

土 崎 遺 跡  
梵 天 塚 遺 跡  
中 谷 地 遺 跡  
発 掘 調 査 報 告 書

1996

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

つち ざき 遺 跡  
土 崎 遺 跡  
ほん てん づか 遺 跡  
梵 天 塚 遺 跡  
なか や ち 遺 跡  
中 谷 地 遺 跡  
発掘調査報告書

平成8年12月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



## 序

本書は財団法人山形県埋蔵文化財センターが平成7年度に発掘調査を実施した、土崎遺跡・梵天塚遺跡・中谷地遺跡の調査成果をまとめたものです。

遺跡は、庄内平野の北に位置する酒田市にあります。酒田市は港町として、「庄内米」の産地として、全国にその名が知られています。北に鳥海山を望み、西は日本海が広がります。

この度、東北横断自動車道（酒田～酒田北間）建設に伴い、工事に先立って土崎遺跡・梵天塚遺跡・中谷地遺跡の発掘調査を実施しました。

土崎遺跡では、中世の建物跡と土器や木製品が発見されました。また梵天塚遺跡では戦国期と思われる墓塚群と埋納銭、中谷地遺跡では平安時代の建物跡を発見することができました。道路工事に係わる調査のため発掘面積は多くはありませんが、庄内平野の古代中世の歴史を理解する上で、よい資料を得ることができました。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産と言えます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の啓発・普及・学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成8年12月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター  
理事長 木場 清 耕

## 例 言

- 1 本書は日本道路公団仙台北建設局（現東北支社）の東北横断自動車道（酒田～酒田北間）建設に係る「土崎遺跡・梵天塚遺跡・中谷地遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は日本道路公団仙台北建設局（現東北支社）の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

- 3 調査要項は下記のとおりである。

遺跡名	土崎遺跡（ASTTZ）	県遺跡番号2027	
所在地	山形県酒田市大字土崎字屋敷添		
調査期間	発掘調査 平成7年4月1日～平成8年3月31日		
	現地調査 平成7年7月11日～平成7年8月4日	18日間	
遺跡名	梵天塚遺跡（ASTBT）	県平成元年度登録	
所在地	山形県酒田市大字牧曾根字梵天塚		
調査期間	発掘調査 平成7年4月1日～平成8年3月31日		
	現地調査 平成7年7月24日～平成7年9月24日	44日間	
遺跡名	中谷地遺跡（ASTNY）	県平成元年度登録	
所在地	山形県酒田市大字吉田新田字中谷地		
調査期間	発掘調査 平成7年4月1日～平成8年3月31日		
	現地調査 平成7年9月11日～平成7年11月29日	52日間	

### 発掘調査・整理作業担当者

調査第二課長	佐藤 庄一（現調査第一課長）
調査研究員	阿部 明彦（主任調査研究員）
調査研究員	石井 浩幸
調査研究員	齋藤 健

- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、日本道路公団仙台北建設局（現東北支社）鶴岡工事事務所・山形県教育委員会文化財課・酒田市教育委員会等関係機関の協力を得た。また発掘調査及び整理にあたっては、大塚幹士 酒井英一 川崎利夫 佐藤慎宏 小野忍の各氏からご指導を賜った。

5 本書の作成・執筆は石井浩幸が担当した。編集は尾形興典・水戸弘美・丸山晶子・森谷昌央が担当し、全体については佐藤庄一が監修した。

6 委託業務は下記のとおり実施した。

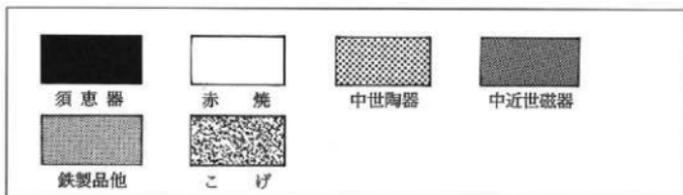
土崎遺跡	遺構の写真実測	㈱パスコ
	遺構の理化学分析	㈱バリノ・サーベイ
	材同定分析	㈱バリノ・サーベイ
梵天塚遺跡	遺構の写真実測	㈱パスコ
	遺構の理化学的分析	㈱バリノ・サーベイ
中谷地遺跡	遺構の写真実測	㈱パスコ
	材同定分析	㈱バレン・ラボ

7 出土遺物、調査記録類については財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

## 凡 例

- 本書で使用した遺構・遺物の分類記号及び表現は以下のとおりである。
 

S B…掘立柱建物跡	S K…土壇	S G…河川跡	
S D…溝跡 畝状遺構	E B…柱跡	S P…ピット、小穴	
S E…井戸跡	E P…柱穴	F…包含層	
R P…登録土器	R Q…登録石製品	R M…登録金属製品	
R W…登録木製品	P…土器	S…鏝	W…木製品、木材
- 遺構番号は現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲したが、建物跡については本書で新たに付したものがあがる。
- 報告書執筆の基準は下記のとおりである。
  - 調査概要図・遺構配置図・遺構平面図中の方位は磁北を示している。
  - 調査区に設定したグリッドの南北軸は土崎遺跡N-85°-E、梵天塚遺跡N-7°-W、中谷地遺跡E-12°-Sである。
  - 遺構実測図は、1/10・1/20・1/40・1/80・1/200・1/300で採録し、それぞれにスケールを付した。
  - 土層観察においては、遺跡を覆う基本層序をローマ数字（I、II等）で表し、遺構覆土はF（F1、F2等）を付して区別した。
  - 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。
  - 遺物実測図・拓影図は1/2・1/3・1/4・1/6縮尺で採録したが、遺物図版に関しては1/3を基準とし、そしてそれぞれにスケールを付した。また遺物の断面実測では次のような表現をした。



- 基本土層・遺構覆土の色調の記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新標準土色帖」に拠った。

# 目 次

I 調査の経緯		V 中谷地遺跡	
1 調査に至る経緯	1	1 調査の概要	125
2 調査の経過	1	2 遺跡の概観	127
II 遺跡の立地と環境		3 遺 構	128
1 自然環境	3	4 遺 物	151
2 歴史的環境	5	5 ま と め	171
III 土崎遺跡		(1) 掘立柱建物跡について	171
1 調査の概要	8	(2) 畝状溝跡について	171
2 遺跡の概観	10	(3) S G 59出土土器と城輪柵跡周辺 の8世紀から9世紀の土器群	173
3 遺 構	12	(4) 墨書土器について	178
4 遺 物	20	(5) 庄内平野・砂丘の縄文～弥生時 代遺跡	179
5 ま と め	45		
(1) 遺構について	45	付 篇	
(2) 遺物について	46	1 土崎遺跡 S K 4土壌分析・樹種同定	
(3) 遺跡の性格	48	2 梵天塚遺跡 リン・カルシウム分析	
IV 梵天塚遺跡			
1 調査の概要	49		
2 遺跡の概観	51		
3 遺 構	52		
4 遺 物	80		
5 ま と め	116		
(1) 土壌について	116		
(2) 埋納銭について	119		
(3) 木製品について	122		
(4) 錫杖について	122		
(5) 庄内地方における葬送民俗につ いて	122		
(6) 梵天塚遺跡の性格	123		

## 挿 図

<p>第1図 東北横断自動車道路線図……………2</p> <p>第2図 土壌分布・地形断面図……………4</p> <p>第3図 周辺の遺跡分布図……………6</p> <p>第4図 土崎遺跡調査概要・層序図……9</p> <p>第5図 土崎遺跡遺構配置図……………11</p> <p>第6図 遺構実測図(1)S B 1・S B 2…14</p> <p>第7図 遺構実測図(2)S E……………15</p> <p>第8図 遺構実測図(3)S K……………16</p> <p>第9図 遺構実測図(4)S K……………17</p> <p>第10図 遺構実測図(5)S K・畝跡群……18</p> <p>第11図 遺構実測図(6)S D 1, S D 123…19</p> <p>第12図 遺物実測図(1)土器 1……………22</p> <p>第13図 遺物実測図(2)土器 2……………23</p> <p>第14図 遺物実測図(3)土器 3……………24</p> <p>第15図 遺物実測図(4)土器 4……………25</p> <p>第16図 遺物実測図(5)土器 5……………26</p> <p>第17図 遺物実測図(6)土器 6……………27</p> <p>第18図 遺物実測図(7)土器 7……………28</p> <p>第19図 遺物実測図(8)土器 8……………29</p> <p>第20図 遺物実測図(9)土器 9……………30</p> <p>第21図 遺物実測図(10)土器10……………31</p> <p>第22図 遺物実測図(11)石製品他……………32</p> <p>第23図 遺物実測図(12)木製品 1……………33</p> <p>第24図 遺物実測図(13)木製品 2……………34</p> <p>第25図 遺物実測図(14)木製品 3……………35</p> <p>第26図 遺物実測図(15)木製品 4……………36</p> <p>第27図 遺物実測図(16)木製品 5……………37</p> <p>第28図 遺物実測図(17)木製品 6……………38</p> <p>第29図 遺物実測図(18)木製品 7……………39</p> <p>第30図 建物跡 (S B 1) の柱配置……………45</p> <p>第31図 遺物の接合関係……………45</p> <p>第32図 土崎遺跡中世遺構概要図……………46</p> <p>第33図 煤付着土器一覧……………47</p>	<p>第34図 土崎遺跡出土墨書集成図……………47</p> <p>第35図 梵天塚遺跡調査概要図……………50</p> <p>第36図 梵天塚遺跡遺構配置図……………53</p> <p>第37図 遺構実測図(1)S K 1～……………57</p> <p>第38図 遺構実測図(2)S K 21～……………58</p> <p>第39図 遺構実測図(3)S K 44～……………59</p> <p>第40図 遺構実測図(4)S K 79～……………60</p> <p>第41図 遺構実測図(5)S K 115～……………61</p> <p>第42図 遺構実測図(6)S K 132～……………62</p> <p>第43図 遺構実測図(7)S K 144～……………63</p> <p>第44図 遺構実測図(8)S K 170～……………64</p> <p>第45図 遺構実測図(9)S K 207～……………65</p> <p>第46図 遺構実測図(10)S K 241～……………66</p> <p>第47図 遺構実測図(11)S K 254～……………67</p> <p>第48図 遺構実測図(12)S K 273～……………68</p> <p>第49図 遺構実測図(13)S K 303～……………69</p> <p>第50図 遺構実測図(14)S K 318～……………70</p> <p>第51図 遺構実測図(15)S K 370……………71</p> <p>第52図 遺構実測図(16)S K 373～……………72</p> <p>第53図 遺構実測図(17)S E 125……………73</p> <p>第54図 遺構実測図(18)S D 160……………74</p> <p>第55図 遺構実測図(19)S D 63・160……………75</p> <p>第56図 遺構実測図(20)S K 群・S D 63…76</p> <p>第57図 遺物実測図(1)土器 1……………81</p> <p>第58図 遺物実測図(2)土器 2……………82</p> <p>第59図 遺物実測図(3)土器 3……………83</p> <p>第60図 遺物実測図(4)土器 4……………84</p> <p>第61図 遺物実測図(5)土器 5……………85</p> <p>第62図 遺物実測図(6)土器 6……………86</p> <p>第63図 遺物実測図(7)土器 7……………87</p> <p>第64図 遺物実測図(8)土器 8……………88</p> <p>第65図 遺物実測図(9)木製品 1……………90</p> <p>第66図 遺物実測図(10)木製品 2……………91</p>
--	--

第67図	遺物実測図(1)木製品 3	92	第95図	遺構実測図(6)S B 9	138
第68図	遺物実測図(2)木製品 4	93	第96図	遺構実測図(7)S E 645・S K 650	142
第69図	遺物実測図(3)木製品 5	94	第97図	遺構実測図(8)S K 18他	143
第70図	遺物実測図(4)木製品 6	95	第98図	遺構実測図(9)S K 341他	144
第71図	遺物実測図(5)木製品 7	96	第99図	遺構実測図(10)S K 362他	145
第72図	土壌出土疎重分布図	98	第100図	遺構実測図(11)S K 452他	146
第73図	遺物実測図(16)金属製品他	98	第101図	遺構実測図(12)S K 810	147
第74図	遺物実測図(17)石製品	99	第102図	遺構実測図(13)畝跡群	148
第75図	遺物実測図(18)礫 1	100	第103図	遺構実測図(14)S G 59	149
第76図	遺物実測図(19)礫 2	101	第104図	遺物実測図(1)土器 1	153
第77図	遺物実測図(20)礫 3	102	第105図	遺物実測図(2)土器 2	154
第78図	埋納銭出土状況図	104	第106図	遺物実測図(3)土器 3	155
第79図	埋蔵銭銜造国・銭種別グラフ	105	第107図	遺物実測図(4)土器 4	156
第80図	埋納銭拓影図 1	106	第108図	遺物実測図(5)土器 5	157
第81図	埋納銭拓影図 2	107	第109図	遺物実測図(6)土器 6	158
第82図	埋納銭拓影図 3	108	第110図	遺物実測図(7)土器 7	159
第83図	土壌群ブロック位置図	117	第111図	遺物実測図(8)土器 8	160
第84図	土壌分類図	118	第112図	遺物実測図(9)土器 9	161
第85図	土壌規模分布図	118	第113図	遺物実測図(10)土器10	162
第86図	土壌レベル関係図	118	第114図	遺物実測図(11)土製品・石製品他	164
第87図	明治9年牧曾根村字切り図	124	第115図	遺物実測図(12)木製品 1	165
第88図	中谷地遺跡調査概要・層序図	126	第116図	遺物実測図(13)木製品 2	166
第89図	中谷地遺跡遺構配置図	129	第117図	掘立柱建物跡群配置図	172
第90図	遺構実測図(1)S B 1・2	133	第118図	畝状溝跡ブロック配置図	173
第91図	遺構実測図(2)S B 3・4	134	第119図	城輪堀跡周辺8世紀後半の土器 変遷案	174
第92図	遺構実測図(3)S B 5・6	135	第120図	中谷地遺跡墨書土器集成	178
第93図	遺構実測図(4)S B 7	136	第121図	縄文・弥生時代遺跡分布図	179
第94図	遺構実測図(5)S B 8	137			

## 表

表-1	周辺遺跡地名表	7	表-7	土崎遺跡遺物観察表 石製品他	43
表-2	土崎遺跡遺構内出土遺物一覧	10	表-8	土崎遺跡遺物観察表 木製品(1)	43
表-3	土崎遺跡検出遺構一覧	12	表-9	土崎遺跡遺物観察表 木製品(2)	44
表-4	土崎遺跡遺物観察表 土器(1)	40	表-10	土崎遺跡の土器接合関係	45
表-5	土崎遺跡遺物観察表 土器(2)	41	表-11	梵天塚遺跡土壌観察表(1)	77
表-6	土崎遺跡遺物観察表 土器(3)	42	表-12	梵天塚遺跡土壌観察表(2)	78

表—13	梵天塚遺跡土壌観察表(3)……………79	表—25	掘立柱建物跡一覽表 ……………139
表—14	錢種別・サシ別古錢一覽表 ……109	表—26	中谷地遺跡遺構内出土遺物 ……151
表—15	錢種別古錢割合 ……………110	表—27	中谷地遺跡遺物観察表 土器(1)…153
表—16	梵天塚遺跡遺物観察表 土器(1)…111	表—28	中谷地遺跡遺物観察表 土器(2)…167
表—17	梵天塚遺跡遺物観察表 土器(2)…112	表—29	中谷地遺跡遺物観察表 土器(3)…168
表—18	梵天塚遺跡遺物観察表 土器(3)…113	表—30	中谷地遺跡遺物観察表 土器(4)…169
表—19	梵天塚遺跡遺物観察表 木製品(1) ……113	表—31	中谷地遺跡遺物観察表土製品・石製品 ……………169
表—20	梵天塚遺跡遺物観察表 木製品(2) ……114	表—32	中谷地遺跡遺物観察表 柱材 ……170
表—21	天塚遺跡遺物観察表 金属製品等……………115	表—33	城輪柵跡周辺における8世紀～9世紀の土器変遷表 ……………176
表—22	梵天塚遺跡遺物観察表 石製品・礫 ……115	表—34	庄内地方の8世紀から9世紀頃の動向 ……177
表—23	庄内地方古銭出土地一覽 (1977佐藤慎宏に追加) ……………120	表—35	番田市周辺の縄文・弥生時代遺跡一覽 ……179
表—24	中谷地遺跡検出遺構一覽 ……128		

## 図 版

図版1	土崎遺跡調査区全景	図版22	土壌検出状況(2)
図版2	土層断面(東壁)・調査風景	図版23	土壌検出状況(3)
図版3	S B 1・S B 2 掘立柱建物跡、柱跡	図版24	土壌検出状況(4)
図版4	井戸跡・土壌・溝跡検出状況	図版25	土壌検出状況(5)
図版5	遺物出土状況	図版26	土壌検出状況(6)
図版6	土崎遺跡出土土器(1)	図版27	土壌検出状況(7)
図版7	土崎遺跡出土土器(2)	図版28	土壌検出状況(8)
図版8	土崎遺跡出土土器(3)	図版29	埋納銭出土状況
図版9	土崎遺跡出土土器(4)	図版30	遺物出土状況(1)
図版10	土崎遺跡出土土器(5)	図版31	遺物出土状況(2)
図版11	墨書土器集成	図版32	遺物出土状況(3)
図版12	中世陶器・磁石	図版33	梵天塚遺跡出土土器(1)
図版13	土器調整技術各種	図版34	梵天塚遺跡出土土器(2)
図版14	土崎遺跡出土木製品(1)	図版35	梵天塚遺跡出土土器(3)
図版15	土崎遺跡出土木製品(2)	図版36	梵天塚遺跡出土土器(4)
図版16	土崎遺跡出土木製品(3)	図版37	梵天塚遺跡出土土器(5)
図版17	梵天塚遺跡調査区全景	図版38	梵天塚遺跡出土土器(6)
図版18	調査風景・調査説明会	図版39	梵天塚遺跡出土木製品(1)
図版19	遺構検出状況	図版40	梵天塚遺跡出土木製品(2)
図版20	土層断面(東壁)	図版41	梵天塚遺跡出土木製品(3)
図版21	土壌検出状況(1)	図版42	梵天塚遺跡出土木製品・石製品他

- |      |                      |      |                |
|------|----------------------|------|----------------|
| 図版43 | 梵天塚遺跡出土石製品・礫         | 図版56 | S E 645井戸跡・土壌  |
| 図版44 | 梵天塚遺跡出土礫・鉄筴          | 図版57 | 弥生時代土壌・土器出土状況他 |
| 図版45 | 梵天塚遺跡出土古銭 1          | 図版58 | S G 59・畝状溝跡群   |
| 図版46 | 梵天塚遺跡出土古銭 2          | 図版59 | 遺物出土状況(1)      |
| 図版47 | 梵天塚遺跡出土古銭 3          | 図版60 | 遺物出土状況(2)      |
| 図版48 | 梵天塚遺跡出土古銭 4          | 図版61 | 中谷地遺跡出土土器(1)   |
| 図版49 | 梵天塚遺跡出土古銭 5          | 図版62 | 中谷地遺跡出土土器(2)   |
| 図版50 | 梵天塚遺跡出土古銭 6          | 図版63 | 中谷地遺跡出土土器(3)   |
| 図版51 | 中谷地遺跡調査区全景           | 図版64 | 中谷地遺跡出土土器(4)   |
| 図版52 | 調査風景                 | 図版65 | 中谷地遺跡出土土器(5)   |
| 図版53 | 土層断面(西壁)・1号・2号掘立柱建物跡 | 図版66 | 中谷地遺跡出土土器(6)   |
| 図版54 | 4号・5号・6号掘立柱建物跡、柱跡    | 図版67 | 中谷地遺跡 弥生土器     |
| 図版55 | 9号掘立柱建物跡、柱跡          | 図版68 | 中谷地遺跡 柱材       |



## I 調査の経緯

### 1 調査に至る経緯

庄内平野の北半に位置する酒田市は水稲の盛んなところで、広々とした水田が広がっている。中心部には出羽国府とされる国指定史跡「城輪柵跡」や出羽留守所と云われる県指定史跡「新田目城跡」がある。この一帯は古代には政治経済の拠点的な場所であつたらしく、それを裏づけるように周辺からは50ヶ所を越える古代から中世の遺跡が発見されている。これまでにほ場整備等で数多くの遺跡が調査されており、歴史の一端を明らかにしつつある。このような地域の歴史の中で、埋蔵文化財は、個々のつながりや結びつきを捉える上でも貴重な財産となる。

ここ庄内では高速交通網整備の一環として高速自動車道の建設が求められ、昭和47年に基本計画が策定され、昭和61年に具体的な整備計画が立てられた。

東北横断自動車道酒田線（以下、山形自動車道という）は、太平洋側の宮城県村田町から日本海側の酒田市に至る全長約180kmに及ぶ高速道路である。この中で村田～寒河江間は平成3年に供用している。酒田～酒田北間は平成2年に施工命令が出され平成9年の供用をめざして事業が進行中である。

山形県教育委員会は、平成元年に酒田～酒田北路線及び関連施設にかかる埋蔵文化財の保護をはかるために表面調査を実施した。さらに平成6年に遺跡地の試掘調査を実施した。この結果を基に日本道路公団と山形県教育委員会との間で路線内の埋蔵文化財の保存協議を開始し、路線設定上避けられない埋蔵文化財に対し、記録保存を目的とした発掘調査を行うこととした。

発掘調査は、(株)山形県埋蔵文化財センターが日本道路公団の委託を受けて実施した。調査対象遺跡は、土崎遺跡・梵天塚遺跡・中谷地遺跡の3遺跡で、調査予定面積は8,050㎡である。

### 2 調査の経過

調査は、各遺跡ともに高速道路造成で保存が困難と判断される区域を対象として実施した。調査区の設定からはじめて、表土の除去、面整理、遺構検出他一連の手順を進めた。調査の進行に合わせて、一部遺跡間で日程の重なる部分がある。以下に遺跡ごとの作業の工程と経過を略記する。

平成7年7月11日、調査員2名作業員20名体制で土崎遺跡の調査を開始した。調査南側から北側に向けて重機による表土の除去を行った。2日ほどで約1,000㎡の表土剥ぎを終え、ジョレン等による遺構検出を始めた。作業が進むにつれ、遺構が確認され始めた。遺構検出面を把握するために、南北に3本のトレンチを入れ、プランの把握に努めた。20日には遺構の概要をつかみ、精査に入る。中世の建物と土壇・井戸跡があり、多数の木製品が出土した。

7月20日以降、遺構・遺物の精査を続行し、平面・断面図作成、写真など諸記録作業と航空撮影による測量（7月29日）を行った。また現地説明会（7月25日参加者約50名）を

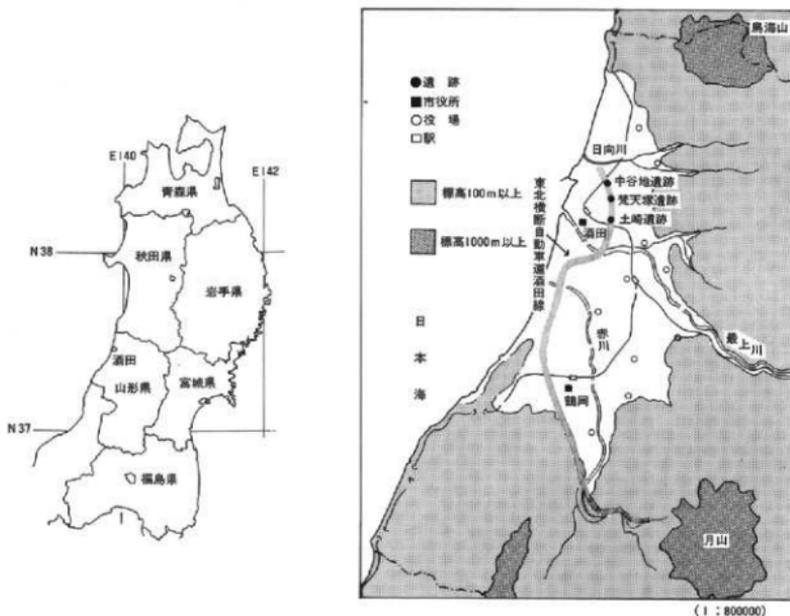
開催した。一部埋めもどしを行い、8月4日に現地での調査を終了した。

7月24日、土崎遺跡の調査と並行する形で、梵天塚遺跡の調査を開始した。土崎遺跡の調査終了まで、調査員1名 作業員10名で実施し、8月5日から合流した。8月の初めに約3,500㎡の調査区全体の表土除去が終わり、遺構の検出作業に入った。夏の高温が続き、土が乾き、硬くなるため水を撒きながらの作業が続いた。

8月中旬には、土壌を主体とする遺構が確認でき、遺構精査に入った。200基を越える土壌の多くは、中世の墓塚と考えられ、一部骨片の出土も見られた。溝跡からは大量の古銭も出土し、9月は記録中心に作業を進めた。

遺構・遺物の精査を継続し、平面・断面図作成、写真など諸記録作業と航空撮影による測量(9月25日)を行った。また現地説明会(9月24日 参加者約200名)を開催した。

中谷地遺跡も梵天塚遺跡の調査日程と一部重なる日程で9月11日から開始した。重機による表土除去から開始したが、堆積層が50cmと厚く、剥ぎ終わったのは9月末となった。堆積層がグライ化しており、地色による遺構検出に慎重さが要求されるために、丁寧に検出作業を進めた。10月下旬に9棟の掘立柱建物跡や土壌・畝跡を確認し、精査・記録作業に入った。11月は連日の降雨にたたられ、作業能率が上がらなかった。11月19日雨の中、説明会(参加者40名)を開催した。その後、航空測量・遺物の取り上げを行い、11月28日にすべての調査を終了した。11月29日には、道路公園側に調査区の引き渡しを行った。調査期間は土崎遺跡延べ18日、梵天塚遺跡延べ44日、中谷地遺跡延べ52日となった。



第1図 東北横断自動車道酒田線路線図

## II 遺跡の立地と環境

### 1 自然環境

土崎遺跡・梵天塚遺跡・中谷地遺跡は酒田市街の東方に位置する。標高はいずれも約3mで水田耕作地帯となっている。1978年(昭和53)以降、農村基盤整備パイロット事業が進められ、整然とした水田が広がっている。道路網も整備され、集落間や市街地との結びつきが強まっている。酒田市の位置する庄内地方は海洋性の気候であり、一日の気温の変化が少ない。また、年間を通して日本海からの季節風が強く吹きつける所であり、冬季間は暴風(地吹雪)の日数が多い。現在、主要道のところどころには防御フェンスが設置されている。さらに海上からの北西風が卓越すると太陽の日照時間は極端に少なくなり、どんよりした曇り空が多くなる。酒田市の北には「出羽富士」の異名を持つ鳥海山(標高2281m)があり、長く農耕の神や作曆として崇められてきた。また、東にはなだらかに出羽丘陵が連なり、西には砂丘を越えて日本海が広がっている。

酒田시는、近世以降酒田港を基点に商業都市として発展してきた町である。一方、肥沃な土壌を生かして水稲栽培でも盛んな地域である。近年は専業農家が減少傾向にあり、複業経営や兼業経営を行う農家が多くなってきている。

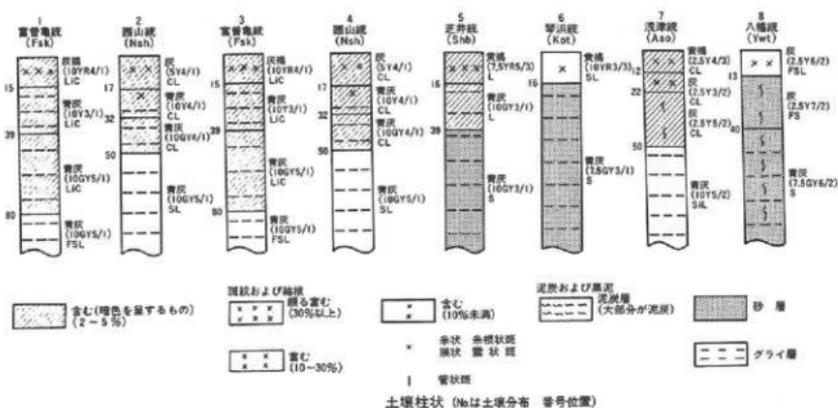
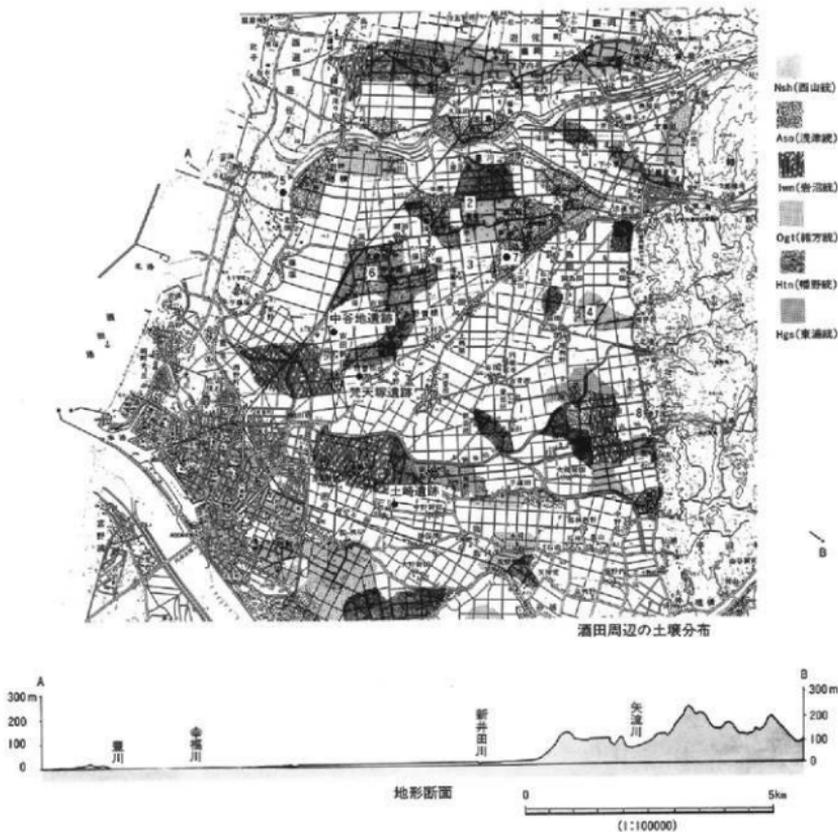
庄内平野北半は砂丘に挟まれ、長い間低湿地であったと思われ、最上川や日向川、荒瀬川により緩やかな扇状地や自然堤防、広い氾濫原を形作っている。現在の集落は旧河川跡の自然堤防上に立地していることが多く、東西に細長く集落が伸びた状況を見せる。

堆積している土壌の分類によれば、酒田市【城輪柵跡】周辺の土壌は5種類に区分されている。いずれも水性堆積物によるもので、耕作土の下はグライ化層になっている。旧河川に沿う形で自然堤防が発達し、遺跡の多くはこの上に立地する。土崎遺跡は「琴浜統(中粗粒強グライ土壌)」に梵天塚遺跡は「幡多野統(細粒グライ土壌)」に、中谷地遺跡は「富曾亀統(細粒強グライ土壌)」に相当する。これらの土壌は、非固結堆積岩を母材とし、地下水位が高く全層または耕作土直下よりグライ層となる。土色は酸化還元反応により青灰色で土性は粗粒質である。酒田市街地周辺は最上川の氾濫原や湿地帯であつたらしく、堆積土に腐食した葦状の植物繊維が多く含まれている。また、自然堤防上からは埋没林が検出され、ある程度樹木が繁茂していた様子が伺える。

高遮道路路線にかかる遺跡地は、開墾前に小河川が網の目のように流れていたと考えられ、それぞれの遺跡でも小河川の跡が確認できた。近世につくられた村絵図などにも小河川が網状に広がっている様子を確かめることができる。

調査区一帯は標高組2.4mまで掘り下げると地下水が湧出してくる。さらに土崎遺跡では泥炭質シルトが広く堆積しており、梵天塚遺跡では埋没した自然木が多数見つまっている。人々が住み始めた自然堤防から一歩外れると荒涼たる荒野と湿地帯が広がっていたと思われ、現在のような水田地帯に変わるには近世まで待たなければならなかった。

II 遺跡の立地と環境



第2図 土壌分布・地形断面図

## 2 歴史的環境

これまでの遺跡の調査から庄内平野の遺跡分布を見てみると、旧石器時代の遺跡は丘陵や高位段丘に立地し、縄文時代の遺跡も同様な分布をなしている。一部庄内砂丘の酒田市黒森地区や輪岡市三瀬地区などに縄文時代の遺跡が立地することは、砂丘が古くから安定した位置を保持していたことを意味する。

弥生時代から奈良時代の遺跡は極端に少なくなるが、生石2遺跡など平野の縁辺部に集落が見られるようになる。平安時代の遺跡から縄文時代晩期～弥生時代の遺物が少量ながら出土することは、少しづつ湿地帯への進出が始まっていることを示唆しよう。庄内平野は場所によって堆積の度合いが不規則であり、地層深く縄文時代や弥生・奈良時代の遺跡が存在する可能性がある。

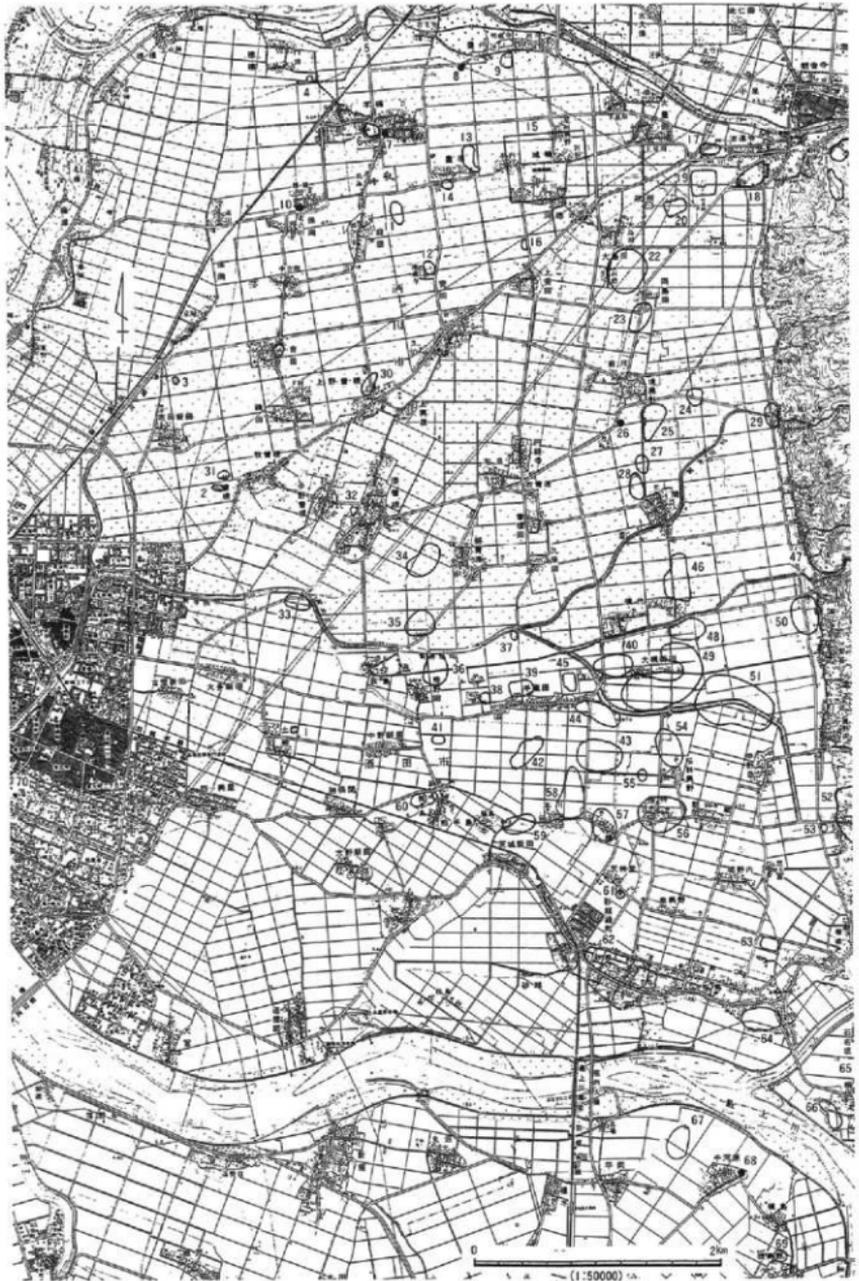
庄内平野とくに最上川以北の開発は平安時代以降に進められたと推測される。文献資料によると出羽国は和銅5年(712)に越後国の出羽郡が昇格したものである。国府的な機能は出羽櫛がはたしていたと考えられているが、現時点出羽櫛に該当する遺跡はまだ確認されていない。いわゆる「征夷」の進展と共に天平5年(733)になると出羽櫛は秋田に移り、天平宝字4年(760)には秋田城が文献上で確認できる。その後、蝦夷との紛争激化から秋田城は廃止され「河辺府」に移されている。延暦年中には「出羽国井口」に国府が建設されており、仁和3年(887)になると「旧府高敷の地」に移転したことがわかる。現在高敷の地の擬定地として八幡町八森遺跡説と城輪櫛遺跡説があるがいずれも決定的な決め手はない。庄内平野の北半は井口への国府移転を契機に本格的に開発が始まったものと考えられている。出羽丘陵に点在する古代の窟跡はほとんどが平安時代に入ってから開かれたものであり、集落遺跡も9世紀以降に形成されたものがかなりの割合を占めている。

9世紀からは史書に自然災害の記載が増えてくる。これも開発が進み、当地域の自然災害への関心が高まったことを意味しよう。

庄内平野、特に酒田市・遊佐町周辺では昭和50年代から始まったほ場整備事業の関連で平野部における古代～中世の集落遺跡の発掘調査が進められ、これまでに数多くの建物や生活用具類を検出してきた。遺跡は地形地質の影響を受けつつも計画的に営まれただろうことが推測される。

このように律令政府の政策により計画的に配置されたと考える古代集落は官衙との結びつきが非常に強かったものと推測される。しかし、官衙遺跡の調査研究は必ずしも進んでいるとは言えず、まだまだ未解決の問題が山積みしている。基本資料となる文献資料に関しては記述内容で問題点も指摘されており、それらを解決する新しい史料の出現も期待できない。その中で考古学的な調査は、この地域の新しい歴史事実を徐々に明らかにしていくものである。個々の遺跡の遺構や遺物の検討から新しい知見や疑問点が提示され、不透明な古代出羽国の様子が明らかにされていくものと思われる。

II 遺跡の立地と環境



第3図 周辺の遺跡分布図

表-1 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	類別	時期	標高	番号	遺跡名	類別	時期	標高
1	土崎遺跡	集落跡	平安	4	36	熊野田遺跡	集落跡	平安	4
2	梵天塚遺跡	集落跡	中世	4	37	早坂遺跡	集落跡	平安	4
3	中谷地遺跡	集落跡	平安	3	38	手蔵田1遺跡	集落跡	平安	5
4	向田遺跡	集落跡	平安	8	39	手蔵田2遺跡	集落跡	平安	5
5	若王寺遺跡	集落跡	平安	8	40	手蔵田3遺跡	集落跡	平安	7
6	黒史跡・新田日城跡	城館跡	中世	10	41	手蔵田4遺跡	集落跡	平安	4
7	新田目入遺跡	集落跡	中世	10	42	手蔵田5遺跡	集落跡	平安	6
8	新田目日遺跡	集落跡	平安	12	43	手蔵田6・7遺跡	集落跡	平安	7
9	明成寺遺跡	集落跡	平安	12	44	手蔵田9・10・11遺跡	集落跡	平安・中世	7
10	廣田遺跡	集落跡	平安・中世	7	45	手蔵田12遺跡	集落跡	平安	6
11	庭田遺跡	集落跡	平安	9	46	高阿弥陀遺跡	集落跡	平安	8
12	安田遺跡	集落跡	平安	8	47	朝日山城	城館跡	中世	130
13	豊原遺跡	集落跡	平安・室町	10	48	横代遺跡	集落跡	平安	8
14	豊原日遺跡	集落跡	平安	11	49	大槻新田遺跡	集落跡	平安・鎌倉	7
15	國史跡・城輪櫓	官衙跡	平安	13	50	生石2遺跡	集落跡	弥生~平安	14
16	藤崎遺跡	包蔵地	平安	6	51	生石4遺跡	集落跡	弥生~平安	7
17	茅針谷地遺跡	集落跡	平安	14	52	山榎榎跡	城館跡	戦国	80
18	綱掛遺跡	集落跡	平安	15	53	山榎遺跡	集落跡	平安・鎌倉	15
19	國史跡・堂の前遺跡	集落跡	平安	15	54	板村興野遺跡	集落跡	平安	7
20	狭田遺跡	集落跡	平安・鎌倉	13	55	西田遺跡	集落跡	平安	7
21	八森遺跡	官衙跡	縄文・平安・中世	100	56	板林遺跡	集落跡	平安・鎌倉	9
22	畷田遺跡	集落跡	平安	11	57	早稲田遺跡	集落跡	平安・鎌倉	8
23	俣田遺跡	集落跡	平安	10	58	本川遺跡	集落跡	平安	6
24	上ノ田遺跡	集落跡	平安	12	59	孤島遺跡	散布地	平安・鎌倉	6
25	境興野遺跡	集落跡	平安	10	60	熊手島遺跡	散布地	平安	5
26	門前寺経塚	経塚	鎌倉	10	61	天神堂遺跡	散布地	平安・鎌倉	8
27	北田遺跡	集落跡	平安	8	62	砂越城跡	城館跡	室町	10
28	間日遺跡	集落跡	平安・中世	9	63	飛鳥遺跡	集落跡	平安・鎌倉	12
29	北地遺跡	集落跡	平安	15	64	飛鳥神内遺跡	散布地	平安・鎌倉	13
30	上曾根遺跡	集落跡	平安・中世	7	65	石名原遺跡	集落跡	縄文・平安	16
31	家賀遺跡	散布地	平安・鎌倉	4	66	藤田山遺跡	散布地	縄文	18
32	部曾根遺跡	集落跡	平安	5	67	千河原遺跡	包蔵地	平安	7
33	船止遺跡	包蔵地	平安・鎌倉	3	68	神律院跡	寺院跡	室町	7
34	新青波遺跡	集落跡	平安	5	69	五輪塚	墳墓	中世	10
35	南興野遺跡	集落跡	平安	4	70	亀ヶ崎城跡	城館跡	中世・近世	3

国土地理院発行2万5千分の1地形図「酒田北郷」「酒田南郷」  
 「羽後観音寺」[赤目]を1/2縮小して使用(1:50,000)

### III 土崎遺跡

#### 1 調査の概要

##### (1) 調査の方法

土崎遺跡の遺跡面積は約3000㎡である。ここに高速自動車道が建設されることになり道路部分の約1,050㎡について発掘調査を実施した。調査員2名作業員20名の体制で開始した。調査にあたって高速道路用地の幅杭を南北の基準線N-5'-Eとした。この基準線に任意に中心を設定し、直交するように東西の基準線N-85'-Eを設定した。2本の軸線から遺跡全体がかかるように10mメッシュのグリッドを組み、測量基準線を交点からの東西・南北方向の距離数で表すことにした。グリッド名はアラビア数字の組合せで呼ぶことにした(第4図)。ベンチマークは南方にある三角点から移動して調査区に設定した。ベンチマーク標高は3.1mである。これをレベル原点とした。発掘調査は重機によるI層II層の表土・耕作土層除去から始め、並行して包含層・遺構面の確認を行った。III層での遺構検出に努めたがその作業が困難であることから、IV層(灰色シルト層)上面で遺構確認することにした。検出した遺構は通し番号を付し、1/10・1/20・1/100で記録し、合せて写真記録を行った。最終的に航空測量によって位置と標高レベルを記録した。写真は36mmカラーネガおよびカラーリバーサルを使用して、両者同アングル、同コマ数で撮影を行った。また、特に必要な場合は6×7判のカメラを使用した。

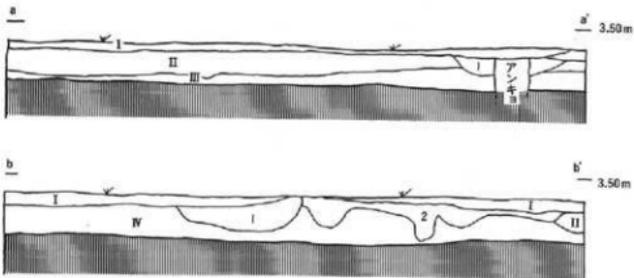
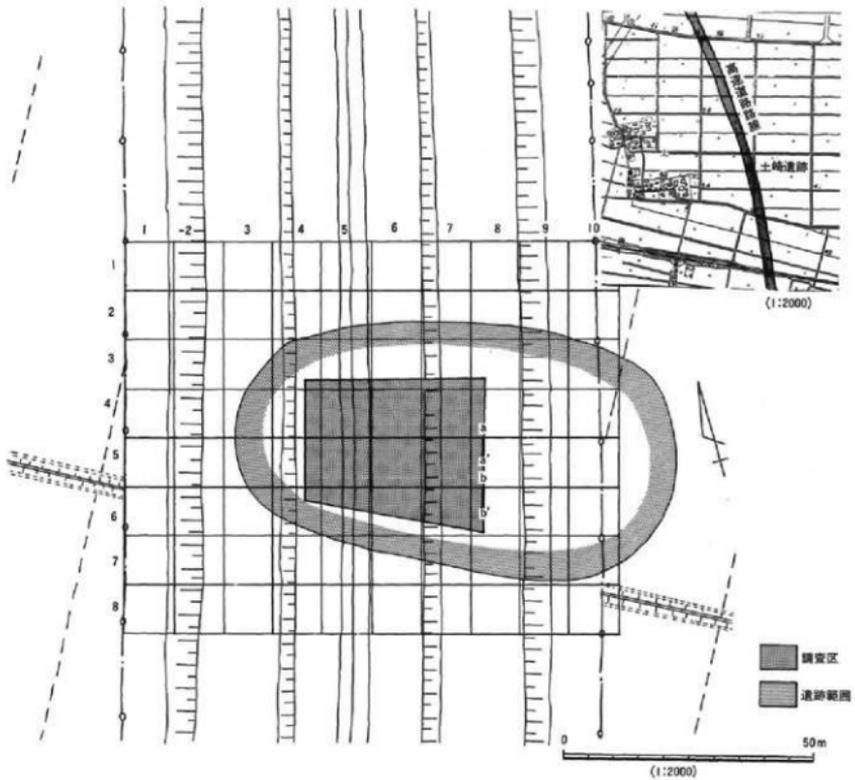
遺物は表土除去時は包含層で取り上げ、遺構検出中はグリッド毎の取り上げを行い、一括性のある遺物・重要な遺物は分布図に記録することにした。遺構精査での出土遺物はまとまりのあるものは実測図を作成し登録番号を付した。その他は遺構内の覆土によって取り上げた。また調査区内に泥炭の堆積部分があることが分かり、遺物の包含状態や遺物の有無・自然環境等を知るためにトレンチによる深掘りを実施した。

##### (2) 層 序

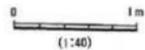
調査区は水田地帯の中に位置するグリッド位置によって若干の堆積土の層が異なった様相を見た。特に遺跡中央に自然堤防の跡があり、東西に細長い高まり部分を確認した。自然堤防を横断するように東側の壁面で土層断面図を作成した。土層は5層に分けられ他が各層の中でも2〜3に細分できるものもあった。I層は表土・耕作土の層である。II層も耕作土で以前のほ場整備時の床土で動いている層である。遺跡中央部の高まり部分には見られない。III層は泥炭質のシルト層である。河川の氾濫・洪水等によって湿地化した時期があったと思われる。IV層は灰色シルト層で遺構の掘り込みを確認した面である。

平安時代と中世の遺構を検出したが、中世の生活面はIII層中位、平安時代の生活面はIII層〜IV層上面にある。中世の井戸跡はIII層で検出できた。遺構の最下部は標高2.00mで、約2.20mで地下水が湧水してくる。

調査区の西側は泥炭層が厚く堆積し、遺構の検出はできなかった。腐食した植物繊維等が多数見られた。



- 調査区東壁セクション
- I 16/V3/1オリーブ黒色 粘質土 耕作土
  - II 1Y4/1赤色 粘質土
  - III 2Y3/1オリーブ黒色 粘質土 泥状質
  - IV 15V3/3 黄褐色 粘質シルト
  - 1 1Y3/1黒色 炭灰質シルト 炭
  - 2 1Z2/0 黒色 炭灰質シルト 凝縮物



第4図 土崎遺跡調査概要・層序図

2 遺跡の概観

遺跡地は水田地帯にあり、土崎集落の東側に位置する。この遺跡は、以前に用水路建設に際して、須臾器甕などが出土したことから、その存在が知られるようになった。ほ場整備により上層はかなり削平を受けており、耕作土下にすぐ遺構が存在する。

本遺跡は平安時代と中世の遺構・遺物が認められる複合遺跡である。主体となるのは遺物は少ないものの中世の遺構である。掘り下げ→精査は平安時代の一部以外は同一面で実施している。中世の遺物は調査北側、平安時代の遺物は南側の溝跡に顕著である。

(1) 遺構の分布 (第5図)

調査区内から発見された遺構は堀立柱建物跡2軒、井戸跡5基、土壇13基、溝跡7条、畝状溝跡21条である。

調査区中央に建物跡が配置し、建物を取り囲むように北側に溝跡、西側に畝跡、南側に溝跡、北側に井戸や土壇が分布しているのを把握した。建物周辺には多数の柱穴が見られ立て替えや塀などの付属施設もあると思われる。調査区西側は泥炭層のため遺構検出は困難であった。遺構の広がりから遺跡は東側と南側に広がると想定される。

(2) 遺物分布

本遺跡から出土した遺物は、土器類は破片数にして総数4276点、木製品は704点、石製品は14点、金属製品として「キセル」1点である。表-2 土崎遺跡遺構内出土遺物一覧

土器類は平安時代の土器と中世の土器に分けられる。平安時代の土器は須臾器・あかやき土器・黒色土器等である。中世の土器は珠洲系の甕・すり鉢などである。以前のほ場整備の際にも多数の遺物が採集されたことがある。遺物は第II層から出土し始め、IV層上部にかけて出土する。平安時代の遺物はSD123・124・125の溝跡から多数出土した。溝跡の底面付近からの出土で、投げ捨てられたものと考えられる。坏類のほかあかやき土器の甕の多さが眼を引く。中世の遺物として土器片は少なく、木製品類が多い。中世の土器片はSD1・SK4・SE6・SE34等から出土した。木製品はSD1・SK4・SK13・SK55・SE34・SE55・SE67から出土した。中でもSD1からは漆塗碗が2個体出土している(表-2)。

主な遺構	グリッド位置	出土遺物					備考
		須臾器	あかやき	中世	近世	木製品	
建物跡 2軒							自掘土
SB1	6-6 3-7						
SB2	6-6 6-7						
土壇 13基							
SK2	5-7						甕? 須臾器 土壇
SK4	5-8						へう 甕 須臾器 甕
SK35	5-7	4	5				
SK57			23				
SK67	6-7	1			1		甕 須臾器
SK136	6-6	8	30				
SK144	6-8	16	44				甕 土壇
SK185	5-5	6	37				
SK188	6-5	2	5				
井戸跡 5基							
SE6	5-7				2		甕
SE13	5-7						甕 須臾器 甕
SE34	5-7						甕 須臾器 甕
SE67							
SE196	6-5						甕
溝跡 6条							
SD1	調査区北側	14	4		4		へう 甕 甕
SD56	調査区東側	7	5				
SD123 124	調査区南側	318	606		4		木製品 甕 甕
SD185	SG120内	40	90				土壇 甕 甕
畝跡 21条							
SD135			3				
SD158			1	2			
SD160			4				
SD162			7				
SD167			4				
SD171			2	4			
SD172			19	30			
SD173			31	84			
SD174			3	4			
SD175			3	3			
SD176			2	3			
SD177			1	5			
SD184				7			



3 遺 構

検出された主な遺構の精査結果と多少の所見を順次記述する。

図面はⅣ層上面の検出面によって作成しており、手取り図面のほか航空測量による図面も利用している。

(1) 掘立柱建物跡 (第6図) 掘立柱建物跡は、2棟確認した。

**SB1 掘立柱建物跡** 調査区中央部に位置し、Ⅲ層上面で検出した。SB2 掘立柱建物跡と重なるが切り合いはなく、新旧関係はわからない。東西5間、南北4間の東西棟の建物跡で東西11.8m、南北8mを測り、柱間距離は南柱列で約2.2m東側柱列で約1.9mを測る。建物の主軸方位はE-22°-Sである。掘り方は円形を基調とするもので径30~55cmを測り、EB54が最大、EB113が最小である。深さは40~62cmで底面から緩やかに立ち上がる。埋土は暗褐色粘質シルトを基調として、青灰色シルトのブロックを含むものもある。柱痕はEP9・EB54・EB146・EB118・EB69・EB11で確認され、下部に礎板等の施設等はなく、直接掘形底面に据え置かれたものと考えられる。柱跡からの遺物はすくなく、EB91からあかやき土器片2点、EB146から須惠器片1点が出土したにとどまる。

**SB2 掘立柱建物跡柱** SB1 掘立柱建物跡に重なる。東西3間・南北2間の東西棟の建物で東西5.48m、南北3.8mを測る。柱間距離は南側柱列で1.8m、北側柱列で1.6mある。建物の主軸方位はE-22°-Sである。掘り方は円形で深さ25~40cmで柱痕は認められない。

(2) 井戸跡 (第7図) 井戸跡は5基確認した。

**SE13 建物跡東側で検出した。**掘り方は直径120cmの円形で、直に掘り込んでいる。深さは82cmを測る。井戸枠等の構造物は検出していない覆土から板状・棒状木製品が出土した。

**SE34 建物跡の東側で重なるように検出した。**掘り方は径200cmの不整形円形で、深さは93cmを測る。珠洲系片口鉢1点と木製品が出土した。腐食した泥炭質の黒い覆土になっている。

**SE67 建物跡東側に重なるように検出した。**掘り方は径90cmの円形で直に掘り込まれている。深さは80cmを測る。ここからは箸やへらなど加工された木製品が多量に出土した。

表-3 土崎遺跡検出遺構一覧

遺構分類	検出数	主な遺構	許測値 (cm)			調査 深さ m	備 考	
			長軸	短軸	距さ			
埋没跡(SB)	2	SB1	1180	820			中世 立て替え	
		SB2	540	380			中世	
	土壇(SK)	13	SK2	160	145	30	2.4	中世
			SK4	188	150	54	2.0	中世6~9世紀?
			SK7					中世
			SK35					
			SK85	225	150	62	2.2	中世
			SK119	88	86	56		
			SK125	190	160	52	2.2	
			SK144	210	70	23	2.4	中世
井戸跡(SE)	5	SE6	60	52	2.3	2.3	中世	
		SE13	224	121	20	2.5	竪穴の敷物	
		SE190					2.6	
		SE192					2.6	
		SE6	170	142	76	1.9	中世	
		SE13	130	124	70	2.0	中世	
		SE34	224	181	84	1.7	中世	
溝跡(SD)	6	SE67	90	90	76	1.9	中世	
		SE196	82	48	96	2.2		
		SD1	220		48	2.3	中世	
		SD56	55					
		SD123 124		(545)	44	2.2	平安時代	
		SD176	35			2.5		
		SD177	44			2.5		
納跡(SD)	21	SD195	32			2.1		
		SD155	30	18	2.5			
		SD157	32	20	2.5			
		SD158	24	12	2.3			
		SD160	64	20	2.7			
		SD162	32	15	2.6			
		SD167	32	9	2.6			
		SD171	48	18	2.4			
		SD172	86	16	2.5			
		SD173	28	20	2.5			
		SD174	44	22	2.4			
		SD175	44	28	2.4			
		SD177	32	20	2.4			
		SD180	28	20	2.4			
SD181	30	15	2.5					
SD184	34	18	2.4					

SE196 調査区の南西、SD123の西側で検出した。径78cm深さ92cmを測る。覆土に板状木製品が重なるように遺存していた。長さ1m弱、幅15cmの均一な板材であり、井戸枠等の一部と見られる。土器などの遺物は出土していない。

(3) 土 墳 (第8～10図) 土壌は大小合せて13基確認した。

SK2 建物跡の北東で検出した。耕作等により上面は削平されているが遺存状況は良好である。他の遺構との切り合いはない。平面は方形で、規模は長辺160cm、短辺140cmを測る。検出面からの深さは35cmである。周壁は直立気味に立ち上がる。覆土は5層に分けられた。遺物は礫が2点出土のみで、性格など不明である。

SK4 建物跡の北東、SK2に隣接して位置する。耕作による削平を受けているが遺存状況はよい。平面形は円形を呈し、規模は径170cm、検出面から底まで58cmを測る。堆積土は9層確認した。この中でF7層～F9層から棒状・細い板状の木製品が多数出土し、「ちゅうぎ」の可能性がある。土壌分析をしたが、明確なトイレ遺構を示すデータは得られなかった。

SK55 調査区の東端で検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸で155cm、確認面からの深さは64cmを測る。覆土は5層確認した。F4層から板状木製品が出土した。

SK126 調査区に南側、建物跡のすぐ南に位置する。不整形の平面形を呈し、一部55cmまで深く掘り込み部がある。覆土F2層に火山灰粒が含まれる。ここからは墨書痕ある須恵器2点、あかやき土器11点とクルミ殻が3個出土した。

SK155 調査区西側 畝群に隣接して位置する。平面は円形で2段に掘り込まれている。2段目は径56cmで深さ76cmを測る。5層の覆土を確認した。F3層から須恵器甕片1点とあかやき土器の甕体部片9点が出土した。畝群がSK155を切っており、畝群よりも時期的に古く位置づけられる。

SK168 SK155に隣接して位置する。平面形は長方形で長辺236cm、短辺130cm、深さ26cmを測る。覆土から須恵器坏片2点、あかやき土器坏片2点、甕片3点出土した。土壌底部に葉状のものが敷いてあった。

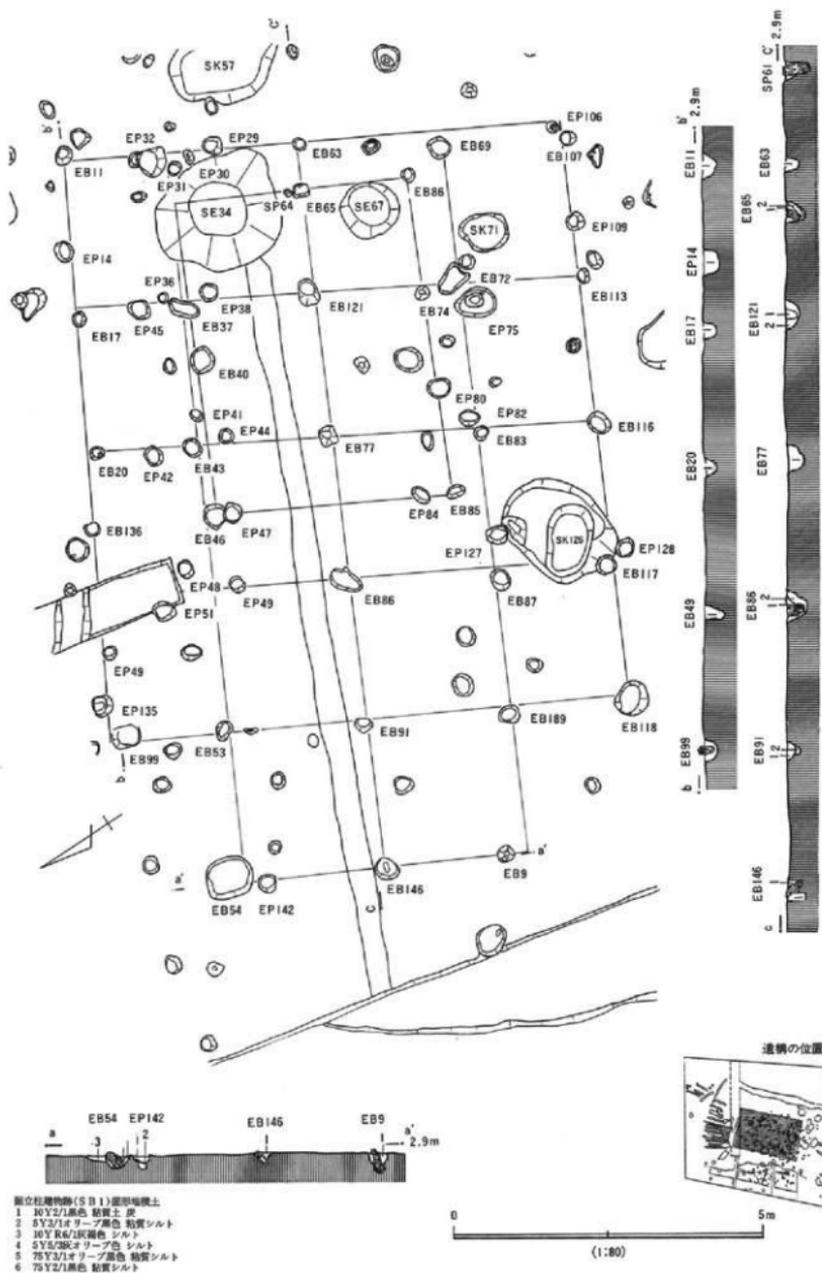
(4) 溝 跡 (第11図)

SD1 調査区東から西にかけて検出した。幅80cm、深さ25cmを測る。覆土は6層あり、泥炭質のF4、5層から珠洲系陶器片・片口鉢片や漆碗や木皿・ヘラ・舟形木製品が出土した。中世の遺構と考えられる。

SD123・124・125 III層下部からIII層にかけて確認した。SD123・124・125ともに幅80cm、深さ30cmで自然堆積を見せる。覆土に乳白色の火山灰堆積層がある。火山灰層下から底面にかけて、たくさんの須恵器・あかやき土器が出土した。中には「主」「刑」「徳」名のある墨書土器がある。また、くびれのある棒状木製品（俵組み用具）が出土した。遺構確認した堆積層から判断して建物跡(SB1)よりも古い時期に相当する。

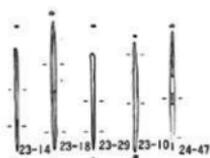
(5) 畝 跡 (第10図)

調査区西側から総数21条の畝跡を確認した。東西方向に規則正しく配置されている。おおむね幅30cmで長さ300～350cmで整然として掘り込まれている。

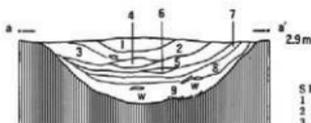
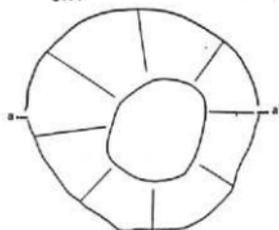
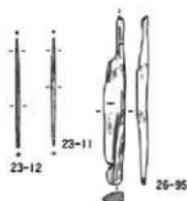
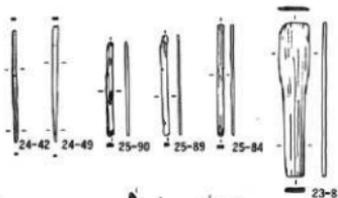


第6図 遺構実測図(1) SB1・2





SK4

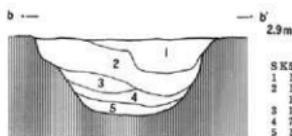
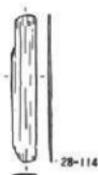
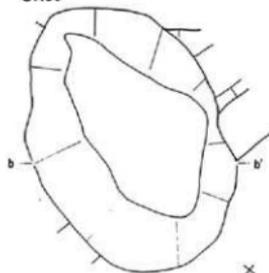


SK4

- 1 75Y4/灰色 粘土質
- 2 5Y6/3オリーブ黄褐色 粘土質 灰少
- 3 75Y2/1オリーブ黄褐色 粘土質 灰少
- 4 75Y7/1灰白色 プロック状
- 5 75Y2/1黒色 灰 火山灰混れ薄く入る
- 6 75Y7/1灰白色 火山灰混れ込み
- 7 10Y2/1黒色 粘状質(木製品)
- 8 10Y2/1黒色 粘状質 灰 繊維物(木製品)
- 9 N/20黒色 粘状質 灰 炭化物 繊維物(木製品)



SK55

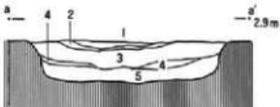


SK55

- 1 N2/0黒色 粘物あり 灰少 繊維物
- 2 N2/0黒色 プロック 褐色炭層
- 3 10Y2/1灰黄褐色 灰入り
- 4 10Y2/1黒色 粘状質 灰
- 5 75Y3/1オリーブ黄褐色 粘状 繊維物多(木製品)

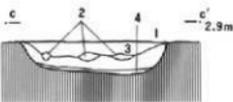
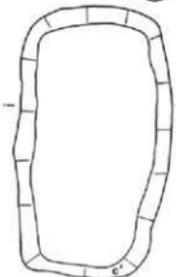


第8図 遺構実測図(3) SK

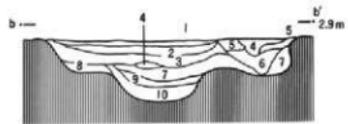
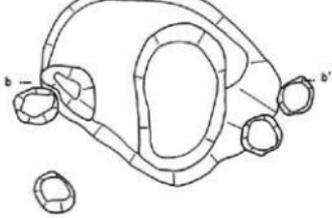


- SK 2
- 1 79Y4/1灰色 粘土質
  - 2 75Y7/1灰白色 火山灰 粘性あり
  - 3 10Y2/1オリーブ黒色 粘性あり 炭
  - 4 25Y2/4黄褐色 シルト質 塊れ込み(木製品 類)
  - 5 5Y2/1オリーブ黒色 炭 シルト質

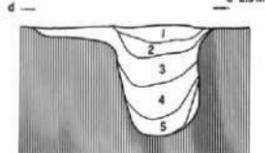
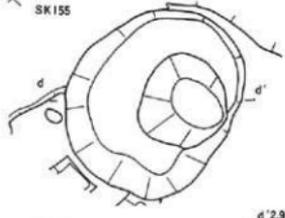
SK168



- SK168
- 1 10Y R4/2灰黄褐色 粘土質
  - 2 5Y6/2オリーブ色 粘土質
  - 3 75Y2/1オリーブ黒色 泥炭質シルト
  - 4 75Y2/1オリーブ黒色 泥炭質シルト



- SK126
- 1 10Y R4/2灰黄褐色 粘質土
  - 2 10Y R6/1黄褐色 粘質土
  - 3 8Y6/1灰色 粘質土
  - 4 70Y7/2灰白色 火山灰混れ
  - 5 75Y2/1オリーブ黒色 粘質土
  - 6 75Y2/1黒色 腐食層シルト
  - 7 75Y2/1黒色 粘質シルト
  - 8 5Y6/2オリーブ色 シルト
  - 9 10Y R4/2灰黄褐色 シルト
  - 10 10Y R6/1黄褐色 砂質シルト

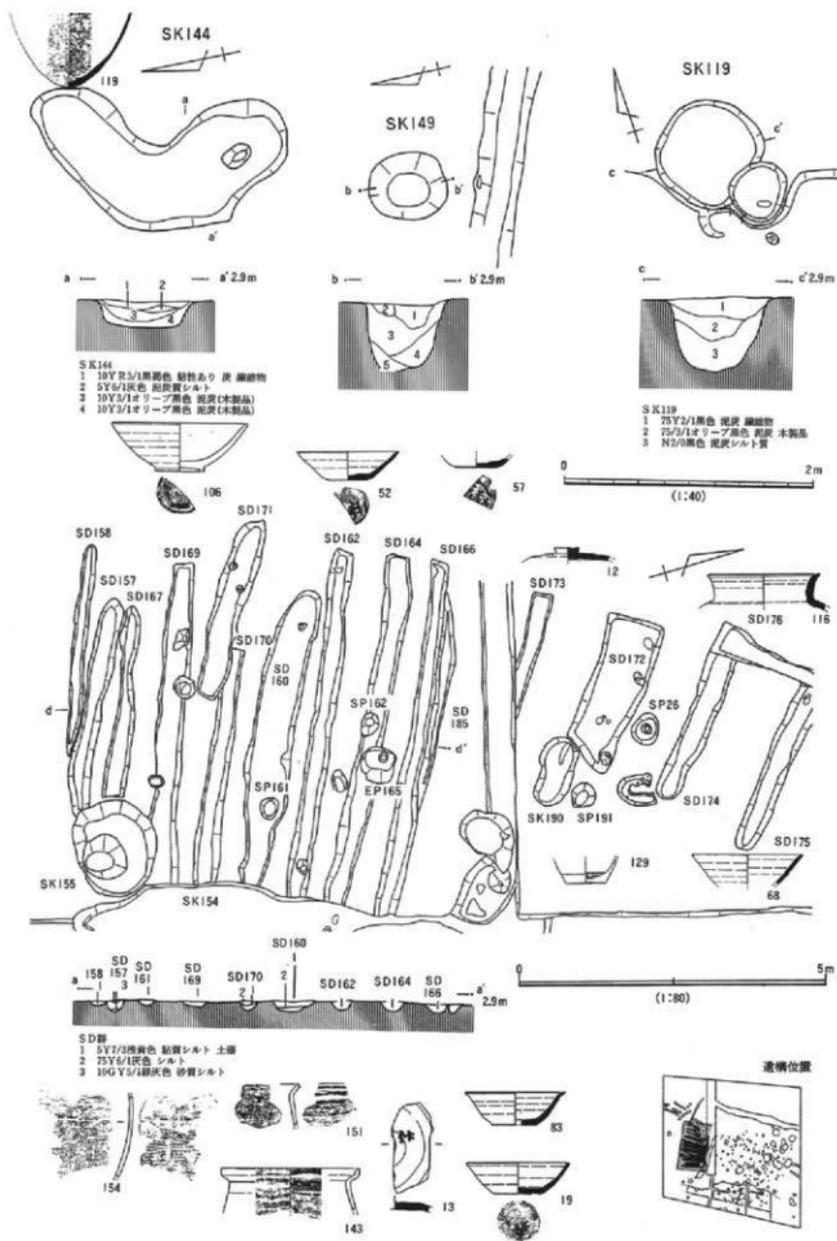


- SK154
- 1 10Y R2/1オリーブ黒色 粘土質
  - 2 5Y6/2オリーブ色 75Y4/1灰色 ブロック状
  - 3 10Y2/1オリーブ黒色 泥炭質 炭
  - 4 10Y2/1オリーブ黒色 泥炭質 炭
  - 5 10Y R3/1黄褐色 泥炭 炭

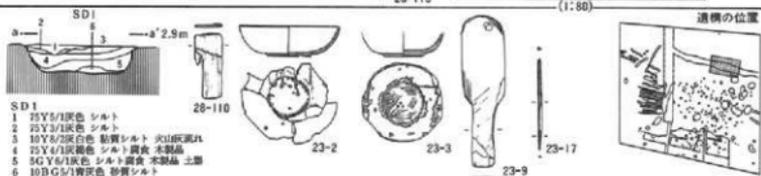
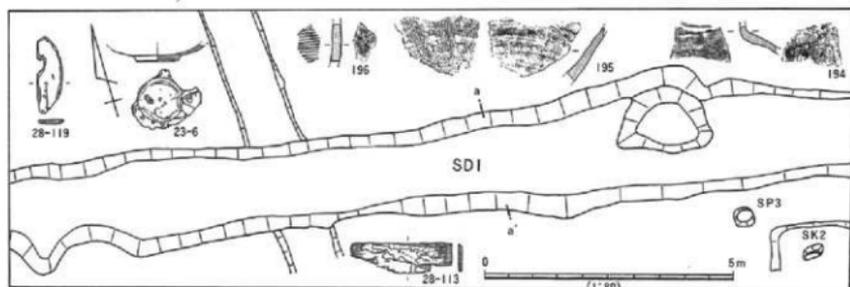


(1:40)

第9図 遺構実測図(4) SK

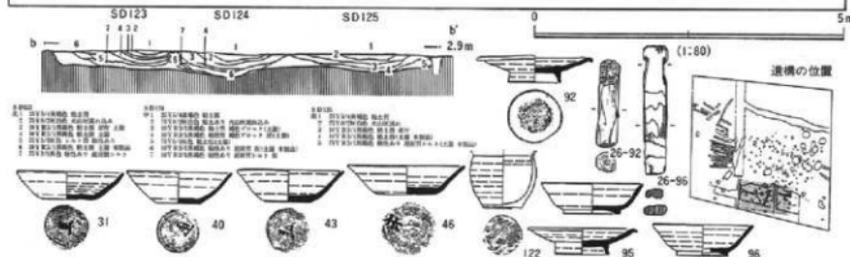
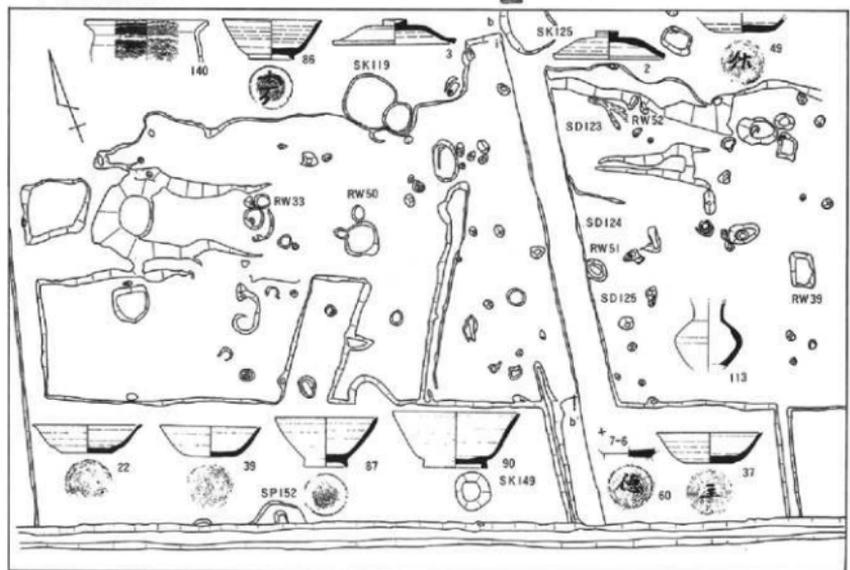


第10図 遺構実測図(5) SK・飲跡群



SD1

- 1 25Y5/1灰色 シルト
- 2 25Y3/1灰色 シルト
- 3 10Y6/2灰色 粘質シルト 火山灰混入
- 4 25Y6/1灰色 シルト 黄土 木炭混
- 5 5GY6/1灰色 シルト 腐食 木炭混 土層
- 6 10BG5/1黄灰色 粘質シルト



第11図 遺構平面断面図(6) SD

#### 4 遺物

土崎遺跡の調査で出土した遺物には土器・木製品・石製品・植物遺体（クルミ等）がある。遺物は総数5030点を数える。主な遺構ごとの遺物出土点数は表一に記したが、遺物全体の約30%は遺構確認までの表土及び包含層出土である。以下、遺物を種類ごとに取り上げ、その特徴をまとめる。

##### (1) 土器

土崎遺跡からは、整理箱にして24箱の土器類が出土している。大半は平安時代の土器であるが、中世の陶磁器類も出土している。以下、須恵器・あかやき土器・黒色土器・中世陶磁器などについて順に説明する。

**須恵器**：用途による分類では食膳具・貯蔵具が見られる。器種として蓋・坏・高台付坏・高台付皿・小壺・壺・甕に分類できる。さらに部分形態や技法上細分される。

a) 蓋（第12図1～13）：断面形で傾斜のあるもの、緩やかなものがある。

b) 坏（第12～15図）：すべてロクロ調整を受けている。ヘラ切りで底部が広く体部が直に立ち上がるもの（69）、ヘラ切りで体部が緩やかに立ち上がるもの（35・42・45・46・48・72）、底部糸切りで体部が緩やかに立ち上がるもの（14～34等）がある。

c) 高台付坏：体部の傾きが急で器高の高いもの（89）低いもの（93）、高台端の平坦なもの（85・90）尖るもの（86・96）がある。

d) 高台付皿（92・95）：ロクロ調整、糸切りで切り離されている。口縁が若干反する。

e) 小壺（第17図）：全形を復元できるものはない。長頸のもの（110・114）、短頸のもの（109）がある。（111・112）など体部下半にケズリ調整を施すものが見られる。

f) 壺（第17図107）：全形がわかるものはない。107は体部下半に縦方向のケズリ調整がある。

g) 甕（第17図115～119）：破片資料のみであるが、体部や丸底底部の器面に外面タタキ痕、内面アテ痕が見られる。119は体部径が65cmを測る大型のものである。

**あかやき土器**：用途による分類では食膳具・貯蔵具・煮沸具がある。器種では坏・高台付坏・寛・塀がある。さらに部分形態や技法上細分される。

a) 坏（第16図97～105）：底径が小さく、外反する体部が伸びる。器高の高いもの（97・99・102）低い（98・104）ものがある

b) 甕（第18図・第19図）：底部の形態、口縁の形態などから2分される。

体部ロクロ調整、底部切離しは糸切りで、口縁が外反するもの。大型で卵型をした体部に外反する口縁部がつき、体部下半の調整は外面タタキ痕、内面アテ痕のものがある。

c) 塀（第19図146・148・155、第20図169～181）：半球形の体部に外反する口縁部がつく。口縁端には「く」字に緩く反るもの（171・178等）と強く反るもの（170・174・177等）が見られる。体部下半の整形・調整はにタタキ・アテ・カキメなどが見られる。

### 黒色土器

a) 高台付付 (第16図106) : 器体内面に黒色処理を施している。底部は糸切りにより切り離されている。高台端は鋭角に尖っている。

### 珠洲系陶器

a) すり鉢 (第21図) : 焼成具合により若干、色の違いがあるが、珠洲系のすり鉢である。体部は直線的に開いて立ち上がる。ロクロ整形の内面に縦方向に8~10目の櫛歯器具により、摺目が走る。吉岡康暢 (1994) のⅣ期に相当する。

b) 壺 : 体部のもの (191・194・196) には細い条線状のタタキ痕が見られる。底部のもの (197) には板材の敷物痕が残る。

### (2) 石製品・金属製品 (第22図)

石製品としては、砥石、金属製品としては小刀とキセルがある。砥石 (6) は泥岩製で消耗が激しくレンズ状にくぼんでいる。金属製品のキズ跡がある。小刀は錆が付着しているが幅2.5cm、長さ20cmほどあったものと推測する。キセル (7) は黄銅製で薄い板状の金属板を接合して作りあげている。

### (3) 木製品 (第23図~第29図)

井戸跡・土壇・溝跡から整理箱にして10箱ほどの木製品が出土した。椀や箸・へら・曲物など用途のわかるもの他に加工が見られるものの用途や名称の不明なものが多い。

a) 椀 (第23図1~3・5~7) : 漆塗椀が5点、椀片が1点ある。1は内面黒漆地に朱漆で筋状の模様が施されている。

b) 木皿 (第23図4) : 1点ロクロ削りによる浅い皿がある。漆が塗布されている。

c) へら (第23図8・9) : 鉋で仕上げた板材を小刀で削り、外形を仕上げている。丸先と平先の2種類ある。9は多数の細かいキズが残されている。

d) 箸 (第23図~第24図) : 長ささまざまある。57~59は先端が平坦である。

e) 加工された木製品 (第25図・第26図) : 手斧、小刀、ノコ等による加工が施された木製品が多数あるが、名称や用途の判別できる資料は少ない。73には端部に溝がめぐる。92・96・97はくびれが作られている。俵編み具と思われる。100は齧串と思われる。98・99・102は木口が擦り減っている。105の舟形木製品は内部が丁寧にくり抜かれており、穿孔がある。くびれのある木製品と舟形木製品は酒田市手戴田10・11遺跡からも出土している。

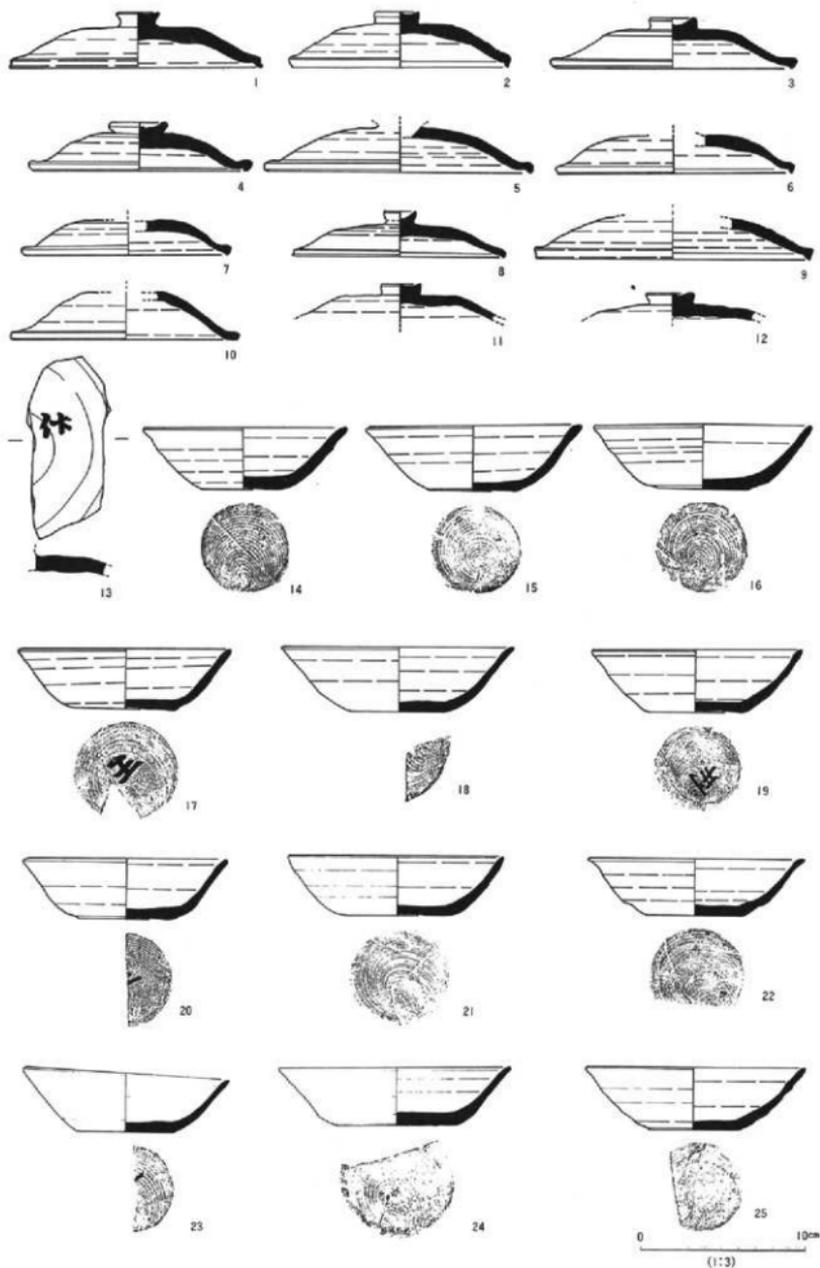
f) 曲物・丸板等 (第27図) : 112・113は曲物枠片である。112には接合した皮片が残る。丸板は径10cm~31cmまであり、107は中央に穿孔、108には折断部に3箇所の穿孔がある。

g) 杭材 (第28図) : 材の先端を手斧で削り、尖らせたものがある。132は4面にわたり丁寧に削り尖頭状に仕上げている。

h) 柱材 (第28図133・第29図) : 芯持ち材全体を利用するもの (134・136・137・140・142)、半分利用するもの (135・139) 2方柱の木材を利用するもの (133・138・141・143) が見られる。また、2根目材は底面平坦で芯持ち材利用のものは「V」字状に手斧で削られている。

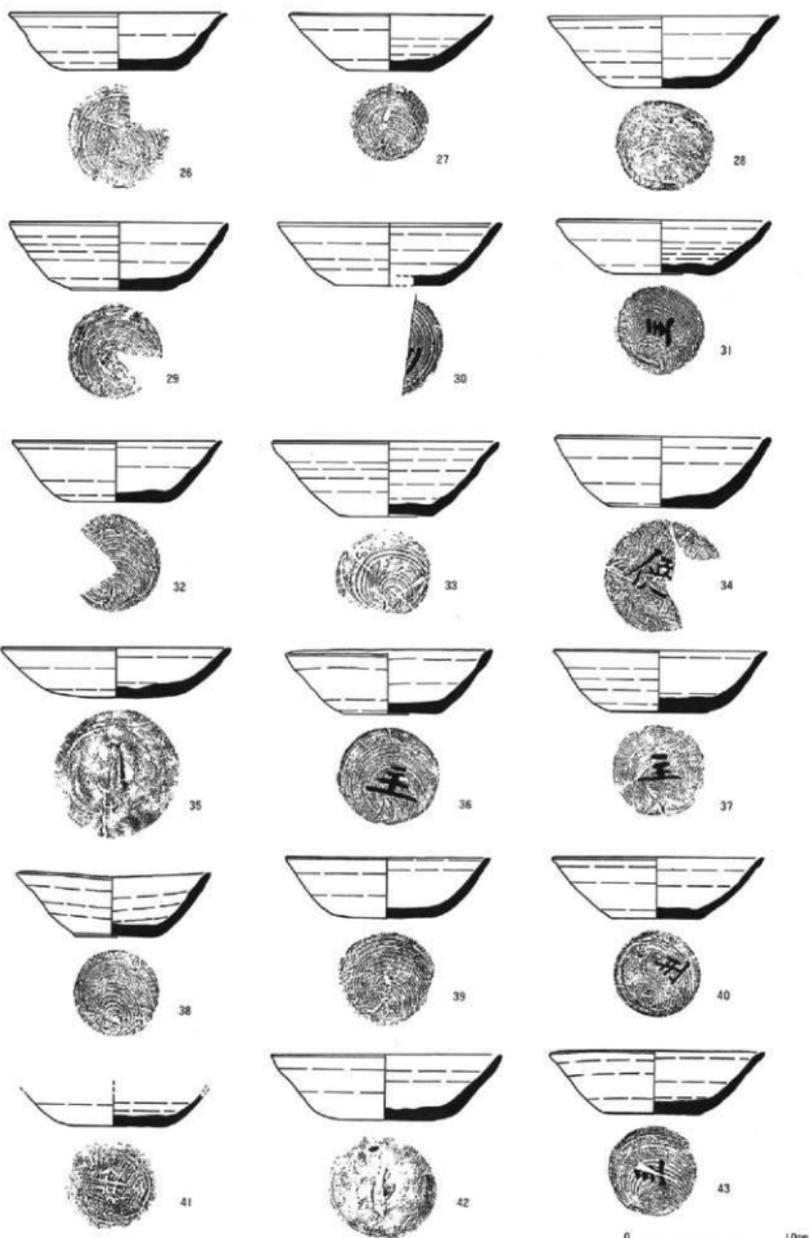
(4) 植物遺体 SD123・124・125からクルミ殻5点と梅の種が2点出土した。

III 土 陶 遺 跡



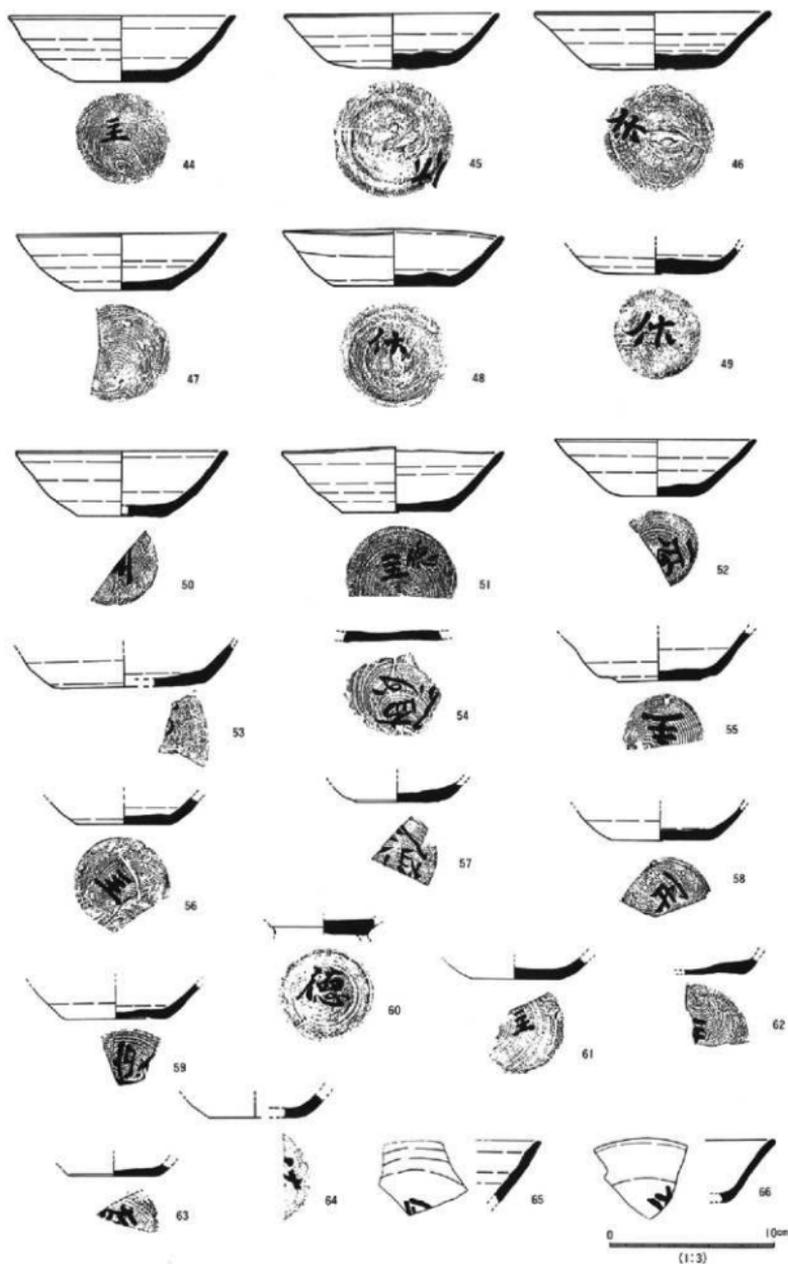
第12圖 遺物実測図(1) 土器 1

III 土崎遺跡



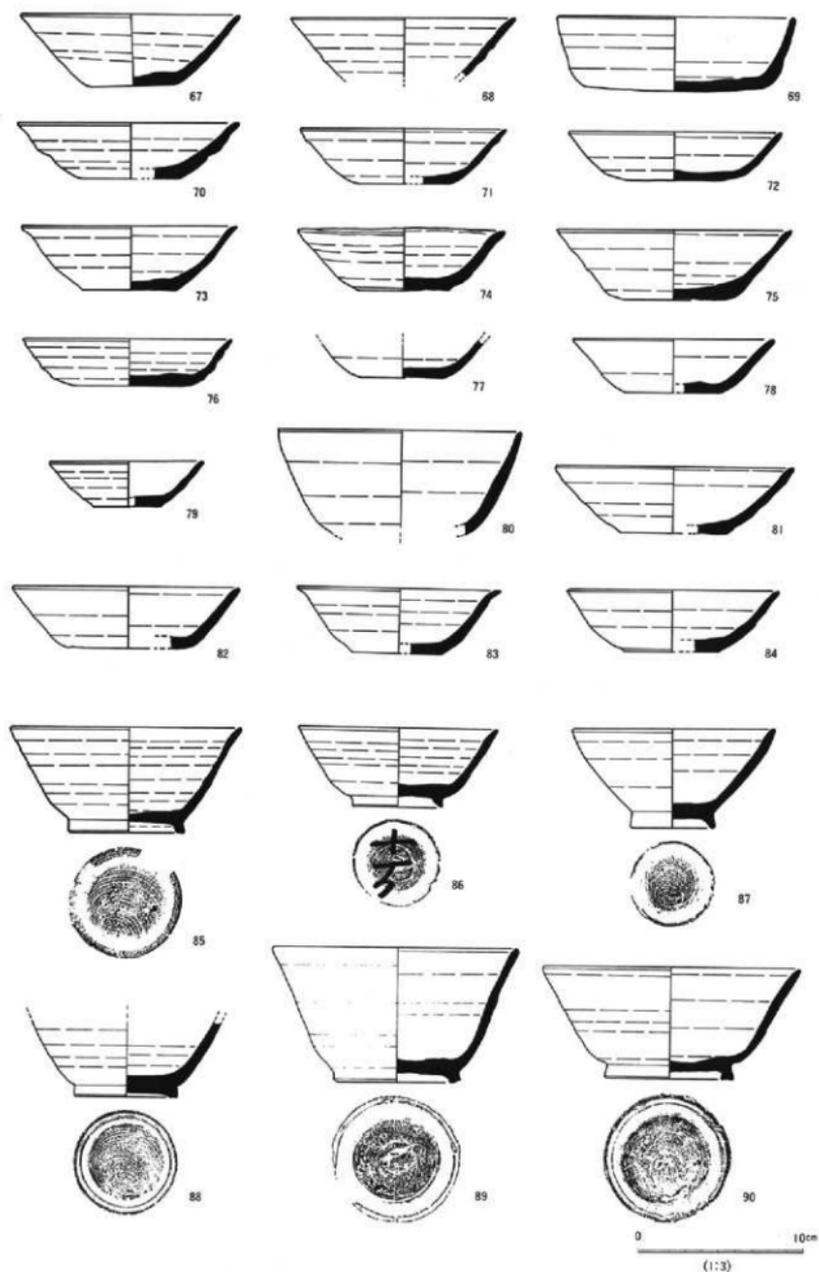
第13図 遺物実測図(2) 土器 2

III 土崎遺跡



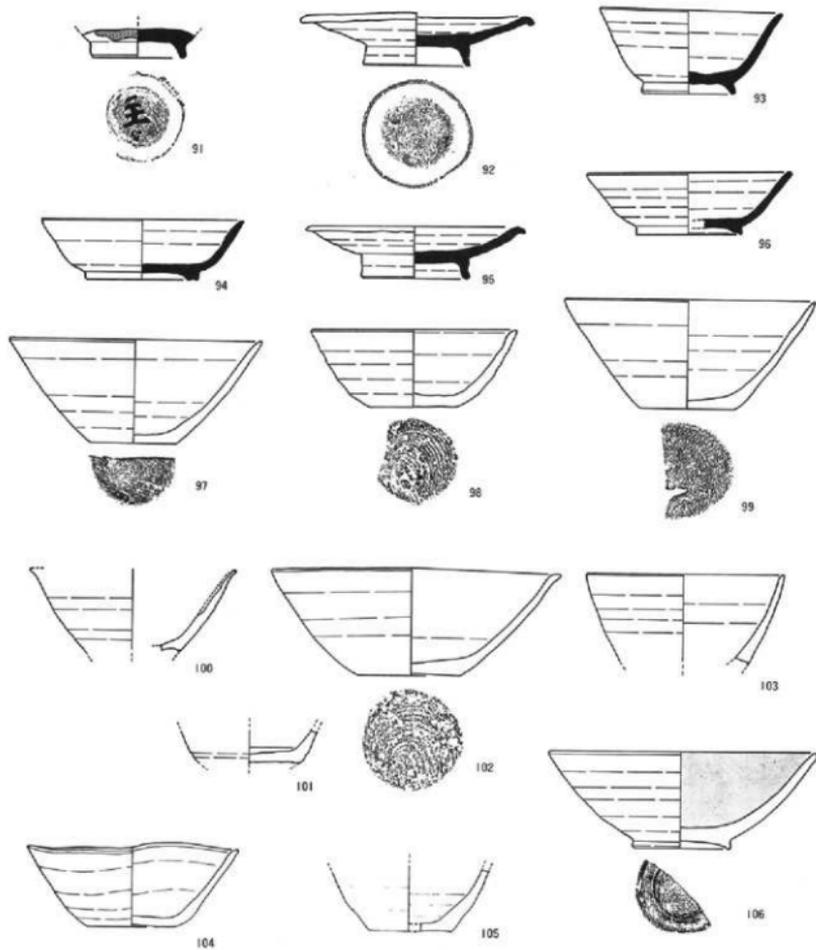
第14图 遺物実測图(3) 土器 3

III 土 師 遺 跡



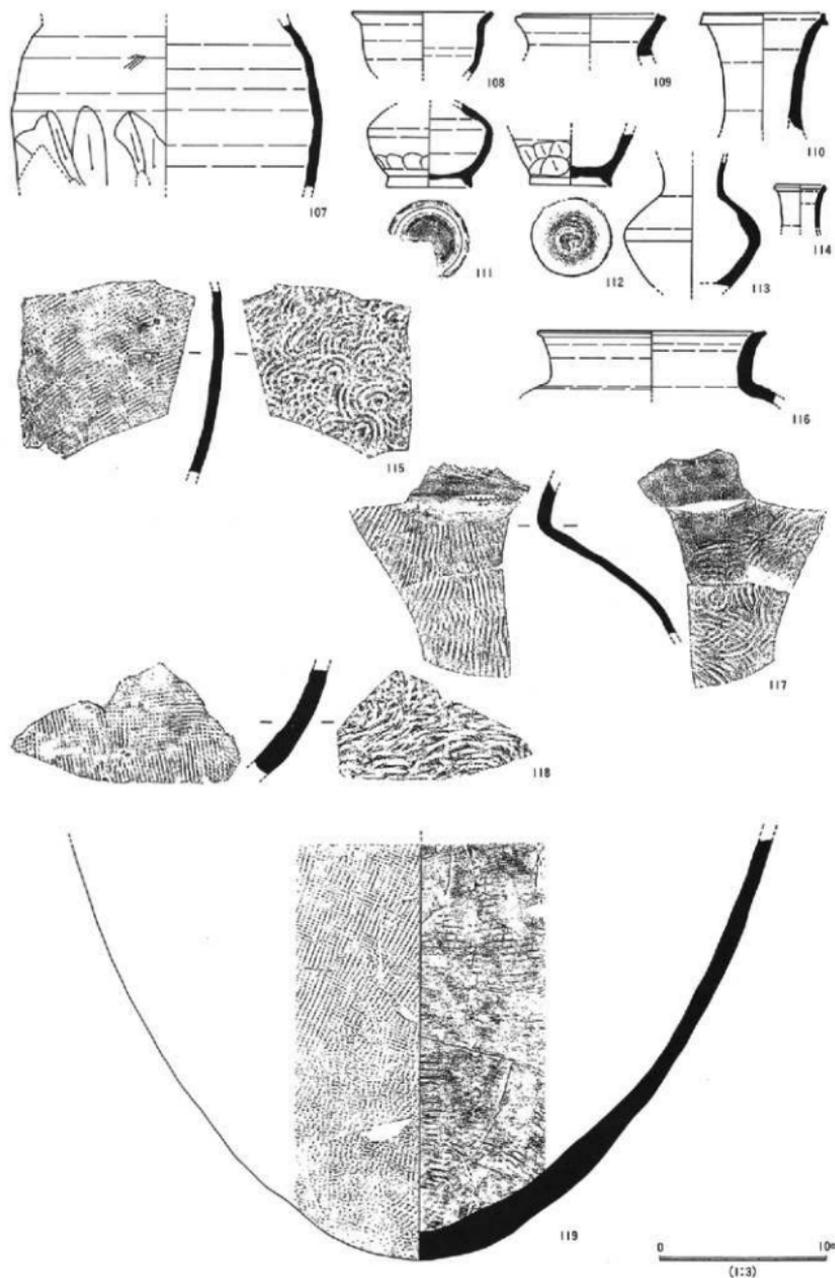
第15図 遺物実測図(4) 土器 4

III 土崎遺跡



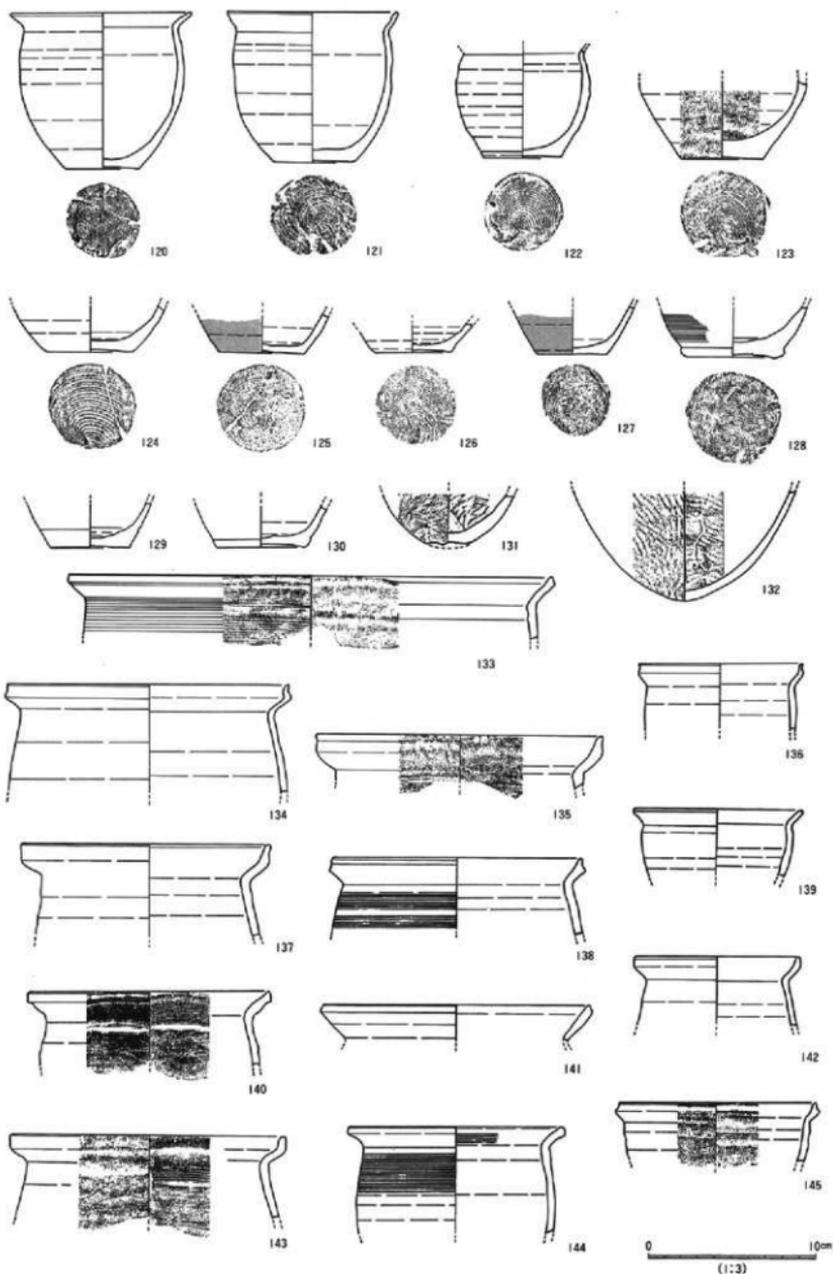
0 10cm  
(1:3)

第16圖 遺物実測図(5) 土器 5

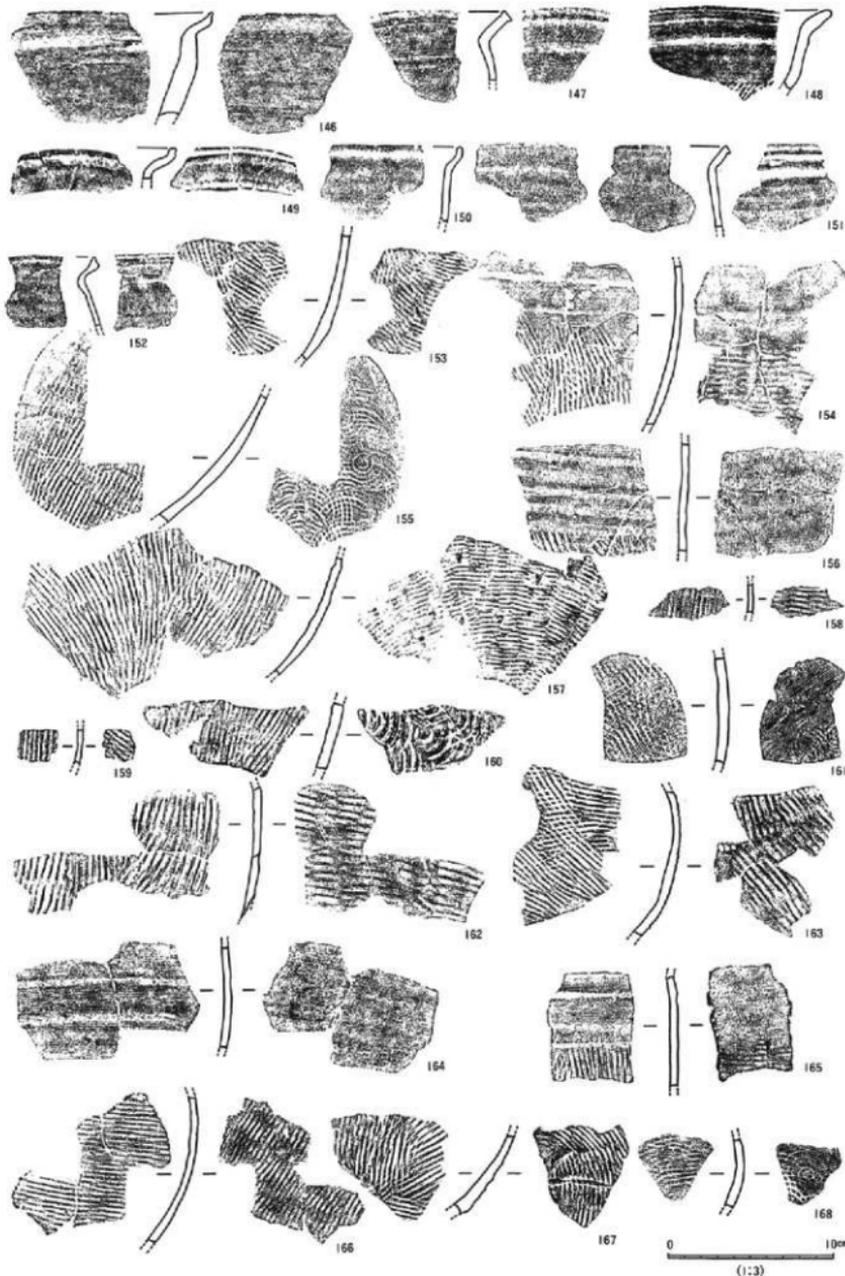


第17図 遺物実測図(6) 土器 6

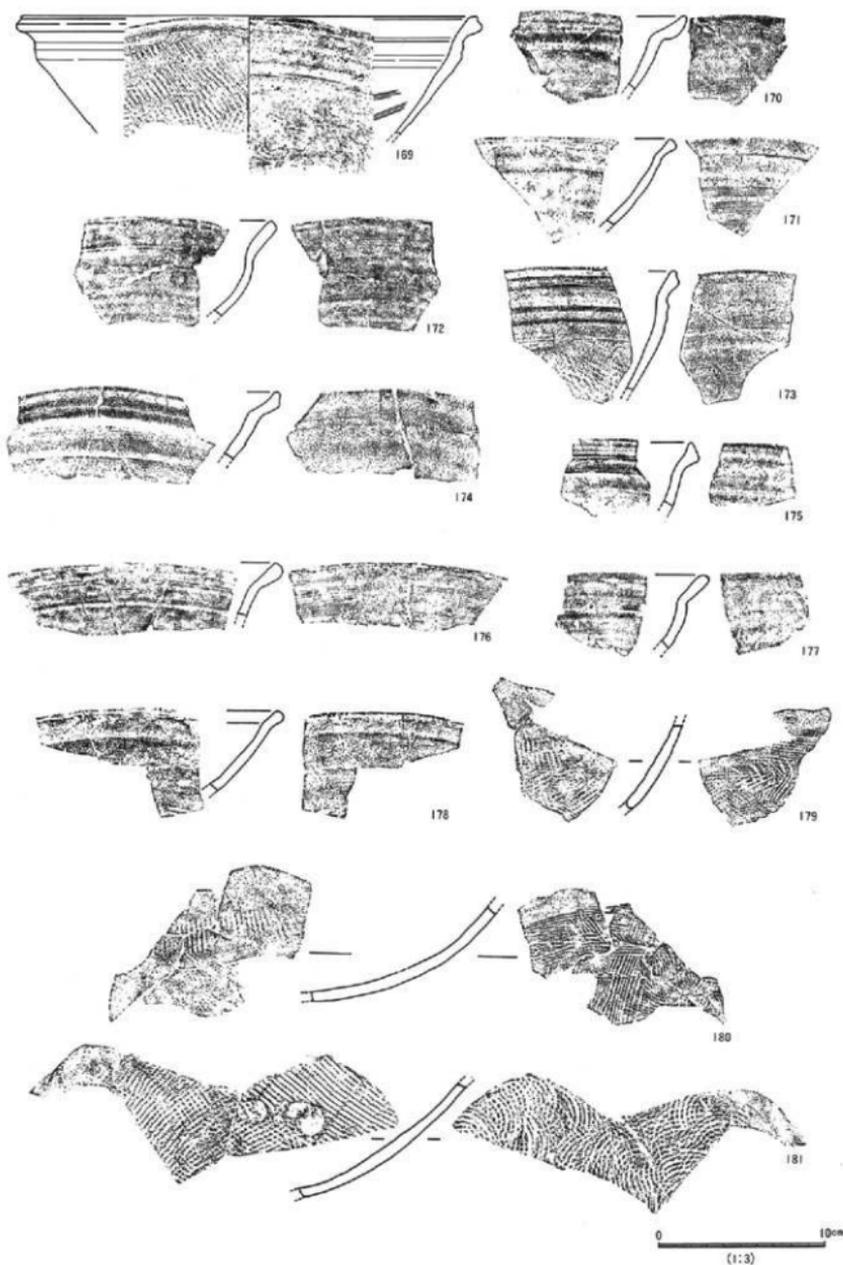
III 土崎遺跡



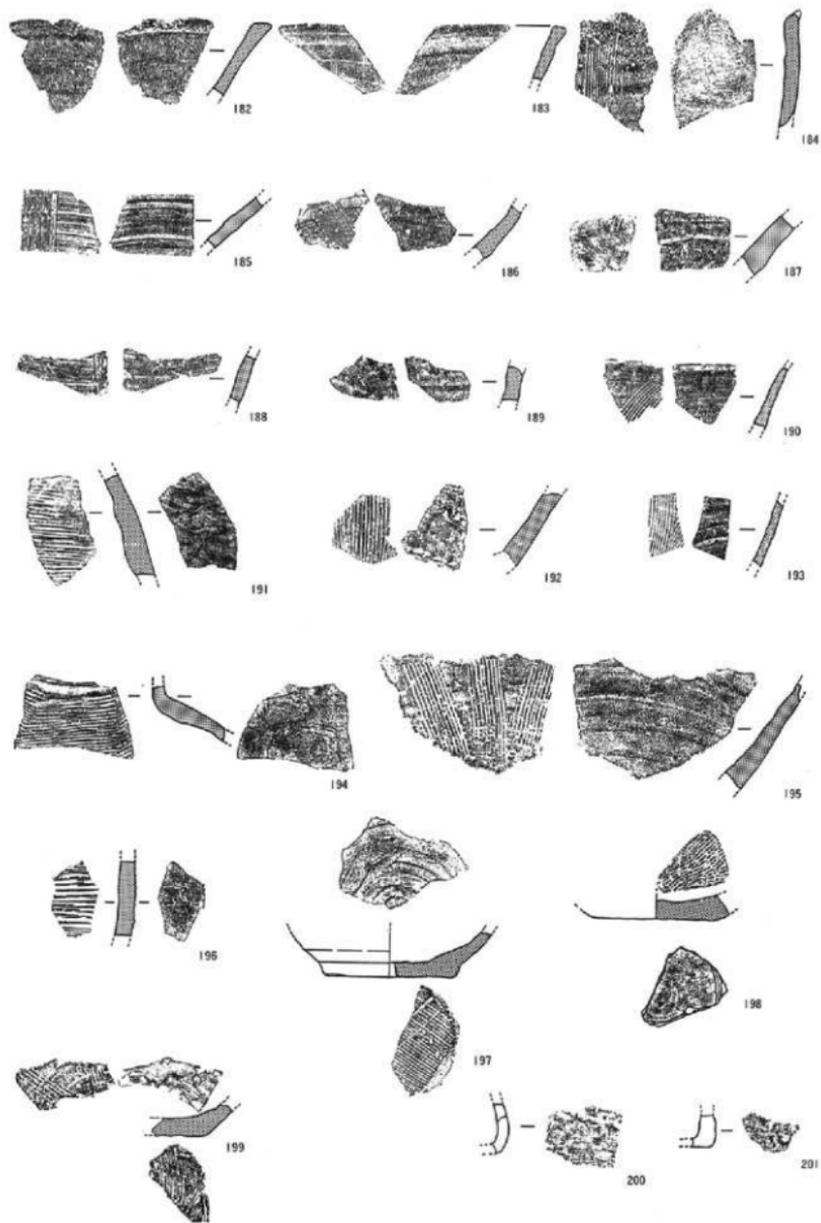
第18圖 遺物実測図(7) 土器 7



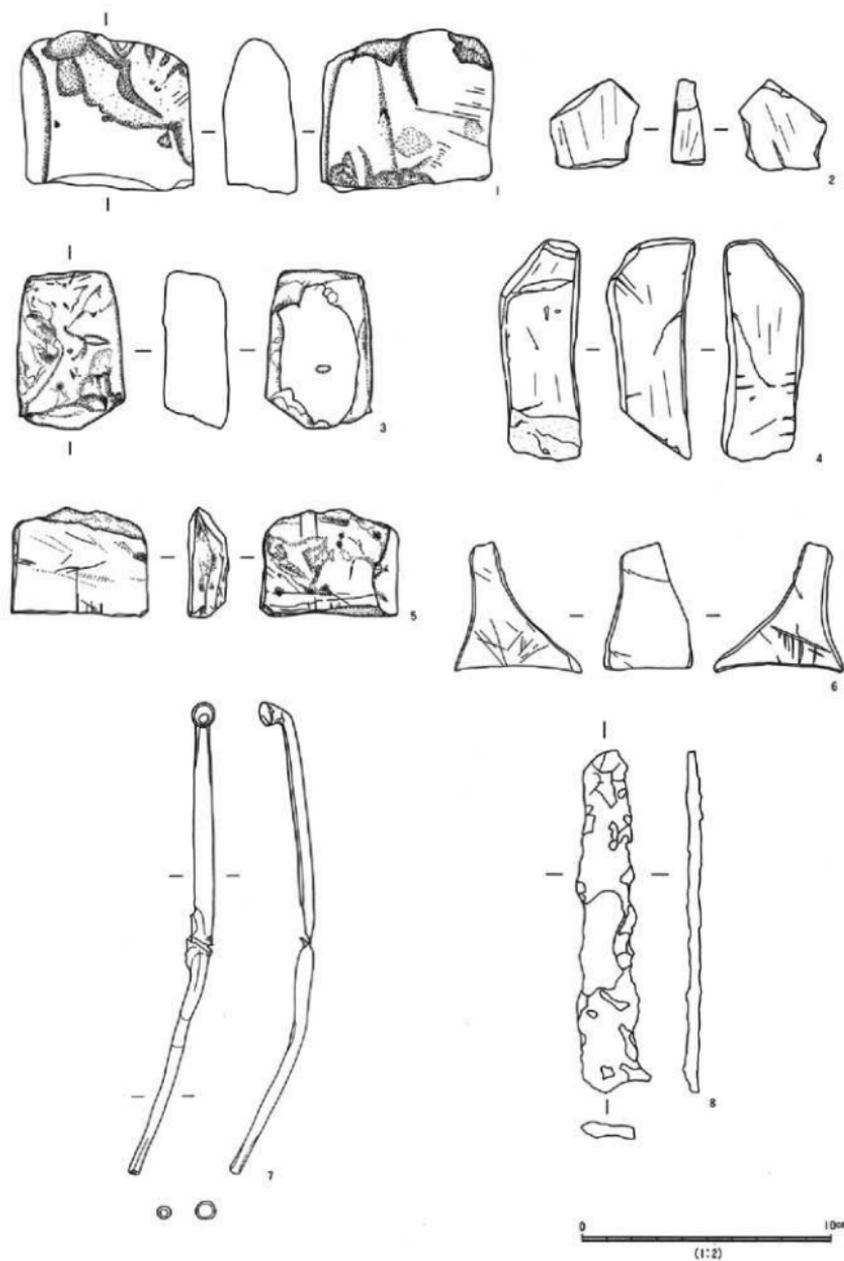
第19圖 遺物実測図(8) 土器 8



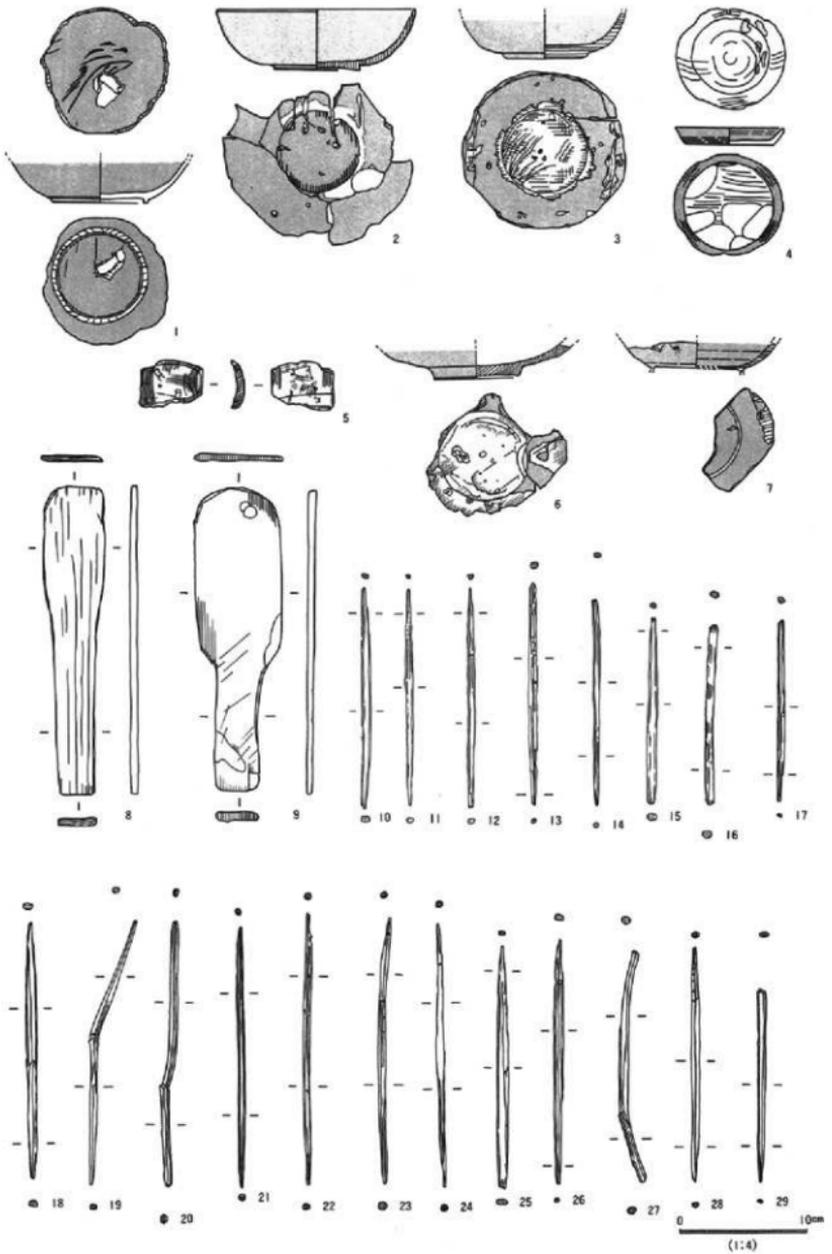
第20圖 遺物実測図(9) 土器 9



第21図 遺物実測図(10) 土器10

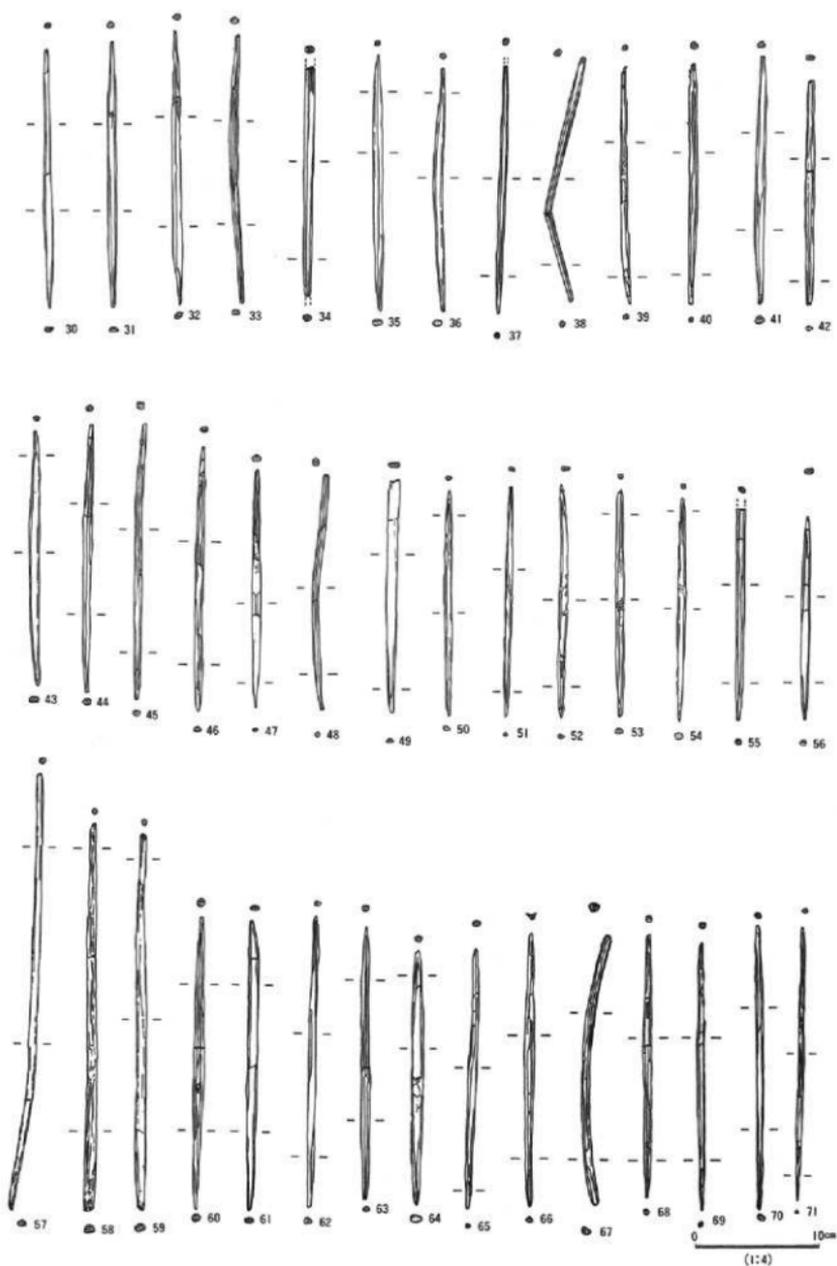


第22図 遺物実測図(10) 石製品他

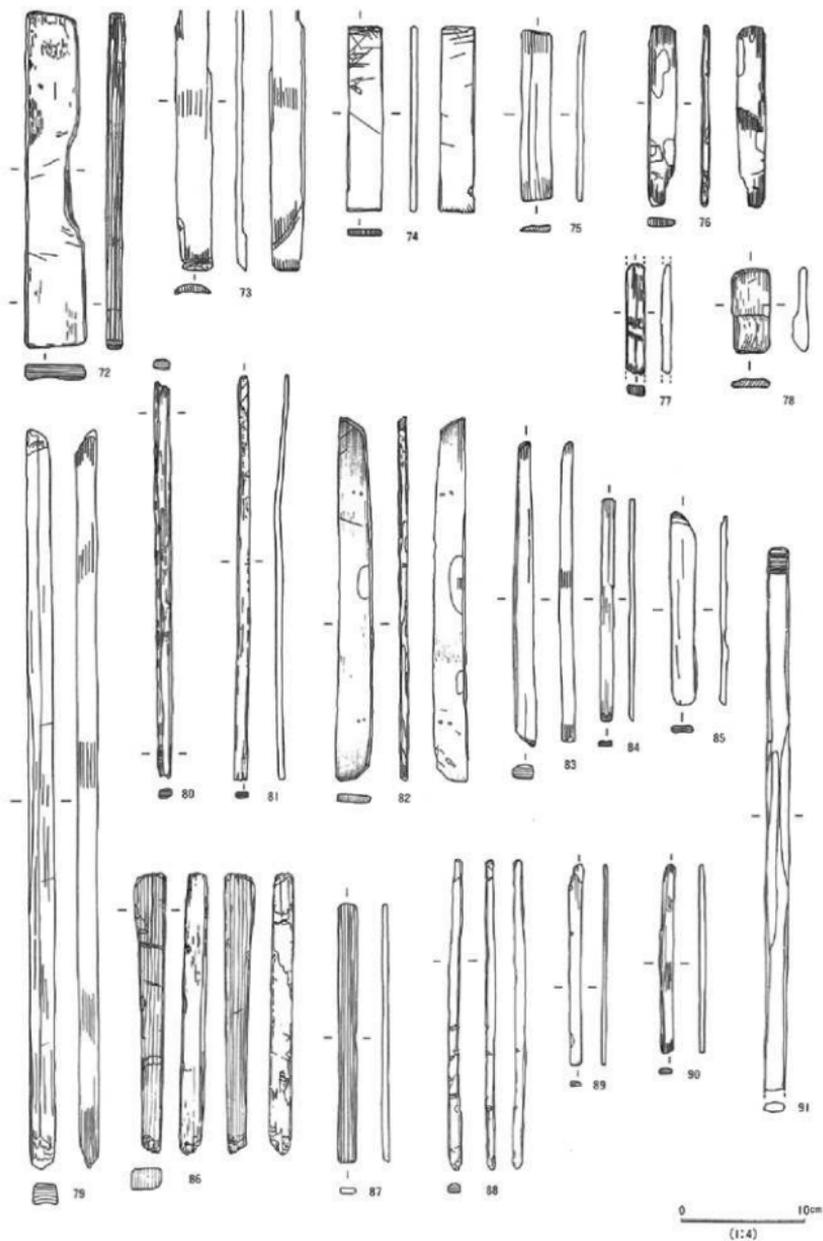


第23圖 遺物実測図(12) 木製品 1

III 土崎遺跡

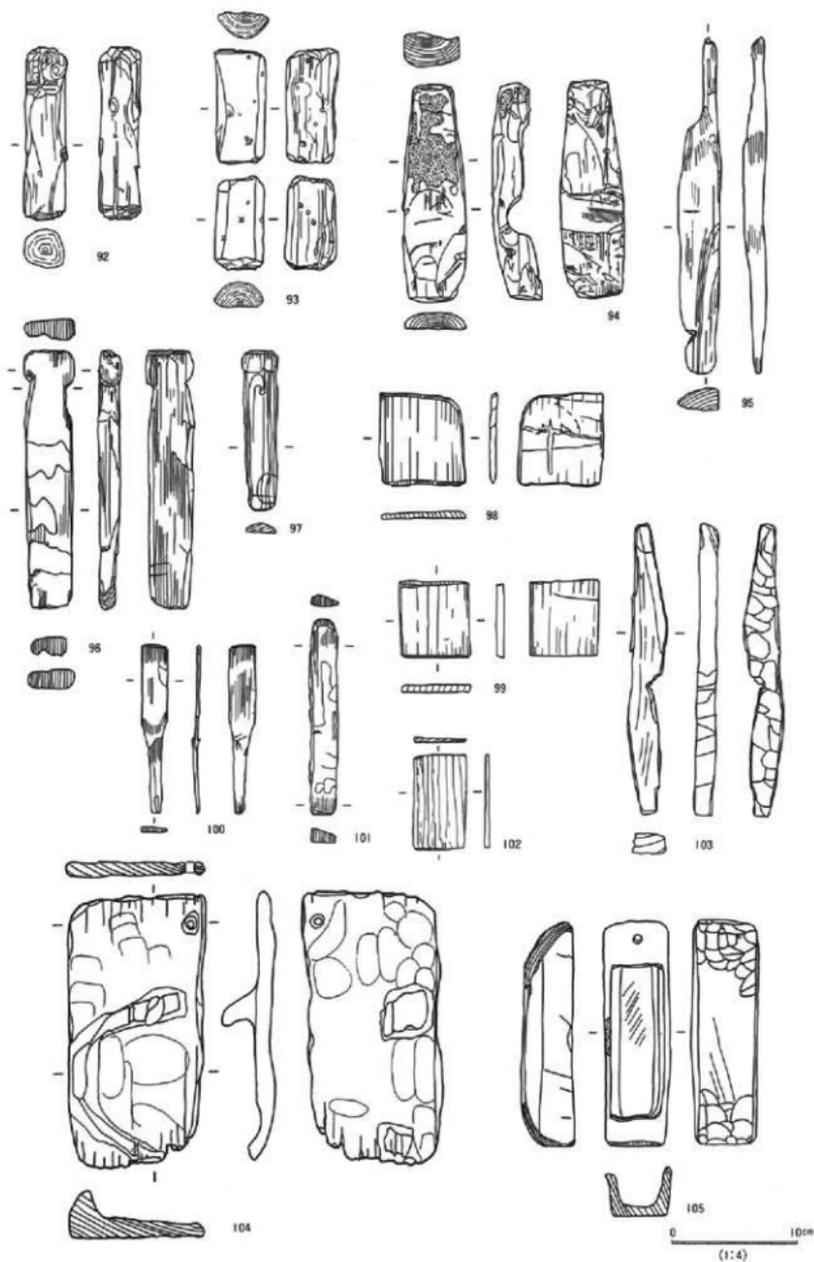


第24図 遺物実測図(1) 木製品 2

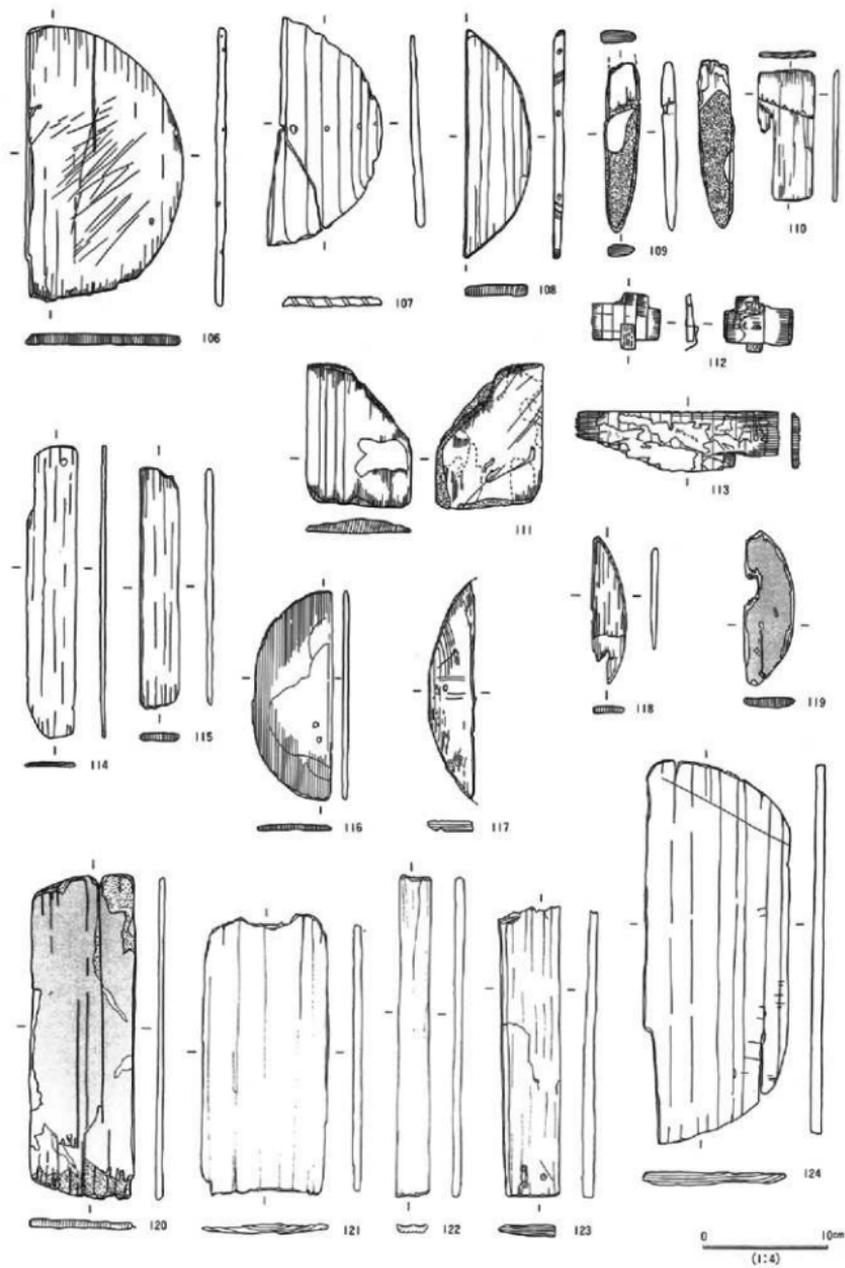


第25図 遺物実測図(14) 木製品 3

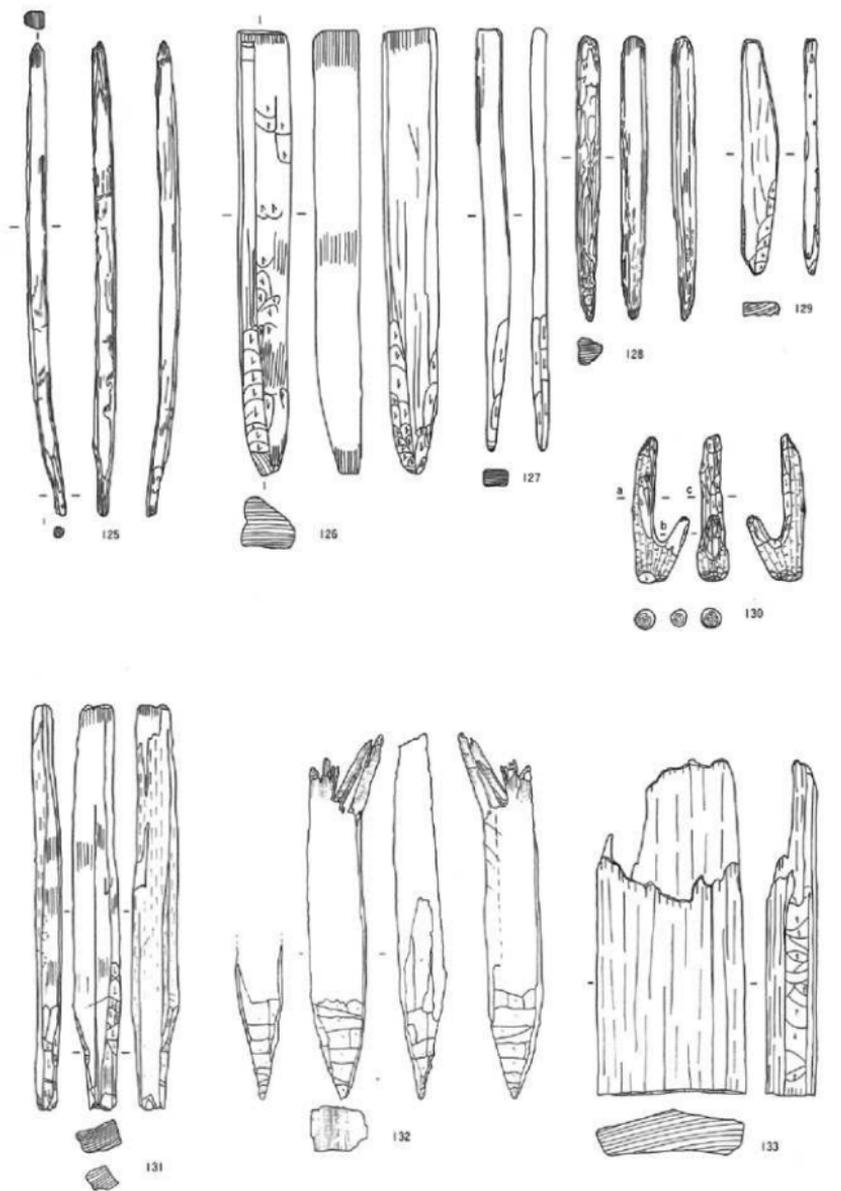
III 土崎遺跡



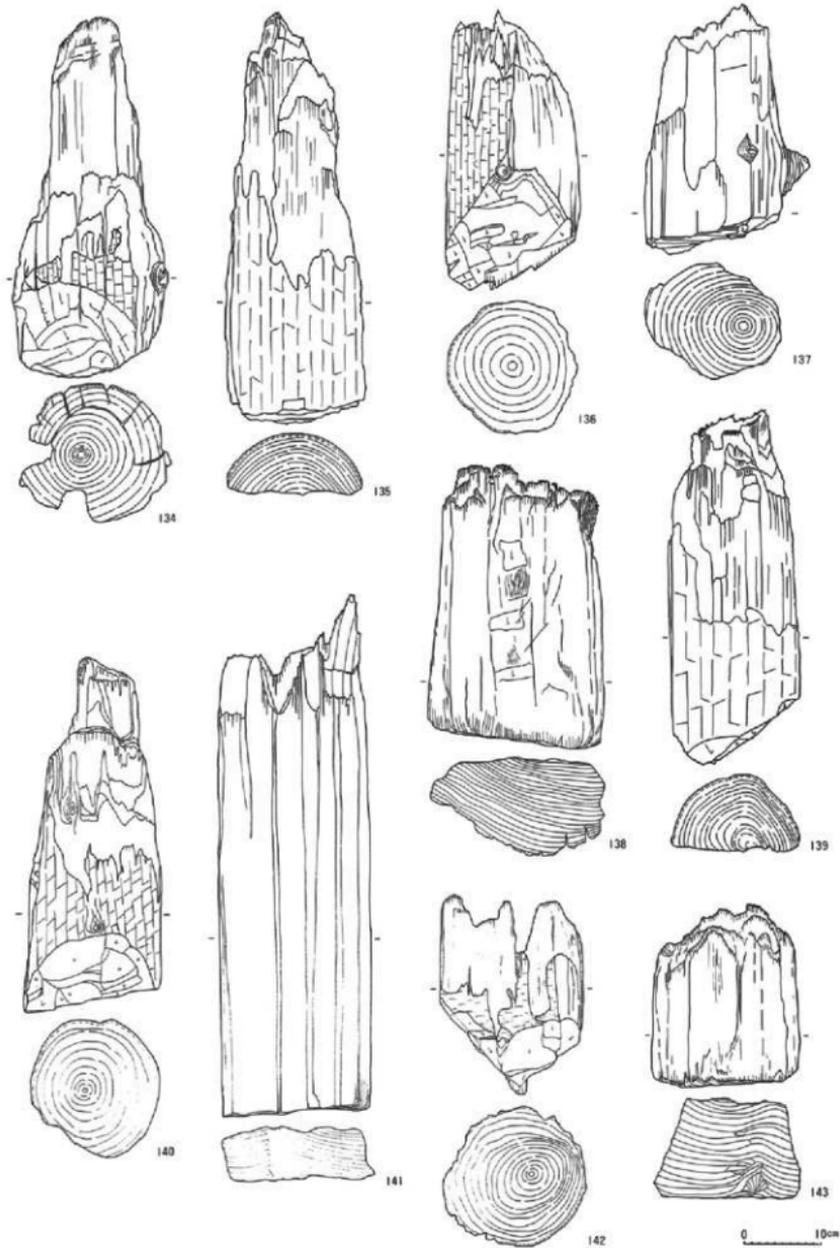
第26図 遺物実測図(15) 木製品 4



第27図 遺物実測図⑩ 木製品 5



第28図 遺物実測図(17) 木製品 6



第29図 遺物実測図(10) 木製品 7

Ⅲ 土崎遺跡

表一 4 土崎遺跡出土遺物観察表 土器(1)

神 田	遺物 番号	種 別	器 種	計 測 値				底面切磨	調 整 技 法		出土地点	備 考	
				口徑	底径	器高	器厚		外 面	内 面			
第12区	1	須恵部	蓋	152		34	6				S D195		
	2	〃	〃	132		34	4				S D124		
	3	〃	〃	144		31	4	糸切り	〃	〃	S D124		
	4	〃	〃	134		28	5		〃	〃	S D124		
	5	〃	〃	160				5	〃	〃	S K57		
	6	〃	〃	141			4		〃	〃	S D124		
	7	〃	〃	124			4		〃	〃	S D124		
	8	〃	〃	128		28	4		〃	〃	R P31		
	9	〃	〃	165					〃	〃	S K57		
	10	〃	〃	138				3	〃	〃	S D124		
	11	〃	〃					5	糸切り	〃	〃	S D124	
	12	〃	〃					5	ヘタ切り	〃	〃	S D173	
	13	〃	〃					7		〃	〃	S D173	「休」
	14	〃	〃	環	124	54	38	6	糸切り	〃	〃	S D124	
	15	〃	〃	〃	132	54	40	6	〃	〃	〃	II	
	16	〃	〃	〃	133	55	40	5	〃	〃	〃	R P12	
	17	〃	〃	〃	128	64	38	5	〃	〃	〃	R P113 S D195	
	18	〃	〃	〃	142	30	40	4	〃	〃	〃	R P25 S P191	
	19	〃	〃	〃	129	56	39	4	〃	〃	〃	S D173	
	20	〃	〃	〃	126	58	37	4	〃	〃	〃	〃	
	21	〃	〃	〃	130	59	37	4	〃	〃	〃	II	
	22	〃	〃	〃	134	58	35	5	〃	〃	〃	S D124	
	23	〃	〃	〃	126	60	33	5	〃	〃	〃	S D124	
	24	〃	〃	〃	140	72	36	5	〃	〃	〃	II	
	25	〃	〃	〃	134	56	39	5	〃	〃	〃	R P14	
26	〃	〃	〃	133	64	35	5	〃	〃	〃	S D124		
27	〃	〃	〃	124	50	35	5	〃	〃	〃	R P49		
28	〃	〃	〃	140	60	45	5	〃	〃	〃	R P72		
29	〃	〃	〃	131	58	42	5	〃	〃	〃	〃		
30	〃	〃	〃	136	66	39	4	〃	〃	〃	S D124 II		
31	〃	〃	〃	130	60	34	5	〃	〃	〃	S D123	「主」	
32	〃	〃	〃	128	60	48	4	〃	〃	〃	S D123		
33	〃	〃	〃	139	58	47	4	〃	〃	〃	S D124 SK144		
34	〃	〃	〃	132	70	43	6	〃	〃	〃	II	「徳」	
35	〃	〃	〃	140	75	31	6	ヘタ切り	〃	〃	II		
36	〃	〃	〃	126	58	39	4	糸切り	〃	〃	S D124 6-7II	「主」	
37	〃	〃	〃	131	57	38	4	〃	〃	〃	S D124	「主」	
38	〃	〃	〃	119	52	37	5	〃	〃	〃	S D123		
39	〃	〃	〃	126	64	38	5	〃	〃	〃	S D195 S D124		
40	〃	〃	〃	130	57	38	3	〃	〃	〃	R P17 S D124	「副」	
41	〃	〃	〃	60			3	ヘタ切り	〃	〃	S D123		
42	〃	〃	〃	142	60	40	6	〃	〃	〃	6-7II II		
43	〃	〃	〃	132	54	39	4	糸切り	〃	〃	R P18 S D13	「主」	
44	〃	〃	〃	138	55	41	5	〃	〃	〃	S D153	「主」	
45	〃	〃	〃	130	70	34	4	ヘタ切り	〃	〃	S D124	「休」	
46	〃	〃	〃	144	65	36	4	〃	〃	〃	S D124	「休」	
47	〃	〃	〃	136	58	35	5	糸切り	〃	〃	R P34 II		
48	〃	〃	〃	135	72	35	6	ヘタ切り	〃	〃	〃	「休」	
49	〃	〃	〃	58			6	〃	〃	〃	S D124	「休」	
50	〃	〃	〃	130	54	40	5	糸切り	〃	〃	II	「主」	
51	〃	〃	〃	133	65	40	3	〃	〃	〃	II	「主・徳」	
52	〃	〃	〃	123	40	35	5	〃	〃	〃	S D172		
53	〃	〃	〃	94			3	ヘタ切り	〃	〃	II		
54	〃	〃	〃				5	糸切り	〃	〃	II	「徳」	
55	〃	〃	〃	50			4	〃	〃	〃	S D124	「主」	
56	〃	〃	〃	58			5	〃	〃	〃	S D123	「主」	
57	〃	〃	〃	48			6	〃	〃	〃	S D173	「徳」	
58	〃	〃	〃	62			5	〃	〃	〃	S D125	「副」	
59	〃	〃	〃	54			4	〃	〃	〃	7-7II	「徳」	
60	〃	〃	高台付環	56			5	ヘタ切り	〃	〃	S D125	「徳」	
61	〃	〃	環	55			6	糸切り	〃	〃	S K190	「主」	
62	〃	〃	〃	4			4	〃	〃	〃	S D173	「主」	
63	〃	〃	〃	52			5	〃	〃	〃	S K126F3		
64	〃	〃	〃	60			6	〃	〃	〃	S K126 6-6		
65	〃	〃	〃				5	〃	〃	〃	II		

表-5 土崎遺跡出土遺物観察表 土器(2)

群	器種	種別	種名	計測値				底部切端	調査技法		出土地点	備考	
				口径	底径	器高	器厚		外面	内面			
第14群	66	須臾器	坏	144			4		ロクロ	ロクロ	II層		
	67	〃	〃	135	55	43	5	糸切り	〃	〃	S D124		
	68	〃	〃	138			5	〃	〃	〃	SD175 S D185		
	69	〃	〃	146	120	47	5	へら切り	〃	〃	SD133 S D124		
	70	〃	〃	136	60	35	5	糸切り	〃	〃	S D123		
	71	〃	〃	126	56	34	4	〃	〃	〃	S D123		
	72	〃	〃	130	60	30	4	へら切り	〃	〃	II層		
	73	〃	〃	112	60	40	5	糸切り	〃	〃	II層		
	74	〃	〃	126	54	26	6	〃	〃	〃	S D124		
	75	〃	〃	144	62	43	5	へら切り	〃	〃	S D195		
	76	〃	〃	128	69	31	4	〃	〃	〃	6-7II		
	77	〃	〃		50		4	糸切り	〃	〃	6-7II		
	78	〃	〃	124	54	34	4	〃	〃	〃	S D123		
	79	〃	〃	125	55	37	5	〃	〃	〃	II層		
第15群	80	〃	〃	148			7	〃	〃	〃	SD124 S P38		
	81	〃	〃	145	64	41	5	糸切り	〃	〃	S D124		
	82	〃	〃	140	70	38	5	へら切り	〃	〃	S P124		
	83	〃	〃	124	56	40	5	糸切り	〃	〃	S D173		
	84	〃	〃	130	60	38	5	〃	〃	〃	S D195		
	85	〃	高台付坏	141	72	65	3	〃	〃	〃	R P11 S K50		
	86	〃	〃	122	53	49	3	へら切り	〃	〃	S D124	〔十万〕	
	87	〃	〃	124	52	61	5	糸切り	〃	〃	SD123 S D124		
	88	〃	〃		64		5	〃	〃	〃	6-7		
	89	〃	〃	150	72	83	6	〃	〃	〃	S D124		
	90	〃	〃	156	78	69	5	へら切り	〃	〃	S D124		
	91	〃	〃		56		5	糸切り	〃	〃	S D 1	〔主〕	
	92	〃	皿	132	63	34	4	〃	〃	〃	S D123		
	93	〃	高台付坏	110	54	54	4	へら切り	〃	〃	S D124		
第16群	94	〃	〃	122	70	38	4	〃	〃	〃	S D124		
	95	〃	皿	126	63	32	3	糸切り	〃	〃	S D124		
	96	〃	高台付坏	126	64	38	4	へら切り	〃	〃	S D124		
	97	あかやき土器	坏	78	53	64	5	糸切り	〃	〃	S D190		
	98	〃	〃	126	50	48	6	〃	〃	〃	S K134 S K155		
	99	〃	〃	152	56	67	5	〃	〃	〃	R P9 S P173		
	100	〃	〃				7	〃	〃	〃	S P173		
	101	〃	〃				6	〃	〃	〃	II層		
	102	〃	〃	176	60	65	5	糸切り	〃	〃	R P77		
	103	〃	〃	120			4	〃	〃	〃	II層		
	104	〃	〃	130	55	49	5	糸切り	〃	〃	R P8 10 17		
	105	〃	〃				4	〃	〃	〃	SD195 S D124		
	106	土師器	高台付坏	185	60	60	5	〃	〃	〃	黒色砥粒 ミガキ	S D171	
	107	須臾器	壺				7		ロクロ ナデ	ロクロ	SD173 S D124		
第17群	108	〃	壺	114			5		ロクロ	〃	S D124		
	109	〃	壺	118			8		〃	〃	S D124		
	110	〃	〃	98			7		〃	〃	S D124		
	111	〃	〃		66		6	糸切り	〃	〃	S P105		
	112	〃	〃		64		6	へら切り	ロクロ ケズリ	〃	S K50		
	113	〃	〃				7		〃	〃	S K124		
	114	〃	〃	42			3		ロクロ	〃	6-7II		
	115	〃	壺				7		タタキ	アテ	II層		
	116	〃	〃	184			10		〃	〃	S D176		
	117	〃	〃				5		〃	〃	7-6		
	118	〃	〃				14		〃	〃	6-7		
	119	〃	〃				18		〃	ロクロ	S K14 S D124		
	第18群	120	あかやき土器	〃	145	60	128	6	糸切り	ロクロ	〃	S D124	
		121	〃	〃	136	67	123	5	〃	〃	〃	II層	
122		〃	〃	63			5	〃	〃	〃	S D124	内面煤	
123		〃	〃	67			7	〃	〃	〃	S D124	外面煤	
124		〃	〃	70			6	〃	ロクロ ハケメ	〃	R P21		
125		〃	〃	70			6	〃	〃	ロクロ ハケメ	II層	外面煤	
126		〃	〃	60			6	〃	ロクロ	ロクロ	S K144		
127		〃	〃	55			5	〃	〃	〃	S K124	外面煤	
128		〃	〃	76			8	〃	ロクロ ハケメ	〃	II層		
129		〃	〃	66			5	〃	ロクロ	〃	S D172		
130		〃	〃	70			5	〃	〃	〃	5-6		

III 土崎遺跡

表一6 土崎遺跡出土遺物観察表 土器(3)

検出 品目	遺物 番号	種別	器種	計測値			底面切離	調整技法		出土地点	備考
				口径	底径	器高		器厚	外面		
第18区	131	あかやき土器	壺				10	タタキ	アテ	S D124	
	132	〃	〃			90	6	〃	〃	S D124	
	133	〃	〃	394			6	ロクロ カキメ	ロクロ	S D22 S P13	
	134	〃	〃	226			5	〃	〃	S P123	
	135	〃	〃	230			10	〃	〃	II	
	136	〃	〃	132			5	〃	〃	S D134 6-7	
	137	〃	〃	204			6	〃	〃	〃	S K57 II
	138	〃	〃	200			7	ロクロ カキメ	〃	7-7II	
	139	〃	〃	136			5	ロクロ	〃	RF12 SD124	
	140	〃	〃	197			5	〃	〃	S D124	
	141	〃	〃	216			7	〃	〃	S D125	
	142	〃	〃	134			5	〃	〃	R P24	周囲スス
	143	〃	〃	222			7	〃	〃	S D173	
	144	〃	〃	176			7	ロクロ カキメ	〃	S D124	周囲燻
	145	〃	〃	158			6	ロクロ	〃	S D123 SD124	周囲燻
第19区	146	〃	埴				16	〃	ロクロ カキメ	S D123	
	147	〃	壺	254			6	〃	ロクロ	II	
	148	〃	埴				9	タタキ	アテ	II	
	149	〃	壺	200			7	アテ	〃	S D124	
	150	〃	〃				6	ロクロ	ロクロ	S D123	
	151	〃	〃				6	〃	〃	S D172	
	152	〃	〃				5	〃	〃	S D122	
	153	〃	〃				8	タタキ	アテ	R P6 S K155	周囲燻
	154	〃	〃				7	ロクロ カキメ	ロクロ アテ	R P6 S K155 SK156 SK159 S P13	
	155	〃	埴				9	タタキ	アテ ナデ	S D124	
	156	〃	壺				6	ロクロ カキメ	ロクロ ハケメ	S F143 SD124	内面燻
	157	〃	〃				5	タタキ	アテ	S D124	外面燻
	158	〃	〃				6	〃	アテ 朱	5-6II	
	159	〃	〃				5	〃	〃	〃	S D124
	160	〃	〃				9	〃	アテ	II	
161	〃	〃				9	〃	〃	S D124		
162	〃	〃				7	〃	〃	S K144		
163	〃	〃				7	〃	〃	S D123	外面燻	
164	〃	〃				6	ロクロ カキメ	ロクロ	4-5II		
165	〃	〃				6	ロクロ カキメ	ロクロ カキメ	S D124		
166	〃	〃				6	タタキ	アテ	〃		
167	〃	〃				8	〃	〃	S D125 II	周囲燻	
168	〃	〃				7	タタキ カキメ	アテ カキメ	R P6 S K155		
169	〃	埴	370			8	ロクロ カキメ	タタキ	II		
170	〃	〃				8	ロクロ	ロクロ	SD124 SD173		
171	〃	〃				7	ロクロ カキメ	ロクロ カキメ	II	外面燻	
172	〃	〃				7	ロクロ	ロクロ	S D124		
173	〃	〃	370			8	ロクロ アテ	ロクロ アテ カキメ	R P25 5-6 II		
174	〃	〃				9	ロクロ カキメ	ロクロ カキメ	S K144 II		
175	〃	〃				7	ロクロ	ロクロ	6-6II		
176	〃	〃	380			8	〃	ロクロ ハケメ	S D124		
177	〃	〃	410			9	ロクロ カキメ	ロクロ カキメ	S D123	外面燻	
178	〃	〃				7	〃	〃	II		
179	〃	〃				9	タタキ カキメ	アテ カキメ	S D1		
180	〃	〃				9	タタキ ケズリ	〃	S D124	外面燻	
181	〃	〃				7	ロクロ カキメ	〃	7-7II	外面燻	
第21区	182	珠洲系陶器	すり鉢				9	〃	ロクロ	II	
	183	〃	〃				7	〃	ロクロ 磨目	S K35	
	184	〃	壺				11	〃	〃	S D1	
	185	〃	すり鉢				10	〃	磨目	5-7II	
	186	〃	〃				10	〃	ロクロ	II	
	187	〃	〃				11	〃	ロクロ 磨目	II	
	188	〃	〃				10	〃	〃	6-7II	
	189	〃	〃				12	〃	ロクロ	II	
	190	〃	〃				8	〃	ロクロ 磨目	II	
	191	〃	壺				16	タタキ	アテ	S K67	
	192	〃	すり鉢				14	ロクロ	磨目	II	
	193	〃	〃				5	〃	〃	II	
	194	〃	壺				9	タタキ	アテ	S D1	
	195	〃	すり鉢				14	ロクロ	磨目	S D1	
	196	〃	壺				15	タタキ	アテ	S D1	
197	〃	すり鉢	50			9	板目板	ロクロ ケズリ	ロクロ	S P10	
198	近世陶器	〃				16	ヘラ切り	〃	〃	II	
199	珠洲系陶器	〃				10	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	II	
200	製塩土器	壺				10	手づくね	手づくね	6-6II		
201	〃	〃				12	〃	〃	6-6II		

表一 石製品他

採掘区	遺物番号	種別	器種	計測値 mm			破損の有無	調整	出土位置	備考
				最大長	最大幅	厚さ				
第22区	1	磁石		66	68	28	有り	両面に研ぎ筋跡	II層	砂岩
	2	#		36	34	13	#	両面に研ぎ筋跡	II層	砂岩
	3	#		65	44	24	#	片面に研ぎ筋跡	S G 124	砂岩
	4	#		90	32	30		全面に研ぎ筋跡有り 網かいキズ有り	S D 1	白色粘岩
	5	#		45	55	16	有り	両面・側面に研ぎ筋跡有り	S G 195	砂岩
	6	#		51	53	35	#	全面に研ぎ筋跡有り 網かいキズ有り	S G 124	白色粘岩
	7	キセル		139	8	6	曲げ	途中で折れ曲がっている。真鍮製	II層	草花の模様有り
	8	刀子		139	28	4	有り	網がほげしい	S K 7	

表一 土崎遺跡出土物観察表 木製品(1)

採掘区	遺物番号	種別	計測値			破損有無	調整 技法等	出土地点	備考
			長	幅	厚さ				
第23区	1	筒			3		内外面に漆塗布 底径70 高さ28 高台取れている。	RW69	黒漆に朱文様
	2	#			5		内外面に漆塗布 底径68 高さ50 口径150	S D 1 RW22	
	3	#			7		内外面に漆塗布 底径70 高さ36	S D 1 RW20	
	4	#			5		内外面に漆塗布 底径74 高さ14 口径36	RW69	
	5	#	39	50	5				
	6	#			5				
	7	#			4		内外面に漆塗布 底径70 高さ23	S D 1 RW23	
	8	へら	251	50	5		内外面に漆塗布 底径75 口径125 高さ23	S K 124	
	9	#	279	69	5			S K 4	
	10	箸	180	7	5		小刀ケズリ	S K 13	
	11	#	177	7	4		#	S K 13	
	12	#	179	6	4		#	S K 13	
	13	#	179	6	6		#	S K 67	
	14	#	167	6	4		#	S K 4	
	15	#	152	8	6		#	S K 13	
	16	#	145	7	6		#	RW1	先端丸い
	17	#	147	5	5		#	S D 1	
	18	#	210	9	5		#	S K 4	
	19	#	220	6	5		#	S K 67	
	20	#	215	8	7		折れ	RW1	
	21	#	214	5	5		#	S K 67	
	22	#	224	6	5		#	S K 67	
	23	#	220	6	6		#	S K 67	
	24	#	215	5	5		#	S K 67	
	25	#	196	7	5		#	S K 13	
	26	#	196	7	5		#	S D 1	
	27	#	190	7	7		折れ	RW1	
	28	#	191	7	5		#	S K 34	
	29	#	158	7	5		#	S K 4	
第24区	30	#	211	5	4		#	S K 67	
	31	#	217	6	4		#	S K 67	
	32	#	226	6	4		#	S K 67	
	33	#	221	7	4		#	S K 67	
	34	#	185	6	5		#	S K 67	
	35	#	211	8	6		#	S K 13	
	36	#	200	7	5		#	S K 13	
	37	#	202	5	5		#	S K 67	
	38	#	200	6	6		折れ	S K 34	
	39	#	193	4	5		#	S K 67	
	40	#	197	6	5		#	S K 67	
	41	#	203	8	6		#	S K 67	
	42	#	184	7	5		折れ	S K 4	
	43	#	209	8	5		#	S K 13	
	44	#	220	7	5		#	S K 67	
	45	#	224	6	6		#	S K 67	
	46	#	215	6	4		#	S K 67	
	47	#	191	6	4		#	S K 4	
	48	#	191	6	5		#	S K 34	
	49	#	190	9	4		#	S K 4	
	50	#	185	5	5		#	S K 13	
	51	#	187	5	3		#	S D 1	
	52	#	186	5	4		#	S K 67	
	53	#	186	7	5		#	S K 13	
	54	#	183	6	6		#	S K 13	
	55	#	172	5	5		#	S K 67	
	56	#	165	7	4		#	S K 34	
57	#	355	7	5		#	S K 13		
58	#	315	8	6		#	S K 13		
59	#	305	9	6		#	S K 13		
60	#	240	8	6		#	S K 67		
61	#	228	7	4		#	S K 67		
62	#	223	6	4		#	S K 67		
63	#	224	6	4		#	S K 67		
64	#	208	9	6		#	S K 13		
65	#	212	7	5		#	S D 1		

田 土崎遺跡

表一 9 土崎遺跡出土遺物観察表 木製品(2)

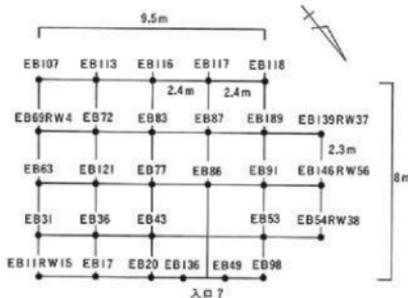
探検	遺物 番号	種 別	計 測 値			破損 有無	調 整 様 法 等	出土地点	備 考
			長	幅	厚さ				
第24回	66	箸	221	7	5			S K67	
	67	#	220	13	7		小刀ケズリ	S D1	
	68	#	214	5	5			S K67	
	69	#	208	5	4			S K67	
	70	#	230	5	5			S K67	
	71	#	224	5	3		小刀ケズリ	S D1	
	72	飯材	277	50	13		小刀ケズリ 扱加工有り	S K67	
	73	#	240	29	9		端にノコ有り	S E34	
	74	#	151	27	5		先ケズリ	S K67	キズ多い
	75	#	136	26	5		片削ケズリ 刃物切り込み	S K13	
第25回	76	#	149	22	7	有り		S K67	
	77	棒材	92	14	9		両面削 木口→小刀	S K13	
	78	#	69	31	13		両端ケズリ	S K4	
	79	#	605	22	16		手拵 木口→削 小刀	S K4	
	80	#	324	13	8	有り		S D1	
	81	#	328	10	5			S K13	
	82	飯材	298	27	6	有り	小刀ケズリ 削	S K67	
	83	棒材	251	17	11		小刀ケズリ 削	S K34	
	84	#	181	10	4			S K4	
	85	丸板	157	19	6			S K13	
第26回	86	棒材	228	125	18			S K13	
	87	#	212	15	5		削	S K13	キズ多い
	88	#	255	10	7	折損	削 木口→削 小刀キズ	S K143	
	89	#	163	10	3			S K4	
	90	#	152	10	5			S K4	
	91	#	442	17	7	欠損	小刀ケズリ 端にキズが入る。	S K4	
	92	#	143	32	30		表皮有り 小刀によりキズミ 木口→削	S D123	
	93	#	92	40	20	半削	表皮有り 木口→削	S D123	
	94	吊り具	177	51	25	焼け有り	小刀ケズリ	S K67	焼け跡有り
	95	棒材	275	36	18			S K4	
第27回	96	鉄鋸み具	212	38	17		手拵ケズリ くびれ部→小刀ケズリ 木口→削	S D124	
	97	#	130	25	7	半削	手拵ケズリ くすれ部→小刀ケズリ 木口→削	S K143	
	98	飯材	27	68	5		削 手拵 木口→削	S K4	
	99	#	60	55	6		削 木口→削	S K4	
	100	高申	138	20	3	折れ	削 木口→小刀ケズリ	S K67	
	101	棒材	160	215	8		削 小刀ケズリ 先端→加工	S D1	
	102	飯材	76	43	4		削 木口→削	S D1	
	103	#	238	29	16		両面→手拵ケズリ	RW36	
	104	下駄	256	110	15		手拵ケズリ 小刀ケズリ	S P128	
	105	舟形木製品	183	54	40		手拵ケズリ 小刀ケズリ 製網込み 穿孔有り	RW19	
第28回	106	丸板	228	126	9		削 表面に切り傷	S K34	
	107	#	184	81	7	半削	削 表面に切り傷 穿孔4カ所	S D1	
	108	#	185	49	9		削 木口に穿孔(木釘)	S D1	
	109	飯材	138	28	11	焼け		S K67	焼け跡有り
	110	#	107	45	4		削 小刀のキズ	S D1	
	111	#	115	83	11	焼け		S K67	焼け跡有り
	112	高物拵	38	54	5	有り	削 接合した樹皮帯有り	S K34	焼け跡有り
	113	#	48	162	5	#	削 付着物有り	S D1	焼け跡有り
	114	穴開き板	240	40	3		削 穿孔有り 木口→削	S K55	
	115	板	196	33	6		削 木口→削	S D1	
第29回	116	丸板	160	63	5		削 漆付着 木口→削 小刀	S K143	
	117	#	178	36	8	半削			
	118	#	100	26	5	半削	削	S K4	
	119	#	126	40	8	半削	漆付着	S D1	
	120	#	264	84	6			S D1	
	121	漆丸板	229	111	8		削	S D1	焼け跡有り
	122	飯材	262	21	7		削	S D1	
	123	穴開き板	236	48	85		穿孔3カ所		
	124	丸板	319	117	10	半削	削 穿孔有り 木口→小刀	S D1	
	125	皿	367	11	14		手拵ケズリ	S D1	
第28回	126	#	262	43	26		手拵ケズリ	S K34	
	127	#	343	22	12	有り	手拵ケズリ	S K13	
	128	棒材	233	185	21		手拵ケズリ	S K13	
	129	#	191	29	13		削 木口に穿孔6カ所(木釘)	S D1	
	130	吊り具	129	39	39		ケズリ	S K34	
	131	杭	499	58	31	上部破損	手拵ケズリ 先端二面ケズリ	RW67	
	132	#	439	65	53	#	手拵ケズリ 先端四面ケズリ	S K55	
	133	柱材	400	180	50	#	手拵ケズリ 底平削	RW30	
	134	#	443	180	170	#	手拵ケズリ 底[V]字形	E P139	
	135	#	563	159	66	#	表皮有り 手拵ケズリ 底平削	RW74	
第29回	136	#	346	158	153	#	表皮有り 手拵ケズリ 底[V]字形	RW53	
	137	#	285	162	143	#	手拵ケズリ 底平削	E P54	
	138	#	335	206	118	#	手拵ケズリ 底平削	RW16	
	139	#	436	151	91	#	表皮有り 手拵ケズリ 底[V]字状	E P61	
	140	#	420	160	170	#	表皮有り 手拵ケズリ 底[V]字状	E P38	
	141	#	620	173	65	#	手拵ケズリ ノコ 底平削	E P47	
	142	#	235	170	170	#	表皮有り 手拵ケズリ 底[V]字状	E P44	
	143	#	224	175	123	#	手拵ケズリ ノコ 底平削	RW3	

5 ま と め

今回の発掘調査は、東北横断自動車道建設に係る1,050㎡について実施した。調査の結果、検出された遺構は掘立柱建物跡2棟、井戸跡5基、土壇13基、溝跡6条状、畝跡21条、小穴群である。遺物は須恵器・あかやき土器・黒色土器・中世陶器・近世陶磁器、金属製品がある。検出された遺構と遺物についての若干の検討を加え、まとめとする。

(1) 遺構について

庄内平野では、平安時代から低地での集落経営が一般化する。その多くは自然堤防上の安定した環境を選択するが、その傾向は近世そして現代に至るまで連続して見られる。当然、中世の集落も自然堤防上を利用したとみられる。土崎遺跡も自然堤防の先端部に位置し、狭い範囲を有効に利用している様子が伺える。発見された建物跡は柱柱配置や周囲から出土した遺物などから中世の建物と考えられる。庄内地方で同様な建物跡は遊佐町升川遺跡(阿部明彦1993)や手蔵田10・11遺跡(名和達郎1988)で確認されている。北陸地方での調査成果では、13世紀から総柱構造の建物が一般化し、梁行方向及び桁行方向への拡大が顕著になる。13世紀後半には8間を越す建物が現れる。この時期に上層有力農民へ普及したと推定している。SB1掘立柱建物跡を観察すると北面に柱並びの不規則な部分があり、入口部と想定することができる。また、井戸や土壇が東→北東(鬼門)に集中し、建物内部に重なる井戸跡(SE34・SE67)もある。建物内部の利用法や土壇・井戸の位置など陰陽道思想の影響も検討すべき点である。



第30図 建物跡(SB1)の柱配置

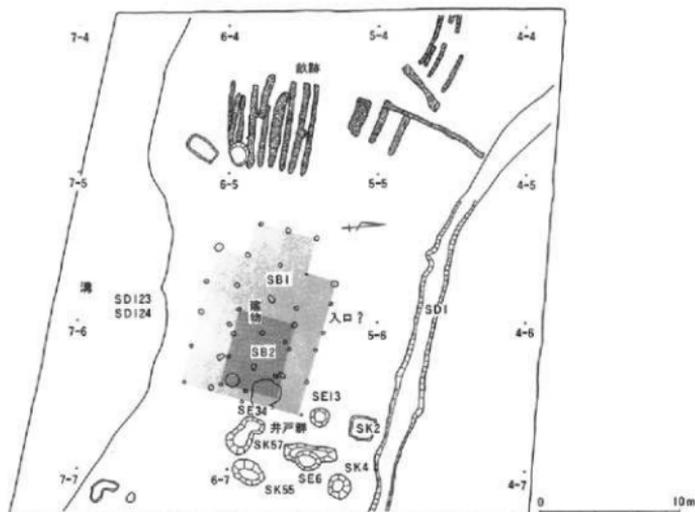


第31図 遺物の接合関係

井戸跡は、井戸枠など遺存しておらず、構造は不明な部分が多いが堆積土や出土した珠洲系土器から建物跡に付随する中世の所産と考えている。また、土壇(SK4)からは底面に細い板状・棒状木製品が多数出土し、「ちゅうぎ」の可能性を示唆する。覆土の理化学分析を行ったが「トイレ」としての断定するデータは得られなかった。

番号	図版番号	種別	器種	接合位置	接合距離
1	12-17	須恵器	坏	SD195 RP12 RP13	12.0m
2	12-18	須恵器	坏	S P191 R P25	1.5m
3	15-68	須恵器	坏	SD195 SD175 SG124	20.0m
4	15-69	須恵器	坏	SD153 SG124	—
5	13-33	須恵器	坏	SG124 SK144	6.0m
6	13-39	須恵器	坏	SD195 SG124	7.2m
7	14-51	須恵器	坏	SG124 S P38	9.5m
8	16-99	あかやき土器	坏	SD154 SD155	0.5m
9	17-107	須恵器	壺	SG124 SD173	17.0m
10	18-133	あかやき土器	壺	SD22 S P131	6.0m
11	19-162	あかやき土器	壺	SK144 SG124	6.0m
12	19-154	あかやき土器	壺	SK155 SK154 SK190 SD191	7.5m
13	18-125	あかやき土器	壺	SG124 SK144	6.0m
14	20-181	あかやき土器	壺	SG124 SD173	17.0m
15	—	あかやき土器	壺	S P76 SD173	17.5m
16	—	須恵器	壺	SK144 SG124	6.0m
17	19-167 166	あかやき土器	壺	SK155 SK135	11.5m
18	19-156 165	あかやき土器	壺	SK143 SG124	8.8m

表-10 土崎遺跡の土器接合関係



第32図 土崎遺跡中世遺構概要図

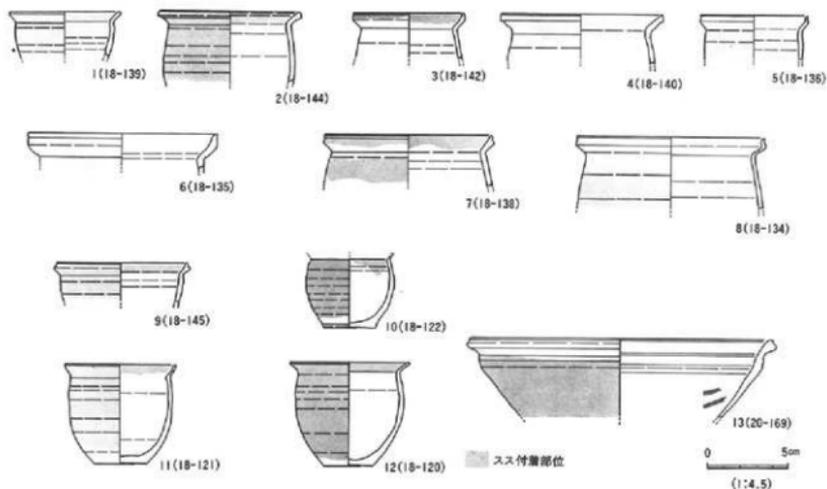
## (2) 遺物について

## 甕の煤付着部位について (第33図)

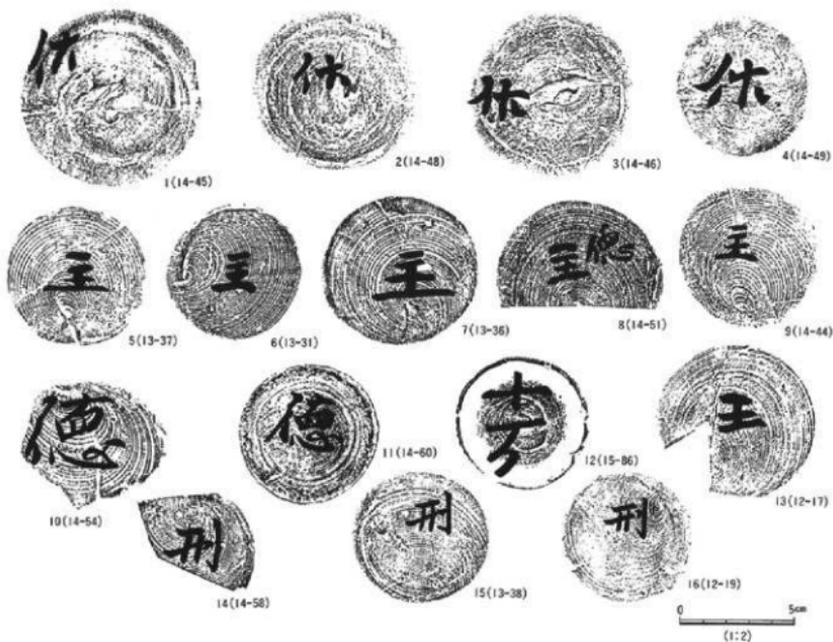
土崎遺跡ではあかやき土器の甕類・埴類の量的な多さが注目される。破片資料がほとんどながら煤が付着するものが多く、煮沸具としての用途を裏づけるものである。煤は当然加熱による炭化物の付着で、土器製作時の1次焼成と煮沸時の2次焼成がある。ここで取り上げた土器は、煤が厚く付着し土器製作時の煤とは状態があきらかに相違するものである。第33図に示した煤付着土器は大小あるがあかやき土器の甕(1~12)と埴(13)である。煤の付着には土器と炉火との位置に関係がある。例えば小型平底甕の底部に煤が付着しておらず、体部から口縁部、そして口縁部内面にかけて煤の付着が見られる。台座(支柱)のようなものに設置して煮沸したと考えられる。このほか長胴甕の体部片や埴の体部片にも煤が付着するものが多い。一部内面に付くものがあるが、内容物の炭化したものと考えられる。丸底の長胴甕は直接、炉火を受けたと考えられ、火はねで底部が破損しているものがある。

庄内地方の平安時代遺跡は、掘立建物柱跡がほとんどで、現時点で竅穴住居で見る「かまど」のような炉跡の検出はない。ただ、厨房施設は存在したことは間違いなく、これらの煮沸具がどのような状態で使用されていたか不明な部分が多い。しかし、甕や埴などの

III 土崎遺跡



第33図 煤付着土器一覧



第34図 土崎遺跡出土墨書集成図

使用痕跡を観察する中で、対象となる厨房部の大要が明らかなのと考える。

#### S D 123・124・125出土の土器群について

S D 123・124から出土した土器は須恵器・あかやき器・黒色土器等である。坏類とともに、あかやき土器の甕・塀の出土が目立った。これから土器群は包含状況から一括性のある遺物群である。坏底部はヘラ切りと糸切りが見られ、ヘラ切り坏は、底径が小さく体部も緩やかに立ち上がり、口唇部は少し外反する。これらの特徴を持つ土器群は、渋谷孝雄(1988)による編年では、9世紀後半に位置づけられている土器群に相当する。

#### 墨書土器について

墨書土器は須恵器の坏と蓋で、坏底部が36点、坏体部が2点、蓋外面に1点の計39点確認した。坏類で底部ヘラ切り坏は5点、底部糸切り坏は27点である。ヘラ切り坏への墨書位置は底部でも端に位置することが多い。糸切り坏への墨書は底部中央部に施される。墨書された文字は「主」「徳」「刑」「十万」がある。「◆」はヘラ切り坏にのみ見られ、「主」「徳」「刑」「十万」は糸切り坏に見られる。この中で第34図8は「主」「徳」が併記され、「徳」が消され、後で「徳」を書き加えたことがわかり、「主」が新しい墨書文字であることがわかった。字体を比較すると、第34図の「◆」4点は同一筆記。「主」5点と「徳」3点も同一筆記。「刑」の3点も同一筆記と見られる。これらの墨書土器はほとんどがS D 123～125の溝跡出土である。

さて、庄内地区のこれまで出土している墨書土器と比べると「主」は遊佐町下長橋遺跡(渋谷孝雄1988)、遊佐町石田遺跡(野尻侃)、酒田市生石2遺跡(安倍実1986)、八幡町沼田遺跡(野尻侃1982)で確認されている。「徳」は平田町西田遺跡(伊藤邦弘1989)で確認されている。「刑」は酒田市手蔵田12遺跡(安倍実1989)、鶴岡市日記遺跡(阿部明彦1989)で確認されている。「十万」と「◆」は土崎遺跡のみである。

#### (3) 遺跡の性格

土崎遺跡の中世の遺構は、掘立柱建物跡・井戸跡・土壇・溝跡・軌跡などからなっている。井戸跡や土壇から出土している珠洲系陶器は片口鉢(すり鉢)に特徴があり、掘目が浅く、間隔が空き、口唇が平坦な特徴を有している。吉岡康暢(1992)によれば第Ⅳ期13～14世紀頃に相当する。同一包含層出土の木製品もこの時期のものと考えられる。

中世遺跡の調査研究が進められている北陸地域の研究成果では、12世紀後半から総柱建物跡が一般化する。そして建物の規模は遺跡の性格によって差が認められ、中心的集落や集落の中心部であるほど規模が大きくなる傾向にある。また12世紀では6間以上の建物は確認されておらず、4間以下が一般的である。13世紀後半から8間を越す建物跡が現れてくる。以後規模拡大が進むが、南北朝期を境に桁行5間以上の建物はほとんど見られなくなる。また、総柱の内部の柱が抜けてくる現象は14世紀から見られてくる(北陸土器研究会1993)。土崎遺跡で検出した5間×4間の総柱掘立柱建物跡は、入口と思われる空間の存在や抜き柱があることから13世紀以降と考えられよう。土崎遺跡でみられた中世の屋敷跡は、土崎周辺の農地を経営する有力富農層の屋敷跡と思われる。

## IV 梵天塚遺跡

### 1 調査の概要

#### (1) 調査の方法

梵天塚遺跡は酒田市大字牧曾根字梵天塚に所在する。遺跡面積は5,000㎡を越すと思われる広がりを持ち、現在、水田地帯となっている。平成5年度に遺跡の範囲や保存状態を調査し、高速自動車道が建設され破壊されることになる道路部分の約3,500㎡について発掘調査を実施する運びとなった。発掘調査は、調査員2名作業員20名の体制で開始した。調査にあたって高速道路用地の幅杭を南北の基準線N-7'Wとした。この基準線に任意に中心を設定し、直交するように東西の基準線N-83'Sを設定した。2本の軸線から遺跡全体がかかるように10mメッシュのグリッドを組み、測量基準線を交点からの東西・南北方向の距離数で表すことにした。グリッド名はアラビア数字の組合せで呼ぶことにした(第35図)。ベンチマークは東方の国道344号沿いにある三角点から移動して設定した。ベンチマーク標高は3.3mとなる。これをレベル原点とした。発掘調査は重機によるI層・II層・III層の表土・耕作土層除去から始め、並行して包含層・遺構面の確認を行った。III層中での遺構検出に努めたが堆積層が一様でない部分がありIV層(青灰色シルト層、茶褐色砂層)上面で遺構確認することにした。検出した遺構は通し番号を付し、1/10・1/20・1/100で記録し、合せて写真記録を行った。最終的に航空測量によって位置と標高レベルを記録した。写真は36mカラーネガおよびカラーリバーサルを使用して、両者同アングル、同コマ数で撮影を行った。また、特に必要な場合は6×7判のカメラを使用した。出土遺物は表土除去時は包含層区分(I、II、III)で取り上げ、遺構検出中はグリッド毎の取り上げを行い、一括性のある遺物・重要な遺物は分布図に記録することにした。遺構精査での出土遺物はまとものあるものは実測図を作成し登録番号を付した。その他は遺構内の覆土位置によって取り上げた。調査区に洪水等による埋没林の堆積部分があることが分かり、包含状態や自然環境等を知るためにトレンチによる深堀りを実施し、下層の堆積状況についても調査した。

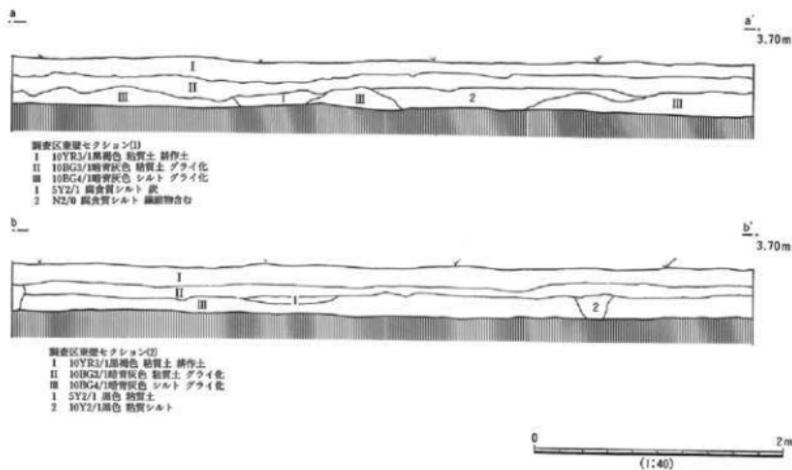
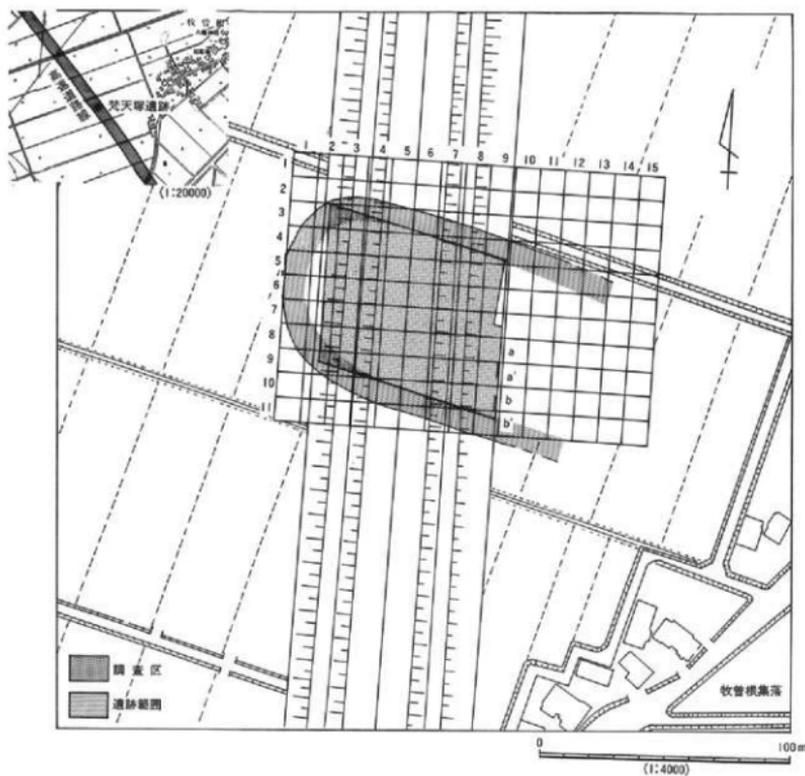
#### (2) 層 序

調査区は水田地帯の中に位置し、グリッド位置によって若干の堆積土の層が異なった様相を見せた。特に遺跡中央に赤砂の流れ込み跡があり、東西に細長い小河道を確認した。遺構の分布する東側の壁面で土層堆積断面図を作成した。基本土層は4層に分けられたが各層の中でも2〜3に細分できるものもあった。I層は表土・耕作土の層である。II層も耕作土で粘土質シルトである。以前のほ場整備時に動いている層である。III層は、シルト土質の土層で、II層と土性は同じである、耕耘が及んでいないため区別した。

遺跡中央部の部分には赤砂が見られ、遺跡の東西に流れ込んでいる様子が見られる。IV層はシルト層である。この層から下部の砂層に埋没した自然林や葦類を確認した。

梵天塚遺跡では多数の土壌を検出したが、確認面はIV層上面に相当する。遺構の最下部は標高約1.86mで、約2.20mで地下水が湧水してくる。

IV 梵天塚遺跡



第35図 梵天塚遺跡調査概要図

## 2 遺跡の概観

ここは『梵天塚』という字名が表すように、地域住民から墓地があったと伝わる場所である。ほ場整備前には、塚・土饅頭といったものがみられたという。現在は水田地帯へと変わり、西方1kmには国道7号線が南北に走る。

遺跡地の地形は、東側から緩やかに西に傾斜しており、遺構検出面も、ほぼ平坦な地形になっている。

梵天塚遺跡からは中世の遺構・遺物が認められており、主体となるのは墓墳と思われる土壌群である。

### (1) 遺構の分布

調査区内から発見された遺構は、土壌199基・井戸跡2基・溝跡5条を数える。大部分の遺構は、Ⅲ層～Ⅳ層上面で検出したが、上部は以前のほ場整備で削平されているものがほとんどである。また、暗渠工事によって切られている土壌が多数見られた。土壌は、幾つかのまとまりをもって分布し、特に調査区の東側に密集している。

### (2) 遺物分布

本遺跡から出土した遺物は、土器類は破片数にて総数592点、木製品は560点、石製品は15点、金属製品として古銭や刀子などがある。

土器類は縄文～弥生時代の土器片と平安時代の土器・中世・近世の陶磁器、さらに貿易陶磁器などに分けられる。

平安時代の土器は須恵器・あかやき土器等である。中世陶磁器の土器は珠洲系・越前系の甕・すり鉢などである。近世の陶磁器は、瓶・碗・皿・すり鉢などが見られる。貿易陶磁器としては明の染め付け皿や青磁碗、白磁などがある。

木製品は、ほとんど土壌内からの出土である。地下水の水位が高いため、保存状態がよく、資料数も多い。

遺物は第Ⅰ層から出土し始め、Ⅲ層中にかけて出土するが、大半は遺構内から出土した。平安時代の土器類は摩滅が激しく、流されたものが多数を占めると思われる。

### 3 遺 構

検出された主な遺構の精査結果と多少の所見を順次記述する。

図面はⅣ層上面の検出面によって作成しており、手取り図面のほか航空測量による平面図も利用している。

#### (1) 土 壌

調査区内において、検出された土壌は199基を数える。これらは、ほぼ調査区全域に分布しているが、いくつかのブロックに分けられるようである。またいくつかの土壌の中には骨片がみられ、墓壇跡と捉えることができる。以下、主な特色ある土壌について説明を加える。なお、土壌の平面形については感覚的な要素を含むことから短軸と長軸の比率1:1.2を基準として方形・長方形・楕円形等の概念を規定した。土壌の検出面はⅣ層上面が大抵であるが、一部はⅢ層中位においても不明確ながら確認することができた。

S K 1 (第37図) 調査区南東端で検出した。約半分程の精査で完掘していない。確認面からの深さは、28cmほどで、砂質シルトの覆土中から須恵器の蓋・あかやき土器壺片・礫・板材片が出土した。平安時代に遡る遺構と判断する。

S K 15 (第37図) 8-9区に位置する。暗渠に切られる。平面形は方形で箱形に掘り込まれている。深さ112cmを測る。覆土下部には、腐食した繊維物や泥炭質シルトが堆積する。ここからは櫛(第71図78)が出土した。

S K 58 (第39図) 8-8区に位置する。平面方形で深さ22cmのところから、さらに径82cm深さ52cmの掘り込みがある。9層にわたる堆積層が確認でき、F 3層には、菓状のものが敷かれた状態で埋められていた。この底から、柄杓・曲物3点と漆碗が出土した。F 8層・F 9層は泥炭質シルトで湧水が激しい。

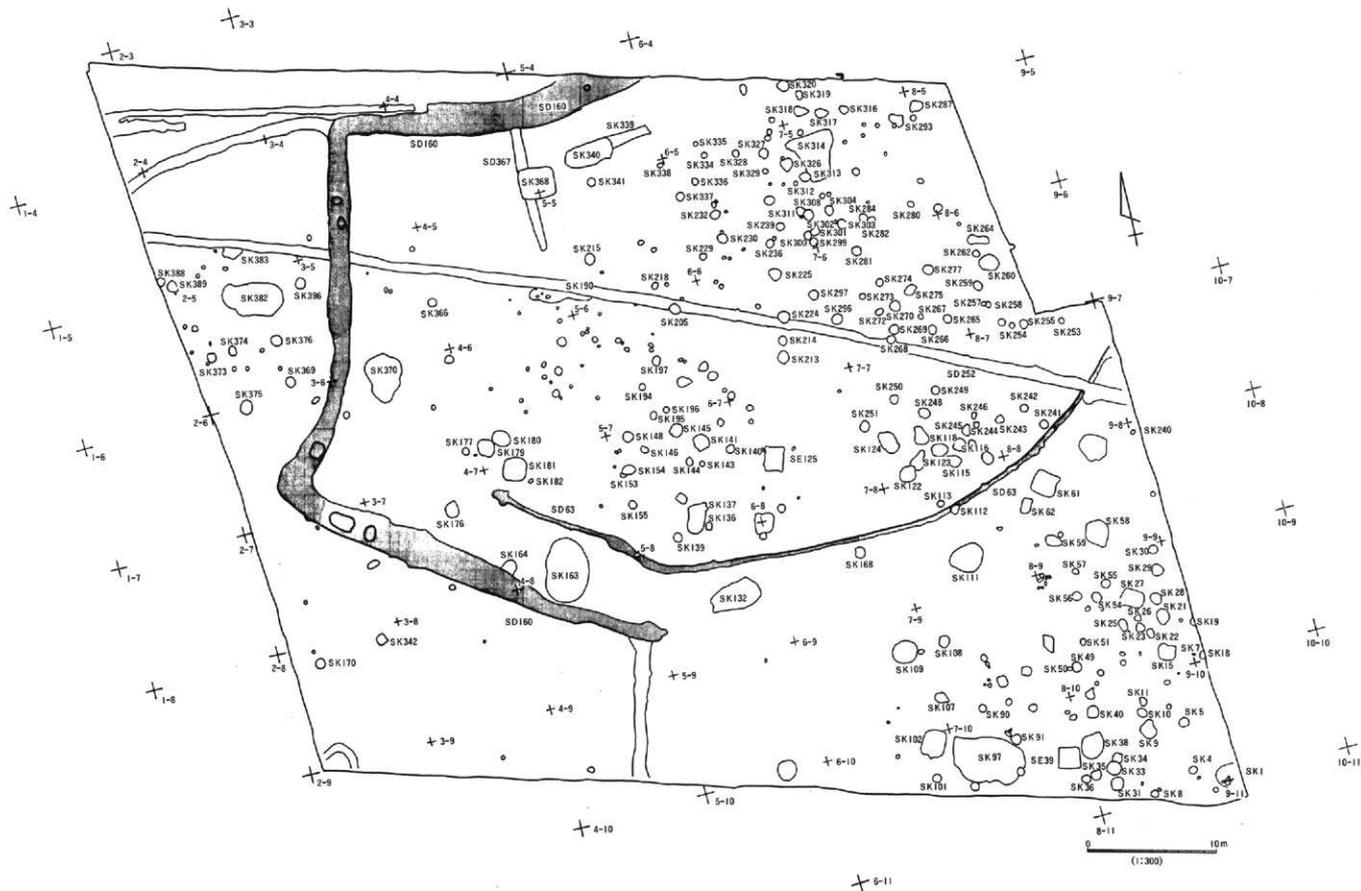
S K 59 (第39図) 8-8区に位置する。楕円形の平面形で、深さは80cmを測る。F 1層中に多数の礫が認められた。礫の重みで落ち込んだとみられ、土壌の表面近くにあったと思われる。礫の中に珠洲系すり鉢(第60図73)があり、礫群の下から漆碗(第65図3)が出土している。

S K 64 (第39図) 7-7区に位置する。径110cm深さ80cmの円筒状に掘り込まれている。底には拳大強の礫があり、その上から丸板片と越前系すり鉢が出土した。

S K 79 (第40図) 7-9区に位置する。一辺70cmの方形で、深さは46cmを測る。土壌中央から焼けた礫と石鉢片が出土した。覆土にも多数炭が確認できた。他所で加熱を受けた後、持ち込まれたとみられる。

S K 97 (第40図) 7-10区に位置する。一部暗渠に切られる。長軸290cm、短軸182cmの大形の土壌である。深さは最大で29cmと浅い。底面の一部にさらに土壌がある。砂質シルト層を掘り込んでおり、黒色の泥炭質シルトが厚く堆積する。底面から珠洲系壺片が、確認面付近から、底部に「上」の文字が記されている近世碗が出土した。

S K 123 (第41図) 7-7区に位置する。S K 122に切られている。楕円形の片側に傾斜した掘り方になっている。底部斜面部から丸板片や板材を重ねるように検出した。F 4層



第36図 梵天塚遺跡遺構配置図

からは石鉢片が出土した。

S K 124 (第41図) 7-7区に位置する。長軸204cm、短軸130cmの大ききで底部は緩やかに湾曲する。底から下駄(第70図69)と永楽通寶1点が出土した。

S K 127 (第41図) 6-7区に位置する。径60cm、深さ32cmを測る。F 1層から人頭大の円磔が出土した。人為的に置かれたと考えられる。

S K 132 (第42図) 5-8区に位置する。長軸400cm、短軸210cm、深さ72cmを測る。シルトと砂質シルトの互層を成している。F 2層上面から珠洲系甕片が11点と斎串・管が出土した。珠洲系甕片は同一個体と見られる。掘り込み斜面には所々から葦状の繊維物が多数出土する。

S K 163 (第43図) 4-7区に位置する。溝跡S D 63とS D 160に挟まれている。長軸525cm、短軸322cm、深さ63cmを測る。腐食した黒色シルトが厚く堆積し、底からは、埋没した自然木が検出された。覆土からは、下駄(第71図76)・漆碗(第64図4)・へら(第67図24, 25)や白磁(第64図151)・斎串(第71図83)のほか、須恵器片・丸板・板材などが出土した。

S K 196 (第44図) 5-6区に位置する。暗渠に切られる。径62cm、深さ30cmを測る。3層の粘質シルトの堆積がみられ、F 3層から保存状態の良い銅製の鋤杖が出土した。ほぼ底面の端にあり、堆積土からは、白い粒状の骨片を確認した。

S K 205 (第44図) 5-6区に位置する。S D 252が切っている。径80cm、深さ70cmの円筒状となっている。覆層から、大形の下駄(第71図75)が出土した。

S K 206 (第44図) 5-6区に位置する。径82cm、深さ100cmを測る。F 4層は腐食した繊維物が多数見られ、泥炭層となっている。また、下部からの湧水が多い。ここからは底面から下駄(第70図73)と丸板(第67図36)俵桶み具(第71図89)が出土した。

S K 230 (第45図) 6-5区に位置する。径82cm、深さ62cmの円筒状を呈す。中央から焼けた丸木材や枕材・丸板を検出した。堆積層からも炭や炭化物を多数確認した。

S K 241 (第46図) 8-7区に位置する。暗渠に切られる。平面円形で、径76cm、深さ51cmを測る。覆土F 2層から骨片が多数出土した。骨片は加熱を受けており、火葬後、埋められたと見られる。

S K 248 (第46図) 7-7区に位置する。平面は円形で、径100cm、深さ74cmを測る。堆積層中から下駄や板材が出土した。

S K 249 (第46図) 7-7区に位置する。平面は円形で、径70cm、深さ37cmを測る。底面から棒材と曲物(第66図-15)が出土した。

S K 270 (第47図) 7-6区に位置する。平面は楕円形で、径84cm、深さ109cmを測る。断面フラスコ状の土壌で、F 4層から曲物杵(第66図21)・丸板・穿孔のある加工板・珠洲系すり鉢など多くの遺物が出土している。F 4層は泥炭層で繊維物が多い。

S K 274 (第48図) 7-6区に位置する。平面は円形で、径60cm、深さ74cmを測る。ほぼ垂直に掘り込まれている。F 2層に人頭大の磔が入る。人為的に入れられたと見られる。

S K 281 (第48図) 7-6区に位置する。平面は円形で、径69cm、深さ81cmを測る。断面プラスチック形で腐食した黒色シルトが厚く堆積している。底に近い地点から骨片が出土した。土器など遺物の出土は見られない。

S K 310 (第49図) 7-5区に位置する。平面は円形で、径62cm、深さ52cmを測る。S K 311が後に掘られ、S K 310を切る。堆積層中位から破損した粉挽き白が出土した。埋める途中で入れられたものとみられる。

S K 335 (第50図) 6-4区に位置する。平面は円形で、径44cm、深さ25cmを測る。中央から焼けた礫と焼けた丸板片が出土した。

S K 336 (第50図) 6-4区に位置する。平面は円形で、径42cm、深さ14cmを測る。比較的浅い土壌で、中央から破損した石鉢と珠洲系すり鉢片が出土した。

S K 368 (第52図) 5-4区に位置する。覆土は黒色腐食シルトと砂質シルトの互層をなす。ここから木製へら(第67図26)が出土した。

S K 370 (第51図) 3-6区に位置する。長軸364cm、短軸142cm、深さは最大で62cmを測る。土壌中央を暗渠が切っている。この土壌からは多数の遺物が出土した。覆土F 8層・F 9層中に並ぶように曲物などの木製品がみられ、底近くから漆碗が出土した。また、F 3層上面から「開元通寶」など古銭18点がまとめて検出された。

(2) S E 125 井戸跡(第53図)

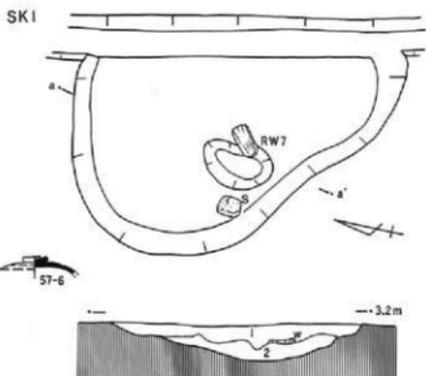
調査区中央部6-7区に位置する。IV層上面で確認した。掘り方は長軸144cm(南北)短軸118cm(東西)の不整形円形を呈する。掘り込みの深さは最深部で検出面から94cmである。掘り方の堆積土は6層確められる。井戸本体は掘り方のほぼ中央部に位置し、縦板・横棧・隅柱によって構築されている。壁の崩落により、西側の縦板・横棧が壊されている。縦板の保存状態はよく、井戸側面は7~8枚の縦板によって区画されている。縦板は、現存長100~120cm、幅15~20cm・厚さ2cmのスギ材を使用している。縦板先端は、手斧ケズリにより杭状に加工されて、ほぼ直立に打ち込まれている。横棧は上下2段に、隅柱のホゾ穴に差し込んで固定している。

この井戸跡からは、あかやき土器の坏片・塀片・甕片が少量出土している。しかし、堆積土上部からの出土であり、2次的な堆積と考えられる。井戸本体下部から斎串が1点出土している。

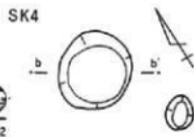
(3) 溝跡(第54~56図)

S D 63 調査区東から西にかけて検出した。幅80cm、深さ25cmを測る。覆土は3層あり、泥炭質のF 4、5層から珠洲系陶器片・すり鉢片などが出土した。東側7-8区からは「洪武通寶」が1点出土している。

S D 160 III層下部にて確認した。幅160cm、深さ80cmで自然堆積を見せる。遺跡北東から南側に流れる。覆土F 2層から底面にかけて、須恵器やあかやき土器片のほかに中世~近世の陶磁器片が出土した。中には明の染め付け磁器皿(牡丹唐草文)や珠洲系すり鉢片が出土している。なお、溝跡底付近から、縄文時代から弥生時代の甕片が6点ほど出土している。



SK1  
1 75Y3/2灰オリーブ色 シルト 10Y3/1オリーブ灰色 シルト  
2 10B4/1暗青灰色 砂質シルト



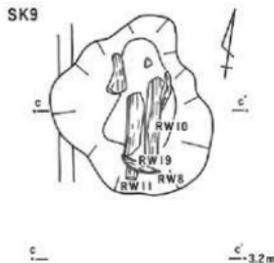
SK4  
1 10YR2/1黒色 粘質シルト



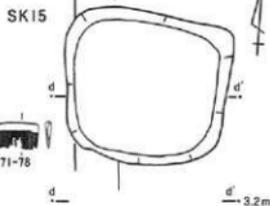
SK5  
1 10YR2/1黒褐色 シルト  
2 10YR4/1暗灰色 粘質シルト



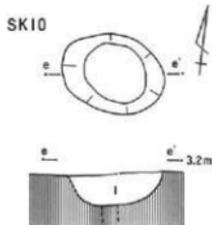
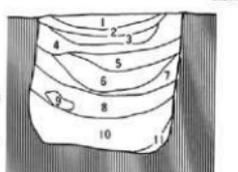
SK5  
1 10YR2/1黒褐色 シルト  
2 10YR4/1暗灰色 粘質シルト



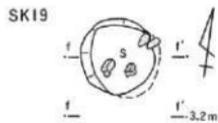
SK9  
1 10YR3/1黒褐色 粘土質  
2 10YR3/2黒褐色 シルト  
3 5Y2/1黒色 シルト  
4 5Y3/1オリーブ灰色 織物  
5 N2/6黒色 泥炭質 灰



SK15  
1 10YR3/1黒褐色 粘土質  
2 10YR2/1黒色 シルト 灰まじり  
3 10YR2/1黒色 シルト  
4 10YR2/1黒色 シルト  
5 5Y3/1オリーブ褐色 シルト 織物  
6 5Y3/1オリーブ褐色 シルト 蓋状のもの  
7 75Y2/1黒色 シルト 灰  
8 75Y2/1黒色 蓋状のもの 腐食質  
9 5B4/1暗青灰色 砂質シルト 燃灰  
10 5C2/1緑灰色 泥炭質 織物  
11 5B2/1暗青灰色 砂質シルト



SK10  
1 10YR2/1黒色 織物 灰



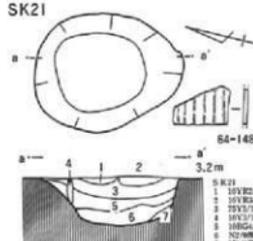
SK19  
1 10YR2/1黒色 砂質シルト



第37図 遺構実測図(1) SK 1～

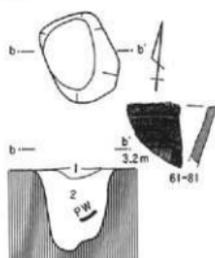
IV 梵天塚遺跡

SK21



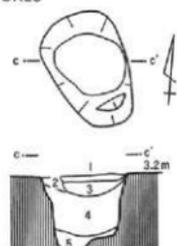
- SK21  
 1 10YR2/1黒色 シルト  
 2 10YR2/2暗褐色 シルト  
 3 75Y2/1灰色 砂質シルト  
 4 10Y3/1オリーブ黒色 砂質シルト  
 5 10BG4/1暗青灰色 シルト  
 6 N2/0黒色 シルト  
 7 N2/0黒色 凝灰質 凝灰質シルト

SK22



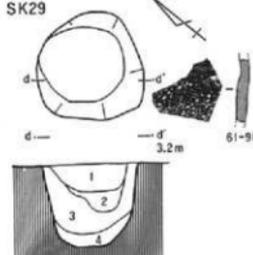
- SK22  
 1 10YR2/1黒褐色 シルト  
 2 10YR6/1暗灰色 粘質シルト

SK25



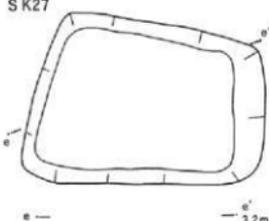
- SK25  
 1 10YR2/1黒色 シルト  
 2 10YR2/2暗褐色 シルト  
 3 75Y2/1灰色 砂質シルト  
 4 10Y3/1オリーブ黒色 砂質シルト  
 5 10BG4/1暗青灰色 シルト

SK29



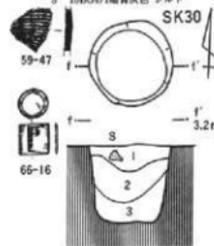
- SK29  
 1 75Y2/1灰色 シルト 75YR3/4暗オリーブ色 砂砂層状  
 2 10BG4/1暗青灰色 砂質シルト  
 3 75Y2/1灰色 凝灰質 凝灰質  
 4 N2/0黒色 凝灰質

SK27



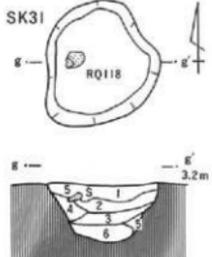
- SK27  
 1 75Y2/1灰色 粘質シルト  
 2 75Y2/2暗灰色 10BG4/1暗青灰色 シルト

SK30



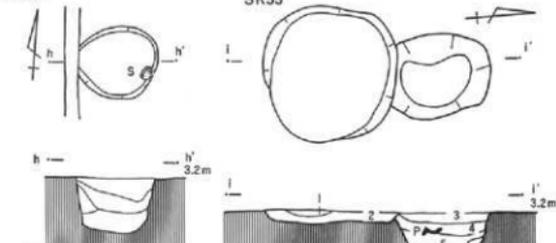
- SK30  
 1 75Y2/1オリーブ黒色 凝灰質シルト  
 2 75Y3/1オリーブ黒色 凝灰質シルト  
 3 10YR3/3暗褐色 シルト

SK31



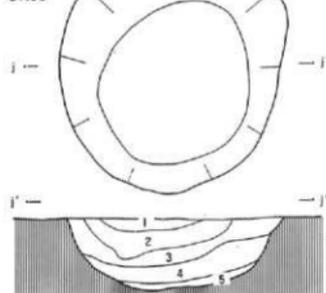
- SK31  
 1 10YR2/1黒褐色 粘質土  
 2 10YR4/3c.iii黄褐色 粘質土 10YR2/1黒褐色 凝土  
 3 10YR4/3c.iii黄褐色 粘質土 10YR2/1黒褐色 凝土  
 4 75Y2/1灰色 粘質シルト  
 5 75Y2/4暗オリーブ色 砂質シルト  
 6 N2/0黒色 凝灰質

SK33



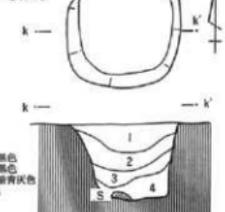
- SK33  
 1 10YR2/1黒褐色 凝灰質  
 2 10YR2/1黒褐色 凝灰質  
 3 10YR2/1黒褐色 凝灰質  
 4 10YR2/1黒褐色 凝灰質  
 5 75Y2/1灰色 粘質シルト  
 6 10BG4/1暗青灰色 砂質シルト

SK38

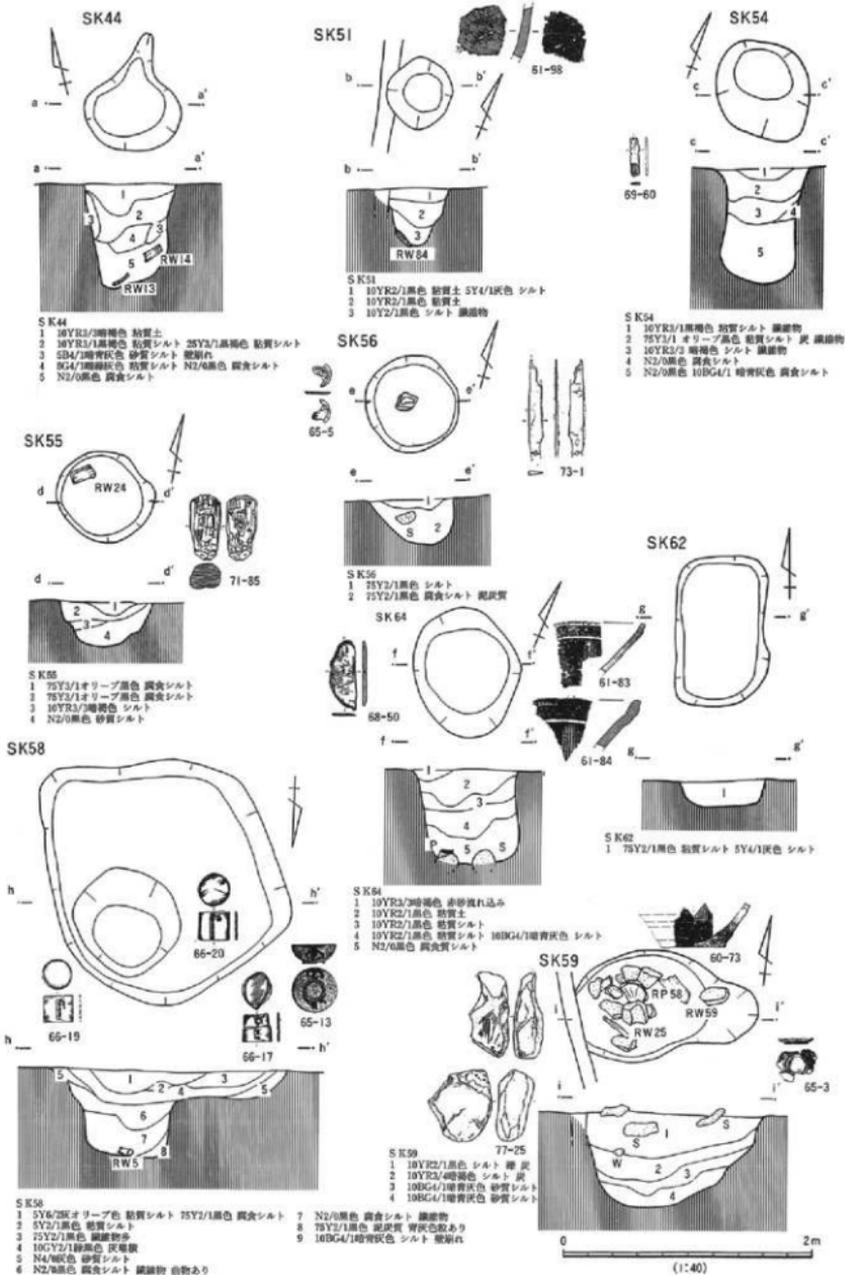


- SK38  
 1 7Y2/1黒色 粘質土 N4/6R灰色 灰  
 2 N4/6R灰色 凝状 5Y4/1R灰色 シルト  
 3 25Y2/1黒色 凝灰質  
 4 N2/0黒色 凝灰質  
 5 N2/0黒色 凝灰質

SK40

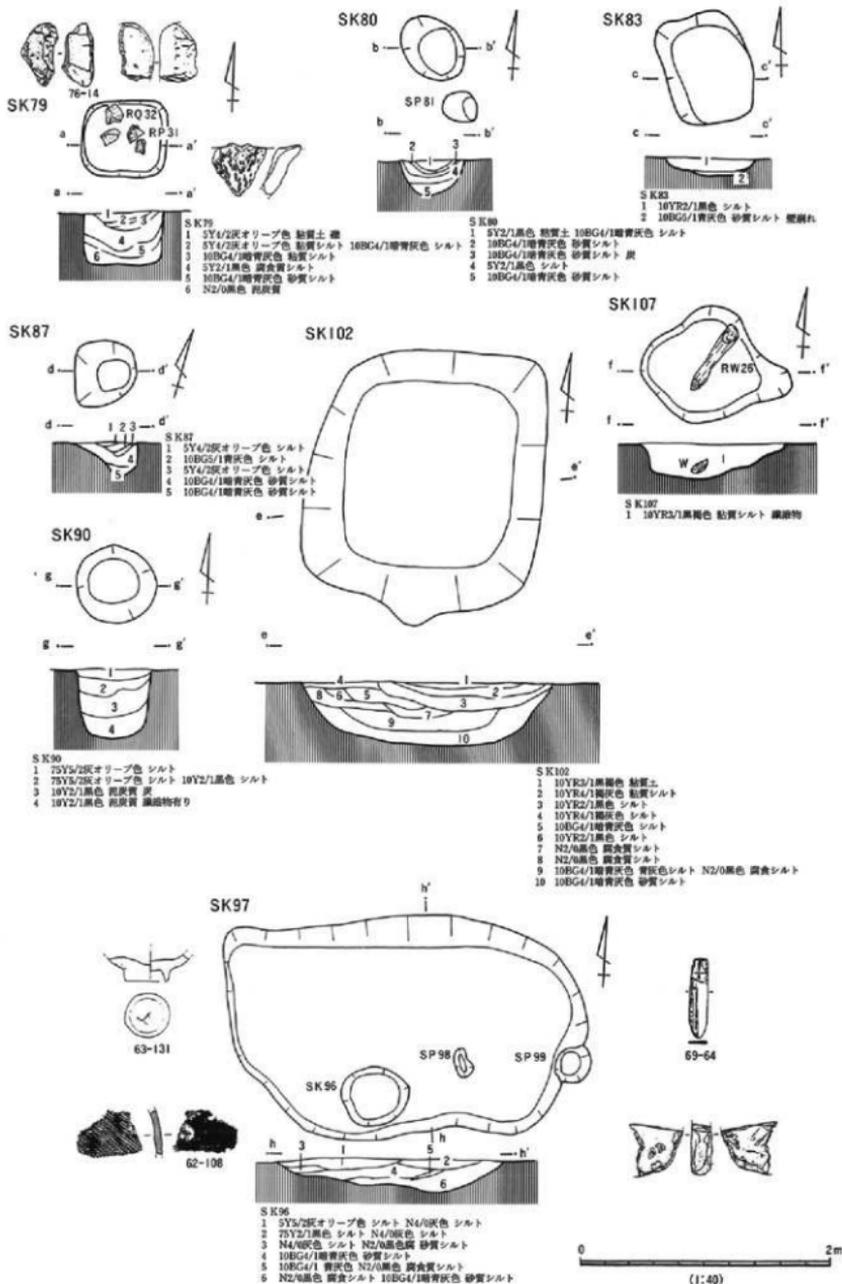


- SK40  
 1 10YR2/1黒色  
 2 10YR2/1黒色  
 3 10BG4/1暗青灰色  
 4 N2/0黒色



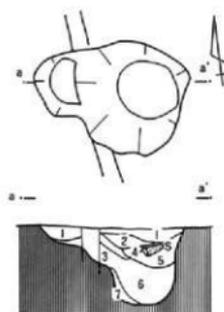
第39図 遺構実測図(3) SK44~

IV 梵天塚遺跡



第40図 遺構実測図(4) SK79～

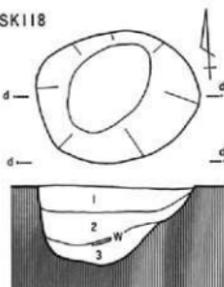
SK115



SK115

- 10YR3/3暗褐色 砂質シルト 浮砂混じり
- 10YR3/6暗褐色 砂質シルト 赤砂混じり
- 75Y4/0灰色 シルト
- 75Y3/1オリーブ黒色 シルト
- 75Y4/1灰色 シルト
- N2/0黒色 腐食シルト
- 10BG4/1暗青灰色 砂質シルト N2/0黒色 腐食シルト

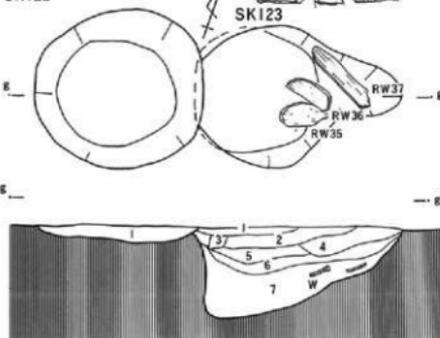
SK118



SK118

- 10Y2/1黒色 シルト 粘土ブロックあり
- 10Y2/1黒色 シルト 灰
- 10BG3/1暗青灰色 シルト 繊維物

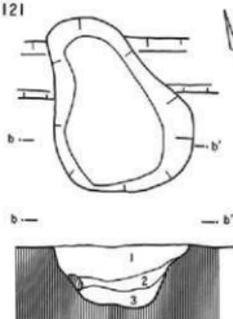
SK122



SK122 123

- 10YR2/1黒色 粘質シルト
- 7YR2/4暗褐色 粘質シルト
- 5Y4/3暗オリーブ色 シルト
- 5Y2/1黒色 腐食シルト
- 7YR2/4暗褐色 シルト
- 2.5Y3/1黒褐色 シルト
- 5Y3/1オリーブ黒色 砂質シルト

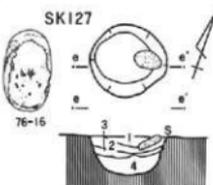
SK121



SK121

- 10YR2/1黒色 粘質シルト
- 10YR2/1黒色 粘質シルト
- N2/0黒色 腐食シルト 10BG4/1暗青灰色 シルト

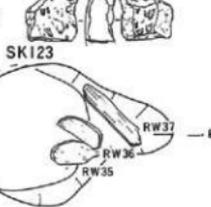
SK127



SK127

- 25Y3/1暗褐色 シルト 灰
- 5Y3/1オリーブ黒色 シルト
- 10G4/1暗青灰色 砂質シルト
- 5Y3/1オリーブ黒色 腐食シルト 10G4/1暗青灰色シルトブロック

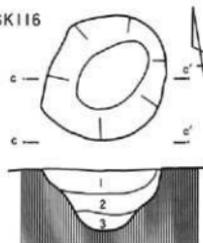
SK123



SK123

- 25Y3/1暗褐色 シルト
- 75YR4/3暗オリーブ色 砂質シルト 赤砂混じり
- 10G5/1暗灰色 砂質シルト
- 5Y3/1オリーブ黒色 粘質シルト 10G4/1暗青灰色 シルト

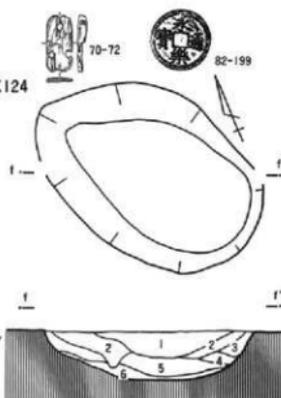
SK116



SK116

- N2/0暗灰色 粘質シルト
- N2/0暗灰色 粘質シルト 砂多
- N4/0灰色 シルト

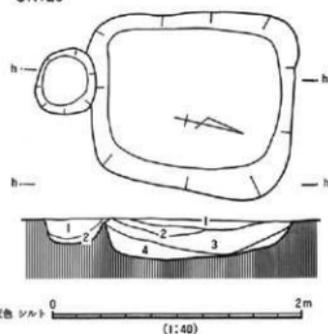
SK124



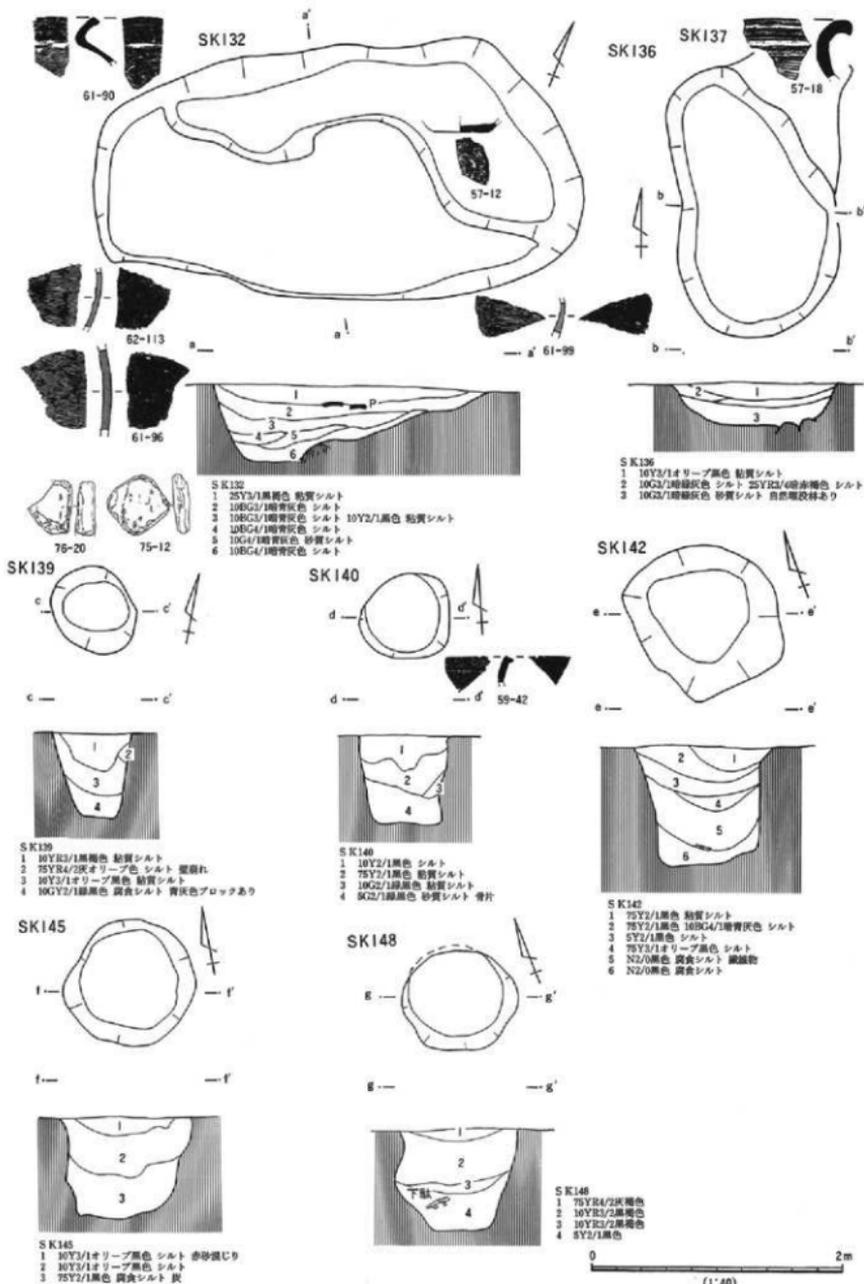
SK124

- 10YR2/1黒色 粘質土 10YR8/1灰白色 火山灰粒
- 10G5/1暗灰色 粘質シルト
- N5/0灰色 シルト
- N4/0灰色 シルト
- N2/0黒色 砂質シルト 灰
- 10BG4/1暗青灰色 砂質シルト

SK128

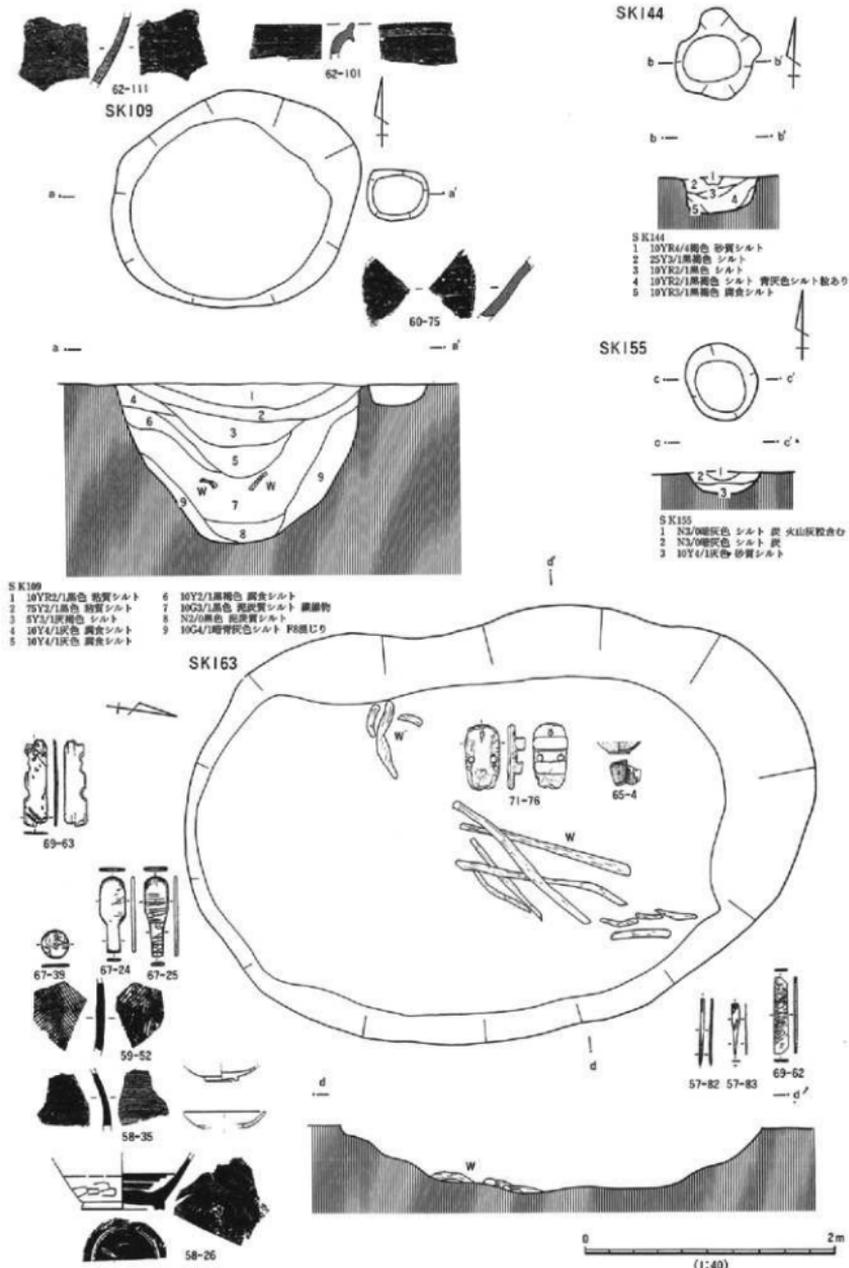


IV 梵天塚遺跡



第42図 遺構実測図(6) SK132~

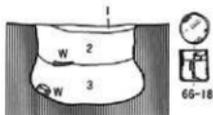
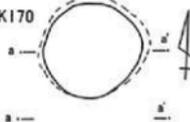
IV 梵天塚遺跡



第43図 遺構実測図(7) SK144~

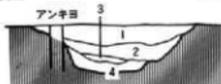
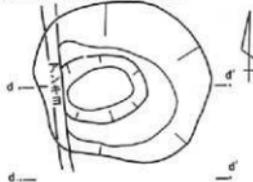
IV 梵天塚遺跡

SK170



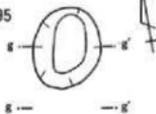
- SK170  
1 10YR2/1黒色 粘質シルト  
2 10YR2/1黒色 粘質シルト SG4/1暗緑灰色 シルト  
3 N2/黒色 腐食シルト

SK179



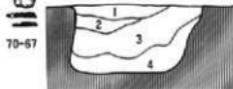
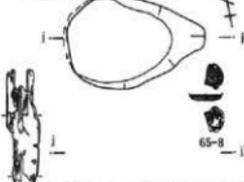
- SK179  
1 3SY4/灰色 シルト  
2 3SY4/灰色 シルト  
3 SG4/暗緑灰色 粘質シルト並れ  
4 SBG4/暗青灰色 F2土の残じり

SK195



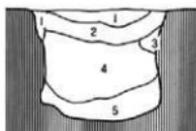
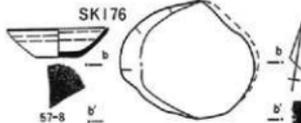
- SK195  
1 10YR2/1黒黄色 粘質土 10YR3/暗褐色 赤砂混じり  
2 10YR2/1黒色 粘質シルト  
3 SG4/暗緑灰色 F2混じり

SK201



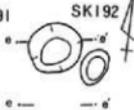
- SK201  
1 5B2/1黒灰色 5YR2/1 黒褐色 混じり土  
2 5GY2/1黒色 砂質シルト  
3 5Y2/1黒色 砂質シルト  
4 2BGY2/1黒色 砂質シルト

SK176



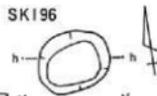
- SK176  
1 10YR2/1黒黄色 粘質シルト 10YR3/暗褐色 粘質シルト  
2 10YR3/暗褐色 シルト  
3 5Y3/3オリーブ褐色 シルト  
4 N2/黒色 腐食シルト  
5 N2/黒色 腐食シルト

SK191



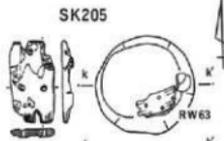
- SK191  
1 5Y2/1黒色 粘質シルト 青灰色ブロックあり  
2 5G4/1暗オリーブ灰色 シルト

SK196

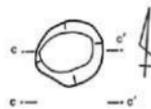


- SK196  
1 5Y2/1黒色 粘質シルト  
2 5Y2/1黒色 粘質シルト  
3 SG4/1暗緑灰色 シルト 腐蝕出土

SK205

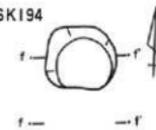


SK177



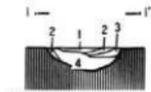
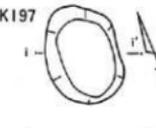
- SK177  
1 5Y2/1黒色 シルト  
2 SG4/1暗緑灰色 砂質シルト  
3 3SY2/1オリーブ褐色 粘質シルト 炭  
4 5BG4/1暗青灰色 シルト

SK194



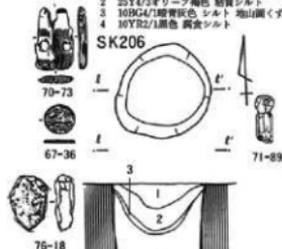
- SK194  
1 7SY2/3黒褐色 シルト 物は開くずれ  
2 10YR2/1黒黄色 粘質シルト

SK197



- SK197  
1 10YR2/1黒色 粘質シルト  
2 3SY4/3オリーブ褐色 粘質シルト  
3 10BG4/1暗緑灰色 シルト 物は開くずれ  
4 10YR2/1黒黄色 腐食シルト

SK206



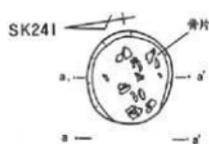
- SK206  
1 5Y2/1黒色 シルト 赤砂混じり  
2 N2/黒色 腐食シルト  
3 10YR2/1黒黄色 シルト 炭状の腐蝕物  
4 5Y2/3オリーブ褐色 腐蝕の腐蝕物  
5 10BG4/1暗緑灰色 シルト 炭屑れ

0 2m  
(1:40)

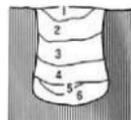
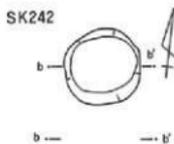
第44図 遺構実測図(8) SK170~



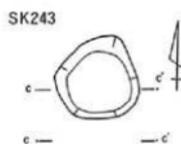
IV 梵天塚遺跡



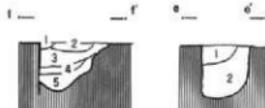
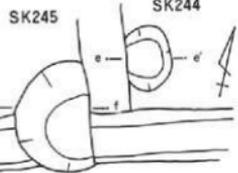
- S K241  
 1 10Y2/1黒色 粘質シルト  
 2 10B2/1黒色 腐食シルト  
 3 10BG4/1暗青灰色 シルト 灰層



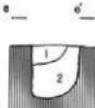
- S K242  
 1 10YR2/1黒色 シルト  
 2 10YR2/1黒色 砂質シルト 灰  
 3 7.5Y2/1オリーブ黒色 粘質シルト  
 4 N2/0黒色 腐食質  
 5 N2/0黒色 硬灰質 灰 凝縮物  
 6 10B2/1青黒色 砂質シルト



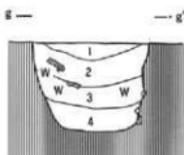
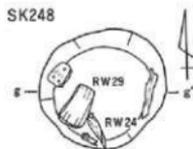
- S K243  
 1 10YR2/1黒色  
 2 10YR2/1黒色 10BG4/1暗青灰色  
 3 7.5Y2/1オリーブ黒色  
 4 7.5Y2/1黒色



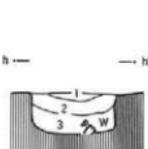
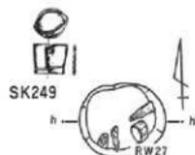
- S K245  
 1 5Y2/1黒色 シルト  
 2 5Y2/1黒色 腐食質シルト  
 3 7.5Y2/1黒色 シルト  
 4 N2/0黒色 粘質シルト  
 5 N2/0黒色 腐食質 灰



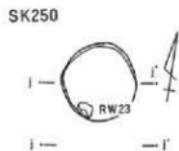
- S K244  
 1 10GY4/1暗青灰色  
 2 10GY2/1暗青灰色



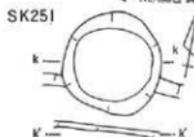
- S K248  
 1 10Y2/1黒色 シルト  
 2 10Y2/1黒色 砂質シルト  
 3 N2/0黒色 砂質シルト  
 4 N2/0黒色 腐食質シルト



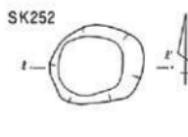
- S K249  
 1 7.5Y2/1黒色 シルト  
 2 7.5Y2/1黒色 粘質シルト 灰  
 3 N2/0黒色 腐食質 腐物土  
 4 N2/0黒色シルト 10DG4/1 青灰色 砂質シルト



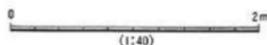
- S K250  
 1 7.5Y2/1黒色 シルト 27.5Y5/1暗青灰色 砂質シルト  
 2 7.5Y2/1黒色 シルト  
 3 10Y2/1黒色 シルト  
 4 N2/0 黒色 シルト 灰  
 5 N2/0黒色 シルト 硬灰質 10BG4/1 砂質シルト



- S K251  
 1 10YR2/1黒色 粘質土 10BG4/1暗青灰色 砂質シルト  
 2 10YR2/1黒色 粘質シルト 10BG4/1暗青灰色 砂質シルト  
 3 7.5Y2/1黒色 凝結凝縮物  
 4 N2/0黒色 硬灰質 10BG4/1暗青灰色 シルト

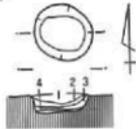


- S K252  
 1 10YR2/1黒色 粘質シルト  
 2 10Y3/1オリーブ黒色 シルト



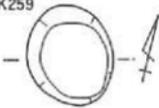
第46図 遺構実測図(10) SK241~

SK254



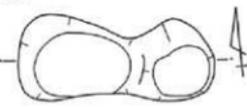
- S K 254  
 1 75Y2/1黒色 粘質シルト  
 2 10BG2/1黒色 シルト  
 3 10DG2/1黒色 砂質シルト  
 4 10BG4/1黒色 砂質シルト

SK259



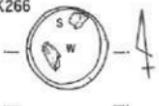
- S K 259  
 1 75Y2/1黒色 粘質シルト  
 2 10YR2/1黒色 粘質シルト  
 3 N2/0黒色 シルト

SK264



- S K 264  
 1 5Y2/1黒色 粘質シルト 青灰色ブロックあり  
 2 8G4/1暗青灰色 シルト  
 3 5Y2/1黒色 粘質シルト  
 4 5Y2/1黒色 青灰色シルト裏じり  
 5 25Y3/1暗灰色 シルト  
 6 5Y2/1黒色 シルト  
 7 10BG2/1 青灰色 シルト質砂層  
 8 5Y2/1黒色 砂質シルト  
 9 10G2/1暗青灰色 砂質シルト  
 10 10G2/1暗青灰色 シルト  
 11 10BG4/1暗青灰色 シルト  
 12 N2/0黒色 黄鉄質シルト  
 13 N2/0黒色 黄鉄質シルト

SK266



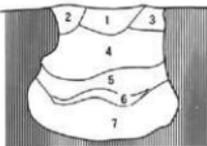
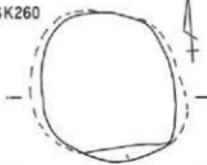
- S K 266  
 1 25Y3/1オリーブ黒色 粘質土 炭  
 2 N4/1灰色 粘質シルト  
 3 N2/1暗灰色 砂質シルト  
 4 N2/1暗灰色 シルト 5G4/1暗緑灰色 砂質シルト

SK255

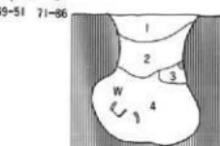
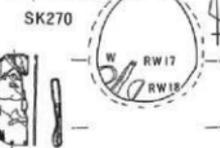
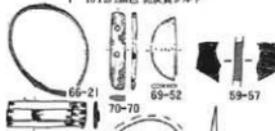


- S K 255  
 1 10YR2/1黒色 シルト  
 2 75Y2/1黒色 シルト  
 3 5Y3/1オリーブ黒色  
 4 10BG2/1黒色 青灰色シルト裏じり

SK260

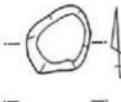


- S K 260  
 1 10YR2/1黒色 粘質シルト  
 2 10BG4/1暗青灰色 シルト  
 3 10BG4/1暗青灰色 シルト  
 4 25Y3/1暗灰色 粘質シルト  
 5 75Y2/1黒色 黄鉄質シルト 凝縮物  
 6 10Y3/1オリーブ黒色 凝縮物多  
 7 10Y2/1黒色 黄鉄質シルト



- S K 270  
 1 10YR2/1黒色 シルト 10BG4/1暗青灰色 砂質シルトブロック  
 2 10YR2/1黒色 シルト 10BG4/1暗青灰色 砂質シルトブロック  
 3 10BG4/1暗青灰色 シルト 凝縮物  
 4 N2/0黒色 黄鉄質シルト 凝縮物多 凝縮物土

SK256

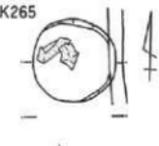


- S K 256  
 1 75Y4/1暗青灰色 粘質シルト  
 2 8G2/1青灰色 砂質シルト 凝縮物  
 3 10BG2/1暗青灰色 砂質シルト  
 4 10BG2/1黒色 砂質シルト



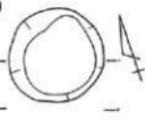
- S K 263  
 1 5Y5/2Rオリーブ色 砂質シルト 黒色ブロックあり  
 2 10YR2/1黒色 粘質シルト

SK265



- S K 265  
 1 10YR2/1黒色 粘質土 炭 凝縮物  
 2 25Y3/1暗灰色 凝縮物  
 3 SDG4/1暗青灰色 砂質シルト  
 4 N2/0黒色 黄鉄質シルト

SK269



- S K 269  
 1 25Y3/1黒色 粘質シルト  
 2 25Y3/1黒色 粘質土  
 3 5BG4/1暗青灰色 シルト 25Y3/1黒色 シルト  
 4 SDG4/1暗青灰色 砂質シルト 凝縮物

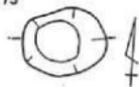
0 2m

(1:40)

第47図 遺構実測図(10) SK.254~

IV 梵天塚遺跡

SK273



- SK273  
1 10YR2/1黒色  
2 5Y3/1緑オリーブ色  
3 5Y2/1黒色

SK274



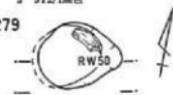
- SK274  
1 10YR2/1黒色  
2 10Y2/1灰色 礫  
3 5Y2/1黒色 礫  
4 5Y2/1黒色  
5 N2/0黒色

SK275

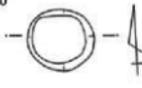


- SK275  
1 10Y2/1黒色  
2 5Y3/1オリーブ黒色  
3 N2/0黒色  
4 N2/0黒色

SK279

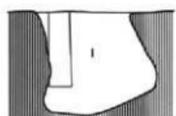
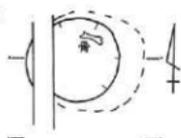


SK280



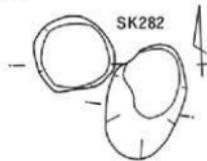
- SK280  
1 25Y2/1黒色  
2 5Y3/1オリーブ黒色  
3 N2/0黒色

SK281



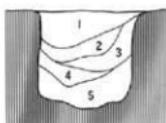
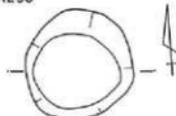
- SK281  
1 10Y2/1黒色 褐色質シルト

SK284



- SK284  
1 10YR2/1黒色 粘質シルト

SK296



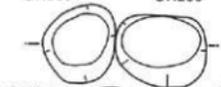
- SK296  
1 5Y2/1黒色 粘質シルト  
2 10YR2/1黒色 粘質シルト  
3 10G4/1緑灰色 砂質シルト  
4 5Y2/1黒色 粘質 礫物  
5 N2/0黒色 褐色シルト

SK297



- SK297  
1 N2/0黒色 粘質シルト  
2 10G2/1緑灰色 粘質シルト  
3 75Y2/1黒色 粘質質 礫物  
4 25G2/2灰色 泥炭質  
5 5Y2/1黒色 泥炭質 礫物

SK300



SK300

SK299



- SK300  
1 N2/0暗灰色 シルト  
2 25Y3/1黒褐色 シルト  
3 N2/0暗灰色 粘質シルト  
4 5Y2/1黒色 粘質シルト
- SK299  
1 N3/0暗灰色 粘質シルト  
2 N3/0暗灰色 シルト

SK301

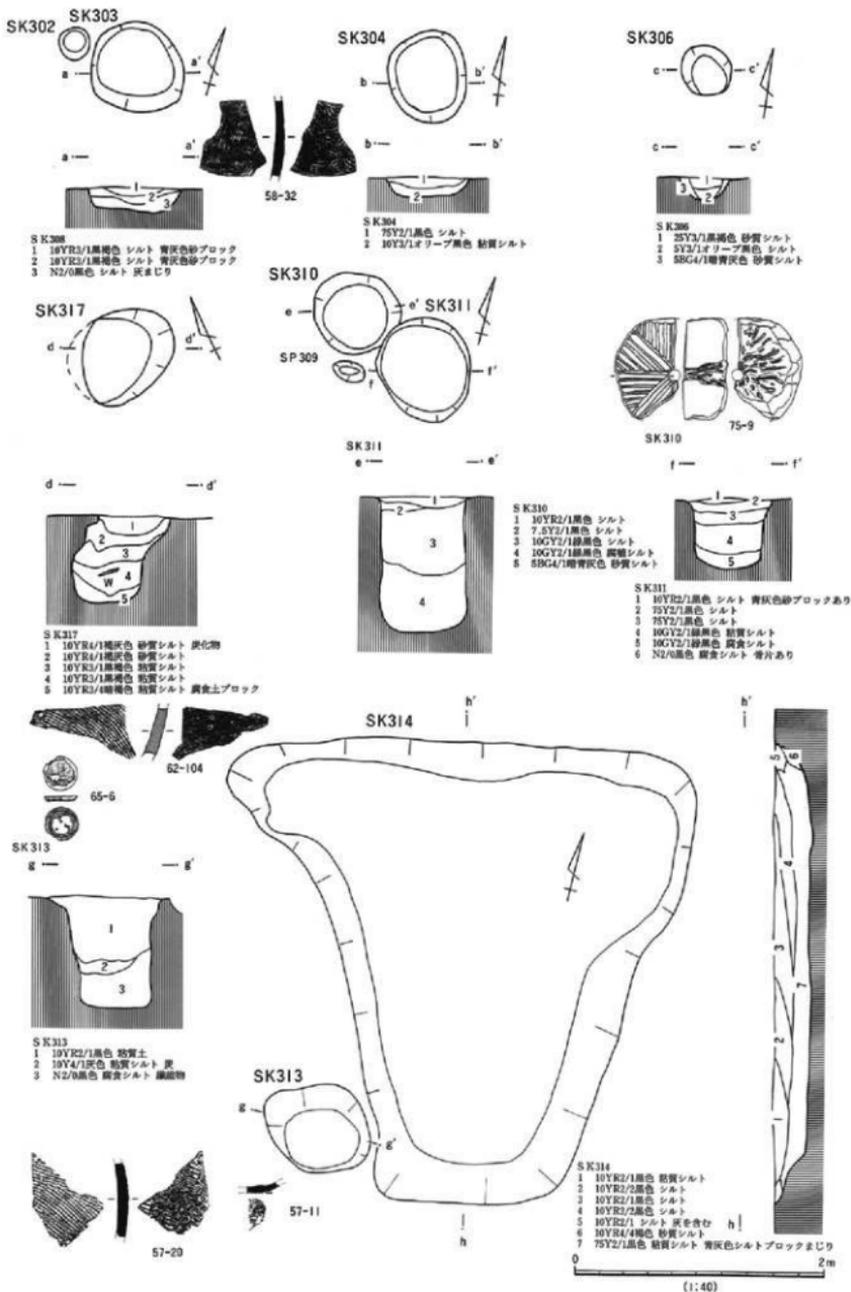


- SK301  
1 5Y2/1黒色 褐色質シルト

0 2m  
(1:40)

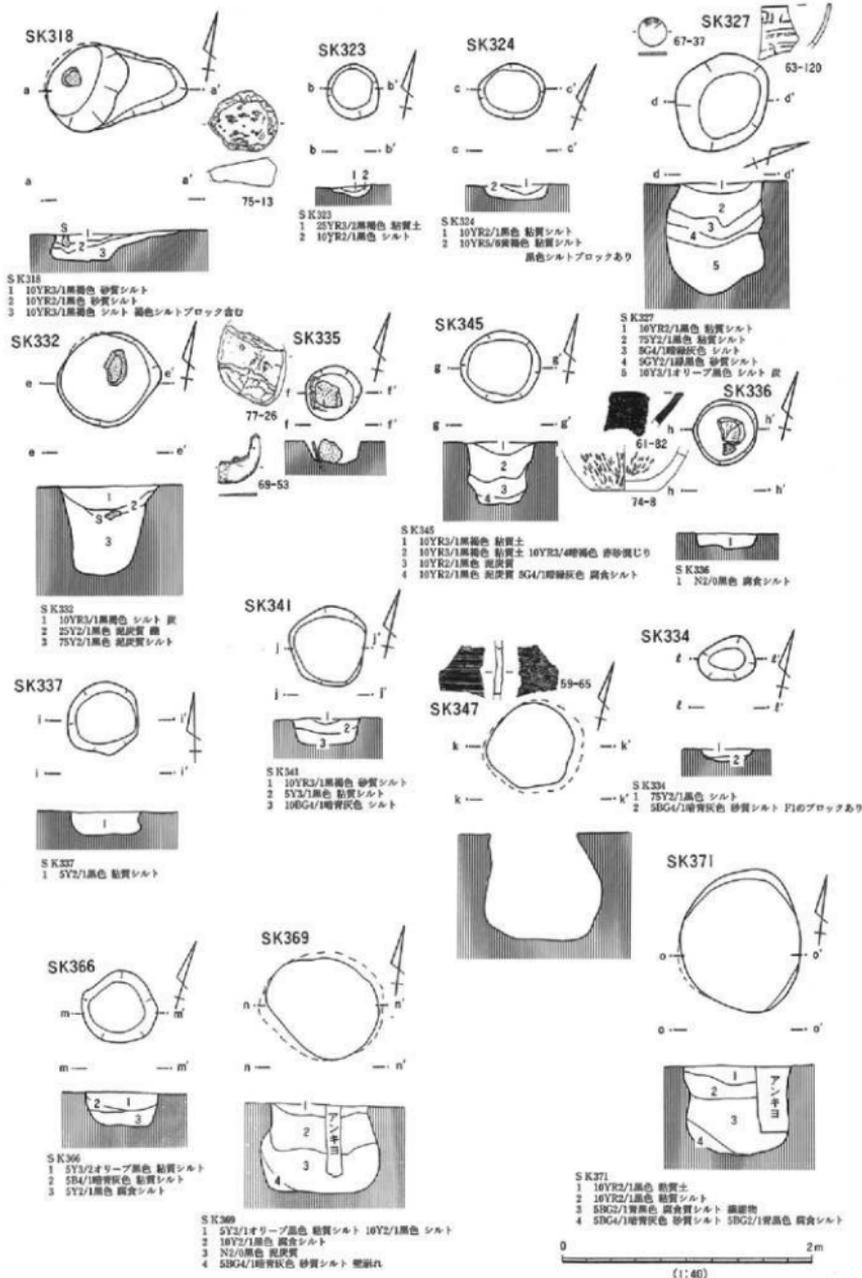
第48図 遺構実測図(1) SK273~

IV 梵天塚遺跡

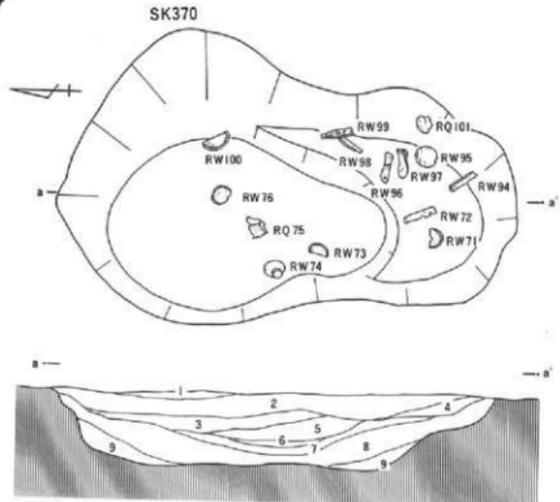
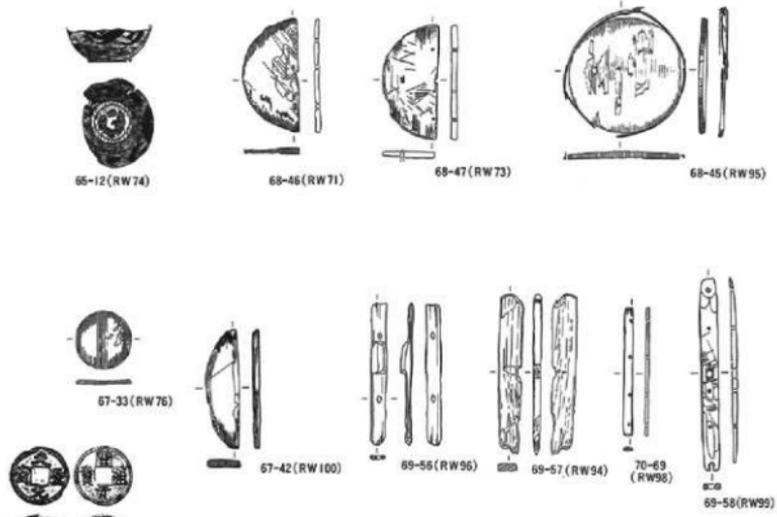


第49図 遺構実測図(1) SK303~

IV 梵天塚遺跡



第50図 遺構実測図(4) SK318~



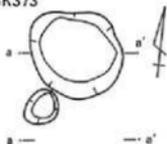
- SK370
- |                   |                      |
|-------------------|----------------------|
| 1 10YR3/1黒褐色 粘質土  | 6 10Y2/1灰色 炭 腐食シルト   |
| 2 10YR2/1黒色 粘質土 炭 | 7 10R2/4/1暗黄灰色 シルト   |
| 3 7.5Y2/1灰色 シルト   | 8 10Y2/1黒色 腐食シルト 未製品 |
| 4 7.5Y4/1灰色 シルト   | 9 10G2/1暗黄灰色 砂質シルト   |
| 5 10Y2/1黒色 腐食シルト  |                      |



第51図 遺構実測図(1) SK370

IV 梵天塚遺跡

SK373



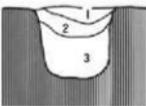
- SK373  
 1 10YR2/1黒色 シルト 灰白色 赤砂入り  
 2 25Y2/1黒色 粘質シルト 灰白色 赤砂入り  
 3 5Y2/1黒色 凝灰質  
 4 25GY2/1黒色 凝灰質



- SK396  
 1 25Y3/1黒褐色 粘質シルト 赤砂入り  
 2 5Y3/1オリーブ灰色 粘質シルト 赤砂入り  
 3 25Y2/1黒色 凝灰シルト 黄灰色ブロックあり  
 4 5Y3/1黒色 シルト 凝灰物  
 5 10Y3/1オリーブ灰色 凝灰質シルト



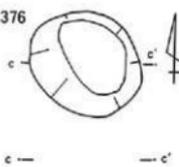
SK374



SK374

- SK374  
 1 25Y2/1黒色 シルト  
 2 75Y2/1黒色 粘質シルト  
 3 10Y2/1黒色 シルト

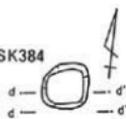
SK376



SK376

- SK376  
 1 10YR2/1黒色 粘質シルト  
 2 75Y2/1黒色 凝灰シルト 黄灰色ブロックあり  
 3 75Y2/1黒色 凝灰シルト  
 4 75Y2/1黒色 凝灰シルト 灰

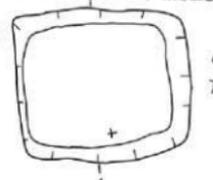
SK384



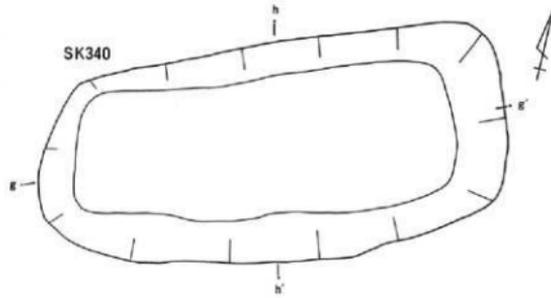
SK384

- SK384  
 1 10YR2/1黒色 シルト 赤砂入り  
 2 25GY4/1暗黄灰色 シルト

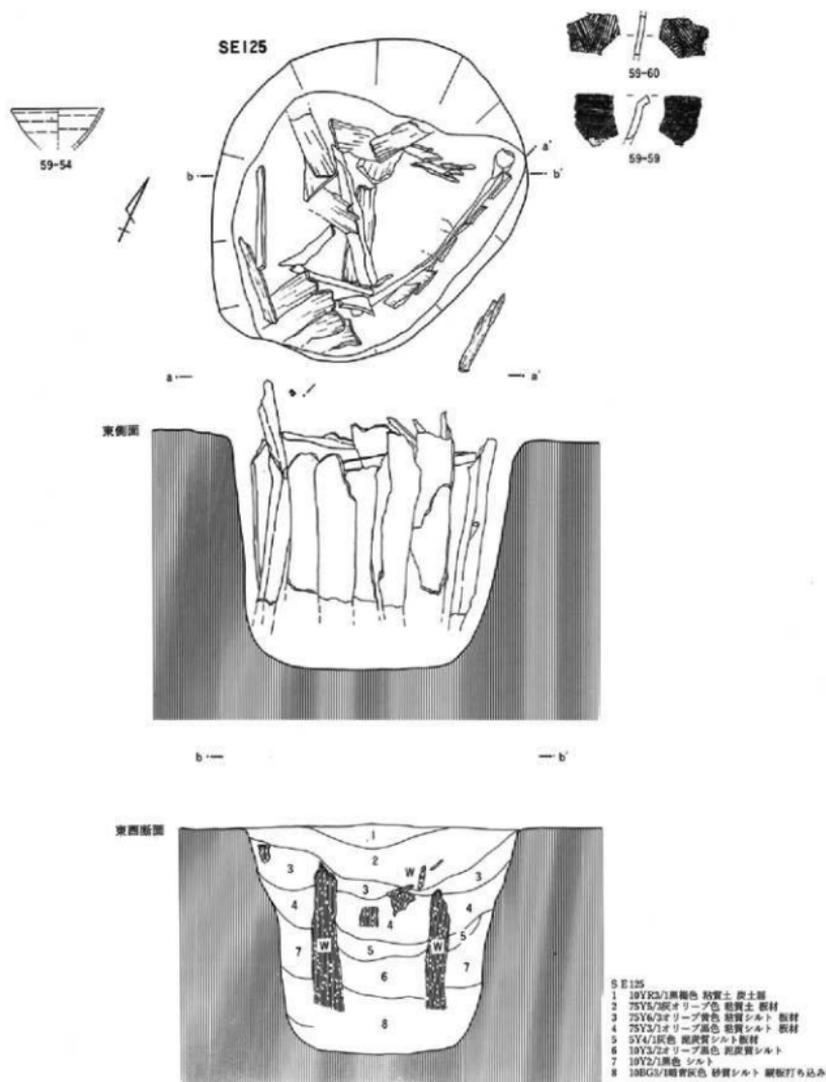
SK368



SK340



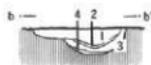
第52図 遺構実測図(10) SK373~



IV 梵天塚遺跡



- SD 160  
 1 25V3/黒褐色 粘質土  
 2 25V3/黒褐色 シルト  
 3 25V2/黒色 砂質シルト 罫線跡あり  
 4 25V2/黒色 砂質シルト



- SD 160  
 1 25V3/黒褐色 粘質土  
 2 5G4/黒オリーブ灰色 シルト N2/6褐色 シルト裏じり  
 3 5G4/黒オリーブ灰色 シルト  
 4 5G4/黒オリーブ灰色 砂質シルト 25V2/黒色 シルト裏じり

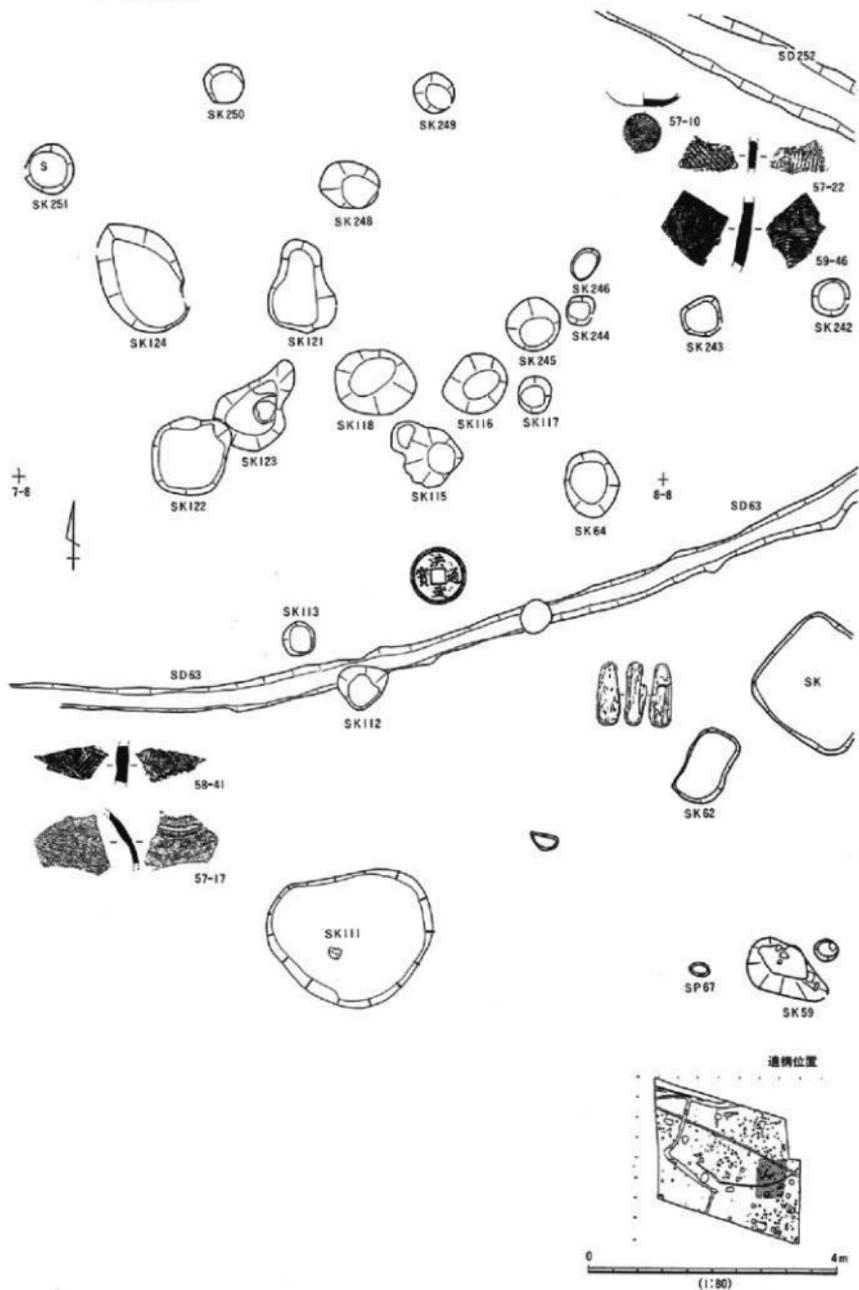


(1:80)

第54図 遺構実測図⑩ SD160



IV 梵天塚遺跡



第56図 遺構実測図⑩ SK群・SD3

表-11 梵天塚遺跡土坑観察表(1)

陣 団	遺構番号	計測値			掘別 種別	平面形	断面形	出土遺物				リン カル 分析	備 考								
		長軸	短軸	深さ				須原器	あかやき	中世	近世			木 製 品							
第37団	SK 1	250	175	28	2	楕円	A 1	1	2												
	SK 4	61	58	20	1	円	B 1														
	SK 5	66	64	28	1	真丸形	B 1	1	2												
	SK 9	148	124	50	4	楕円	A 2									●					
	SK10	83	65	28	1	#	B 1														
	SK15	122	120	112	10	方形	B 2	1	1								●				
	SK19	60	58	56	—	円形	C	1									●				
第38団	SK21	120	96	38	7	#	B 1			1	1						●				
	SK22	77	50	88	2	方形	B 2				1						●				
	SK25	95	64	60	5	真丸形	B 2														
	SK27	185	130	34	2	方形	B 1			1											
	SK29	90	88	99	4	円形	B 2	1	2									●			
	SK30	68	65	64	3	#	B 2	1										●			
	SK31	100	89	48	6	不整形	A 2		1									●			
	SK33	110	105	11	2	円形	A 1														
	SK34	92	71	38	4	楕円	B 1														
	SK36	60	60	47	4	円形	B 1														
	SK38	220	185	61	5	楕円	A 2												●		
	SK40	92	90	64	4	方形	B 2	1											●		
	第39団	SK44	98	87	80	5	円形	B 2	1	1									●		
SK51		60	57	50	3	#	B 2	1	1	1	1							●			
SK54		90	74	97	5	#	C			1								●			
SK55		80	80	38	4	#	A 2												●		
SK56		82	80	38	2	#	A 2												●		
SK58		216	181	73	9	不整形	D												●		
SK59		160	87	80	4	楕円	A 2	1	1										●		
第40団	SK62	122	76	21	1	長方形	B 1	1											●		
	SK64	110	86	80	5	円形	B 2				3								●		
	SK79	70	70	46	6	方形	B 2												●		
	SK80	51	44	30	5	円形	A 2													●	
	SK87	55	232	33	5	真丸形	A 2													●	
	SK90	60	58	58	4	円形	B 2	1												●	
	SK96	299	182	29	6	長方形	A 1	3	1	2	4									●	
	SK102	222	191	50	10	方形	B 1	2	8											●	
	SK107	110	96	29	—	不整形	A 1			4										●	
	SK109	198	185	133	9	円形	A 2	1			3	1								●	
第41団	SK115	120	94	62	7	楕円	D													●	
	SK116	93	90	46	3	円形	A 2														●
	SK118	131	108	64	3	#	A 2				1									●	
	SK121	159	110	52	3	楕円	A 2														●
	SK122	138	135	15		円形	A 1														●
	SK123	162	120	78	7	楕円	E														●
	SK124	205	130	40	6	#	A 1														●
	SK127	60	60	32	4	円形	B 1														●
SK128	170	155	33	4	方形	B 1					2									●	
第42団	SK132	400	210	72	6	長方形	E	11	9												●
	SK136	220	121	34	4	#	A 1														●
	SK139	78	70	68	4	円形	B 2														●
	SK140	70	70	72	4	#	B 2														●
	SK142	120	116	98	6	方形	B 2														●
	SK144	76	63	30	5	不整形	B 1														●
	SK145	108	105	84	3	円形	B 2														●
	SK146	90	82	84	4	#	B 2				1										●
第43団	SK155	66	60	21	3	#	B 1														●
	SK162	510	340	60	—	楕円	A 1														●
	SK163					円形		4	3	3	3										●
第44団	SK170	82	80	66	3	#	C														●
	SK176	112	107	91	5	#	C			3											●
	SK177	54	50	33	5	#	B 2														●
	SK179	142	124	38	4	#	D	1													●
	SK191	40	37	20	2	#	B 1														●
	SK194	60	52	18	2	#	B 1														●
	SK195	66	50	30	3	楕円	B 1														●
	SK196	62	48	30	3	円形	B 1														●
	SK197	84	61	21	4	楕円	A 2	3	1												●

\* リン・カルシウム分析で ●印は実施を示す。結果は附編に掲載。

表-12 梵天塚遺跡土坑観察表(2)

陣 団	遺構番号	計測値			埋覆層	平面形	断面形	出土遺物				リン ン 分 析	備 考	
		長軸	短軸	深さ				須惠朝	あかやき	中世	近世			木製品
第44団	S K201	120	74	58	4	楕円	B 2							
	S K205	80	76	70	—	円形	B 2							● 漆
	S K206	82	80	100	5	#	B 2							焼け罫
	S K207	70	66	31	2	#	B 1							
	S K210	55	50	14	3	#	A 2							
第45団	S K213	92	89	90	7	#	B 2		2		1			● 漆
	S K215	88	88	89	6	#	B 2	1						炭片
	S K218	56	54	15	2	#	A 2							
	S K222	30	28	10	2	#	A 2							
	S K224	111	105	94	5	#	C	1			1			● 丸板 板材 杭
	S K229	59	57	14	3	#	A 2							
	S K230	82	80	62	2	#	B 1							● 炭
	S K232	91	60	20	2	楕円	B 1							
	S K235	90	77	84	5	#	B 2							
	S K236	64	60	85	4	円形	B 2							
第46団	S K239	70	51	40	4	楕円	B 1							
	S K241	76	70	58	3	円形	B 2							
	S K242	61	60	80	6	#	C							
	S K243	68	66	52	4	半円形	B 2							
	S K244	48	45	44	2	円形	B 1							
	S K245	90	88	40	5	#	A 2							
	S K248	100	96	74	4	#	B 2							
	S K249	70	58	37	3	#	B 1							
	S K250	62	60	57	5	#	B 2							
	S K251	82	80	56	4	#	B 2							
第47団	S K252	78	62	23	2	#	A 1							
	S K254	45	42	17	4	#	B 1							
	S K255	78	69	50	4	楕円	B 2							
	S K256	60	44	39	3	半円形	B 1							
	S K259	81	76	41	3	円形	A 2							
	S K260	122	120	113	7	扇形	C							
	S K263	53	50	18	2	円形	B 1							
	S K264	160	72	78	12	楕円	D							
	S K265	64	62	38	5	円形	B 1							
	S K266	64	61	20	3	#	B 1							
第48団	S K269	78	75	44	4	#	B 1							
	S K270	84	82	109	4	#	C	2						
	S K273	66	52	20	3	#	B 1							
	S K274	60	57	70	4	#	B 2							
	S K275	96	53	60	4	楕円	B 2							
	S K279	67	50	57	—	円形	B 2							
	S K280	50	50	21	2	#	B 1							
	S K281	69	67	86	—	#	C							
	S K282	94	62	58	4	楕円	B 2							
	S K284	64	60	10	1	円形	A 1							
第49団	S K296	88	85	80	5	#	B 2	1						● 漆
	S K297	80	80	71	5	#	B 2	2						
	S K299	80	90	48	1	楕円	B 2							
	S K300	66	56	53	4	円形	B 2	1	2					
	S K301	35	60	64	1	#	B 2							
	S K303	80	65	20	3	#	B 1	1						
	S K304	72	70	18	2	#	B 1							
	S K306	38	35	18	3	#	A 2							
	S K308	84	80	110	4	#	B 2	1						
	S K311	88	85	54	5	#	B 2							
第50団	S K313	94	72	90	3	#	B 2	1	1	1				
	S K314	375	230	27	7	長方形	A 1	2	1	1				● 梅種子
	S K318	117	70	24	3	楕円	E							
	S K323	50	47	10	2	円形	A 1							
	S K324	51	48	14	2	#	B 1							
	S K327	82	80	90	5	楕円	B 2			1				
	S K332	80	78	78	3	円形	B 2							
	S K335	44	40	25	—	#	B 1							
	S K336	50	46	11	1	#	B 1							
	S K345	63	60	50	4	#	B 2							

表-13 梵天塚遺跡土壌観察表(3)

探 洞	遺構番号	計 測 値			溝 別 埋 藏 層	平面形	断面形	出 土 遺 物				リ ン カ ル 分 析	備 考	
		長軸	短軸	深さ				須恵期	あかやき	中世	近世			木 製 品
第50回	S K334	47	40	9	1	楕円	A 2							
	S K337	60	55	19	1	円形	B 1						●	
第52回	S K340	382	180	55	1	長方形	A 2	1	2					
第50回	S K341	64	59	23	2	円形	B 1							
	S K347	72	69	83	—	#	C	1	5	1	板材 棒材		●	
	S K366	60	54	28	3	#	B 1		1		丸板 棒材			
	S K368	280	261	42	1	方形	A 1	1			罎 ヘラ			古銅(還元遺物)
	S K369	100	80	78	4	円形	C							
第51回	S K370	364	142	62	8	楕円	A 2				丸板 加工板 漆輪 穴開き丸板			古鉄18 層
第52回	S K373	80	72	79	4	円形	C							
	S K374	72	61	60	3	#	B 2							
	S K376	97	80	74	3	#	B 2						●	
	S K384	33	30	20	2	異方形	B 1							
	S K396	88	78	75	5	円形	B 2				構け棒材			

(56頁からつづき)

梵天塚遺跡のさらに下層に弥生時代に溯る遺構がある可能性がある。

S D160は、埋納銭や明の磁器皿等から16世紀以前に掘り込まれていることがわかる。溝は土壌部をめぐるように配されていることから、墓域区画の意味も予想できる。

S D252 土壇や溝跡S D64・S D160を切っている。近世以降の溝跡とみられ、近世の陶磁器片が少量出土した。ほぼ直線的に作られている。水田の用水路跡とも考えられる。

## 4 遺物

梵天塚遺跡から出土した遺物は、土器類・木製品・金属製品・石製品・自然遺物（種子）などで、整理箱で22箱を数える。このうち木製品が比較的多く出土し、17箱を数える。木製品のほとんどは土壌内出土である。土器類は、弥生時代・平安時代・中世・近世・近代以降のものが認められる。いずれも完形の資料はなく、破片資料のみである。また、本遺跡からは、一括の埋納銭が出土している。以下、順に説明する。

## (1) 土器

## a) 弥生時代の土器（第57図1～5）

溝跡（SD160）壁面から弥生時代中期の土器片が6点出土した。そのうち5点を図示した。第57図2, 4は口縁部でやや外反し、突起を持つ。1, 3, 5は体部片で節の小さい縄文が施文されている。いずれも同一個体で焼片と思われる。

## b) 平安時代の土器（第57図6～第59図66）

平安時代の土器としては、須恵器とあかやき土器がある。須恵器は、蓋(6)・杯(8～13・皿(7))・壺(15～17・19・26・39)・甕(18・20～38・40～53)がある。甕体部の資料が多い。あかやき土器は、杯(54・55)・甕(58・60～66)・埴(59)がある。破片資料がほとんどで、全体形を知るものはほとんどない。また、表面が摩滅したものが多い。

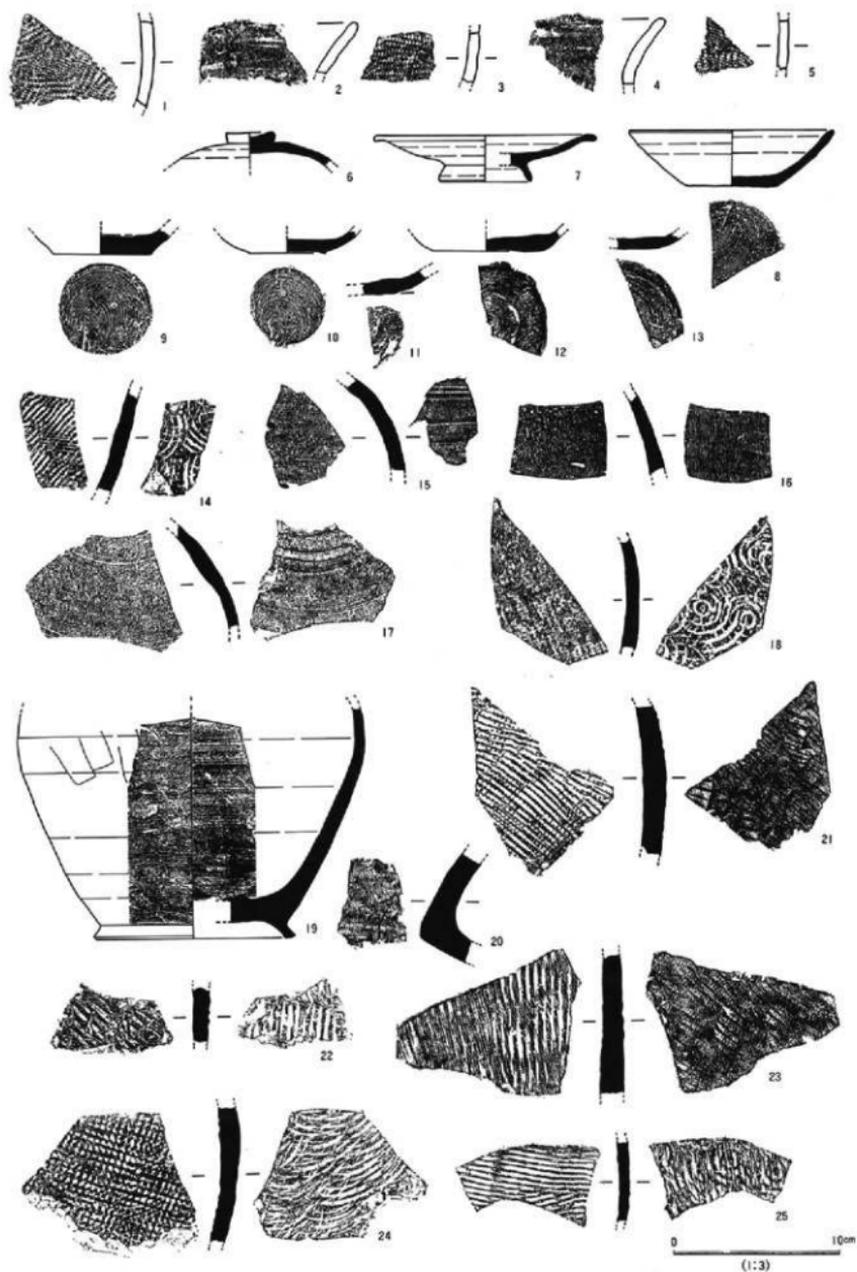
## c) 中世の陶磁器（第59図～第64図）

中世の陶磁器としては、国内産の珠洲系陶器・越前系陶器等ほか貿易陶磁器が見られる。全体としては、珠洲系陶器が大半を占める。

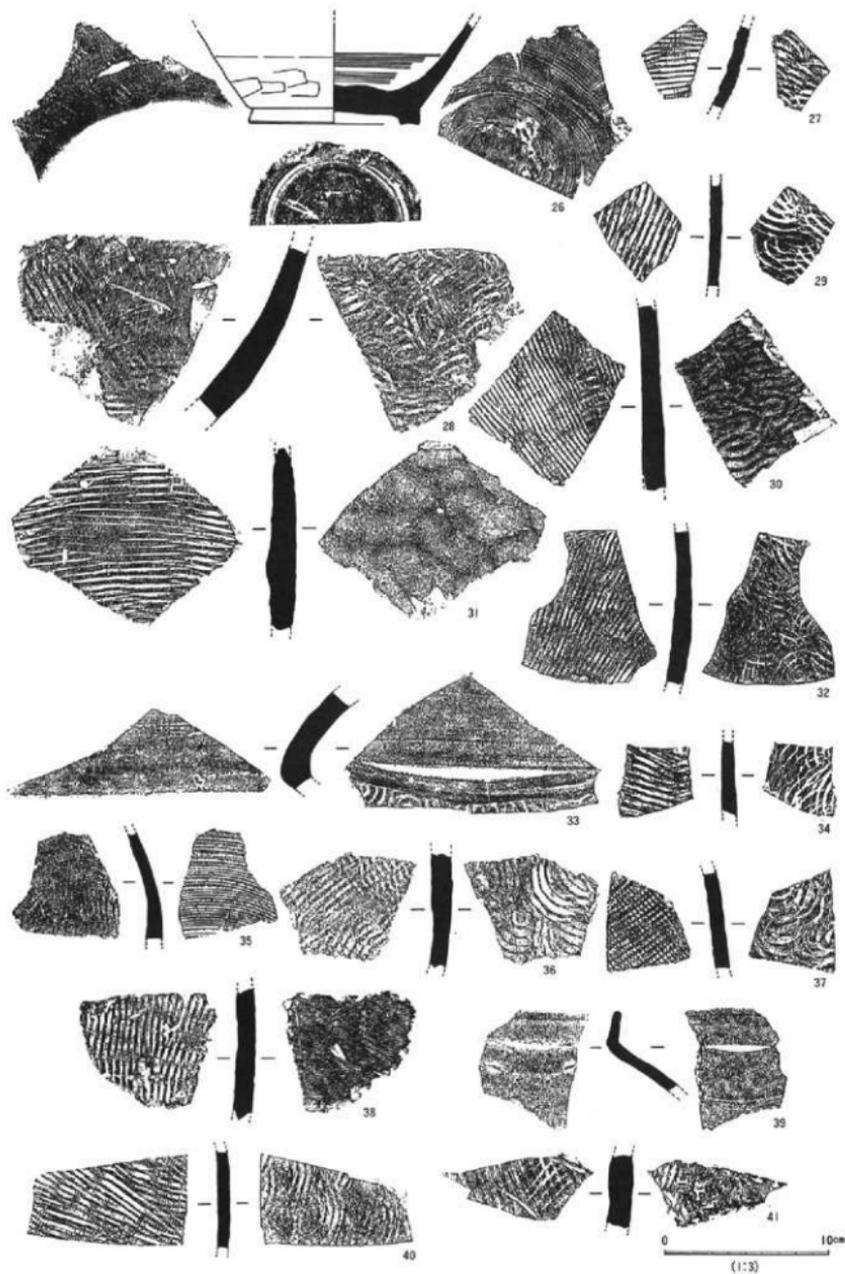
**珠洲系陶器** 片口鉢（第60図67～80、第61図81～87）・壺（第61図90・95～99、第62図106～109・111～113）・甕（第61図89・92・93、第62図103・104）がある。片口鉢は、吉岡康暢（1994）の編年にあてはめると、Ⅳ期・Ⅴ期・Ⅵ期に対応する。Ⅳ期は第60図67・70・第61図82の資料で口縁部が水平もしくはやや内傾する。撞目は明瞭である。Ⅴ期の資料は第61図71、第62図81の資料で、口縁部は内傾して面を持ち、内面との境が角ばる。端面には、4～7条の櫛描き波状文が巡る。Ⅵ期の資料は第61図86・87の資料で、口縁端面に櫛描波状文が入り、撞目は細く弱い。焼成は甘くなる。壺には外面は細かい糸タキ目で、内面は手のひらでのアテが見られる。

**越前系陶器** すり鉢（第61図83・84）・甕（第62図101）がある。すり鉢は土壌（SK64）からの出土で、口縁内面に弱い段を持つ。内面には7～8状の撞目が入る。16世紀前半の年代が与えられる。甕は檜崎・田中編年（1976）のⅢ期（15世紀）に近い口縁形態である。

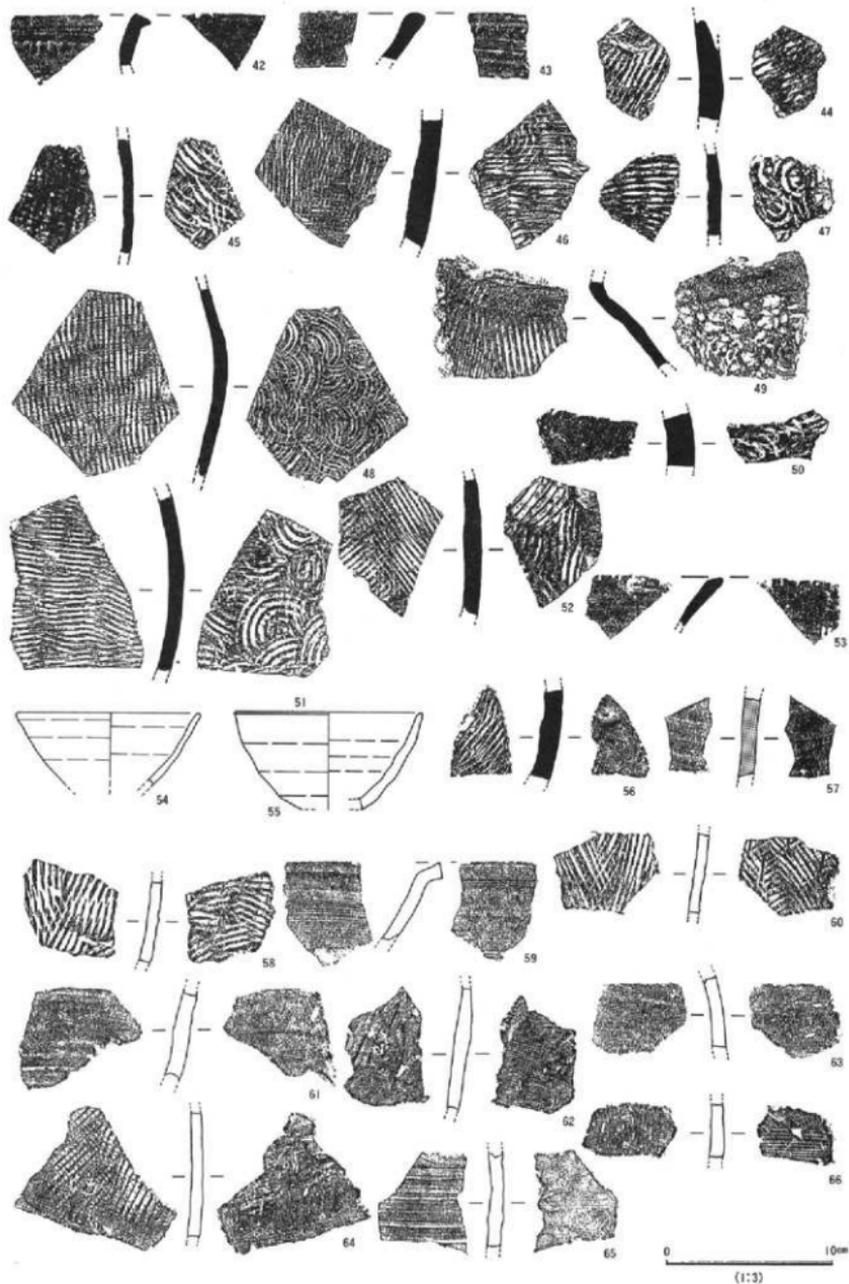
**貿易陶磁器** 明の染付皿・青磁・白磁がある。染付皿（第63図117）は横田・森田（1978）の染付け皿B1群Ⅵ期に分類されるもので、見込みに十字花纹、側面には牡丹唐草文が描かれている。16世紀の年代が与えられる。青磁碗（第63図120）は口縁に雷文帯が回り、胴部に大きな線書きの蓮弁文を持つ。青磁碗（第63図121）は、端反りで内外面無文となる。青磁碗（第63図119）は線描きの蓮弁文が描かれている。第64図151は白磁皿である。



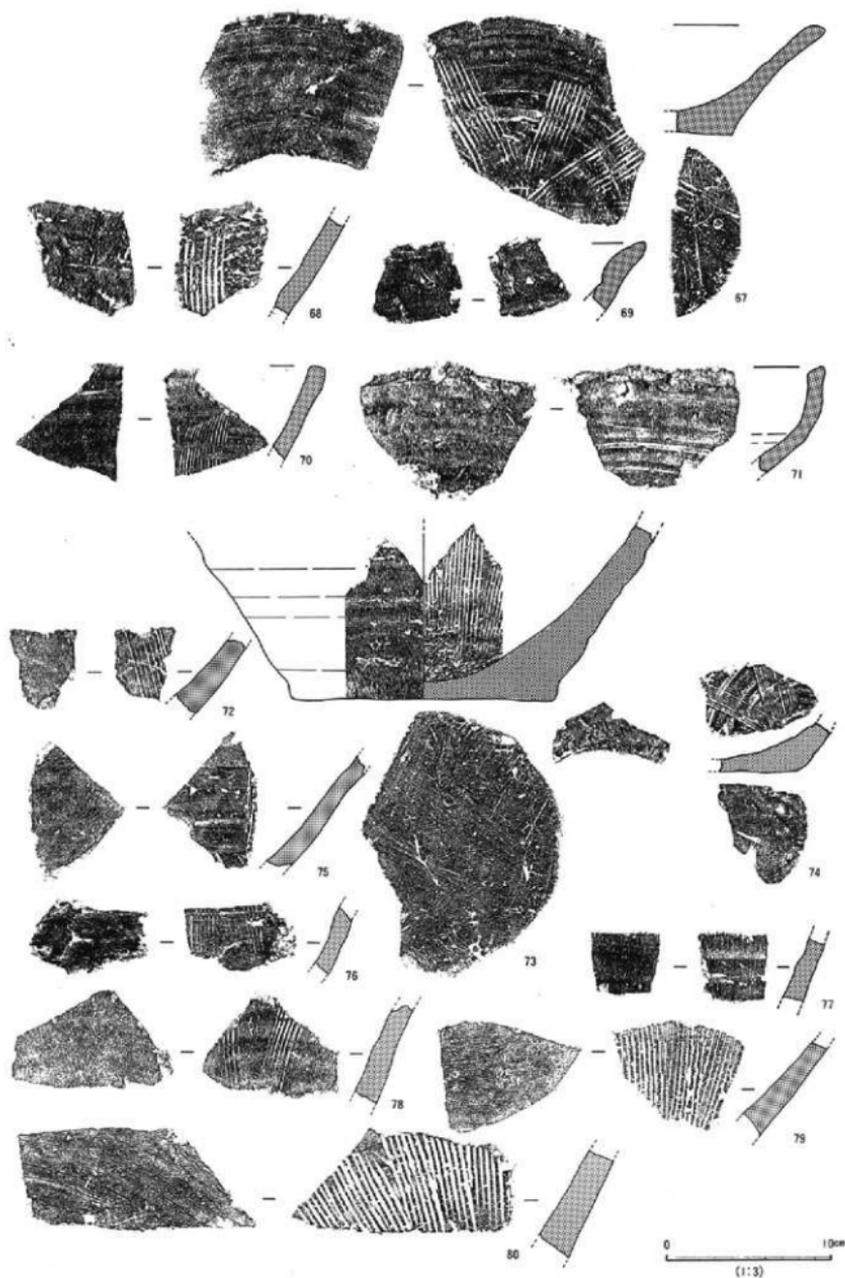
第57圖 遺物実測図(1) 土器 1



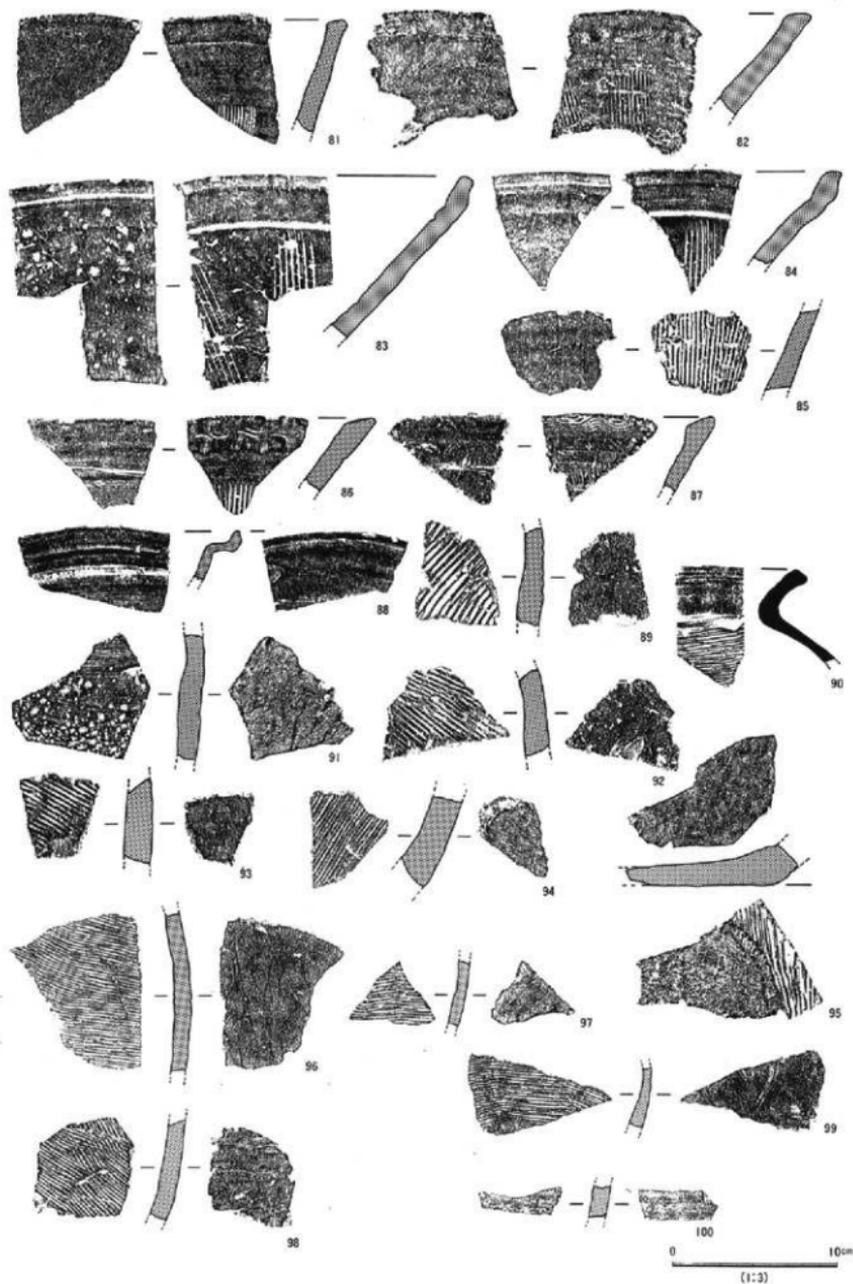
第58図 遺物実測図(2) 土器 2



第59回 遺物実測図(3) 土器 3

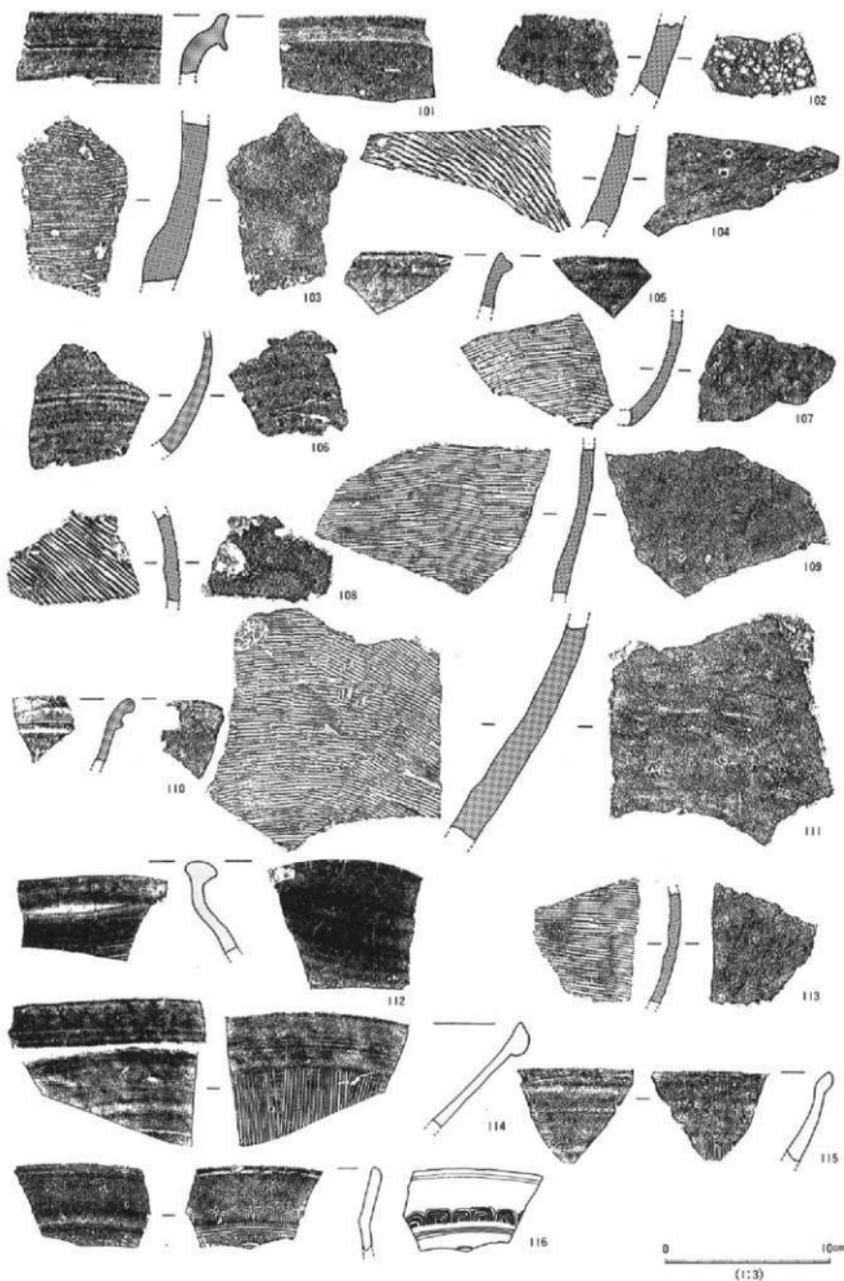


第60図 遺物実測図(4) 土器 4

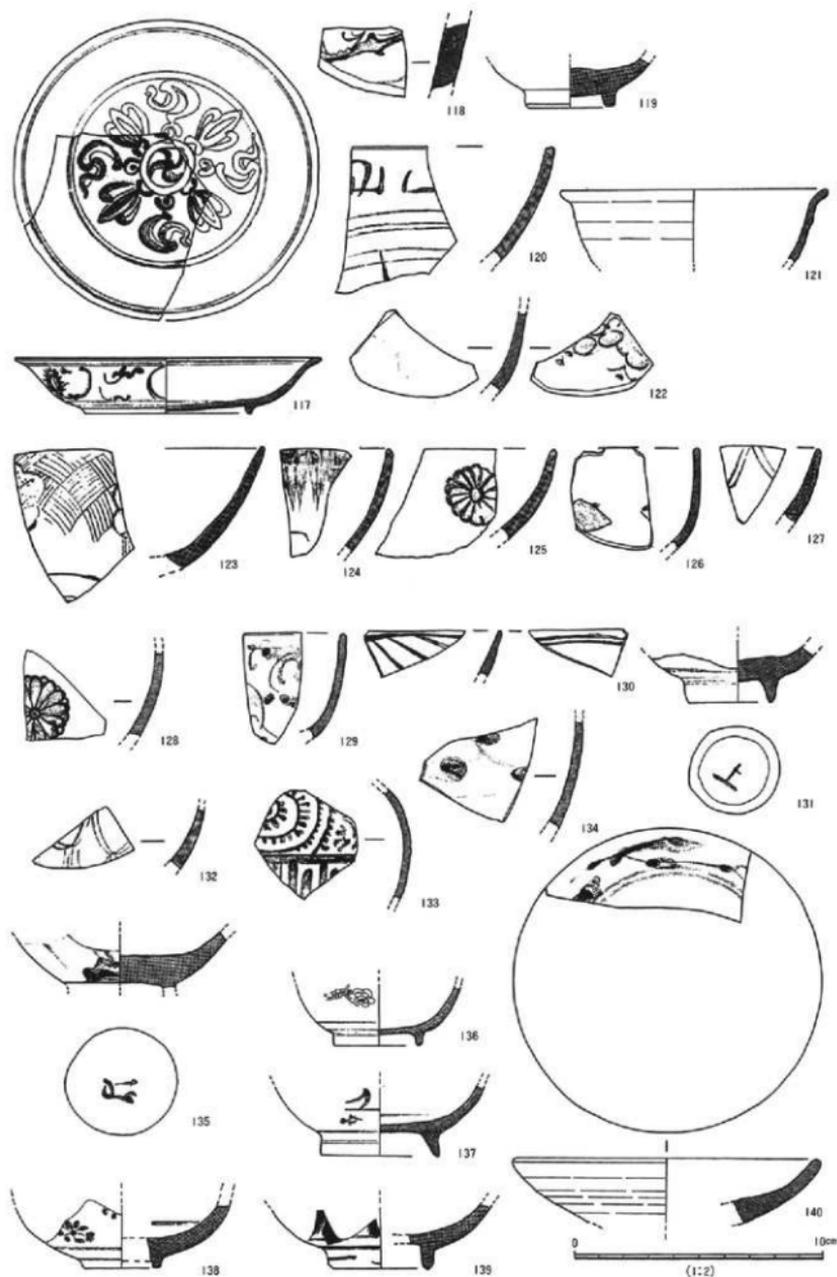


第61図 遺物実測図(5) 土器 5

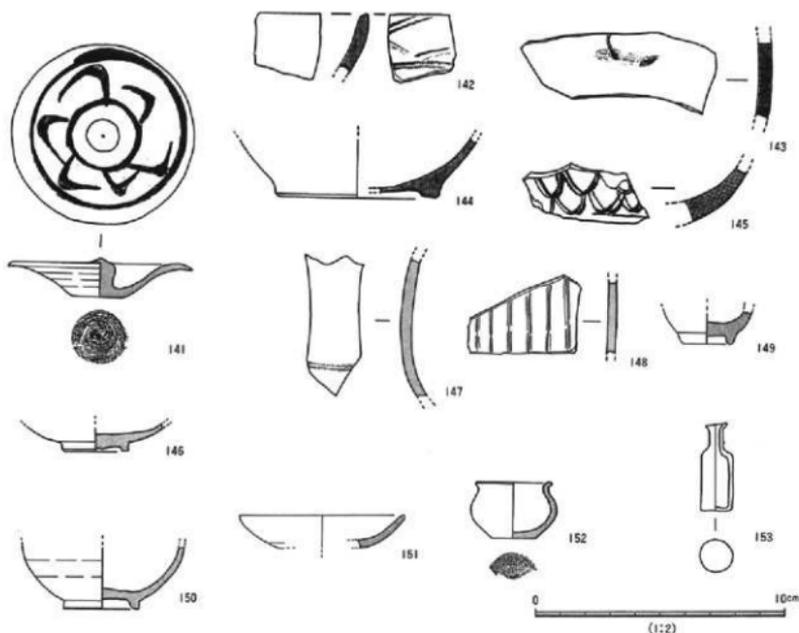
IV 梵天塚遺跡



第62図 遺物実測図(6) 土器6



第63圖 遺物実測図(7) 土器 7



第64図 遺物実測図(8) 土器 8

## d) 近世の陶磁器 (第62図～第64図)

近世の陶磁器にはすり鉢・染付碗・花瓶・土瓶蓋・線香立てなどがある。すり鉢(第62図114～116)はすり鉢片であり、産地等は不明である。第63図の127・132、第64図145は二重網目文様、122は梅花文様、133は体部海鼠文様のある花瓶である。140は内面壁に草葉文様が描かれる。125・126の碗はくらわんか手碗の可能性もある。141は土瓶の蓋で鱈状の文様がめぐる。147は、瓶の頸部である。152は茶褐色の小型壺である。線香立てであろう。

## (2) 木製品

梵天塚遺跡出土の木製品には、椀・皿・柄杓曲物・曲物・へら・箸・加工された板材や棒材・下駄・斎串・櫛・俵編み具などがある。ほとんど木製品は土壌内出土である。それぞれについて説明する。

椀は、9点出土している。第65図1, 2, 3, 4, 7, 8は黒漆が塗布されている。このうち4と7には底部に「上」の字が朱漆書きされている。11は朱漆椀で台部がやや高い。12と13は黒漆地に朱漆で草葉文様が描かれている。

皿は、2点出土した。5は底にロクロ痕が残る。6は内面に漆が付着している。

柄杓曲物は、7点出土した。径約95mmのものと同径約105mmのもの2タイプある。第67図に図示してある小丸板は、柄杓曲物の底板と考えられる。曲物の材は杉材である。

曲物は完形品はなく、回した側板のみ(第65図14、第66図21, 23)、底丸板のみ(第67図41・42・43、第68図44～50、第69図51～53)がある。21は曲物棒を2重に補強している。

へらは2点出土した(第67図24・25)。2点ともに先端が丸く削り加工され、柄部は緩やかに狭りが入る。幅広い柄に特徴があり、土崎遺跡出土のへらに近似する。類例は、酒田市手蔵田10, 11遺跡の中世の土壌(SK401)から出土している。

箸は、土壌(SK270)からまとまって出土している。箸は、他の遺跡においても中世の遺構から大量に出土する事例(高阿弥陀遺跡等)がみられる。

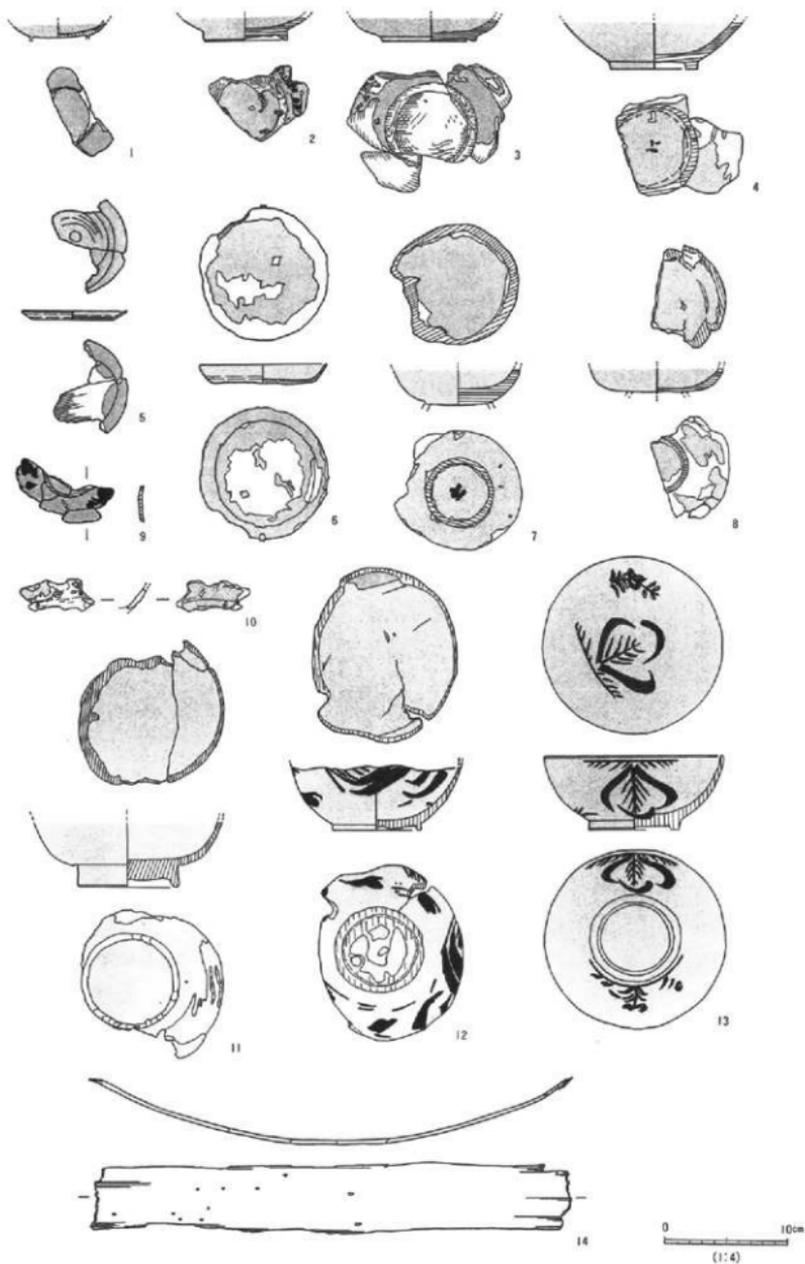
加工された板材(第69図54、第70図66～70)は、用途など不明なものがほとんどである。この中で56・58・69・70は穿孔が見られ、農具類の部品と思われる。59は先端側面に刻みが入り、基部に穴があく。61は、破損しているもののほぞ穴が2本入り、台の一部と見られる。加工された棒材(第71図79～82、85～87)も用途不明の物が多い。79は穴があけられており、80は柄杓の側にあつたもので、柄部品と思われる。86は加工用具の把手であろう。紐通し穴がある。

斎串は第69図60と第71図83である。60は半分ほど焼けて無い。側面に刻みが入る。

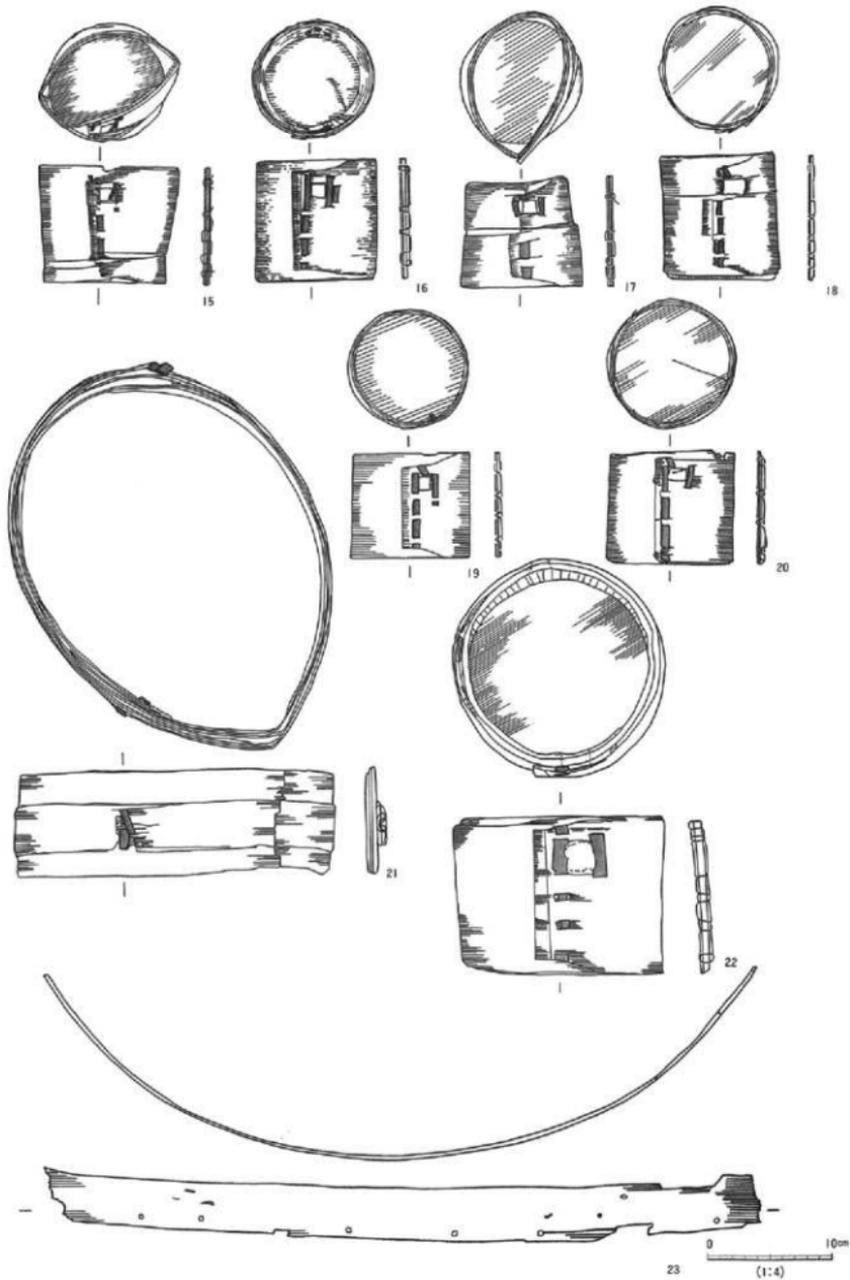
下駄は6点出土したが、5点図示した。削り出しの連歯下駄(第70図72・73、第71図75・76)と、差し歯下駄(第70図74)がある。差し歯下駄は、断面かまぼこ形で、削り調整が密に施されている。下駄は単品のみで、対になるものは無い。

櫛は、2点出土している。土壌内出土で、保存状態が良い。

俵編み具(第71図88・89)が2点出土した。棒を切断し、表面を小刀で削り調整を施す。端に挟りを入れ、紐を巻きつける引っかけ部を作り出している。これは、俵や籠を織る器具の道具として近世・近代にいたるまで利用されてきた。庄内農具資料館(羽黒町松ヶ丘開墾場内)に類似品が数多く展示されている。

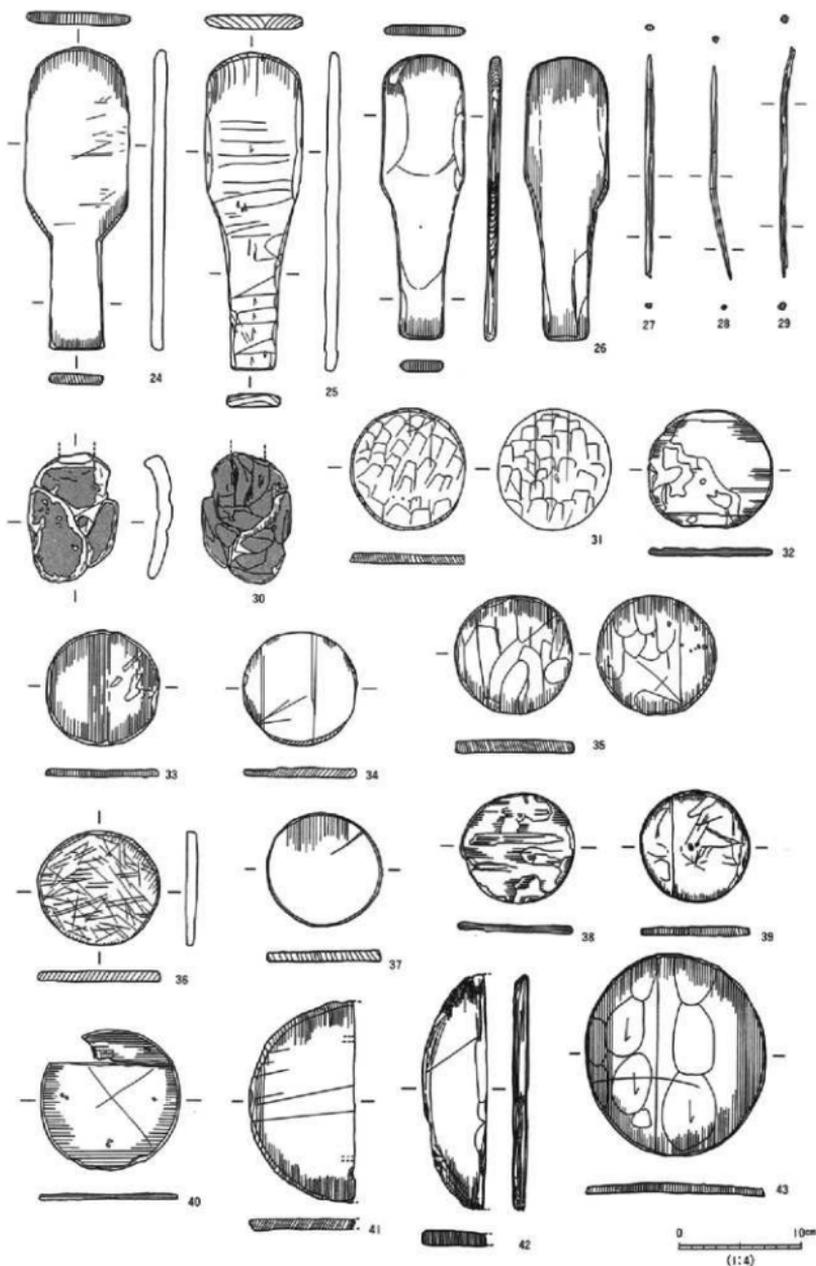


第65图 遺物実測図(9) 木製品 1

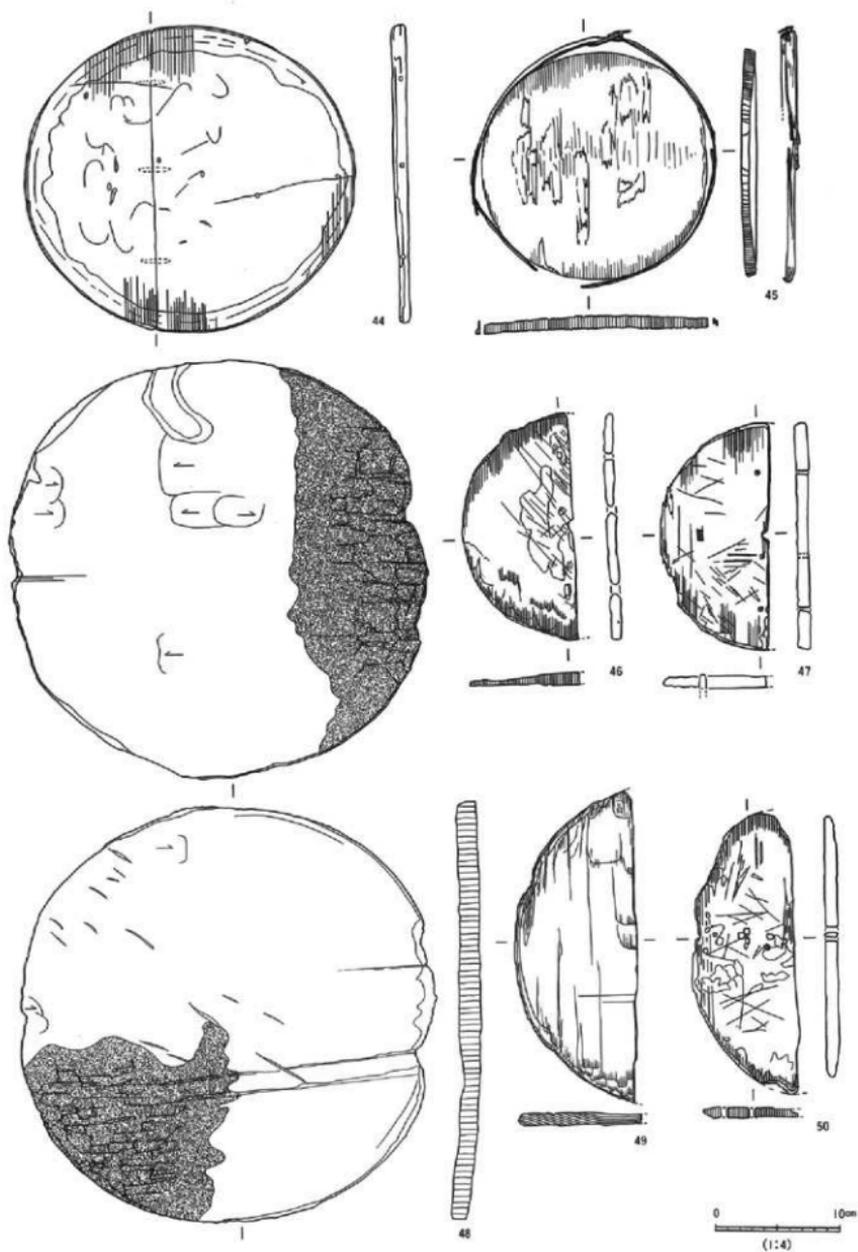


第66图 遺物実測図(10) 木製品 2

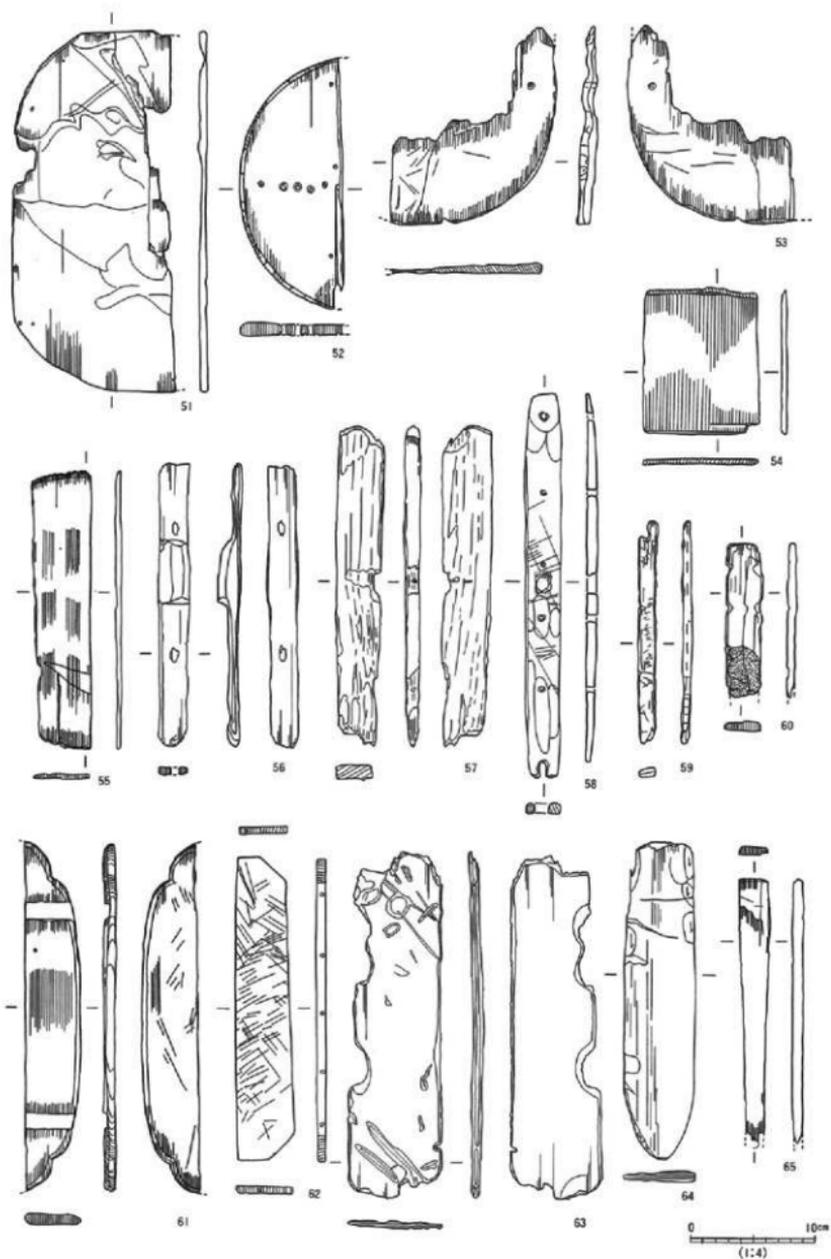
IV 梵天塚遺跡



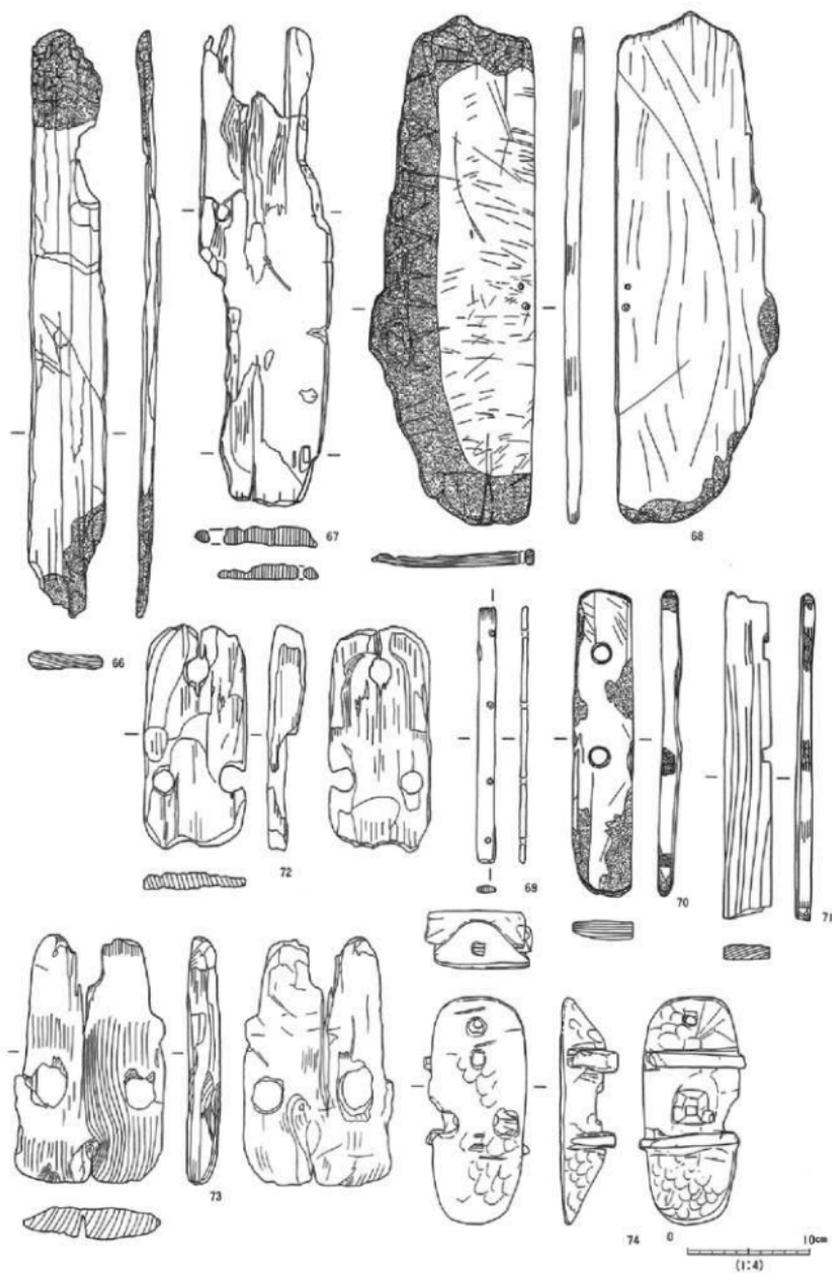
第67圖 遺物実測図(1) 木製品 3



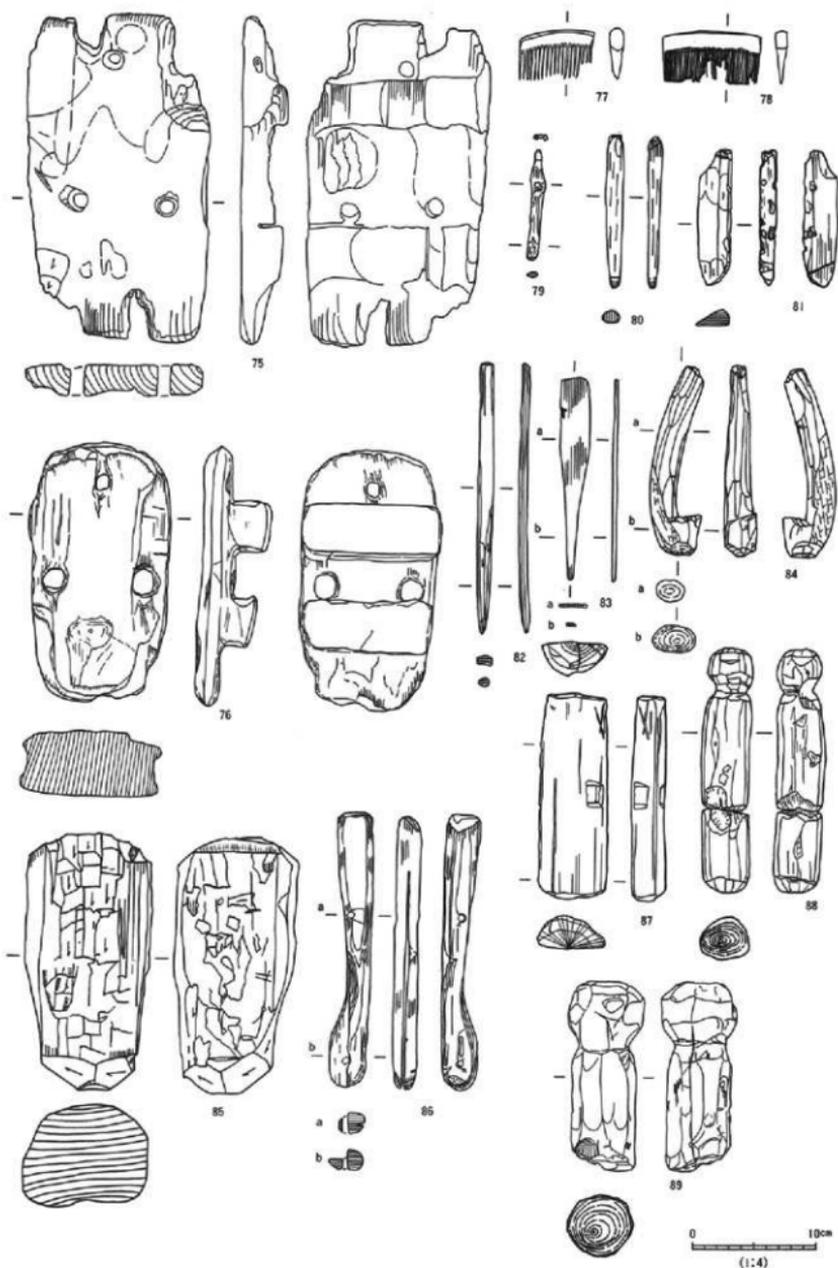
第60圖 遺物実測圖(12) 木製品 4



第69圖 遺物実測図(13) 木製品 5



第70図 遺物実測図(14) 木製品 6



第71圖 遺物実測図(19) 木製品 7

## (3) 金属製品 土製品 (第73図)

第73図に金属製品と土製品を图示した。1・2は刀子である。1の刀子はSK56出土で、先端部と下部が欠損している。柄部に装着用の径5mm穿孔が見られる。現存資料から推定して、全長22cm程あったと思われる。2の刀子も先端部と下部が欠損している。薄手ながらやや大型である。3の小刀状鉄製品は溝跡SD160内の埋納鉄と伴出した刀子状鉄延群(8本)の一つで、同一規格の鉄延がまとめられていた。全長172mm程で基部は鎌金時に金箸で押さえたためか、曲がっている。日本海側での出土例が多く鉛釘ではないかとの説もある。4は角釘である。6は銅製の鋤杖である。大鋸は三葉形で、1本の銅板を折り曲げ、真柱部で接合している。5個の円形遊鋸が付く。鋤杖の柄部に柄を差し込む中空部分が見られず、杖の先端に付いていたかは不明である。全体に保存状態が良く、丁寧に磨かれ整形されている。発掘調査で鋤杖が出土した例は、松山町山寺法海坊遺跡で確認されている。

5は土鍾である。長さ57mm厚さ27mmで中心に径7mmの穴が空けられている。

## (4) 石製品・礫 (第74図～第77図)

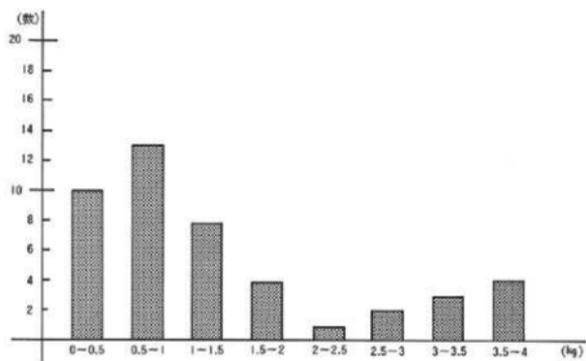
石製品としては、砥石・石鉢・粉挽き臼が出土し、この内9個体を图示した。

第74図1～5は砥石で長方形で中央部が湾曲してくぼむ。石質は荒い粒子の泥岩で、粗研ぎ用と思われる。4・5は粘板岩製で粒子が密である。薄手で切り込みのようなキズが見られる。仕上げ研ぎ用と思われる。

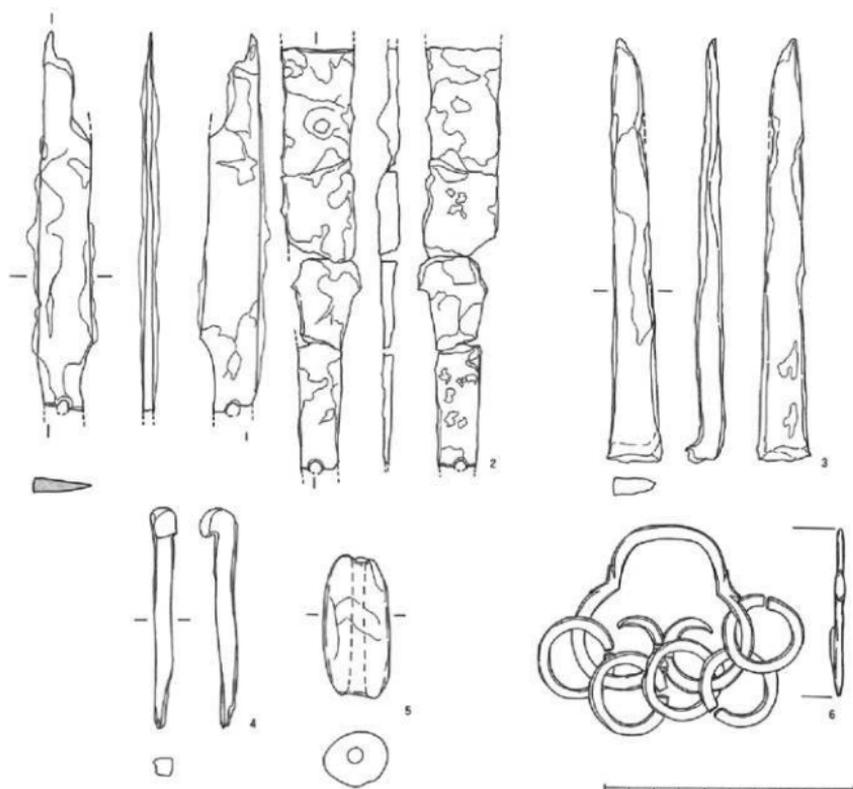
6～8は石鉢である。いずれも凝灰岩製で、加工によるノミ痕が多数見られる。内面のノミ加工が密で縦方向にノミによる条線が並ぶ。また、使用により内面の摩滅がはげしい。口縁には片口が付く。石鉢は、藤島町藤島城跡から出土例がある。藤島城例では15～16世紀の年代が想定されている。梵天塚遺跡出土の石鉢も近い時期と考えられる。

第75図9は粉挽き臼の下臼である。SK310出土で、半分欠損している。石材は輝石安山岩製である。径250mm、高さ83mmを測る。白面中央には、径131mm深さ80mmの円形の芯棒孔を2段に穿つ。白面は、ほぼ平坦でノミ加工による粗い目が8分割に刻まれる。かなり使用されたようにみられ、溝表面は摩滅が進んでいる。裏面は放射状にノミ加工が施されている。

礫は土壌内出土の17点を图示した。10は白色泥岩製で、ケズリ面に横方向の細かい刻みがある。11は泥岩製で両面に多数の線状のキズが見られる。12は、偏平な尖縁岩である。13以降の礫は、ほとんど加熱を受けた礫で、煤が付着したり、火ハネをおこして割れたりしている。加熱はほぼ全面に及ぶもの(第75図13、第76図14・15・18・19・21、第77図24・25)片面或いは礫面の一部に及ぶもの(第76図16・20、第77図26)がある。

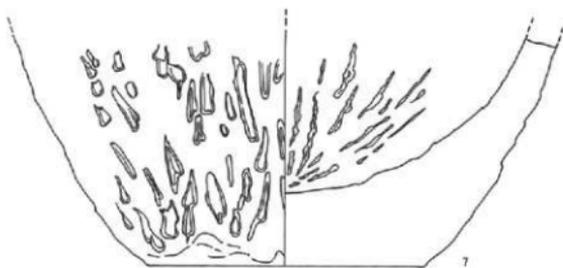
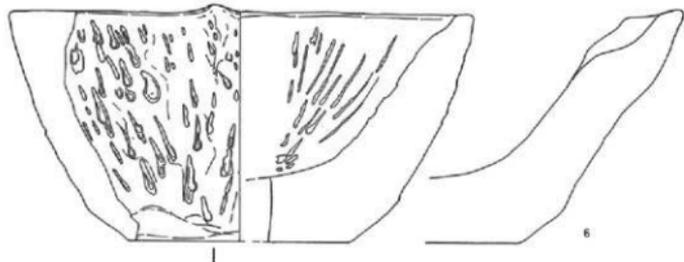


第72図 土壌出土物重量分布図



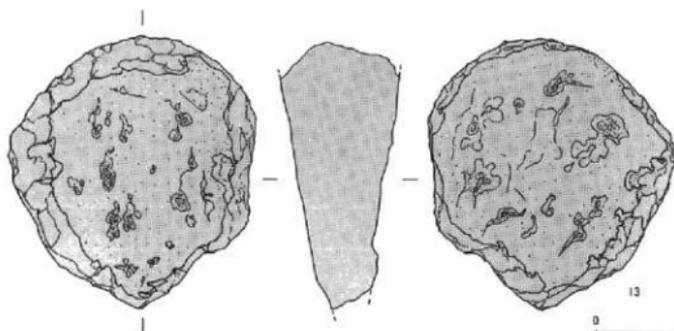
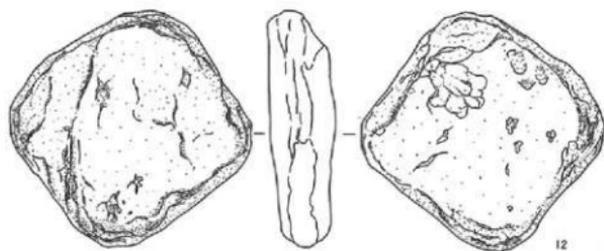
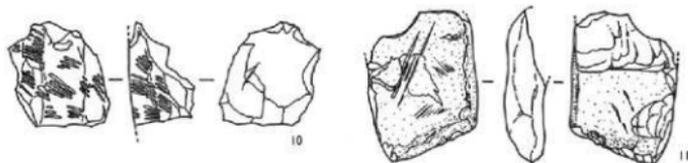
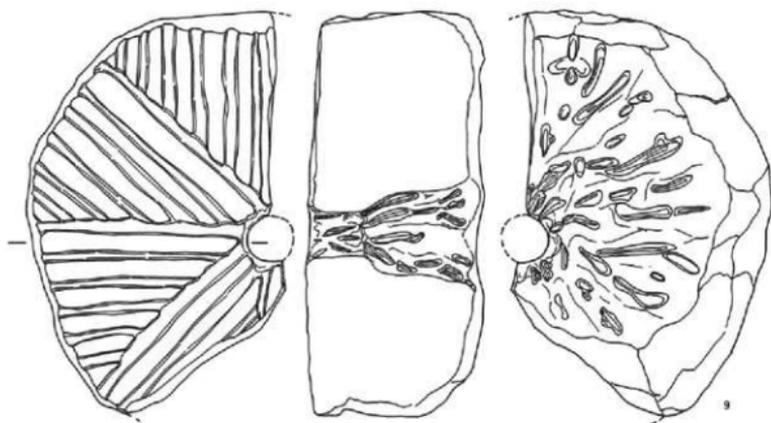
第73図 遺物実測図(10) 金属製品他

IV 梵天塚遺跡



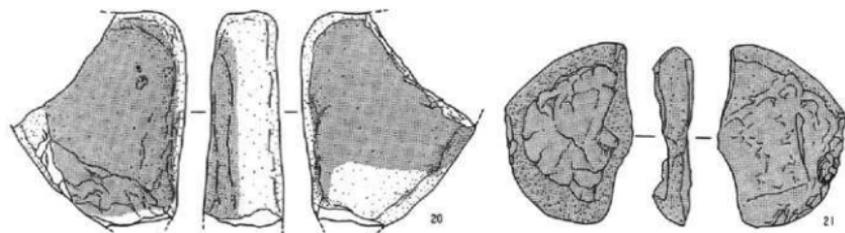
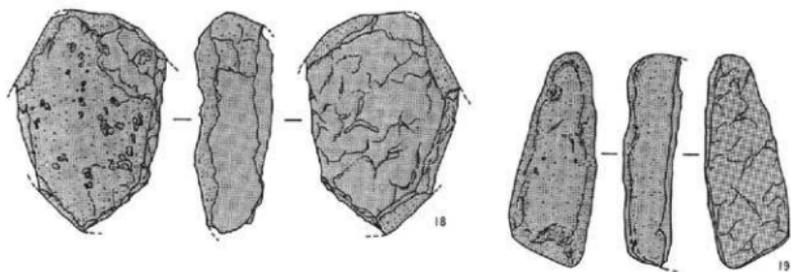
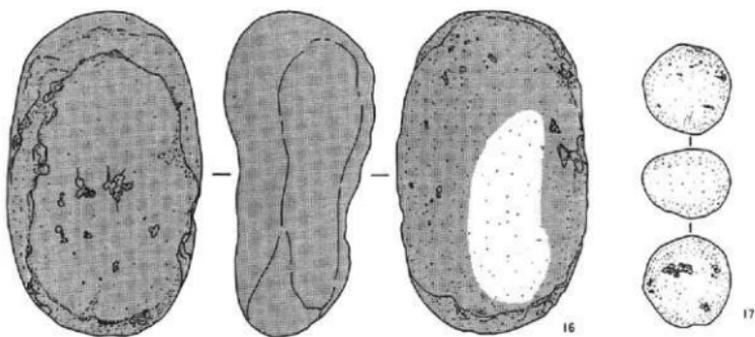
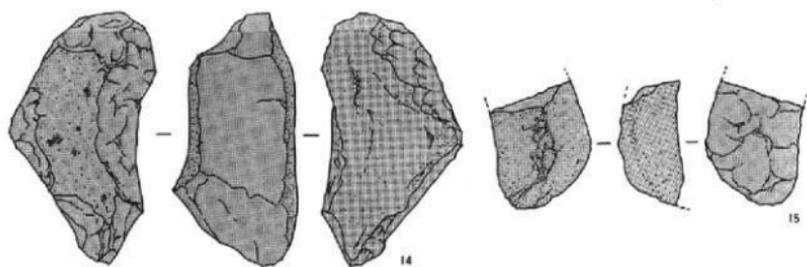
0 10cm  
(1:4)

第74圖 遺物実測図(1) 石製品



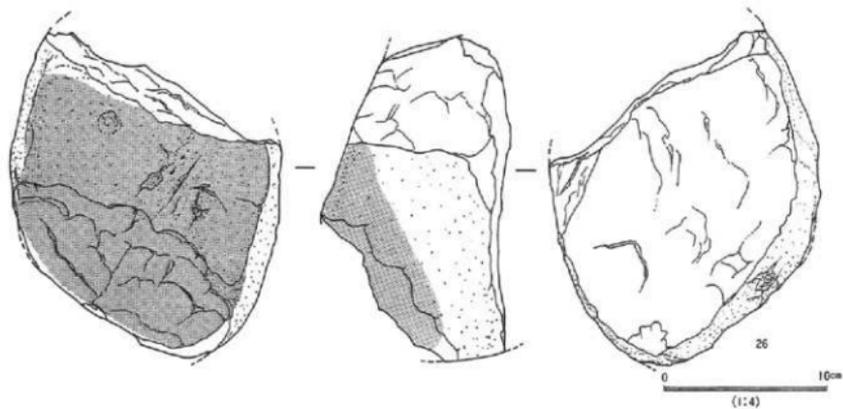
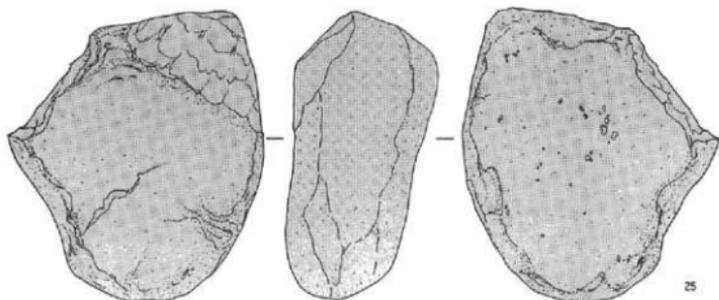
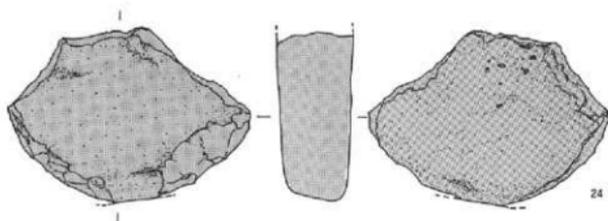
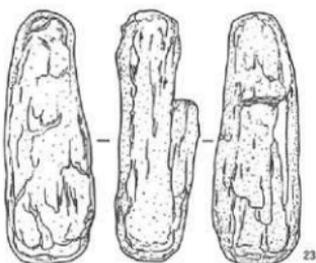
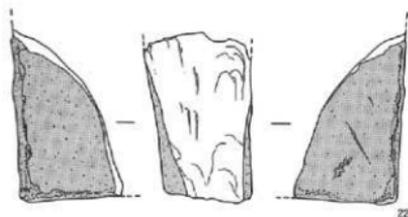
0 10cm  
(1:4)

第75図 遺物実測図(18) 石製品・種 1  
(スクリーン-tonは、煤付箇所)



0 10cm  
(1:4)

第76図 遺物実測図(IV) 塚 2



第77圖 遺物実測図(20 碟 3)

## (5) 古 銭

## 出土位置と状況

梵天塚遺跡からは、溝跡（SD160）からの一括埋納銭と土壌（SK124・SK261・SK368・SK370・SD63・SD159・SD160）から古銭が出土した。いずれも中世の古銭で中国からの渡来銭である。中でもSD160からは1,757枚もの古銭が埋納当時の状況がわかるように出土した。小刀状鉄延も共伴し、庄内地方では初めての発掘資料として貴重な資料である。

埋納銭は調査区西側SD160内（第78図）から出土した。溝跡確認面から約40cm下、ほぼ溝の底に位置する。標高にして2.7mになる。溝跡堆積土F3層の粘質シルト層から発見されたが、土色などによる埋納施設（穴）は確認できなかった。若干埋納銭周辺が窪んでいる様子が見られたが、古銭の重みでできたことも考えられ結論づけられない。埋納銭は、長さ28cm、幅15.5cm、厚さ7cmを測る。全体は「さし」状に丁寧に埋められており、木箱か袋等に入れられていたものと推測する。また、古銭脇には小刀状鉄延8本が添えられている。埋納銭の下は草状の植物繊維が押し潰された状況が見られた。銭貨自体の腐食は少なく銭名が容易に判読できるものが多かった。

## 分 類

本遺跡出土の銭貨はすべて銅銭で、表-15に示すとおり55種、総数1,778枚を数える。この分類は銭名による分類で、書体及び後鑄・私鑄などの分類を行えば、さらに種類は多くなる。銭名不詳としたものは銭面が摩滅しているために銭名が判読できないものである。

銭貨の比率を鑄造国別に見ると、宋銭がもっとも多く29種1,101枚で全体の62%を占める。次は明銭で3種408枚23%、唐銭3種154枚8.7%、南宋銭14種35枚2%の比率を示している。

銭名別に見た場合、唐の開元通寶7%、北宋の熙寧元寶9.2%、皇宋通寶9.4%、明の洪武通寶9%、永樂通寶13%などの比率が高い。

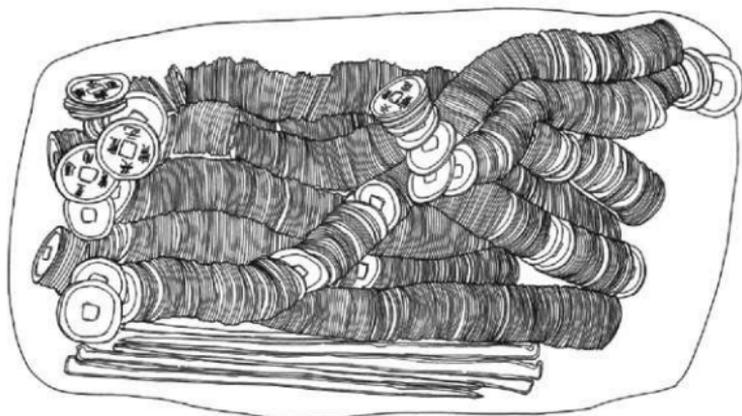
「さし」状態は長短があり、11連の「さし」を確認したが、掘りおこしの際、崩れたものがあり、絶対数ではない。「さし」状態で発見された枚数は1,537枚で総数の87%である。11連の内、170～200枚の範囲に入るものが6連で、0～150枚の範囲に入るものが5連ある。「一さし」100枚前後が一般的であるが、200枚近い数は、「二さし」状態つまり、200枚で「一さし」の状態であったと考えられる。

各サシの中で使用されている銭種は、限定されておらず混在している。

各銭には型の違うものがあり、背面に字や記号が記されているものもある。例えば「開元通寶」3はタイプ確認した。銭の大きさ字形の違いが見られる。洪武通寶は、背面に「一銭」「浙」の銘や記号が見られる。「皇宋通寶」は5タイプ確認している。字形の変化が多い。

## 時期と性格

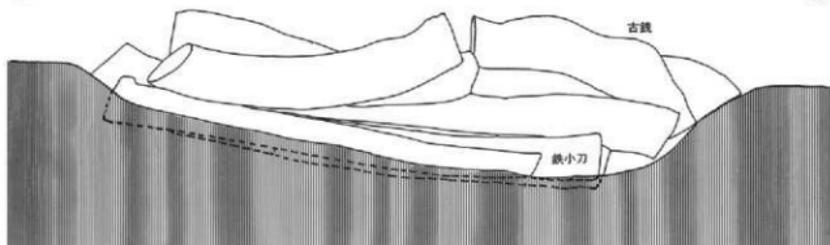
現在、埋蔵銭は8期にわたる時期区分が進められている（鈴木公雄1993）。全国的に第6期（15世紀～16世紀）に相当する埋納遺構が4割を数える。梵天塚遺跡例では、新しい銭



小刀狀鐵扁群

2.6m —

— 2.6m

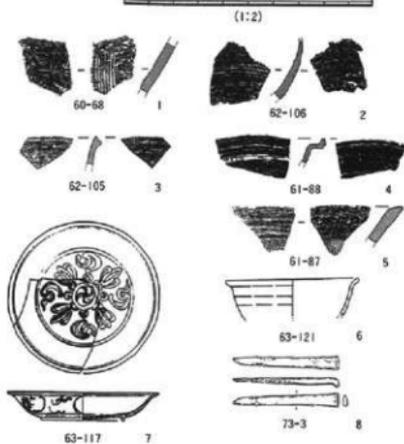


埋納銭 平面・側面図

0 100m



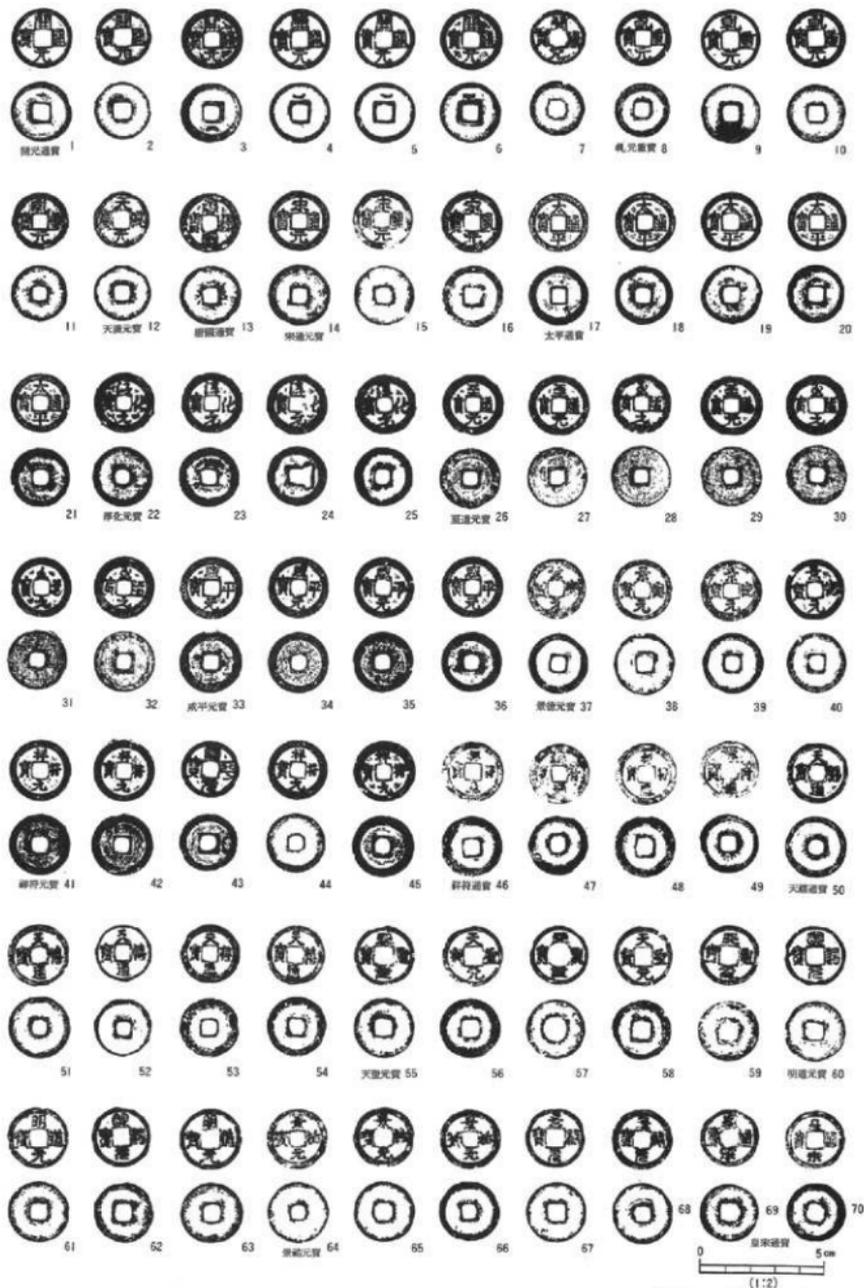
埋納銭出土位置



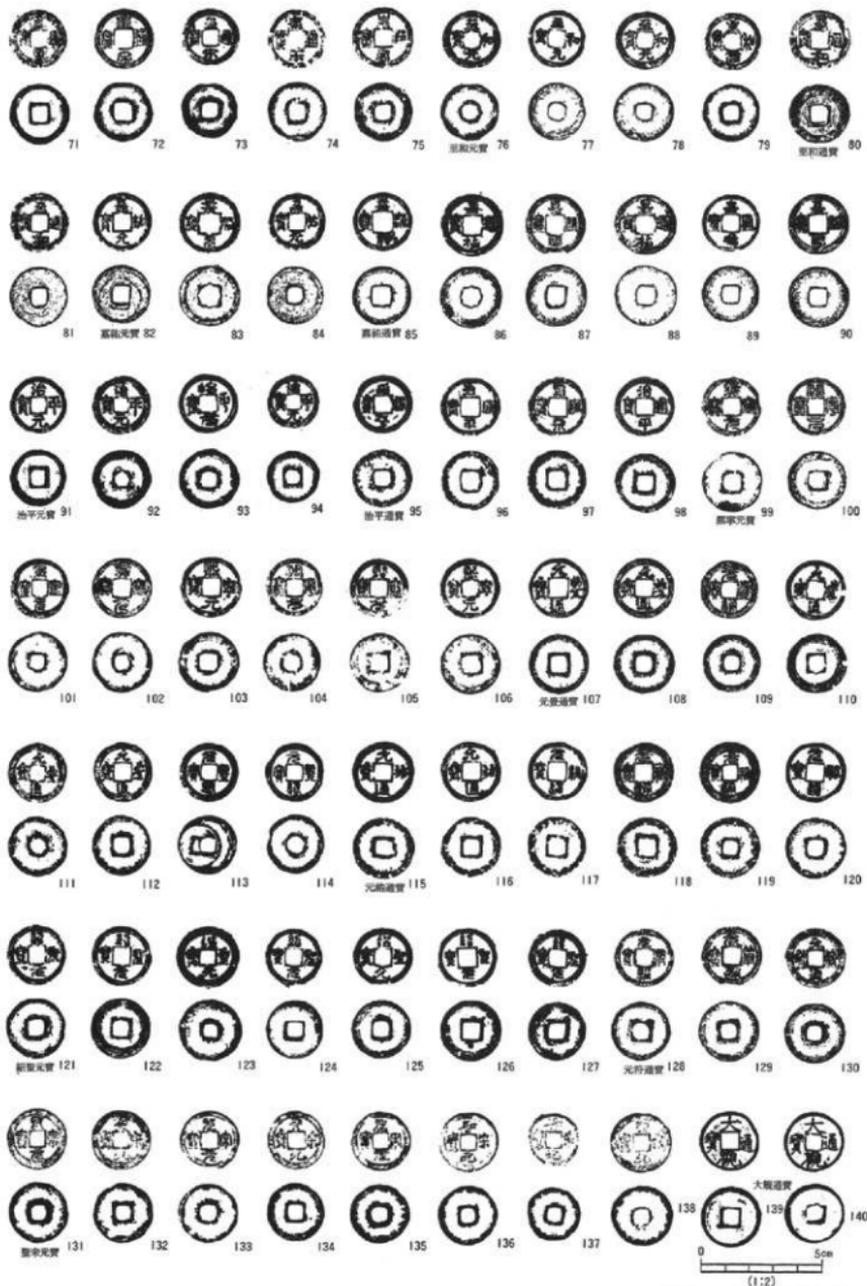
清跡 (SD160) 内出土遺物

第78圖 埋納銭出土狀況圖

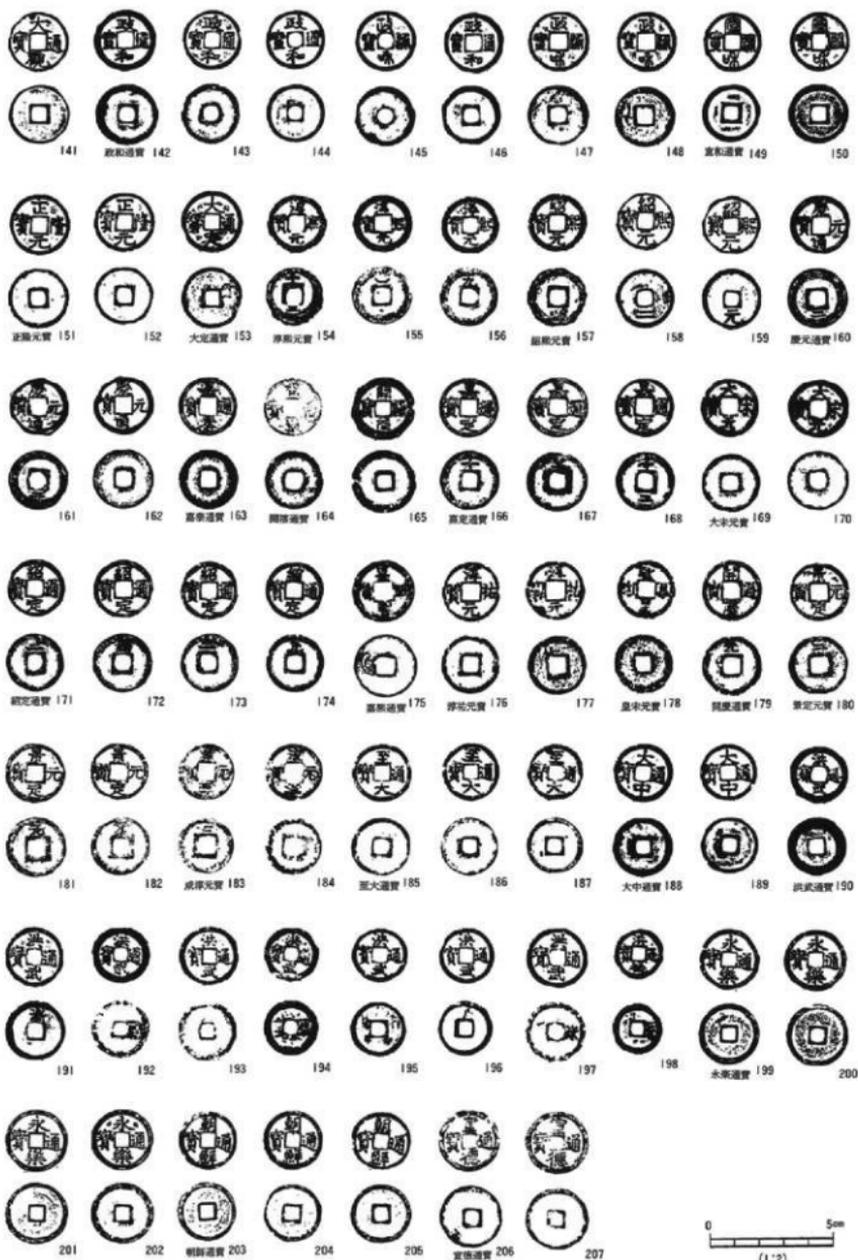




第80圖 埋納錢拓影圖 1



第81圖 埋納錢拓影圖 2



第82圖 埋納銭拓影図





表-16 梵天塚遺跡遺物観察表 土器(1)

採 掘 回	遺物 番号	種 別	器 種	計 測 値			底部切離	調 整 技 法		出土地点	備 考	
				口径	底径	器高		器厚	外 面			内 面
第57回	1	縄文-弥生土層	壺				7	縄文	ナデ	SD160	同一個体	
	2	〃	〃				7	ナデ	〃	SD160		
	3	〃	〃				7	〃	〃	SD160		
	4	〃	〃				6	縄文	〃	SD160		
	5	〃	〃				7	〃	〃	SD160		
	6	須恵層	壺				6	ロクロ	ロクロ	SK1 R P23		
	7	〃	高台付皿	135	65	29	4				SD160	
	8	〃	坏	124	55	34	4	糸切り	〃	〃	SK176	
	9	〃	壺		59		7	〃	〃	〃	SD160	
	10	〃	坏		47		5	〃	〃	〃	SD252	
	11	〃	〃				6	ヘラ切り	〃	〃	SK314	
	12	〃	〃		70		5	〃	〃	〃	SK132	
	13	〃	〃				6	〃	〃	〃	SD160	
	14	〃	壺				8	タタキ	アテ	〃	SD252	
	15	〃	〃				8	ロクロ	ロクロ	〃	SK328	
	16	〃	〃				9	〃	〃	〃	SK368	
	17	〃	〃				10	〃	〃	〃	SD63	
	18	〃	〃				15	〃	〃	〃	SK136	
	19	〃	〃				10	ヘラ切り	ロクロ ケズリ	〃	SK34 R P12	
	20	〃	壺				12	〃	〃	〃	II層	
	21	〃	〃				13	タタキ	アテ	〃	SK314	
	22	〃	〃				9	〃	〃	〃	SD252 F2	
	23	〃	〃				12	〃	〃	〃	SD160	
	24	〃	〃				10	〃	〃	〃	II層	
	25	〃	〃				5	〃	〃	〃	SD131	
第58回	26	〃	壺		102		6	ヘラ切り	ロクロ ナデ	ロクロ ハケメ	SK163	
	27	〃	〃				7	タタキ	アテ	〃	SK224	
	28	〃	壺				13	〃	〃	〃	II	
	29	〃	〃				7	〃	〃	〃	SD160	
	30	〃	〃				11	〃	〃	〃	II	
	31	〃	〃				14	〃	ロクロ アテ	〃	SK163	
	32	〃	〃				10	〃	アテ	〃	SK302	
	33	〃	〃				14	〃	ロクロ アテ	〃	SK134	
	34	〃	〃				8	〃	アテ	〃	SD160	
	35	〃	〃				10	〃	ロクロ	〃	SK163	
	36	〃	〃				13	〃	アテ	〃	SD160	
	37	〃	〃				9	〃	〃	〃	SD160	
	38	〃	〃				11	〃	〃	〃	II	
	39	〃	〃				9	ロクロ	タタキ	ロクロ	II	
	40	〃	〃				5	タタキ	アテ	〃	II	
	41	〃	〃				14	〃	〃	〃	SD63	
	第59回	42	〃	〃				9	ロクロ	ロクロ	〃	SK40
43		〃	〃				8	〃	〃	〃	SK90	
44		〃	〃				8	タタキ	アテ	〃	SD160	
45		〃	〃				7	〃	〃	〃	SD252	
46		〃	〃				14	〃	〃	〃	SD252	
47		〃	〃				8	〃	〃	〃	SK30	
48		〃	〃				8	〃	〃	〃	SD160	
49		〃	〃				7	〃	〃	〃	SK176	
50		〃	〃				16	〃	アテ	〃	SK111	瓶石転用
51		〃	〃				8	〃	〃	〃	SD160	
52		〃	〃				10	〃	〃	〃	SK163	
53		〃	〃				8	ロクロ	ロクロ	〃	II	
54		あかやき土層	坏	112			3	〃	〃	〃	SE125	
55		〃	〃				7	〃	〃	〃	SK128	
56		須恵層	壺				11	タタキ	アテ	〃	II	
57	〃	〃				6	ロクロ	タタキ	ロクロ アテ	〃	SK132	
58	あかやき土層	壺				6	タタキ	アテ	〃	II		
59	〃	罎				8	ロクロ	ハケメ	ロクロ ハケメ	〃	SE125	表面煤付層
60	〃	壺				6	タタキ	アテ	〃	SE125		
61	〃	〃				10	ロクロ	ロクロ	〃	SK101		
62	〃	〃				8	ケズリ	ロクロ	ハケメ	〃	SE125	
63	〃	〃				8	ロクロ	ハケメ	ロクロ	〃	SK21	
64	〃	〃				7	ロクロ	タタキ	ロクロ アテ	〃	SD160	
65	〃	〃				8	ロクロ	ロクロ	〃	SK347		

表-17 梵天塚遺跡遺物観察表 土器(2)

群 団	遺物 番号	種 別	器 種	計 測 値			底部切離	測 量 技 法		出土地点	備 考	
				口径	底径	器高		器厚	外 面			内 面
第60区	66	あかやき土器	甕				8	タタキ	アテ	S K214		
	67	珠洲系土器	すり鉢	112	69		10	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ 知し目	II	
	68	〃	〃				12	〃	〃	S D160		
	69	〃	〃				13	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	II		
	70	〃	〃				11	ロクロ	ロクロ 知し目	S K111		
	71	〃	甕				9	〃	ロクロ アテ	II		
	72	〃	〃				14	〃	ロクロ 知し目	R P11		
	73	〃	〃		80		17	糸切り	〃	〃	R P58	
	74	〃	〃				14	ヘラ切り	ロクロ ナデ	〃	II	
	75	〃	〃				11	〃	ロクロ	〃	S K109	保付蓋
	76	〃	〃				10	〃	〃	ロクロ	II	
	77	〃	〃				13	〃	〃	〃	II	
	78	〃	〃				15	〃	〃	ロクロ 知し目	II	
第61区	79	〃	〃				18	〃	〃	知し目	II	
	80	〃	〃				10	〃	〃	ロクロ 知し目	S D160	
	81	〃	〃				10	〃	〃	〃	S K22	
	82	〃	〃				13	〃	〃	〃	S K336 R P104	
	83	〃	〃				11	〃	〃	〃	S K64	火はね
	84	〃	〃				10	〃	〃	〃	S K64	火はね
	85	〃	〃				13	〃	〃	〃	II	
	86	〃	〃				12	〃	〃	〃	S D160	口縁内面 磨製段文様
	87	〃	〃				9	〃	〃	〃	II	口縁内面 磨製段文様
	88	〃	甕				6	〃	〃	ロクロ	S D160	
	89	〃	〃				14	タタキ	アテ	〃	II	
	90	〃	〃				9	〃	〃	ロクロ	S K270	
	91	〃	〃				12	タタキ	アテ	〃	S K29	火はね
	92	〃	〃				15	〃	〃	〃	S D63	
	93	〃	〃				16	〃	〃	〃	II	
	94	〃	〃				20	〃	〃	〃	II	
	第62区	95	〃	〃				20	ヘラ切り	〃	〃	S K314
96		〃	〃				10	〃	〃	〃	S K132 R P77	
97		〃	〃				7	〃	〃	〃	S K132	
98		〃	〃				11	〃	〃	〃	S K51	
99		〃	〃				6	〃	〃	〃	S K132	
100		〃	〃				10	ロクロ	ロクロ	〃	S K270	
101		常盤系土器	〃				11	〃	〃	〃	S K109	
102		珠洲系土器	〃				14	タタキ	アテ	〃	II	
103		〃	〃				23	〃	〃	〃	II	
104		〃	〃				13	〃	〃	〃	S K313	
105		〃	〃				8	ロクロ	〃	〃	S D160	
106		〃	〃				7	〃	〃	ロクロ	S D160	
107		〃	〃				6	タタキ	アテ	〃	S K132	
108		〃	〃				8	〃	〃	〃	S K96	
109	〃	〃				7	〃	〃	〃	S K132 R P77		
第63区	110	近世陶器	〃				15	ロクロ	〃	〃	II	
	111	珠洲系土器	〃				16	タタキ	〃	〃	S K109	
	112	近世陶器	〃				7	ロクロ	ロクロ	〃	II	
	113	珠洲系土器	〃				6	タタキ	アテ	〃	R P77	
	114	近世陶器	すり鉢				6	ロクロ	ロクロ 知し目	〃	II	
	115	〃	〃				10	〃	〃	〃	S K382	
	116	〃	〃				7	〃	〃	〃		鍋巻状押し型文
	117	明 染付磁器	高台付皿	126	68	24	3	ロクロ 染付	ロクロ	〃	S D160	牡丹唐草 十字文様
	118	近世磁器	碗				6	〃	〃	〃	II	
	119	青磁	〃	48			5	ロクロ 通弁文	〃	〃	S D160	
120	〃	〃				4	ロクロ	〃	〃	S D327	雷文帯 花縁	
121	〃	碗	164			4	〃	〃	〃	I	口縁外反	
122	近世陶器	碗				4	ロクロ 染付	〃	〃	I		
123	〃	〃				4	〃	〃	ロクロ 青雲唐草文	S D160		
124	〃	〃				3	〃	〃	ロクロ	S E382		
125	〃	〃				5	ロクロ 染付 菊花文	〃	〃	I		
126	〃	〃				3	ロクロ 染付	〃	〃	I		
127	〃	〃				5	ロクロ 染付 蓮華文	〃	〃	S K382		
128	青磁	〃				4	ロクロ 染付 菊花文	〃	〃	S K294		
129	明 染付	〃				3	〃	〃	〃	II	唐草文様	
130	近世陶器	〃				3	ロクロ 染付	〃	〃	II		

表-18 梵天塚遺跡遺物観察表 土器(3)

採 回	遺物 番号	種 別	器 種	計 測 値			底部切痕	調 整 技 法		出 土 地 点	備 考	
				口徑	底徑	器高		器厚	外 面			内 面
第63回	131	近世磁器	碗		42		5	染め付け 青		S K56	底に「上」の文字あり	
	132	〃	〃				4	染め付け 青 蓮華目文		II		
	133	〃	壺				3	染め付け 青 花文		II	伊万風糸織器	
	134	〃	碗				3	染め付け 青	II			
	135	〃	〃		45		5	〃		S D252		
	136	〃	〃		38		3	〃		II		
	137	〃	〃		48		4	染め付け 青	染め付け 青 平行線	S K382		
	138	〃	〃				6	染め付け 赤 雲文		I		
	139	〃	〃		38		6	染め付け 青		S D294		
	140	〃	皿		126		5	染め付け 白	薄緑 草木文	I		
第64回	141	〃	土瓶蓋	12			3	糸切り	染め付け	染め付け 針状文	S D252	
	142	〃	皿				4	〃	〃	染め付け 雲状文	II	
	143	〃	壺				5	染め付け 青	染め付け	I		
	144	〃	〃		100		5	糸切り	染め付け	〃	S D252	
	145	〃	碗				5	染め付け 蓮華目文		S D64		
	146	〃	〃		40		5	染め付け 白色	〃	S D163		
	147	〃	花瓶		40		3	染め付け 青 木目	〃			
	148	〃	碗				4	〃	〃	I		
	149	〃	〃				3	染め付け 白	染め付け 白	I		
	150	青磁	〃		48		3			II		
	151	白磁	皿	100			20		白色	白色	S D252	
	152	近世陶器	鎌倉立て		28	35	3	糸切り	染め付け 茶色	染め付け 茶色	S D252	
	153	ガラス瓶	小壺		20	55	2				I	

表-19 梵天塚遺跡遺物観察表 木製品(1)

採 回	遺物 番号	種 別	計 測 値			破損の 有 無	調整技法 (輪は法量合)	出 土 地 点	備 考
			長	幅	厚さ				
第65回	1	椀				割れ	底径48 厚さ3 表面赤漆 底黒漆	RW109	
	2	〃				〃	厚さ6 外面黒漆 内面赤漆	RW30	
	3	〃				〃	内外面黒漆 底径75	—	
	4	〃				〃	内外面黒漆 底径74 厚さ8	S K163	
	5	皿				〃	口径86 底径66 高さ7 厚さ2	S K56	
	6	椀				割れ	口径144 底径81 高さ15 厚さ2 漆	S K313	
	7	〃				〃	底径56 厚さ9 内外面黒漆		高台穴横
	8	〃			4	〃	厚さ6 内外面黒漆	S K119	
	9	〃				割れ	厚さ3 内面赤漆 外面黒漆	RW14	文様あり
	10	〃	23	54	4	〃	漆	S K335	
	11	〃				割れ	底径76 厚さ5 赤漆	RW61	
	12	〃				〃	底径70 厚さ7	RW74	草木文様あり
	13	〃				〃	底径71 高さ60 口径146 厚さ3	S K58	草木文様あり
	14	動物骨	55	390	3		丸	S K201	
第66回	15	動物 折朽	96	105	5		縄皮5重接合	RW27	
	16	〃	98	98	5		縄皮4重接合	S K30	
	17	〃	90	98	5		縄皮4重接合	S K58	
	18	〃	102	85	3		縄皮5重接合	RW64	
	19	〃	85	96	5		縄皮4重接合	S K58	
	20	〃	104	92	4		縄皮4重接合	S K58	
	21	動物骨	85	257	15	欠損	3ヶ所に接合点あり	S K20	
	22	動物 折朽	130	170	10		縄皮4重接合	S K270	
	23	動物骨	571	42	4	欠損		S K297	
第67回	24	ヘラ	246	83	10		小刀ケズリ 龜	S K163	
	25	〃	259	79	11		小刀ケズリ 龜	S K163	
	26	〃	233	67	10	欠損	小刀手厚ケズリ 龜	S K368	
	27	箸	183	6	5		ケズリ	S K270	
	28	〃	175	5	5	折れ		S K270	
	29	〃	190	5	6			S K270	
	30	杓子	102	72	12		手斧ケズリ	RW63	
	31	丸板	98	91	7		小刀ケズリ 藁多い	RW13	柄杓底板
	32	〃	96	100	6		小刀ケズリ	RW22	柄杓底板
	33	〃	95	90	6			RW76	柄杓底板
	34	〃	90	90	7			S K144	柄杓底板
	35	〃	97	95	10		小刀ケズリ 藁多い	S K215	柄杓底板
	36	〃	95	100	8		鎌状のキズ多い	S K206	柄杓底板
	37	〃	92	91	8			S K327	柄杓底板
	38	〃	90	91	6			RW70	柄杓底板
	39	〃	91	89	8			S K163	柄杓底板

表一 梵天塚遺跡遺物観察表 木製品(2)

押 団	遺物 番号	種 別	計 測 値			破損の 有 無	調整技法 (検は法量令)	出 土 地 点	備 考
			長	幅	厚さ				
第62団	40	丸板	113	112	4		板材接合の木釘穴有り	S K119	板約底板
	41	〃	164	85	9			S K20	曲物底
	42	〃	192	53	12			RW160	曲物底
	43	〃	163	145	8		表面小刀ケズリ	S K270	曲物底
第68団	44	〃	263	250	11		周端に木釘穴有り	S K224	曲物底
	45	〃	185	181	11		曲物特有り 小刀ケズリ	RW95	曲物底
	46	〃	184	89	7		穿孔有り 47と接合する	RW71	曲物底
	47	〃	175	89	10		穿孔有り 46と接合する	RW73	板皮有り 曲物
	48	〃	342	335	18	焼け	両面ケズリ	S K230	曲物底
	49	〃	255	98	8			S K396	曲物底
	50	〃	200	83	10		穿孔有り	S K64	曲物底
第69団	51	〃	294	129	7		周端小刀ケズリ	S K56	曲物底
	52	〃	250	83	8		穿孔有り 9ヶ所	S K270	曲物底
	53	板材丸板	162	126	6		穿孔有り 1ヶ所	S K335	曲物底
	54	板材	119	93	4		線状のキズ有り	S K96	
	55	〃	228	49	4	焼け		RW97	
	56	〃	230	26	17		手弁ケズリ 突起有り	RW96	
	57	〃	261	39	13		木ノ有り 木釘穴有り	RW94	
	58	〃	313	28	8		木釘有り 線状のキズ有り	RW99	穴開き
	59	〃	182	14	7		側面にキザミが入る	S K102	穴開き
	60	斎串	266	24	8		頭部に4ヶ所の狭り部	S K260	
	61	板材	285	45	8		2条の溝有り	S K209	
	62	〃	245	46	8		側面に木釘穴5ヶ所	S K163	
	63	〃	285	75	9		ケズリ	S K201	曲物底?
	64	〃	258	58	8		ケズリ	S K96	
	65	〃	126	28	7	焼け		RW38	
第70団	66	板材	479	63	10	〃		S K230	
	67	〃	390	110	15		ケズリ	S K20	
	68	〃	416	133	11	焼け	キズ多数 穿孔有り 2ヶ所	S K270	
	69	杓子	308	14	5		穿孔有り 4ヶ所	RW98	
	70	丸板	248	48	17	焼け	穿孔 2ヶ所	S K163	
	71	〃	266	37	13		木ノ2ヶ所 木釘穴有り	RW72	
	72	下駄	184	82	29		底 円弧状の歯がつく	RW33	
	73	〃	202	122	26		底平坦	S K206	
	74	〃	185	80	36		底付歯 小刀ケズリ密	RW46	
第71団	75	〃	268	144	31		逆曲下駄	RW62	
	76	〃	211	106	27		〃	S K167	
	77	櫛	41	60	10		目が荒い	S K368	
	78	〃	42	79	8		目が密	S K15	
	79	棒材	91	11	4		小穴有り	S K119	
	80	〃	124	14	11		ケズリ 先端に溝	S K58	
	81	〃	110	28	12		ケズリ 片側面にキザミ	S K206	
	82	〃	118	12	7		ケズリ 先端状	S K163	
	83	斎串	165	22	3		墨痕有り	S K163	
	84	棒材	153	40	25		ケズリ		吊り具?
	85	〃	209	99	83		ケズリ 四角の穴	RW24	
	86	〃	224	30	19	焼け	穿孔 2ヶ所	S K270	
	87	棒材	168	55	25		ケズリ 角穴有り	S K209	
	88	ワラ織み用具	190	38	35		ケズリ 狭り入れ	S K382	
	89	〃	154	51	51		ケズリ 狭り入れ	S K382	

表-21 梵天塚遺跡遺物観察表 金属製品等

押 団	遺物 番号	種別 器種	計 測 値				破損有無	加 工	遺存 状況	出土位置	備 考
			最大長 径	最大幅 径	厚さ	重さ					
第73団	1	鉄製品 小刀	155	24	5		有	基部に穿孔	サビ	S K56 RM43	
	2	〃	171	20	10		〃	〃	サビ多	S D225	
	3	〃	174	22	10		無	刃部の加工有り	〃	S D169 RM6	焼数9本が詰るとままって出土
	4	鉄製品 内釘	89	8	8		〃	穿孔 径6cm	サビ	包含層 II	
	5	土製品 土壺	57	27	22		〃	〃	良	S K308	
	6	銅製品 銅杖	72	64	3		〃	ケズリ 接合している	〃	S K226	銅杖の先端部に相当する
	7	輪	32	32	3		〃	ケズリ	〃		

表-22 梵天塚遺跡遺物観察表 石製品・礫

押 団	遺物 番号	種別 器種	計 測 値				破損有無	加 工	遺存 状況	出土位置	備 考
			最大長 径	最大幅 径	厚さ	重さ					
第74団	1	礫石	69	33	26		有	全体に磨り面	砂岩	S K3F4	線状のキズ
	2	〃	93	23	20		無	〃	〃	包含層 II	線状のキズ
	3	〃	54	17	21		有	全面に磨り面	白色砂岩	包含層 II	線状のキズ
	4	〃	57	54	3		〃	両面に磨り面	粘板岩	S D294	線状のキズ
	5	〃	104	43	4		〃	〃	〃	S D263	線状のキズ
	6	石鉢	286	136	41	190	〃	内外面に磨加工	凝灰岩	S K160	片口部有り
	7	〃		168	49		〃	〃	〃	S K332 R Q49	
	8	〃		162	49		〃	〃	〃	S K336 R Q104	
第75団	9	石臼	250	147	83		〃	驚による糸痕 穿孔	花崗岩	S K310	
	10	加工礫	66	52	37		〃	ケズリ 糸線状のキズ	白色砂岩	S D160	火はね
	11	礫石	95	61	23		〃	磨り面 キズ	〃	S K199 R Q103	キズ
	12	礫	145	140	41		〃	割れ	〃	S K132 R Q78	
	13	焼け礫	167	145	72		〃	〃	花崗岩	S K318 R Q106	全面スス 火はね
第76団	14	〃	156	76	80		〃	〃	凝岩	S K79	全面スス 火はね
	15	〃	78	60	41		〃	〃	安山岩	S K382	全面スス 火はね
	16	〃	202	114	91		無	〃	〃	S K127 R Q79	全面スス 火はね
	17	礫	56	50	43		〃	〃	凝岩	S D160	
	18	焼け礫	137	90	43		有	割れ	花崗岩	S K206	全面スス 火はね
	19	〃	133	50	31		〃	〃	凝岩片岩	S K160	全面スス 火はね
	20	〃	131	104	43		〃	〃	安山岩	S K132	全面スス 火はね
	21	〃	112	78	24		〃	〃	凝岩	S K160	全面スス 火はね
第77団	22	〃	107	62	68		〃	〃	〃	包含層 II	全面スス 火はね
	23	礫	156	47	47		無	〃	〃	S D63	
	24	焼け礫	148	108	46		有	割れ	花崗岩	S K370 R Q101	全面スス 火はね
	25	〃	178	160	90		〃	〃	安山岩	S K39 R Q90	全面スス 火はね
	26	〃	198	174	110		〃	〃	〃	S K335 R Q90	片割スス 火はね

## 5 ま と め

### (1) 土壌について

土壌199基についてその特徴や遺物等を分析し、土壌群のあり方について若干の検討を加える。

#### 分 布

土壌は総数199基あり、大半はある程度のまとまりをもって存在しているが、単独で2～3基で存在するものもあり、特異性を表している。また、溝跡(SD160)の西側と東側に分布が見られ、溝(SD160)は区画の役割を意識させる。土壌はさらに東西に広がる様子を見せており、東西に延びる微高地に土壌が運地されていると推測される。土壌は視覚的に5ブロックに分けられる。それぞれ西側からAブロック～Eブロックと設定した(第83図)

Aブロックの土壌群は、計11基あり、溝跡(SD160)の西側に位置する。径15m程の広がりを持ち、西側に広がる傾向が見られる。

Bブロックの土壌群は、計25基あり、調査区のほぼ中央に位置する。径13m程の広がりをもつ。

Cブロックの土壌群は、計47基あり、調査区の北東コーナーに位置する。散漫ながら径20m程の広がりを持ち、北東方向にさらに広がる。

Dブロックの土壌群は、計23基あり、調査区東の溝跡(SD654)に近接して位置する。径15m程で密集している。

Eブロックの土壌群は、計56基あり、調査区の南東コーナーに位置する。ブロックの1/4程の検出で、南方にさらに広がると予想される。

これらのブロックには、さらに密な部分と散漫な部分が見られる。また、溝跡(SD160・SD64)はこれらの土壌群を区画する役割をもつものと考えられる。

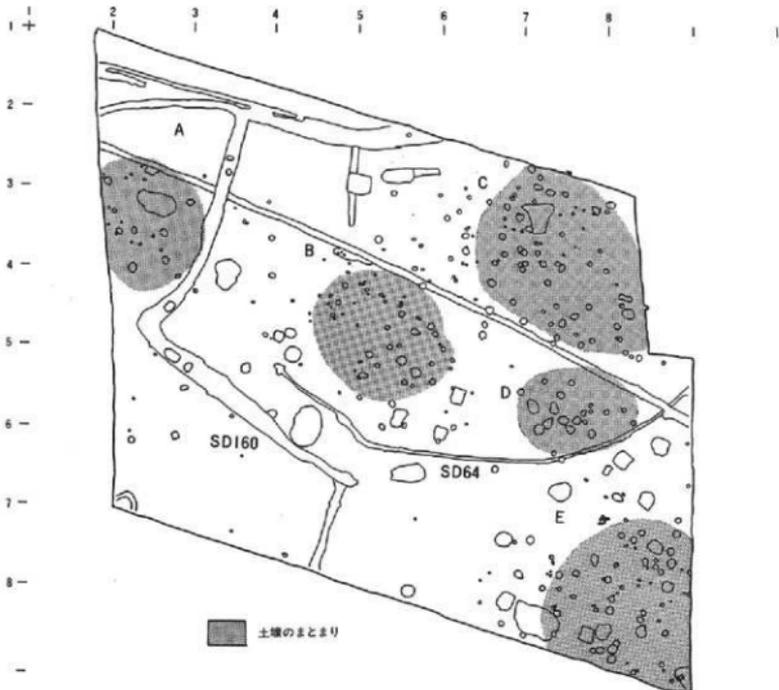
#### 形 状

梵天塚遺跡で検出した土壌群の形状についてまとめる。

平面(第84図): 検出面での平面形は、円形・楕円形・方形・隅丸方形・長方形に分けられた。全体の割合から見ると円形63.8%・楕円形18.0%・方形6.2%・隅丸方形3.4%・長方形4.1%に大別される。規模的には第86図に長軸と短軸の関係を示してあるが、長軸では80前後と150前後に集中が見られる。さらに、規模の大小のばらつきがみられ、長軸最大は400cmのものから最小30cmのものまで見られる。

断面: 断面形は、半円形・方形・フラスコ形・2段掘り込み形・斜形の5分した。さらに半円形と方形は深さにより2分し、総7類型に分類した。割合をみると、半円形24.9%・方形61.1%・フラスコ形8.3%・2段掘り込み形2.7%・斜形2.0%となる。大半は直に掘り込んでいる。

レベル: 土壌の深さについては第85図に示した。ブロックで検出面レベルが10cm前後で違うものの、土壌の深さは70～100cmと15～25cmの2つの集中が着取できる。100cmを越える土



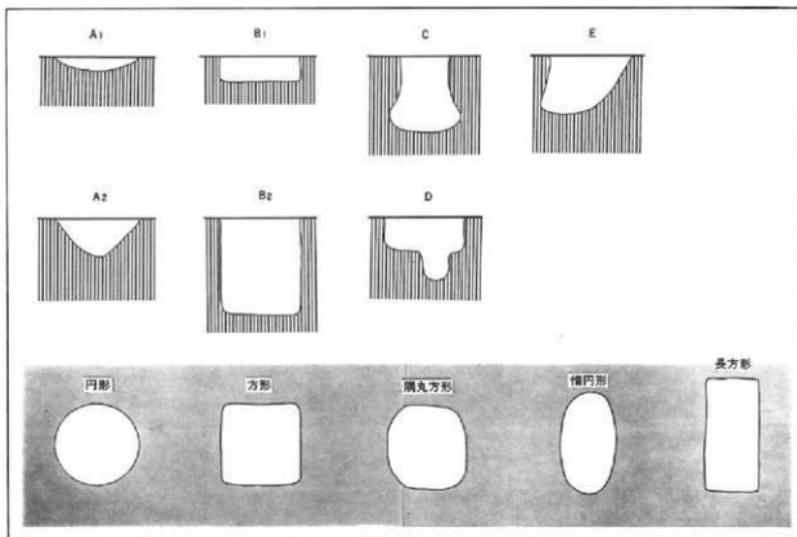
第83図 土塊群ブロック位置図

塊はほぼ垂直に掘り込まれたものが大半である。

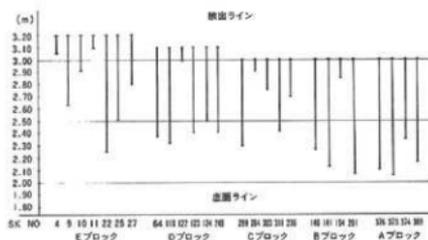
形状全体をみるに、ブロック間の相違やへだたりはなく、各ブロックに分布が見られる。

#### 出土遺物

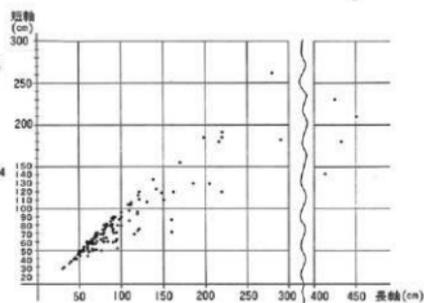
土塊内出土の遺物は、表11～13に示した。土塊からは、木製品が多数出土している。また、煤の付着した焼罽や青磁など陶磁器片も出土した。木製品では、曲物や下駄・櫛など、金属製品では、刀子などが注目される。地下水の水位が高いため、木製品の保存状態が良い。平安時代の須恵器片やあかやき土器片もあるが、小片で摩滅が見られ、大半は流れ込みと思われる。



第84図 土壌分類図



第85図 土壌レベル関係図



第86図 土壌規模分布図

## 土壌内の堆積土壌

大半の土壌は、青灰色シルト層（一部赤褐色砂層）に掘り込まれ、覆土は黒色粘質シルト層を呈している。深さが標高2.4m付近までである土壌は、地下水の冠水で泥炭質になっている。また、炭や植物繊維の腐食したものを含む土壌が多く見られる。堆積状況の観察から、短期かつ人為的に埋められたと考えられる。

#### 土壌リン・カルシウム分析

4ヶ所の土壌（SK196・SK241・SK281）から骨片が出土したため、墓塚か否かを判断するために調査区内40ヶ所の土壌内土壌を採取し、リン・カルシウム分析を実施した。分析の結果、ほとんどの土壌から高い率のリンとカルシウムを検出し、墓塚の可能性が高まった。（付編参照）

#### 土壌の性格

径30cm～100cmの範囲の土壌群は、土壌分析からも、その多くが「墓」と考えられるもので、骨片が出土した土壌が存在することからも蓋然性が高いと言える。一方、一辺が2mを越す大形の土壌は、散在する分布を見せ、比較的木製品などの遺物も多い。SK370からは古銭が18枚も出土し、特殊な性格の土壌と考えられる。同様な大形土壌は、高阿弥陀遺跡や手蔵田10・11遺跡でも土壌群に付随する状況で発見されている。

#### 土壌の類例と年代

酒田周辺では、ほ場整備に係る発掘調査で、墓塚と思われる遺構がいくつか検出されている。八幡町樋掛遺跡(1980)では、7基の墓塚が検出された。一辺が80cmの方形のものと同径約90cmの円形のものがある。ここでは、土葬と思われる墓塚から中世の古銭が出土した。古銭には「永楽通寶」があることから15世紀以降の墓塚と考えられる。また酒田市手蔵田10・11遺跡(名和達郎1988)では、円形と方形(A～D類)の墓塚が検出された。径20mほどの区域に70基もの土壌が密集してみられた。加熱を受けた骨片が出土し、一部火葬墓と推測される。この土壌群からは漆椀・下駄・曲物・古銭・中世陶磁器が出土した。寺院伝承も残されており、14世紀以降の時期が考えられる。同じく酒田市高阿弥陀遺跡(長橋至1985)では、墓塚と思われる土壌群のまとまりが発見されている。高阿弥陀遺跡では、30ヶ所ほどの土壌が検出された。ここでは梵天塚遺跡同様、漆椀・節・曲物などが出土した。特殊なものに「かんざし」がみられる。この土壌群は「墓塚」とみられ、出土した中世陶磁器から13世紀以降の時期が想定されている。庄内地方では、おそらく中世的な集落を形成する13世紀以降、念仏聖らの活動により、村毎に葬送儀礼が確立し、村持らの墓塚が作られるようになっていったものと考えられる。墓を設けることは、古くから旧石器時代から始まるが、集落が「墓」としての空間を意識し始めるのは、中世以降で、亡骸に関心が集まり、極楽浄土に対する希求と念仏聖らによる葬送儀礼の普及と関与が大きな影響をもたらしてからである。中世村落にて村持の埋葬地は、村はずれ北西方向が好まれた。村境が宗教的結界で、あの世とこの世の境目という意識が働いていたためである。また、北西方向は魂の去来する方向でもある。「梵天」という地名にそのなごりが伺えよう。

#### (2) 埋納銭について

庄内地方からはこれまでに34ヶ所の埋納銭が発見されている。庄内各地で発見された古銭と比較するとともに、埋納銭の性格について考えてみたい。

庄内地方での埋納銭発見の初見は天文15年（1546）、『留守殿』跡から銭甕に入って百貫の古銭が出土したという記録がある（1955 鶴岡市「庄内史年表」）。明治に入り、明治24

Ⅳ 梵天塚遺跡

表一23 庄内地方古銭出土一覧(1977佐藤禎宏に追加)

番号	出土地名	出土地	出土古銭の銭化名期							容 器	備 考 文献 その他	
			随前	唐	五代	北宋	南宋	元	明			江戸
1	野沢	飽海郡遊佐町野沢下くね跡44	●	●	●	●	●	●			木箱	百貫文出土
2	水上	飽海郡遊佐町野沢水上				●						
3	宮山塚	飽海郡遊佐町宮山塚(池のそば)										両手いっぱい
4	新田目	酒田市本郷新田目									壺	百貫出土
5	城輪遺跡	酒田市城輪				●			●			
6	堂の横遺跡	飽海郡八幡町法蓮寺 堂の前				●			●	●		
7	上安田	酒田市上安田										
8	藤曾根	酒田市藤曾根										
9	萩島	酒田市藤曾根										3~4貫出土
10	手蔵田	酒田市手蔵田村建40 1	●	●	●	●	●					曲物
11	生石	酒田市生石									棺	2百貫出土 2貫出土
12	勝保	酒田市勝保 前										3貫出土
13	山楯	飽海郡平田町山楯							●		壺	数十貫出土
14	山谷	飽海郡平田町山谷三ヶ沢14							●			
15	樽橋	飽海郡平田町樽橋										杉皮粘土 90貫出土
16	新山	飽海郡平田町樽橋 新山										
17	横川B遺跡	東田川郡三川町横川大下52 2				●						
18	千本杉	東田川郡立川町千本杉下川端	●			●	●					
19	古榎遺跡	東田川郡立川町古榎							●	●		
20	平形遺跡	東田川郡藤島町藤島		●		●	●		●			
21	藤島	東田川郡藤島町藤島		●		●						
22	浜津	東田川郡立川町三ヶ沢	●	●		●	●				壺	
23	小瀬京田	鶴岡市本田小瀬京田	●			●	●		●			曲物
24	布目	鶴岡市布目 三軒在家	●			●	●		●			
25	羽黒山山頂経塚	東田川郡羽黒町手向				●			●			経塚遺物の外
26	西山	東田川郡立川町 科沢 西山				●				●		
27	由良	鶴岡市由良							●			五輪塔に伴出
28	水沢経塚	鶴岡市水沢 経ヶ沢地蔵堂山	●									
29	七日台墳墓	鶴岡市田川七日台										10号墳
30	藤田川経塚	鶴岡市湯田川岩清水		●								
31	東荒屋	東田川郡柳引町東荒屋西田中72	●	●	●	●	●	●			壺	
32	小国墳墓	西田川郡湯野町小国町尻	●			●			●			
33	法木	酒田市飛島法木	●			●	●					
34	梵天塚遺跡	酒田市牧曾根梵天塚	●			●	●	●	●			

年に松森保が古銭出土地5ヶ所を研究誌「弄石余談」に紹介した。戦後、昭和26年(1951)には佐藤東一は庄内地方の古銭出土地と出土品を紹介した(佐藤東一1951「庄内の文化遺産」)。その後、考古学的な調査が意識されると少数の古銭についても注目され始めた。昭和27年鶴岡市布目での埋納銭発見、昭和32年酒田市手蔵田で埋納銭の発見、昭和43年柳引町東荒屋でのほ場整備時の埋納銭発見出土例の増加と骨董品から文化財としての扱われるようになってきた。昭和50年代以降、ほ場整備に係る発掘調査が進むにつれて、遺跡内出土の資料が集積されてくる。以上のような経緯を経て佐藤禎宏氏は庄内地方で発見された古銭を集成し、銭種・容器等の分析から庄内地方での埋納銭の時期や流通について考察を加えられた(佐藤禎宏1977)。銭貨研究史上の高い評価が与えられよう。

庄内地方での大量の埋納銭出土例は20ヶ所を数える(表-23)。これら出土地の分布状況は平野部に集中し、現在の集落とは離れた水田地帯からの出土がほとんどである。佐藤禎宏氏は、城館跡が近くに所在している場合が多いことから、在地領主と関わりを持つ富農階級の介在を示唆している。

埋納銭は容器に入れられて埋められたものが多く、容器は土器・木製品の場合がある。東荒屋では珠洲系壺に、新田目では壺に、手蔵田と布目では曲物に、藤島ではクリ物に入れられていた。特殊なものに平田町檜橋の場合がある。檜橋では穴を掘り、その中に杉皮を敷き、古銭を置いて、それに粘土をかぶせて密閉している。これは厳密に容器とは言えないが特殊な埋納方法である。

各地の埋納銭の種類別組成を見ると(佐藤禎宏1977、第2表)、藤島と布目からは梵天塚遺跡と同様に最新銭「宣徳通寶」の出土と「永楽通寶」の割合が高い。古い古銭は「開元通寶」からで、いずれも16世紀以降の埋納を設定できよう。一方、小瀬京田では最新銭が開禧通寶(南宋1205初鋳)で第1期(鈴木公雄1993)に相当する。

古銭の地下への埋納は、当時の社会情勢を反映した共通した行為である。現在まで掘り出されることがなかったということは、埋納したがその後掘り起こさなかったということである。当時一般に古銭の備蓄法として普及していたとすれば、相当量の銭が保管方法として埋められたと考えられる。

16世紀から17世紀には庄内飽海地区は、国人領主の対立する混乱期に入る。武藤氏と砂越氏の対立をはじめ、武藤・土佐林氏の対立を経て、天正期に入ると武藤義氏は上杉に従い、庄内三郡を支配した。天正9年以降は、最上と上杉両雄の争いの場となっている。天正18年には、武藤氏は滅び、最上義光の支配する所となったが、天正19年(1589)には、上杉方の本庄繁長によって代わられた(十五里ヶ原の戦い)。関ヶ原の戦い後、庄内は、また最上の支配下に入る。15~16世紀の古銭埋納は、このような社会情勢の不安定さが基盤にあったのであろう。

## (3) 木製品について

梵天塚遺跡では、下駄・櫛・漆椀といった木製品が目される。下駄は時期や機能により形態が変化する。第70図74のような断面台形で小刀ケズリ痕の差し歯下駄と方形幅広で大型の蓮歯型下駄は、手蔵田10・11遺跡で2点出土している。ただ手蔵田10・11の資料は歯高が10cmほどあり、若干相違する。庄内地方では、水稲用具として「やちかり下駄」という大型の下駄が用いられており、大型の下駄は同様な使用法が考えられる。

漆椀は、破片資料も含めて11点出土している。台の低いものと高いものが見られ、朱漆のもの黒漆のものがあり、さらに模様や文字が描かれたものがある。草花模様の椀は、酒田市手蔵田10・11遺跡（名和達郎1988）・亀ヶ崎城（野尻 侃1993）や藤島町藤島城（伊藤邦弘1992）などで類例が報告されている。

## (4) 錫杖について

土墳（SK196）出土の錫杖は、真柱部分が極端に短く、特殊な形態を見せる。一般に錫杖は、地藏菩薩の右手に持つことで知られ、杖状になることが多い。また修験道にかかわる仏具として峰入りや加持折箭に使われた。庄内地方は、古来から出羽三山信仰の旦那場が広がっており、里修験として各集落に羽黒修験の先達が居住しており、彼ら修験者は、村落内の宗教儀式をとり行ったと見られる。各地に見られる神楽舞いや入定伝説は、そのような宗教的職能者が存在したことを物語る。庄内では、松山町山寺法海坊遺跡（伝・法海坊入定地）で錫杖が出土している（1979 庄内教育事務所埋蔵文化財年報79）。近世（天和2年）の入定地伝承地の調査で、墓塚と思われる土壇から青銅製の錫杖が出土した。錫杖は柄部はなく、頭部は断面偏平で、大銀は仰月形のもので上下左右についている。真柱部は柄が差し込まれるため中空になっている。また、同心円状の模様が彫られている。出羽三山宝物館でも同様な錫杖が展示されており、近世中期以降のものと同推測する。梵天塚遺跡出土錫杖は、真柱部が短く、装飾が少ないなど粗略な感じを受ける。類例は無く、具体的な使用法や時期等は不明である。

## (5) 庄内地方における葬送民俗について

庄内地方における葬送儀礼に関する民俗例には、戸川安章氏の研究がある（戸川安章1978『日本の民俗「山形」等』）。また、市町村史の民俗調査などで紹介されているものがある。梵天塚遺跡の墓塚や「梵天塚」の地名などを考える上からも、近世以降の葬送の様子について触れておきたい。

近親者が亡くなり臨終を迎えると、大まかにツグト（親族・村民・寺に知らせる。）⇒枕経・マクラナオシ⇒湯灌⇒着衣・入棺⇒（念仏講など）⇒葬列⇒僧による引導⇒火葬・土葬⇒七日法事の順で葬儀が進む。

入棺では死者にはさらしの白衣を左前に着せる。草履をはかせ、手には六文銭や血脈を納めたズブクロをかけ、手首に数珠をかけて合掌させる。魔除けの小刀など刃物と死者の思いのかかったものを入れる。梵天塚遺跡では、櫛・下駄・錫杖などが該当しそうである。

葬列は、近親者や火葬場や墓地へは、あしなか(足半)を履いて行き、帰りは往還で脱ぎ捨て裸足で戻る。よって墓地周辺には履物が残されることがある。また、明治時代の末までは結核や癩病など伝染病以外は土葬にしており、火葬でも火葬場が完備していない所は、野に藁やまきを積んで焼いたという。火葬後のコツアグが終ると家に帰り僧の供養を受けてから墓地に埋めている。土葬の場合は、埋葬した晩から初七日の夜まで毎晩、墓地で藁を一束焼く。土饅頭の上には弓のように曲げた2本の生柴を交差して差し込み、その真ん中に小石をつるす。これをイヌハジキといい、小石が地面に落ちると新霊は成仏し、「仏」になるという。梵天塚遺跡の土壌内から出土した焼け礫や礫は、これらの作法を示すものであろうか。

その後、三十五日、百か日、一年、三年、七年、十三年、三十三年に法事をする。三十三年目には、トムライアグといって、川原から拾ってきた石を洗い、僧から戒名を書いてもらって墓に建てる。川原で石を拾うときには、目をつむって手を伸ばし、その時に触った石を持ち帰って、トムライアグの石にするという。

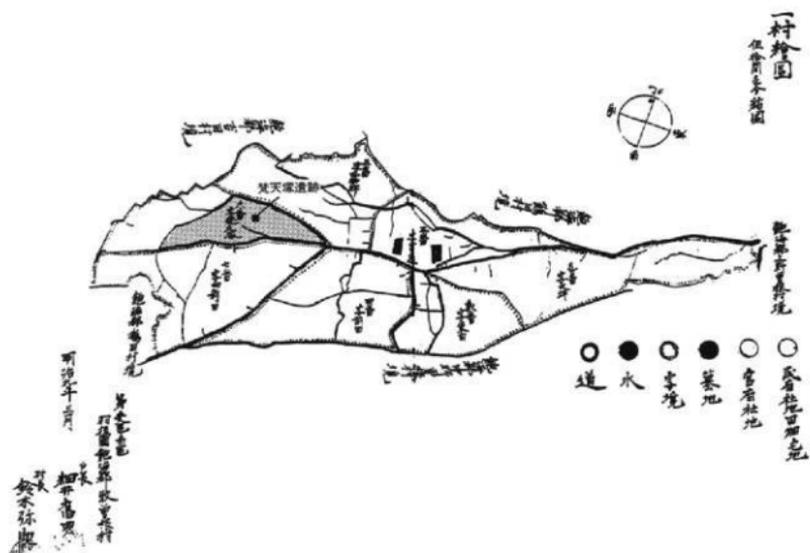
以上の葬送儀礼は、近世以降の檀家制度が整備されてからのことと考えられる。しかし、一部戦国期においても共通する過程を保持していたのではないだろうか。

#### (6) 梵天塚遺跡の性格

梵天塚遺跡のある牧曾根集落は、昭和14年発刊の「村勢一覽」に記載されている沿革誌には「永正ノ頃土師門天皇ノ木齋永井僧遺守金国・鶴田樞主クリシガ、天正年中永井家没落、ソノ家臣ノ残レルモノ此ノ地に永住ノ地ト定メ拓ク。」と記され、同様な由来は牧曾根集落に鎮座する八幡神社縁起にも見られる。これらが事実とすれば、牧曾根の開村は天正年間、およそ1570年頃と推定される。

第87図は明治9年3月作成の「一村絵図」である。これを見ると、6番字梵天塚の地名が見られる。3番字之越は八幡神社の場所であり、その周辺に屋敷が連なっていた。東田・前田・西新田は集落屋敷を基天とした呼称で梵天塚は集落の西端に位置する。明治時代には村の墓地は八幡神社の西側に見られる。現在は北方の水田地の中に整備された。しかし、この時点で梵天塚には、塚や墓碑があったらしく、古老の伝承に知ることができる。字「梵天塚」付近は、よく水があがったとの古記録もあり、墓地移転は、洪水に起因していることも考えられる。

地名「梵天」は魂成仏の意味があり、葬送儀礼との関わりがあることは確かであり、おそらく中世後期16世紀頃の村の墓地跡と考えたい。牧曾根では、近世中期以降、「松影庵」という村持ちの仏堂が建てられ、「講」を主体とする共同組織が葬送儀礼に関与していくものと見られる。牧曾根での墓碑の建立は近世後期になってからである。同様な状況は酒田近郊の集落各地でも辿ったことであろう。



第87圖 明治4年 牧曾根村字切り圖

## V 中谷地遺跡

### 1 調査の概要

#### (1) 調査方法

中谷地跡は酒田市大字吉田新田字中谷地に所在する。遺跡面積は東西に8,000㎡を越すとと思われる広がりを持ち、現在、高速道路用地と水田地帯となっている。平成5年度に遺跡の範囲や保存状態を調査し、高速自動車道が建設され破壊されることになる道路部分の約3,500㎡について発掘調査を実施する運びとなった。調査にあたって高速道路用地の幅杭を南北の基準線E-12-Sとした。この基準線に任意に中心を設定し、直交するように東西の基準線N-2-Eを設定した。2本の軸線から遺跡全体がかかるように10mメッシュのグリッドを組み、測量基準線を交点からの東西・南北方向の距離数で表すことにした。グリッド名はアラビア数字の組合せで呼ぶことにした(第88図)。ベンチマークは西方の県道沿いにある三角点から移動して設定した。ベンチマーク標高は3.50mで、これをレベル原点とした。発掘調査は重機によるI層・II層・III層の表土・耕作土層除去から始め、並行して包含層・遺構面の確認を行った。IV層上面での遺構検出に努めたが遺物は出土するものの遺構検出が困難であるためV層上面(青灰色シルト層、一部茶褐色シルト層)で遺構確認することにした。検出した遺構は通し番号を付し、1/10・1/20・1/100で記録し、合わせて写真記録を行った。最終的に航空測量によって位置と標高レベルを記録した。

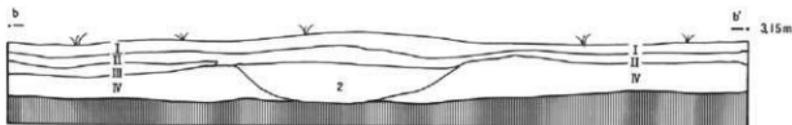
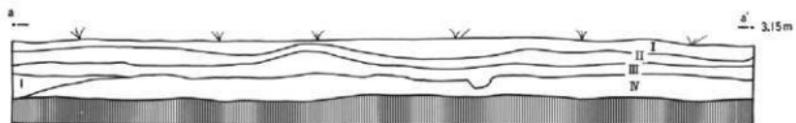
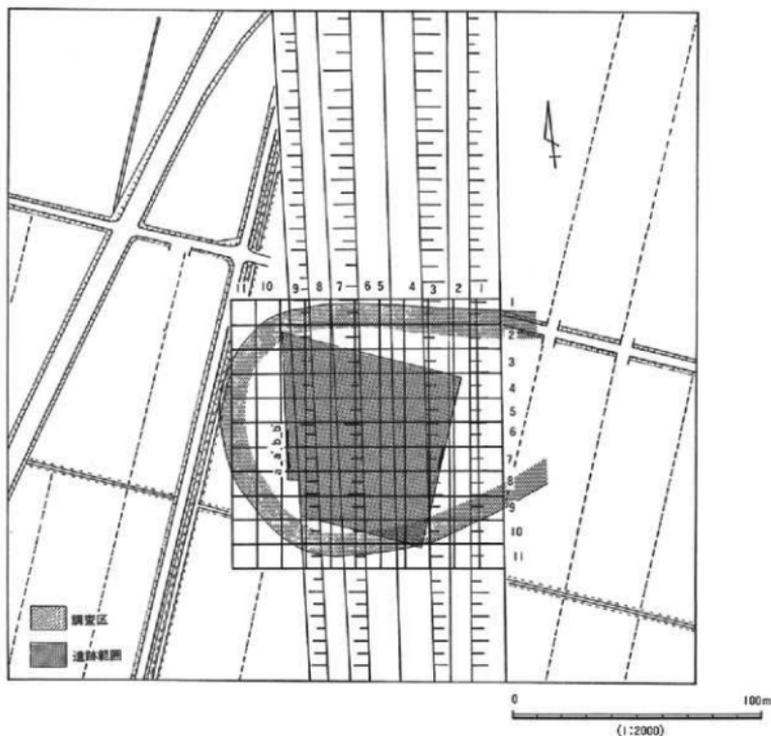
出土遺物は表土除去時は包含層区分(I、II、III、IV)で取り上げ、遺構検出中はグリッド毎の取り上げを行い、一括性のある遺物・重要な遺物は分布図に記録することにした。遺構精査での出土遺物はまとまりあるものは実測図を作成し登録番号を付した。その他は遺構内の覆土位置によって取り上げた。調査区に河川跡のような泥炭堆積部分があることが分かり、包含状態や自然環境等を知るためにトレンチによる深掘りを実施し、下層の堆積状況についても調査した。また、弥生時代の土壌が検出された付近(7-5地区)については、IV層下面(10m×10m)を、地表面から約80cmまで掘り下げ、弥生時代の遺構確認を実施した。

#### (2) 層序

調査区は水田地帯の中に位置し、グリッド位置によって若干の堆積土の層が異なった様相を見せた。特に遺跡北側と南側に泥炭層の河川跡があり、東西に長い川道を確認した。調査区西壁面で土層堆積断面図を作成した。基本土層はV層に分けられたが各層の中でも2~3に細分できるものもあった。I層は表土・耕作土の層である。II層も耕作土で腐食した粘質シルト層である。以前のほ場整備時に動いている層である。III層は、腐食した粘質シルト層である、耕転が及んでいないため区別した。IV層はシルト層、V層は砂質シルト層になっている。遺跡中央部の部分は自然堤防の微高地になっている。遺構面は、III層中にあるが検出確認が困難なため、IV層下部~V層上面まで掘り下げている。

中谷地遺跡では多数の土壌や柱跡を検出したが、遺構の最下部は標高約1.81mで、標高約2.25mで地下水が湧水している。

V 中谷地遺跡



- 西壁土層断面
- I 25Y2/1黒褐色 粘質土 耕作土
  - II 25Y2/1黒色 粘質土 炭化物含む 上位に耕作土よぶ
  - III 75Y4/1灰褐色 シルト 25Y2/1黒色 粘質土層じり
  - IV 75Y4/1灰褐色 シルト 炭化物混入
  - V 25Y2/1黒褐色 シルト 炭化物混入
- 1 10Y3/1オリーブ黒色 粘質シルト 炭化物含む
  - 2 10Y2/1黒色 シルト 炭化物含む



第86図 中谷地遺跡調査概要・層序図

## 2 遺跡の概観

吉田新田は万治2年(1659)に南吉田村の伊藤久三郎が開拓した村で、寛文9年の荒瀬郷正徳寺組文書に村の名が見られる(『大泉紀年』)。また、南吉田は慶長20年(1615)の開拓を伝えている。南吉田には、字井口があることから、郷土史家阿部正己は南吉田に国府があったのではないかという説を示された(『八幡町史』)。

中谷地遺跡は吉田新田の北側、幸福川の右岸に位置し、近くを羽越本線が走る。遺跡地の地形は、東側から緩やかに西に傾斜しており、遺構検出面も、ほぼ平坦な地形になっている。調査では弥生時代と奈良・平安時代の遺構・遺物を検出した。主体となるのは奈良・平安時代の建物群である。

### (1) 遺構の分布

調査区内から発見された遺構は、掘立柱建物跡9棟、井戸跡1基・土壇3基、溝跡6条柱跡小穴630ヶ所である。弥生時代の土壇は、調査区東側に位置する。建物跡は、中央の河川跡を挟んで両側にみられ、特に調査区北西側に切り合って分布が認められた。集落の中心を流れる小河川跡は、Ⅳ層中にて確認することができた。遺構の分布する一帯は自然堤防上の微高地になっている。また、建物跡や土壇を切って、多数の畝状溝跡が検出された。長さや向きなど一定のまとまりがみられ、幾つかのグループに分けられる。掘立柱建物跡群は、奈良・平安時代に属するもので、周辺に分布する柱穴もこの時期のものと思われる。

### (2) 遺物分布

本遺跡から出土した遺物は、土器類は破片数にして総数約5,800点、木製品は17点、石製品は5点、金属製品は1点である。

土器類は弥生時代の土器と奈良・平安時代の土器・珠洲系陶器・近世陶磁器などに分けられる。弥生時代の土器は2個体の壺と破片資料がある。奈良・平安時代の土器は須恵器・土師器・あかやき土器等である。珠洲系陶器は壺片などである。近世の陶磁器としては、産地不明の碗片が大半である。木製品は、曲物の底板・板材片・柱材などである。石製品では、砥石・石器剥片が見られる。

遺物は第Ⅰ層から出土し始め、Ⅴ層上部にかけて出土する。包含層の中心は、Ⅳ層にある。遺構検出をⅣ～Ⅴ層上面で行なったため、一括性のある遺物以外は、グリッドで取り上げている。遺構内では、小河川跡(SG59)から多数の土器の出土があった。

弥生土器は、平安時代の遺構確認面下25cmからの出土で、現地表面からは約80cmほどある。弥生土器の小片が平安時代の掘立柱建物跡掘形からも出土した。このことはより下層に弥生時代の遺構面が存在する可能性を示唆する。ただ、弥生時代の土壇周囲を10m四方拡張して掘り下げたが、遺構を発見することはできなかった。

## 3 遺 構

検出された主な遺構の調査結果と多少の所見を順次記述する。

図面はⅣ層下部～Ⅴ層上面の検出面によって作成しており、手取り図面のほか航空測量による平面図も利用している。

## (1) 掘立柱建物跡

## 第1号掘立柱建物跡 (S B 1、第90図)

5-9、5-10グリッドに位置し、検出面は、Ⅴ層上面である。この建物は溝跡 (S D 433) を切っている。プランは桁行2間、梁行2間の東西棟建物である。柱穴掘り方は長軸82m、短軸65mの方形を呈している。遺構検出面から底面までの深さは45cm～65cmを測り、底面の標高は2.2～2.4mで一定している。柱底は直径20～25cmのほぼ円形である。掘り方覆土は3層ある。柱底は小炭片まじりの黒色土で、ほぼ掘り方の底面まで達している。柱間隔は柱痕の芯で桁行北から2.7+2.7m、梁行西から2.6+2.7mを測る。建物の面積は30.8㎡となる。桁行、梁行は4～4.5尺と考えられる。遺物は掘り方から須恵器片3点、あかやき土器片18点・土師器片1点が出土している。

## 第2号掘立柱建物跡 (S B 2、第90図)

5-9、5-8グリッドに位置し、検出面は、Ⅴ層上面である。この建物の柱跡 (E B 602) で3号建物跡と切り合う。また、S K 499で4号建物跡と切り合う。プランは桁行3間、梁行2間の東西棟建物である。柱穴掘り方の形は長軸80cm、短軸55cmの円形を呈している。遺構検出面から底面までの深さは40cm～55cmを測り、底面の標高は2.3～2.4mで一定している。柱底は直径20～25cmのほぼ円形である。掘り方覆土は3層ある。柱底は小炭片まじりの黒色土である。掘り方底面にくいこむ。柱間隔は柱痕の芯で桁行2.7m+2.7m+2.7m、梁行3.5m+3.1mを測る。桁行間尺は7尺+7尺+7尺、梁行間尺は11尺+10尺で建物の面積は53.12㎡となる。遺物は、掘り方から須恵器片5点、あかやき土器片30点出た。

## 第3号掘立柱建物跡 (S B 3、第91図)

5-8グリッドに位置し、検出面は、Ⅴ層上面である。この建物は柱跡 (E B 602) で2号建物跡と切り合う。プランは桁行2間、梁行2間の東西棟建物である。柱穴掘り方は、長軸55m、短軸47mの円形を呈している。遺構検出面から底面までの深さは50cm～65cmを測り、底面の標高は2.2～

表-24 中谷地遺跡検出遺構一覧

遺構分類	検出状況	主な遺構	規 模 (m)		遺出 標高 (m)	備 考
			長軸	短軸		
建物跡 (S B)	9 層	S B 1	5.6	5.5	2.3	
		S B 2	8.3	6.4	2.4	
		S B 3	5.6	4.8	2.3	
		S B 4	8.8	5(6.8)	2.2	
		S B 5	7.6	4.8	2.4	
		S B 6	4.8	4.4	2.4	
		S B 7	6.4	4.8	2.4	
		S B 8	6.4	4.8	2.4	
		S B 9	8.8	6.4	2.7	
土塼 (S K)	33 基	S K 18	232	180	22.2	2.02
		S K 76	66	50	20	2.40
		S K 94	106	90	20	2.57
		S K 137	181	100	48	2.18
		S K 154	116	100	18	2.50
		S K 179	182	158	14	2.52
		S K 341	230	141	22	2.56
		S K 382	117	188	50	2.21
		S K 399	312	280	26	2.56
		S K 408	206	180	32	2.49
		S K 452	183	134	33	2.53
		S K 462	98	90	18	2.65
		S K 499	146	118	30	2.40
		S K 513	130	95	19	2.51
		S K 542	142	129	19	2.62
S K 543	205	145	29	2.11		
S K 568	130	106	18	2.57		
S K 627	195	164	53	2.05		
S K 660	129	118	42	2.06		
S K 810	145	138	85	1.56	築造年代は 築 5 世紀	
丹戸跡 (S D)	1 基	S D 465	332	330	181	1.36
		欄 干				
溝跡 (S D)	6 条	S D 2	42		35	2.46
		S D 135	80		20	2.82
		S D 224	75		16	2.66
		S D 433	160		11	2.81
		S D 793	102		22	2.51
鉄線 (S D)	128 条	欄 干				
瓦用跡 (S G)	3 ヲ所	S G 50			482	2.20
		S G 809				
小穴 (S F)	630 ヲ所					



2.3mで一定している。柱痕は直径20~25cmのほぼ円形である。掘り方覆土は3層ある。柱痕は炭混じり土で、ほぼ掘り方の底面まで達している。柱間隔は柱痕の芯で桁行東から2.7+2.7m、梁行北から2.5+2.5mを測る。建物の面積は26.88㎡となる。桁行9尺+9尺、梁行は8尺+8尺と考えられる。遺物は掘り方から須恵器片1点が出土している。

#### 第4号掘立柱建物跡（SB4、第91図）

5-9、6-9グリッドに位置し、検出面は、V層上面である。この建物の柱跡（EB482）で5号建物跡と切り合う。また、平面的に5号建物跡と6号建物跡と重なる。プランは桁行4間、梁行2間の東西棟建物である。一部北側に庇部を持つ。柱穴掘り方の形は長軸72m、短軸50mの円形を呈している。遺構検出面から底面までの深さは64cm~54cmを測り、底面の標高は2.2~2.3mで一定している。柱痕は直径25~30cmのほぼ円形である。掘り方覆土は3層である。柱痕は黒褐色シルトで、掘り方底面にくいこむ。柱間隔は柱痕の芯で桁行1.8m+1.8m+1.8m+3.2m、梁行1.8m+2.7m+2.7mを測る。桁行間尺6尺+6尺+6尺+10尺強、梁行間尺は6尺+9尺+9尺で建物の面積は59.84㎡となる。遺物は、掘り方から須恵器片8点、あかやき土器片14点出土した。

#### 第5号掘立柱建物跡（SB5、第92図）

5-8、6-8グリッドに位置し、検出面は、V層上面である。この建物は柱痕（EB480）で4号建物跡と切り合う。また、西側で溝跡（SD433）と切り合う。プランは桁行4間、梁行2間の東西棟建物である。柱穴掘り方は長軸50m、短軸42mの円形を呈している。遺構検出面から底面までの深さは55cm~42cmを測り、底面の標高は2.3~2.4mで一定している。柱痕は直径18~24cmのほぼ円形である。掘り方覆土は3層ある。柱痕は炭混じり黒褐色シルトである。ほぼ掘形底面に達する。柱間隔は柱痕の芯で桁行1.8m+1.8m+1.8m+1.8m、梁行2.5m+2.2mを測る。桁行間尺は6尺+6尺+6尺+6尺強、梁行間尺は8尺+7尺で建物の面積は36.48㎡となる。遺物は、掘り方から須恵器片4点、あかやき土器片8点が出土した。この建物の南北脇に位置する溝跡（SD412、SD493）は、雨落ち溝等付属する遺構と見られる。

#### 第6号掘立柱建物跡（SB6、第92図）

6-8グリッドに位置し、検出面は、V層上面である。この建物の柱痕（EB602）で2号建物跡と切り合う。プランは桁行2間、梁行2間の建物である。柱穴掘り方は長軸64m、短軸43mの円形を呈している。遺構検出面から底面までの深さは40cm~50cmを測り、底面の標高は2.5~2.6mで一定している。柱痕は直径20~23cmのほぼ円形である。掘り方覆土は3層ある。柱痕は黒色土で、ほぼ掘り方の底面まで達している。柱間隔は柱痕の芯で桁行東から2.0+2.2m、梁行北から2.5+2.5mを測る。建物の面積は26.88㎡となる。桁行7尺+7尺、梁行は8尺+8尺と考えられる。遺物は掘り方から須恵器片2点、あかやき土器片1点が出土している。この建物は、5号掘立柱建物跡に東西に並列し、梁間尺が一致している。

## 第7号掘立柱建物跡 (SB7、第93図)

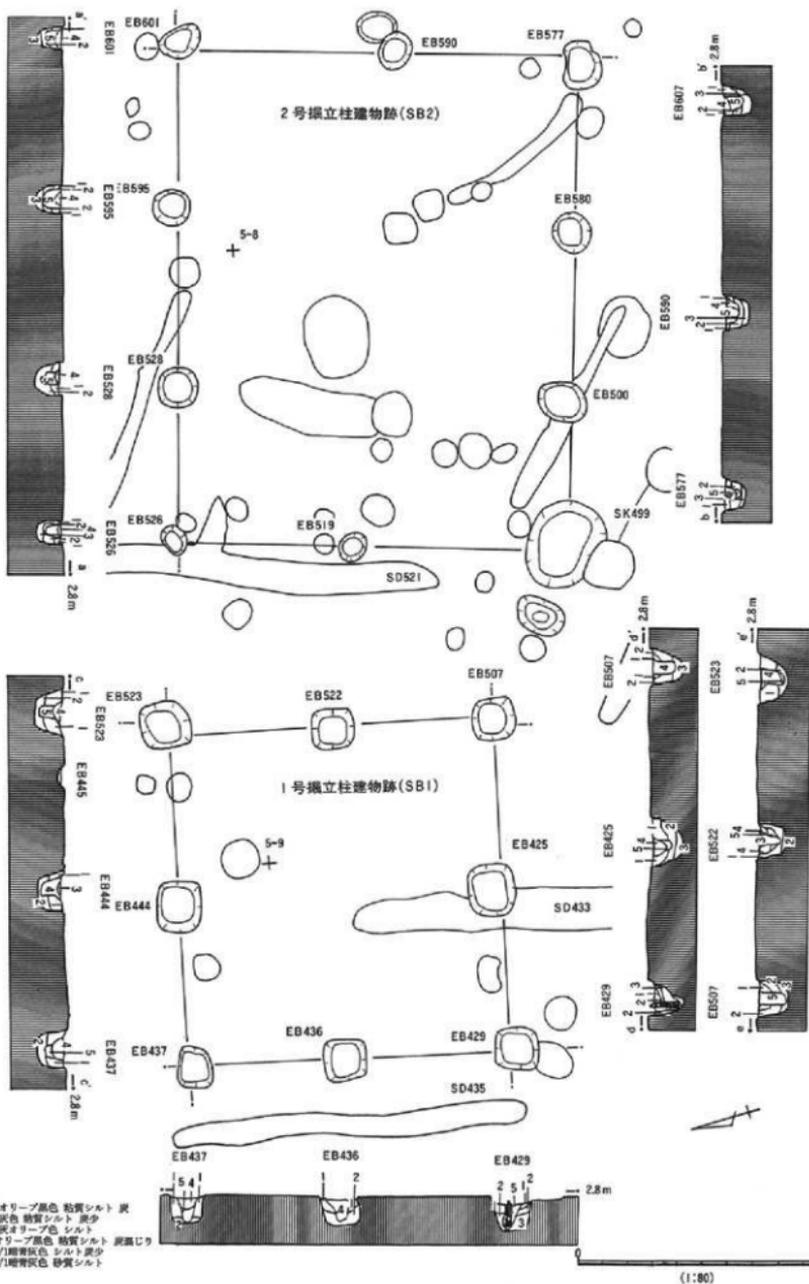
7-4グリッドに位置し、検出面は、V層上面である。この建物の柱跡は畝跡群に切られている。また、EB771は、弥生時代の土壇 (SK810) と切り合う。プランは桁行3間、梁行2間の建物である。柱穴掘り方は長軸73m、短軸60mの方形を呈している。遺構検出面から底面までの深さは58cm~65cmを測り、底面の標高は2.5~2.6mで一定している。柱痕は直径25~33cmのほぼ円形である。掘り方覆土は3~4層あり、柱痕は炭混じり土で、ほぼ掘り方の底面まで達している。柱間隔は柱痕の芯で桁行東から1.8m+1.8m+1.8m、梁行北から2.4m+2.5mを測る。建物の面積は30.72㎡となる。桁行6尺+6尺+6尺、梁行は8尺+8尺と考えられる。遺物は掘り方から須恵器片5点、あかやき土器片2点が出土している。

## 第8号掘立柱建物跡 (SB8、第94図)

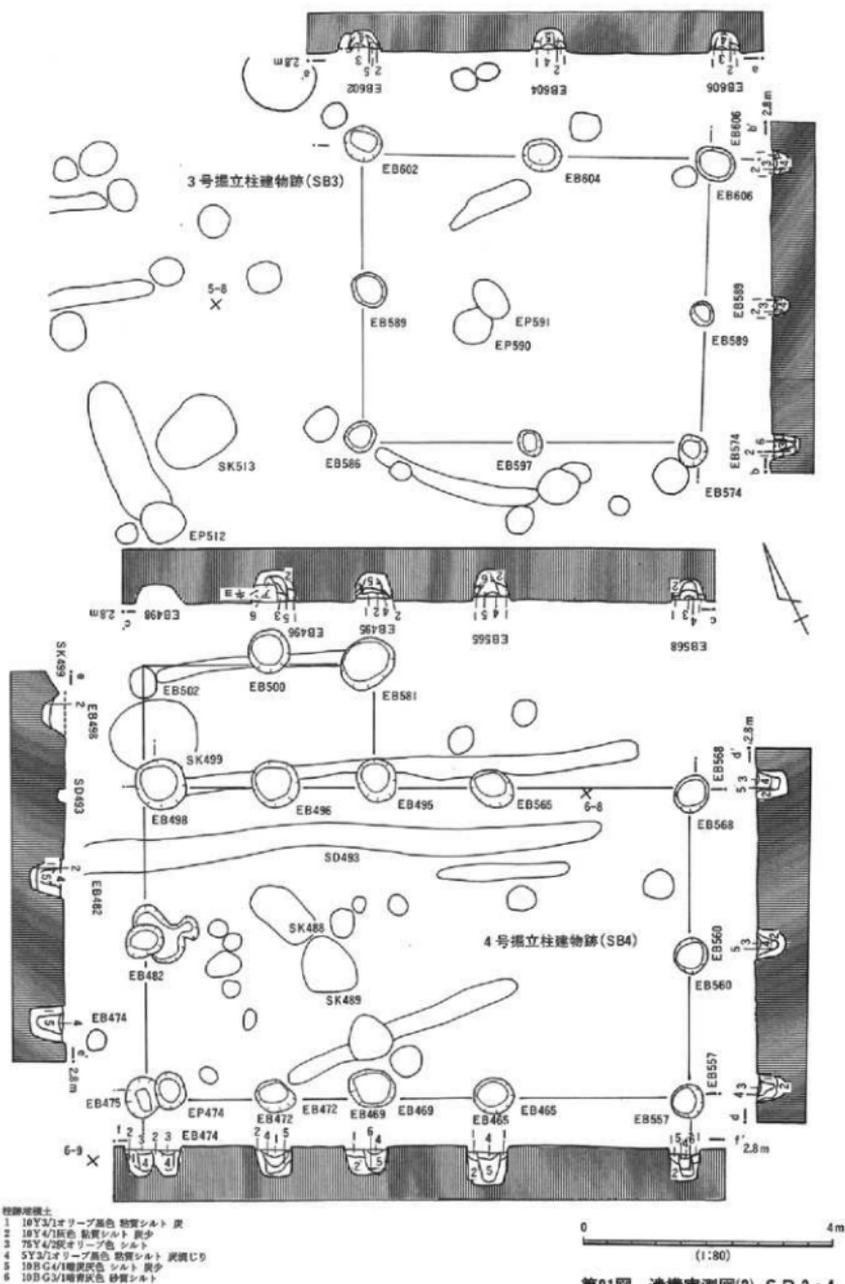
7-5グリッドに位置し、検出面は、V層上面である。この建物の柱跡は畝跡群に切られている。建物プランは桁行2間、梁行2間の建物である。柱穴掘り方は長軸64m・短軸50mの方形を呈している。遺構検出面から底面までの深さは30cm~45cmを測り、底面の標高は2.6~2.7mである。掘り方覆土は2層である。柱間隔は桁行を東から3.0m+3.0m、梁行北から3.0m+2.5mを測る。建物の面積は31.2㎡となる。桁行10尺+10尺、梁行は10尺+8尺と考えられる。

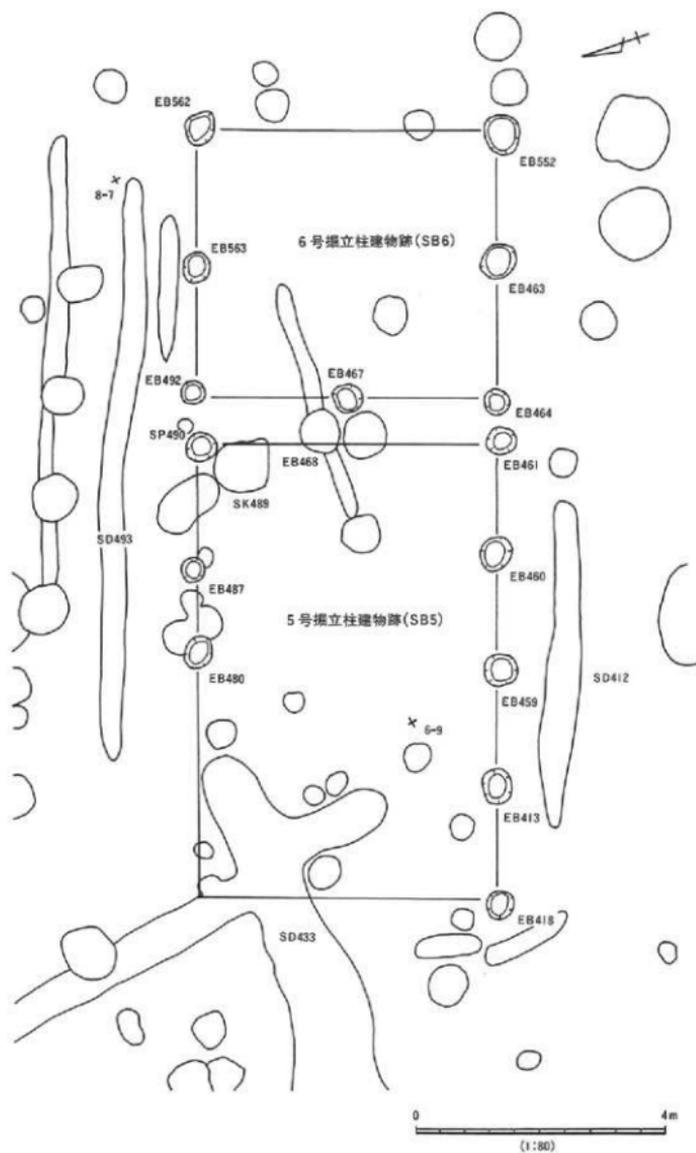
## 第9号掘立柱建物跡 (SB9、第95図)

8-6、8-7グリッドに位置し、検出面は、IV層である。プランは桁行3間、梁行2間の建物である。柱穴掘り方は長軸58m、短軸50mの方形を呈している。遺構検出面から底面までの深さは35cm~50cmを測り、底面の標高は2.4~2.6mである。柱痕は直径18~26cmのほぼ円形である。掘り方覆土は4層あり、柱痕は炭混じりの黒褐色シルトで、ほぼ掘り方の底面まで達している。柱間隔は柱痕の芯で桁行東から2.2m+2.2m+2.2m、梁行北から3.2m+3.2mを測る。建物の面積は43.52㎡となる。桁行7尺+7尺+7尺、梁行は11尺+11尺と考えられる。遺物は掘り方から須恵器片6点から、あかやき土器片12点が出土している。

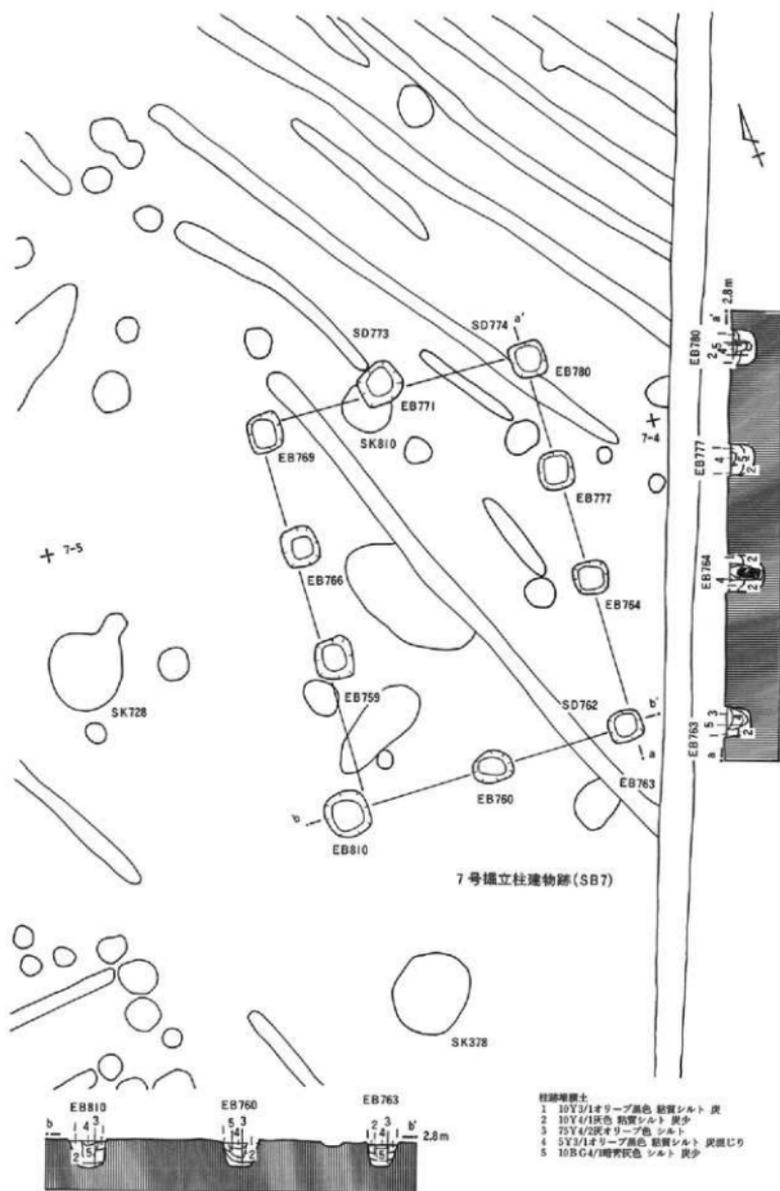


(1:80)  
第90図 遺構実測図(1) SB1・2



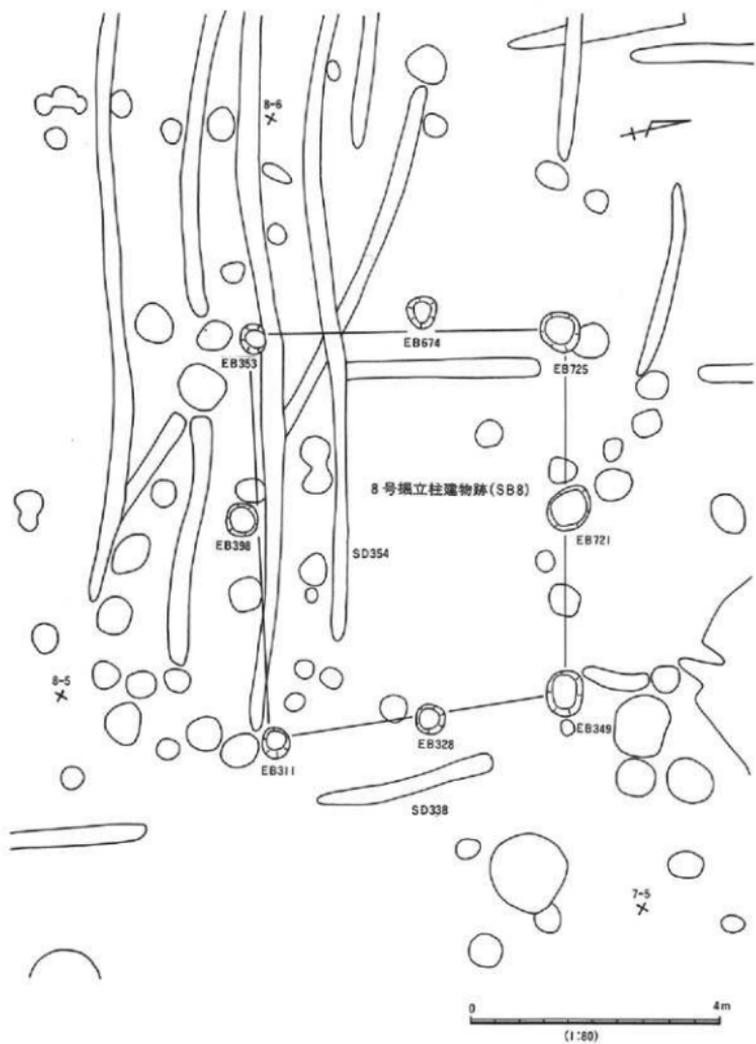


第92图 遺構実測図(3) SB5・6

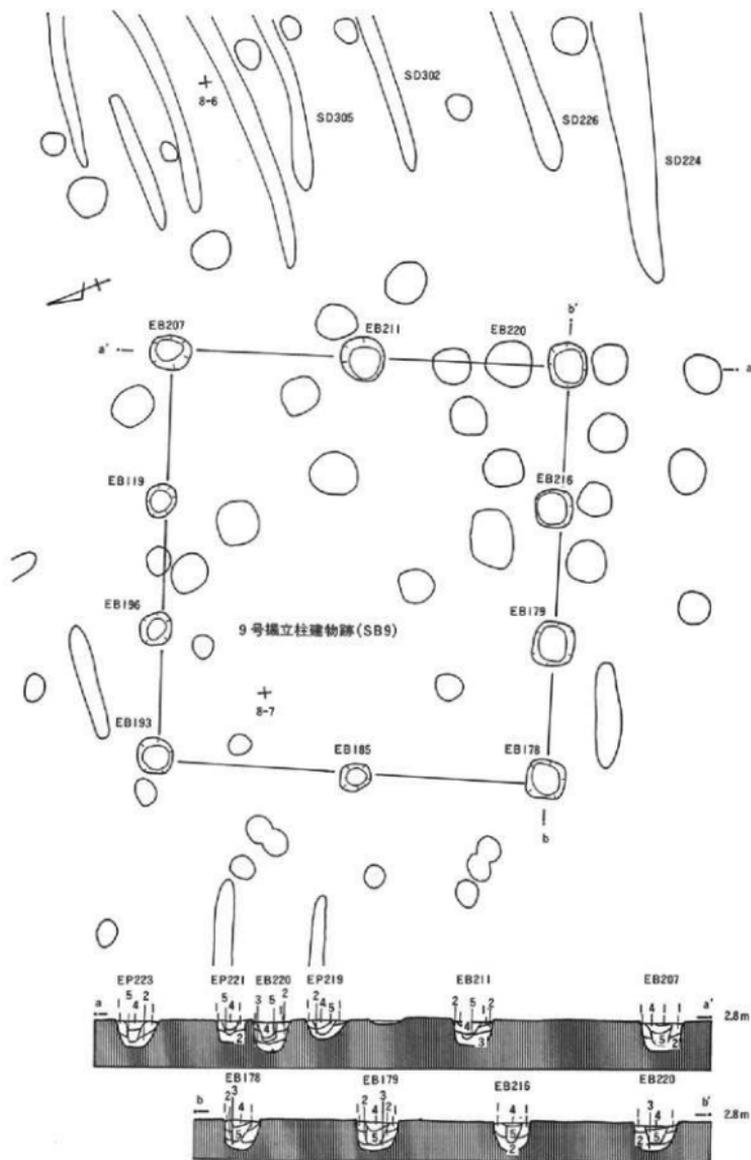


0 4m  
(1:80)

第93図 遺構実測図(4) SB7



第94図 遺構実測図(5) SB8



柱跡番号

- 1 10Y3/14リープ黒色 粘質シルト 灰
- 2 10Y4/1灰赤 粘質シルト 灰砂
- 3 7.5Y4/2灰オレンジ色 シルト
- 4 5Y3/1オレンジ黒色 粘質シルト 炭素じり
- 5 10B4/4暗青灰色 シルト 灰砂
- 6 10B G/1暗青灰色 砂質シルト
- 7 10Y R5/2R黄褐色 粘質シルト

第95図 遺構実測図(6) SB9

表-25 掘立柱建物跡一覽表

建物跡	柱 跡 配 置	建物概要 畝舎規模 庇	柱間 距離 m		柱 穴 跡 cm		主 軸 方 位
			桁 行	梁 行	距 方 位	柱 徑	
S B 1		2間×2間	5.6×5.5 30.8㎡	523~522 2.7m 522~507 2.7m	437~444 2.6m 444~523 2.7m	方形 68~75cm 円形 20~25cm	N-75° -W
S B 2		2間×3間	8.3×6.4 53.12㎡	526~519 3.5m 519~499 3.1m	526~528 2.7m 528~595 2.7m 595~602 2.7m	円形 45~56cm 円形 20~25cm	N-77° -W
S B 3		2間×2間	5.6×4.8 26.88㎡	602~589 2.5m 589~586 2.5m	602~604 2.7m 604~606 2.7m	円形 44~50cm 円形 20~25cm	N-60° -W
S B 4		2間×4間 北原園 一塚底付き	8.8×5 8.8×6.8 44.0㎡ 59.84㎡	502~496 1.8m 498~482 2.7m 482~474 2.7m	474~472 1.8m 472~469 1.8m 469~465 1.8m 465~557 3.2m	円形 60~75cm 円形 25~30cm	N-60° -W
S B 5		2間×4間	7.6×4.8 36.48㎡	490~468 2.5m 468~461 2.2m	418~413 1.8m 413~459 1.8m 459~460 1.8m 460~461 1.8m	円形 40~46cm 円形 18~24cm	N-63° -W
S B 6		2間×2間	4.8×4.4 21.12㎡	492~467 2.5m 467~464 2.5m	464~463 2.0m 463~552 2.2m	円形 22~55cm 円形 20~23cm	N-63° -W
S B 7		2間×3間	6.4×4.8 30.72㎡	780~771 2.4m 771~679 2.5m	769~766 1.8m 766~759 1.8m 759~810 1.8m	方形 50~62cm 方形 25~33cm	N-6° -W
S B 8		2間×3間	6.0×5.2 31.2㎡	353~398 2.5m 398~311 3.0m	353~694 3.0m 694~725 3.0m	円形 33~50cm 円形	N-68° -E
S B 9		2間×3間	6.8×6.4 43.52㎡	193~185 3.2m 185~178 3.2m	193~196 2.2m 196~119 2.2m 119~207 2.2m	円形 46~68cm 円形 18~26cm	N-74° -W

## (2) 井戸跡(第16図) S E 645

井戸跡は1基確認した。井戸跡(S E 645)は、調査区ほぼ中央に位置し、建物群と小川跡(S G 59)の間にある。井戸は、掘り方のみで、井戸枠などの構造物は検出できなかった。掘り方は、平面形が長軸333cm、短軸320cmの不整形形で周壁の立ち上がりは緩やかである。深さは、151cmを測り、底は標高1.26mになる。砂質シルト層からの湧水が激しい。掘り方の覆土は10層を数え、途中、F 4層に黒色の腐食層が入る。井戸周壁は崩れ、内部に流れ込んでいる。ここからは、須恵器片12点、あかやき土器片90点、土師器片5点出土した。素掘り井戸と推定する。

## (3) 土 壇 (第97図～第101図)

土壇は33基確認された。それぞれ大きさや出土遺物・堆積土など様々である。以下、主な土壇について規模や出土遺物・堆積状況について、それぞれ概略を述べる。

S K 18 (第97図) 土壇全体を検出した。畝状溝跡との切り合いが見られ、土壇の方が古い。平面形は楕円形をなす。規模は長軸232cm、短軸110cm、深さが22cmである。覆土は3層に分けられる。壁の立ち上がりは緩やかで、底面は平坦である。ここからは須恵器片2点、あかやき土器片13点が出土した。遺物はF 2層に出土し、「大玉」墨書痕のある完形の須恵器蓋が出土している。

S K 408 (第98図) 土壇全体を検出し、他の遺構との切り合いはない。平面形は不整形形をなす。規模は長軸266cm、短軸180cm、深さが32cmである。覆土は3層に分けられ、壁の立ち上がりは緩やかで、底面は平坦である。F 1層からは炭屑が認められた。ここからは須恵器片10点、土師器片6点、あかやき土器片88点が出土した。遺物はF 1層に出土し、ほとんど破片資料である。

S K 452 (第100図) 土壇全体を検出し、他の遺構との切り合いはない。平面形は楕円形をなす。規模は長軸183cm、短軸134cm、深さが23cmである。覆土は4層に分けられる。壁の立ち上がりは緩やかで、底面は平坦である。ここからは須恵器片5点、あかやき土器片15点が出土した。遺物は、ほとんど破片資料である。

S K 499 (第99図) 土壇全体を検出し、4号掘立柱建物跡柱跡(E B 498)と切り合う。また、この土壇は2号掘立柱建物跡の柱穴とも重なる。平面形は円形をなす。規模は長軸146cm、短軸118cm、深さが30cmである。覆土は9層に分けられ、壁の立ち上がりは急で底面は曲面を持つ。ここからはあかやき土器片6点が出土した。遺物のほとんどが破片資料である。

S K 637 (第100図) 土壇全体を検出し、他の遺構との切り合いはない。平面形は円形をなす。規模は長軸195cm、短軸164cm、深さが53cmである。覆土は4層に分けられ、2段に掘り込みが見られた。壁の立ち上がりは急で、底面は曲面である。ここからは須恵器片3点、土師器片2点、あかやき土器片22点が出土した。

S K 810 (第101図) 6-5グリッド第7号掘立柱建物跡(E P 771)を精査中に発見した。土壇全体を検出した。平面形は円形をなす。規模は長軸145cm、短軸126cm、深さが55cmである。覆土は3層に分けられ、壁の立ち上がりは緩やかである。底面は曲面である。平安

時代の遺構確認面から約20cm下位、現地表面からは約80cm下に位置する。標高1.96mになる。ここからは弥生時代の甕が2個体が出土した。土器はF1層に出土し、割れているもののほぼ完形に復元できた。2個の甕は、やや斜位に並ぶように配置されていたものと考えられる。この種の埋設土器は、これまで墓墳に伴うものとして理解されている。

#### (4) 畝状溝跡 (第102図)

畝状溝跡は、総数128条検出した。幅約20cm前後、長さは3mのものから20mを超えるものまで見られた。断面は「U」字形をなし、整然と並び幾つかのグループのまとまりが認められる。これらの畝状溝跡は、畑作に関わる遺構と考えられている。

#### (5) 溝跡

溝跡として確認したのは、6条ある。

SD2 最大幅で90cm、深さは35cmを測る。調査区南側を東側から西側に延びる。途中二手に枝分かれしていく。西側は泥炭層化しており、明確に確認できなかった。この溝跡からは須恵器片90点、土師器片10点、あかやき土器片237点出土した。ほとんど小片で磨滅したものである。

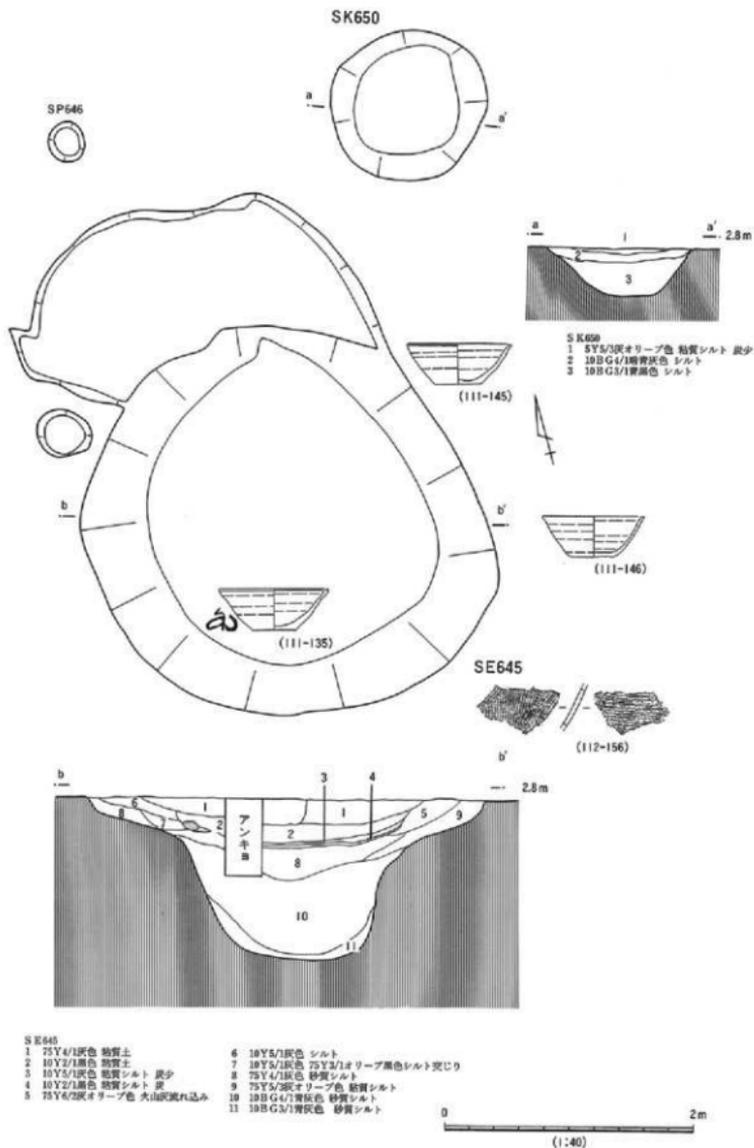
SD135 最大幅で80cm、深さは20cmを測る。調査区南側SG59とSD2を繋ぐ。この溝跡を畝状溝跡群が切っている。この溝跡からは須恵器片18点、土師器片3点、あかやき土器片22点出土した。ほとんど小片で磨滅したものである。

#### (6) 河川跡

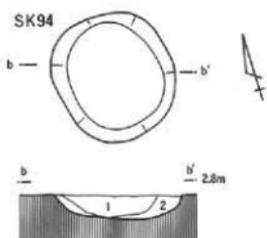
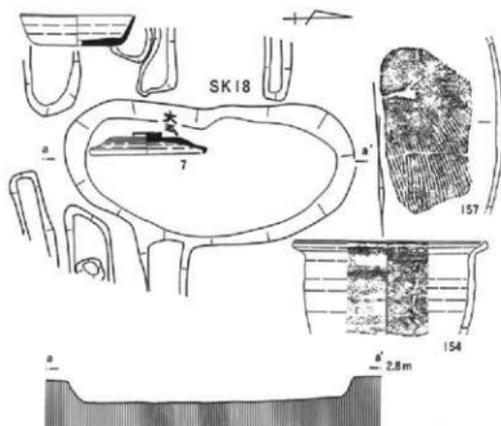
調査区の北側および中央、南側において河川跡と思われる落ち込み及び堆積土が確認された。

SG59 (第103図) 調査区中央部を東西に蛇行しながら連なる痕跡を確認した。途中、大きく池状に広がる部分がある。この河川跡は、IV層上面から、遺物が多数出土することややや土色に変化しているため、その存在を知ることができた。最大深さは確認面から48cmを測る。この河川跡からは須恵器片582点、土師器片122点、あかやき土器片983点出土した。完形の坏が多数見られた。坏は斜めになったり、逆位になったり、重なったりと投げ捨てられたような状態を示している。土器群は4ヶ所のまとまりが見られた。(A~Dブロック)。また、ここからは砥石3点・土錘2点、礫79点が出土している。

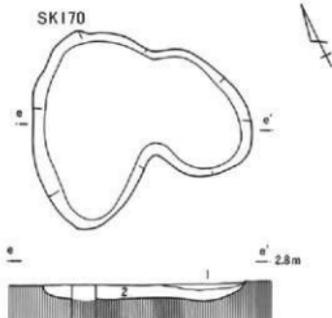
SG809: 調査区北側に位置する。黒色腐食土、泥炭層、シルト層が厚く堆積する。トレンチによる一部分の調査を実施した。最高で深さ45cmを測る。建物群に近いところで土器の出土をみたが、北側ほど少なくなる。土器はほとんど破片資料で、図示できるものはなかった。



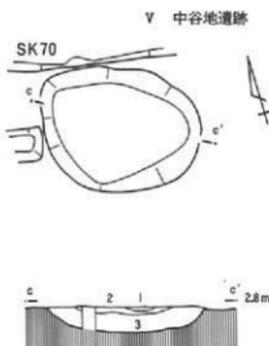
第96図 遺構実測図(7) SE645, SK650



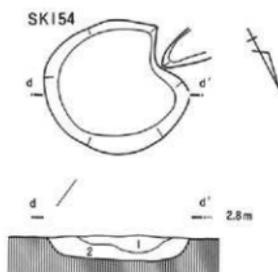
SK94  
1 75Y3/1オリーブ黒色 粘質シルト 10Y4/2オリーブ灰色 シルト  
2 10B G4/1青灰色 砂質シルト



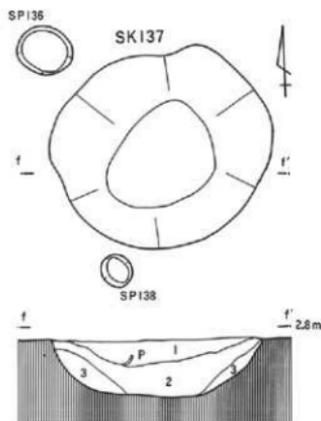
SK170  
1 10B G2/1青黒色 シルト  
2 10B G4/1青灰色 砂質シルト



SK70  
1 75Y2/2灰白色 粘質シルト 火山灰混じり  
2 75Y3/1オリーブ黒色 粘質シルト  
3 10Y4/1灰色 シルト



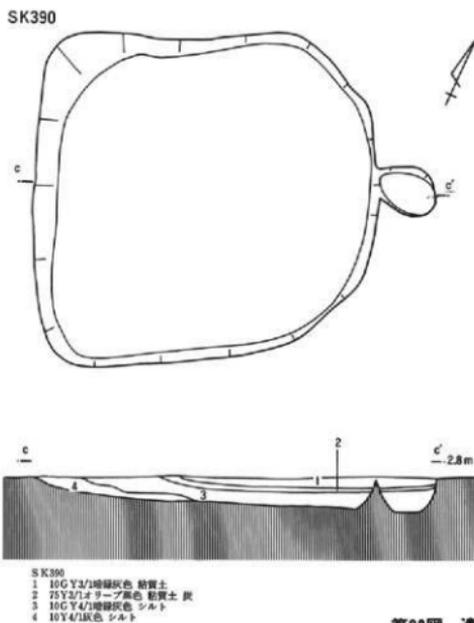
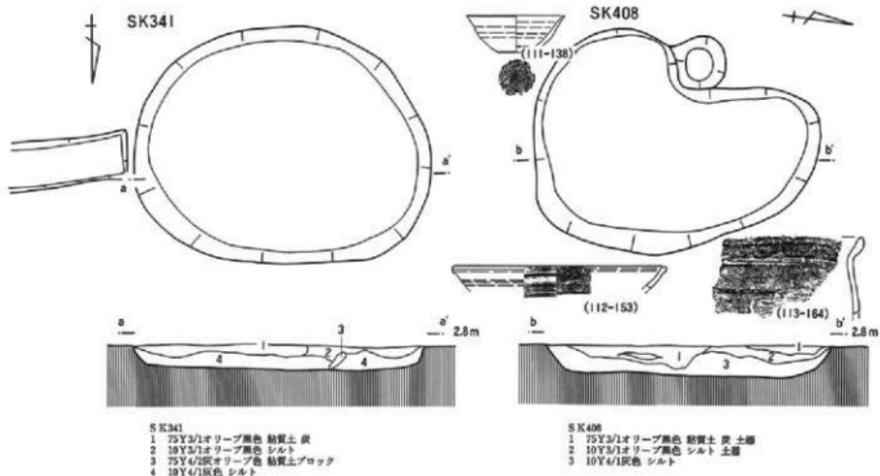
SK154  
1 75Y3/1オリーブ黒色粘質土 10Y4/2オリーブ灰色 シルト  
2 10B G4/1青灰色 砂質シルト

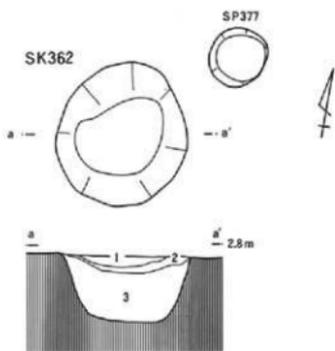


SK137  
1 75Y4/1灰色 粘質シルト 土層  
2 10B Y4/1濃緑灰色 粘質シルト 土層  
3 10B G4/1青灰色 シルト

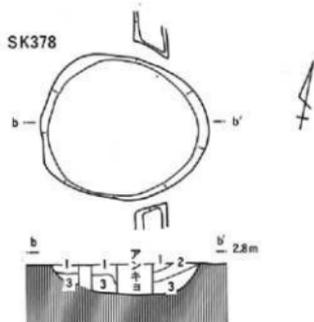
0 2m  
(1:40)

第97図 遺構実測図(8) SK18他

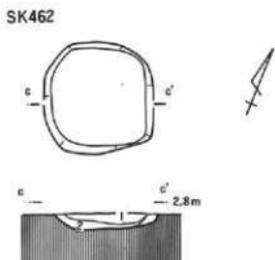




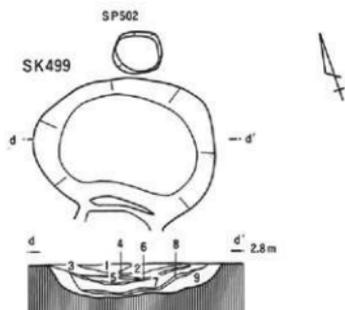
SK362  
 1 75Y5/2灰オリブ色 粘質シルト  
 2 75Y2/1オリブ褐色 粘質シルト  
 3 10B G4/1黄灰色 砂質シルト



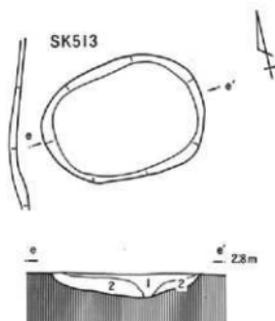
SK378  
 1 5Y4/2灰オリブ色 粘質土  
 2 5Y5/1灰色 粘質シルト  
 3 10Y4/1灰色 シルト



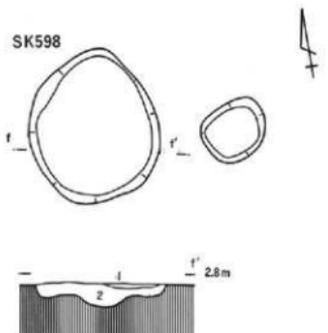
SK462  
 1 25Y5/2黄灰色 粘質土  
 2 10Y5/1灰色 粘質シルト



SK499  
 1 75Y3/1オリブ灰色 粘質土 灰少 土層  
 2 75Y2/1黄褐色 粘質土 灰 土層  
 3 75Y5/2オリブ灰色 粘質シルト  
 4 75Y2/1黄褐色 粘質シルト 灰  
 5 10Y3/1オリブ褐色 シルト  
 6 75Y4/2灰オリブ色 シルト  
 7 75Y4/1灰色 砂質シルト  
 8 10Y2/1黄褐色 シルト  
 9 10B G4/1黄灰色 砂質シルト



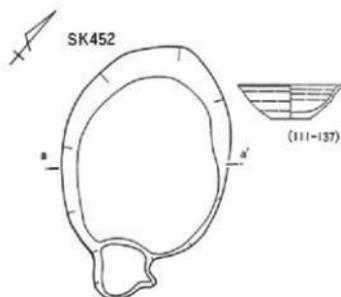
SK513  
 1 75Y5/2灰オリブ色 粘質シルト  
 2 10B G4/1黄灰色 砂質シルト



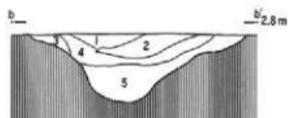
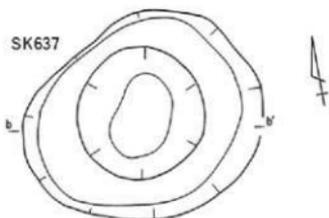
SK598  
 1 75Y5/2灰オリブ色 シルト  
 2 10B G4/1黄灰色 砂質シルト



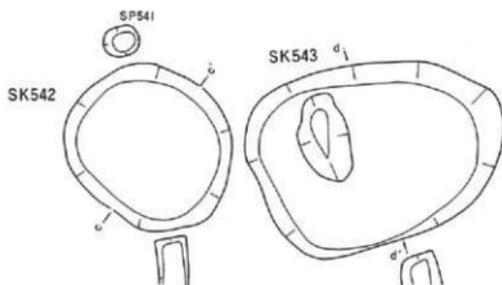
V 中谷地遺跡



- S K 452
- 1 75Y4/2灰オリーブ色 粘質土 炭化物 土層
  - 2 5Y5/2灰オリーブ色 粘質土炭少 土層
  - 3 75Y5/2灰オリーブ色 粘質シルト
  - 4 10Y5/1灰色 シルト



- S K 637
- 1 75Y5/1灰色 粘質シルト 75Y7/1灰白色 火山灰粘土層
  - 2 10Y5/1灰色 シルト 火山灰土 土層
  - 3 10Y4/1灰色 シルト 土層
  - 4 10B G5/1青灰色 砂質シルト
  - 5 10B G4/1青灰色 砂質シルト



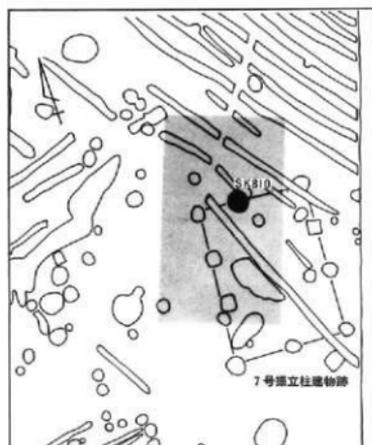
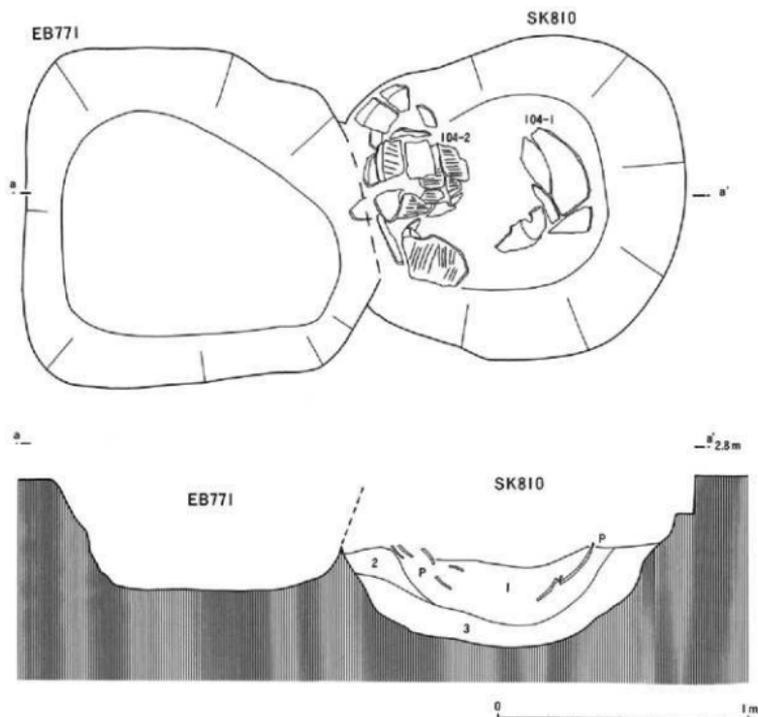
- S K 542
- 1 25Y5/2灰オリーブ色 粘質シルト
  - 2 10Y5/1灰色 シルト



- S K 543
- 1 25Y5/2灰オリーブ色 粘質シルト
  - 2 10Y5/1灰色 シルト

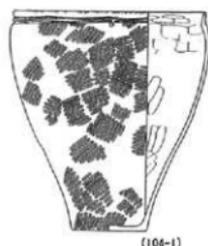


第100図 遺構実測図(1) SK452他



※スクリーン・トーンは弥生時代精査区

弥生土層 SK810  
 1 10G Y4/粘質シルト 泥少 黒色粘質土塊じり 弥生土層出土  
 2 10Y5/1 粘質シルト 壁層状  
 3 10B G4/粘質シルト

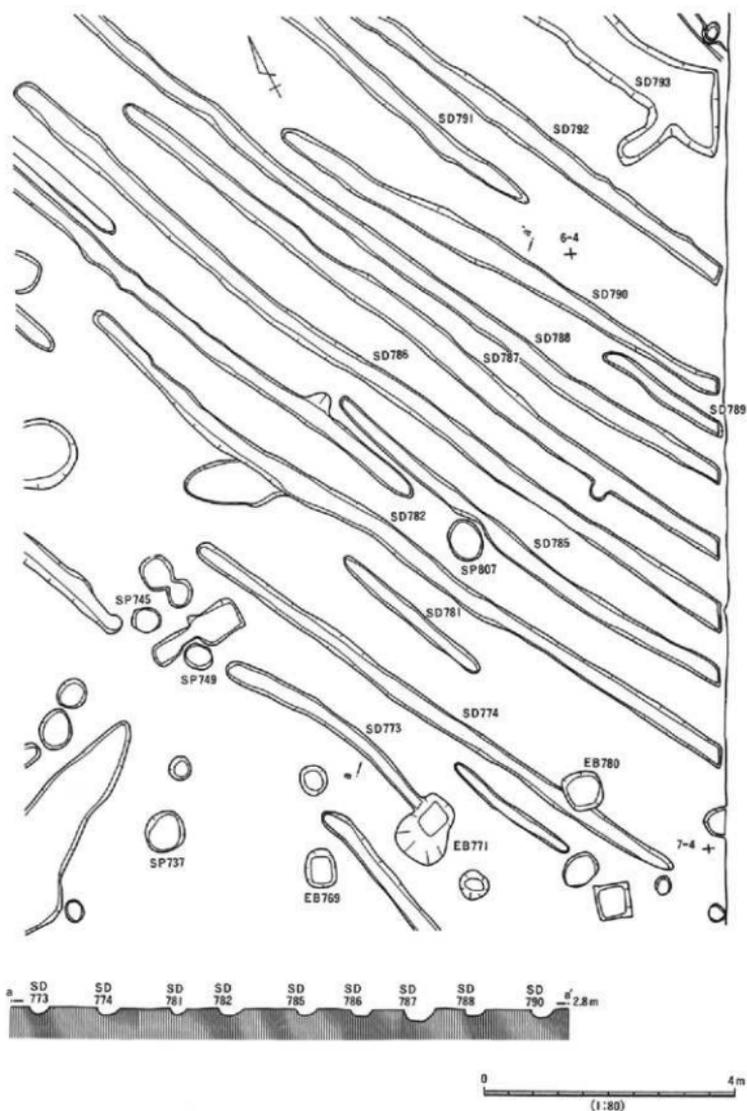


(104-1)

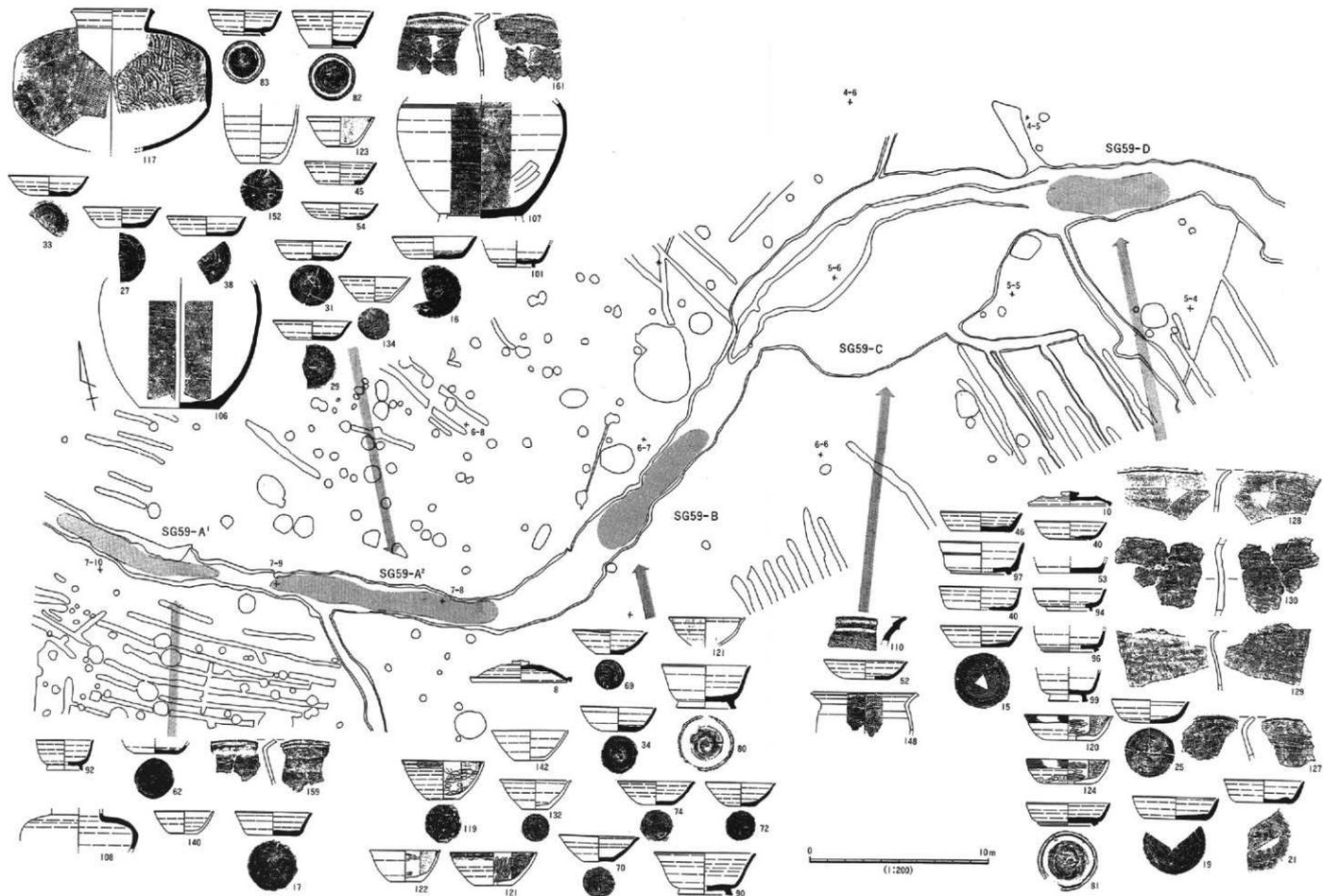


(104-2)

第101図 遺構実測図(12) SK810



第102圖 遺構実測図(13) 畝跡群



第103図 遺構実測図④ SG59

## 4 遺物

中谷地遺跡の調査で出土した遺物には土器・木製品・石器石製品がある。遺物は総数約5,800点を数える。主な遺構ごとの遺物出土点数は表-26に記したが、遺物全体の約50%は遺構確認までの表土及び包含層出土である。遺構内では溝跡(S D 59)からの出土数が多かった。以下、遺物を種類ごとに取り上げ、その特徴をまとめる。

## (1) 土器

中谷地遺跡からは、整理箱にして27箱の土器類が出土している。大半は奈良・平安時代の土器であるが、弥生時代の土器も出土している。以下、弥生土器・須恵器・土師器・あかやき土器・中世陶磁器などについて順に説明する。

**弥生土器** (第104図) 土壇(S K 810)から、甕が2個押しつぶされた状態で出土した。1は甕形土器で、へら状工具により口唇部に刻みが入る。口縁には2条の沈線が巡り、口縁下で最大径をつくる。体部にはR L原体によりやや斜めに回転施文される。2は体部にR L原体の縄文を施文した後、口縁部をナデで磨消し、口唇部に縄文原体にて押し、刻みを入れている。その他E P 463やS G 59から弥生土器片が出土した(第105図1~6図)。これらの弥生土器は、酒田市生石2遺跡(安倍実1988)から出土している弥生土器甕類と同じ範疇に入るもので、東北日本海側での「砂沢式」に相当する土器群である。

**須恵器** 用途による分類では食膳具・貯蔵具がある。器種として蓋・坏・高台付坏・高台付皿・小壺・壺・甕に分類できる。さらに部分形態や技法上細分される。器種ごとに概要を説明する。

表-26 中谷地遺跡遺構内出土遺物一覧

主な遺構	グランド 位置	出土遺物						火 土 器	備 考
		須恵器	あかや き土器	中世	近世	石製 土器	土壇		
a) 甕 (第105図7~14) : 把手が宝珠形のもののあるもの(8、10、11、12、14)と把手頂部がくぼみ、断面が緩やかに湾曲するもの(9、13)がある。10、14は上面が平坦で丁寧なへら削り調整が施されている。	遺物跡	S B 1	4-9 4-9	3	18	1			遺物跡より 方法土器類 を整理した。
	S B 2	4-7 4-8	5	20					
	S B 3	5-7	1						
	S B 4	5-8 5-8	3	14					
	S B 5	5-8 5-8	4	8					
	S B 6	6-8	2	1					
	S B 7	7-4	5	2					
	S B 8	7-5	2						
	S B 9	8-6 8-7	6	12					
	b) 坏 (第105図~第108図) : すべてロクロ調整を受けている。へら切りの底部が広く体部が直に立ち上がるもの(17・19・20~23・40・41)、へら切りで体部が緩やかに立ち上がるもの(24~26・30~35)、へら切りで体部が緩やかに立ち上がり、口唇がやや外反するもの(27~29・37・39) 底部切離しは糸切りで、体部が緩やかに立ち上がるもの(63~73)がある。また、第105図15は静止糸きり後、底部周辺をへら削り調整をしている。庄内では、これまで手蔵田遺跡からの出土が報告されている。この種の土器は、まとまった資料がなく、検討の余地がある。	土壇	S K 18	7-9	2	13			
S K 19		7-9	1	3					
S K 24		7-9							
S K 137		7-7							
S K 154		8-8	2	2					
S K 169		8-8	11	6					
S K 341		9-6							
S K 362		8-5							
S K 390		8-4	15	14					
S K 408		5-10	10	88	6				
S K 432		6-9	5	15					
S K 462		8-8							
S K 469		8-8							
S K 513		4-8	1	2	1				
S K 542		4-8	7	7					
S K 543		6-7	10	5					
S K 637		5-6	3	22	2				
S K 650		5-6							
S K 930		8-4							
井戸跡	S E 645	5-6	12	90	5				
溝跡	S D 2	南側	90	227	10			弥生土壇1点	
S D 135	南側	18	23	3					
S D 435	北側	6	12	2					
S D 753	東側	5			2				
S D 734	東側								
河川跡	S G 59	中央部	582	983	122		砥石	土壇1点	磨石点
S G 83	北側	18	58		1	土壇1点			

E P 463から弥生土器出土。

c) 高台付坏 (第108図79～第109図102) : 体部の傾きが急で器高の高いもの (80・82・87・90・97) 低いもの (79・81・83・85・88・89・91) がある。この中で、81、95、96は高台断面がV字形を呈し、新潟北陸方面では、8世紀にみられる形態である。また、97は体部に2条の沈線がめぐるので、酒田市生石2遺跡で出土例がある。鉄場などからの模倣が伺える。101、102は高台取りつけ後、底部周辺をへら削りしているため、体部に段を持つ。98は酸碗に近い形態である。すべて底部切離しはへら切りである。

d) 高台付皿 (第109図103) : 小破片が多いため、1点だけ図示した。ロクロ調整、底部は切りで切り離されている。口縁が若干外反する。

e) 長頸壺 (第109図104、105) : 全形を復元できるものはない。105は頸部に2条の沈線が施される。

f) 壺 (第109図～第110図) : 全形がわかるものはない。107は体部に2条の沈線がめぐり、内面には縦方向のハケメがある。

g) 甕 (第109図110・111、第110図113・114) : 破片資料のみであるが、体部や丸底底部の器面に外面タタキ痕、内面アテ痕が見られる。110、111は甕の口縁部で、櫛描き波状文が見られる。114は、甕体部破片であるが、アテ痕が途中で変わっている。

h) 横瓶 (第110図117) : 横瓶は2個体確認している。

#### 土師器

a) 坏 (第110図) : 器体内面に黒色処理を施している。底部はへら切りにより切り離されている。120はロクロ整形で、底部へら切りの坏である。口縁部はナデ、内面は黒色処理され、丁寧にミガキが施されている。124の坏も同様な整形を受けている。119、121は糸きり坏で、口縁部外面にも黒色処理・ミガキがなされている。

b) 甕 (第110図127・第111図128～131) : 甕は口縁は緩く外反し、口唇端部が丸みを持つものと平坦なものがある。また、器面はハケメ調整が主であり、底部付近は縦方向のケズリが施されている。第111図130の甕は外面に縦方向と横方向からのハケメが施されている。

c) 壺 (第110図118) : 小形の壺で口縁部を若干欠く。両面黒色処理され、丁寧にミガキが施されている。

**あかやき土器** 用途による分類では食膳具・貯蔵具・煮沸具がある。器種では坏・高台付坏・甕・埴がある。さらに部分形態や技法上細分される。

a) 坏 (第111図135～146) : 底径が小さく、外反する体部が伸びる。器高の高いもの (142・146) 低いもの (136・140) がある。

b) 甕 (第112図147～第113図161・162・164) : 底部の形態、口縁の形態などから2分される。体部ロクロ調整、底部切離しは糸切りで、口縁が外反するもの。大型で卵形をした体部に外反する口縁部がつき、体部下半の調整は外面タタキ痕、内面アテ痕である。157の甕資料は、内面にクロス状のアテ痕を残す。

c) 埴 (第112図153、第113図163) : 半球形の体部に外反する口縁部がつく。口縁端には「く」字に緩く反るもの (153) と強く反るもの (163) が見られる。体部の下半の整形・調整

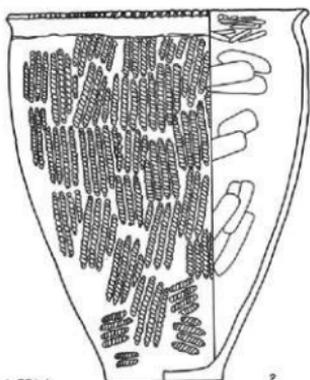
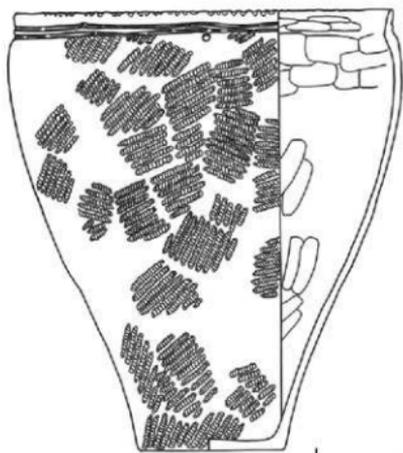
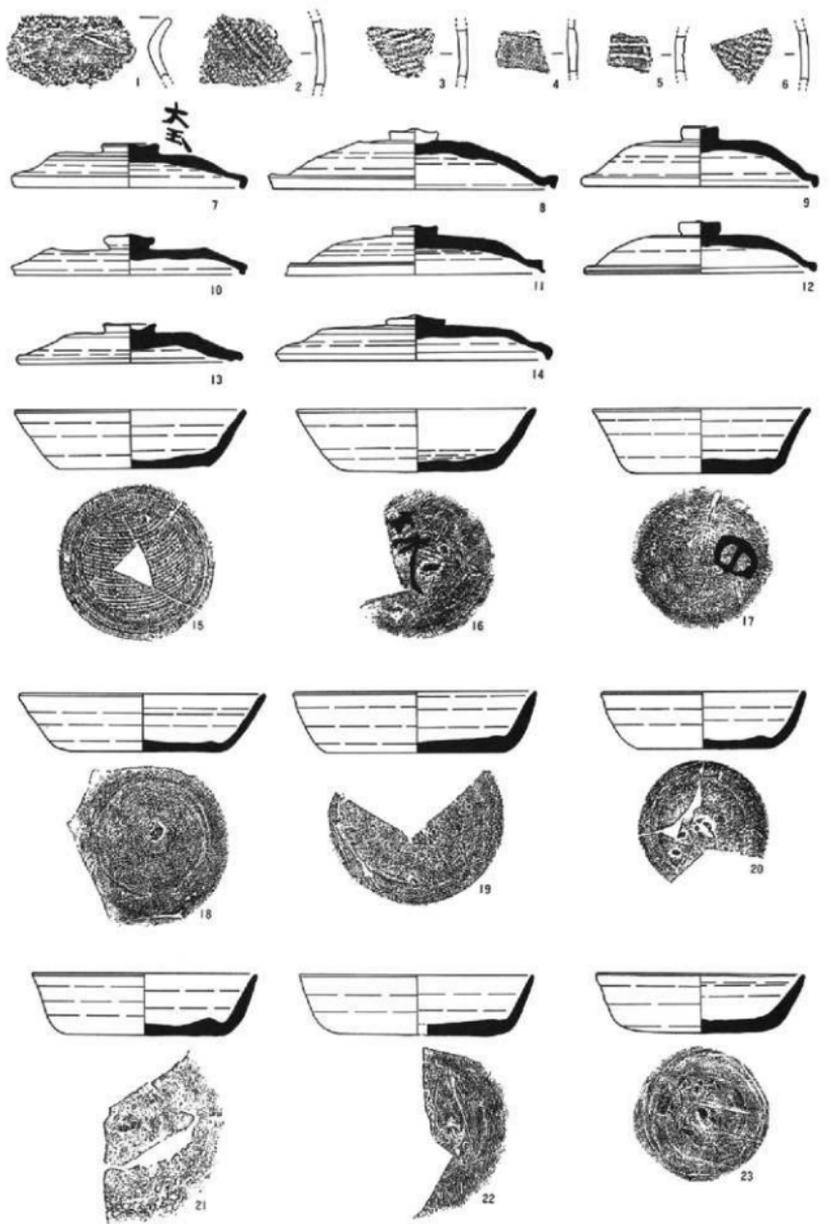


表-27 中谷地遺跡遺物観察表 土器(1)

探出 番号	種別	器種	計測値 mm				底面	整形調整		備考	
			口径	底径	器高	厚さ		外面	内面		
第104回	1	弥生土器	壺	306	116	356	6	板庄痕	口唇部にヘラ状工具によるヤケザミが入る。口縁には2条の沈線がめぐる。穿孔1ヶ所あり。体部の縄文は、LR原体による縄文。	口縁部裏は工具等による縦方向のナデ、下部は縦方向のナデ。	口縁部周辺に炭化物や煤が付着する。
	2	弥生土器	壺	240	94	300	6	板庄痕	口唇部に縄文原体押圧によるヤケミが入る。口縁は外反し。縄文が磨消される。体部の縄文は、LR原体による縦位縄文。	口縁部裏は工具等による縦方向のナデ、下部は縦方向のナデ。	口縁部周辺に炭化物や煤が付着する。 口縁部、縄文縄文後磨り消し。

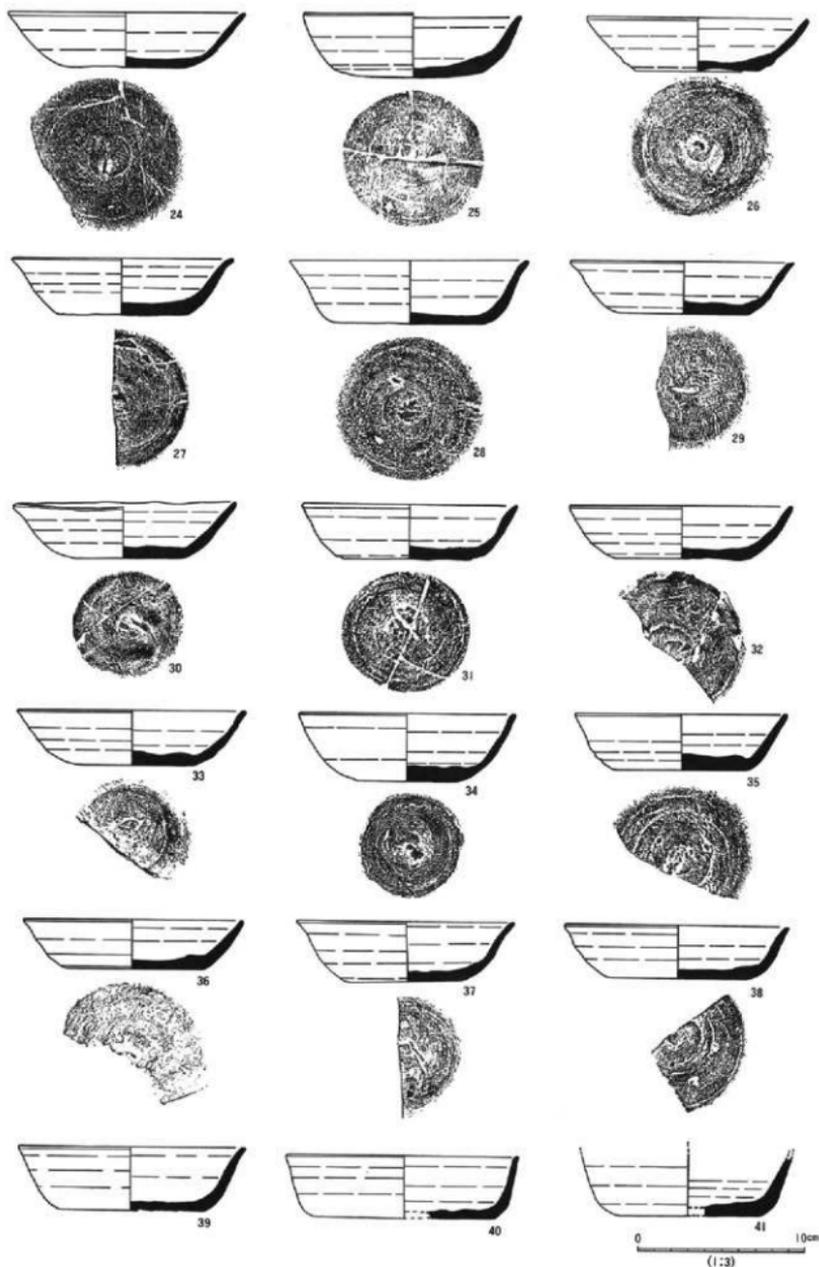
0 10mm  
(1:4)

V 中谷地遺跡



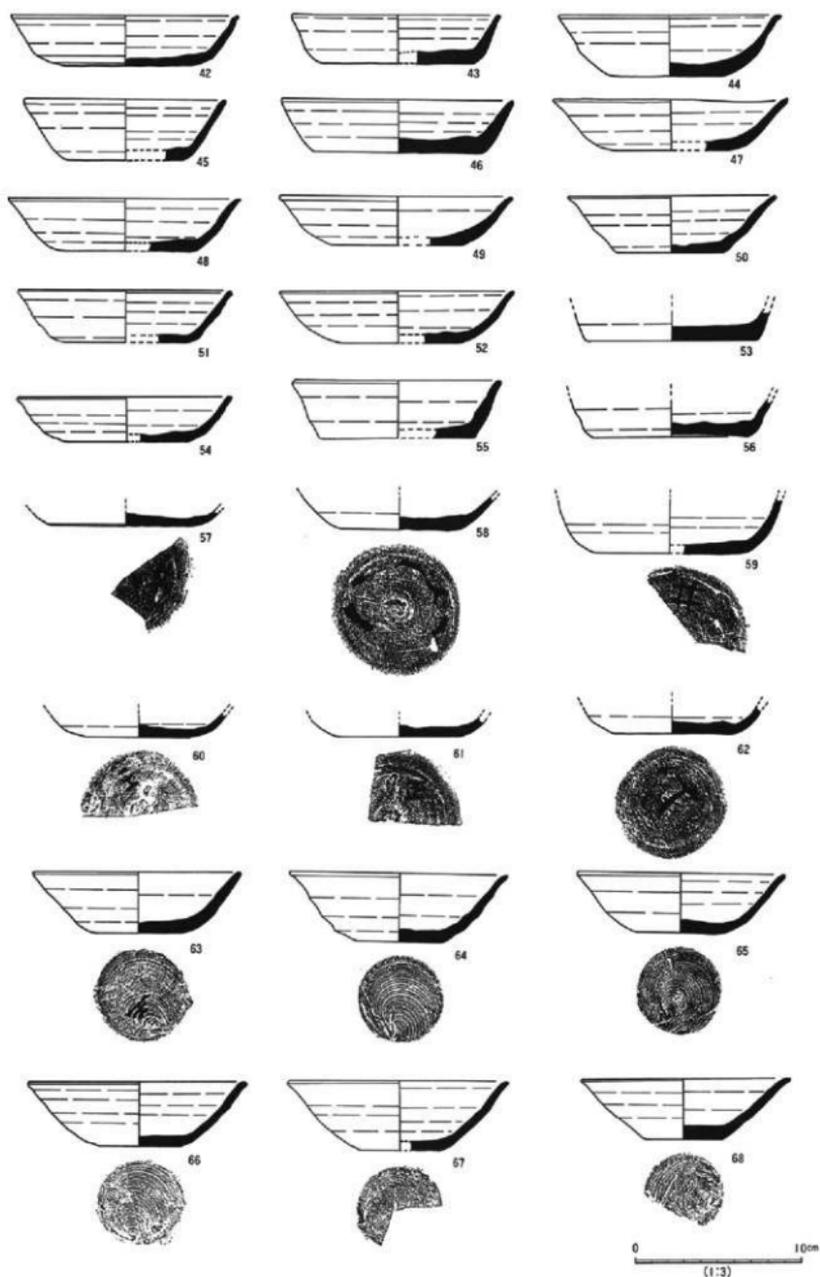
0 10cm  
(1:3)

第105圖 遺物実測圖(2) 土器 2

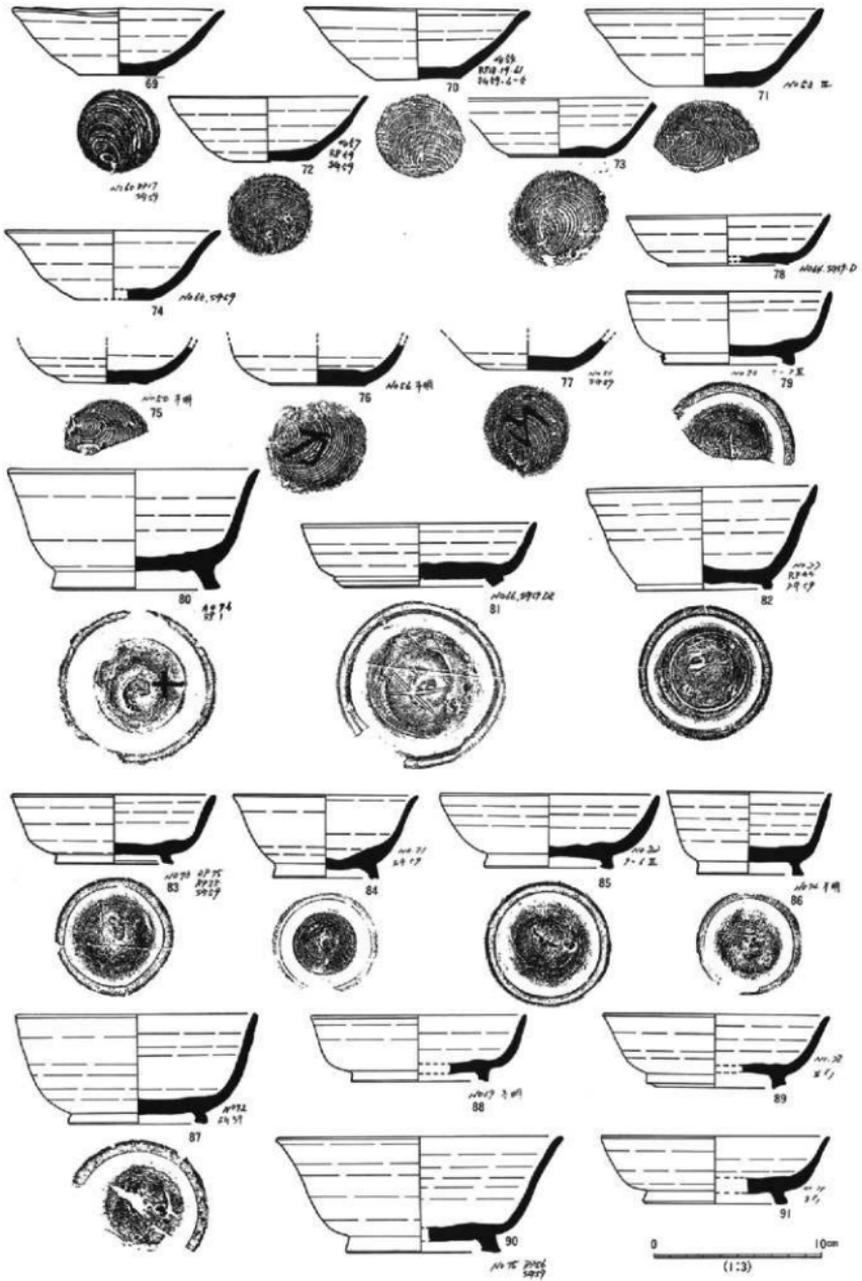


第106図 遺物実測図(3) 土器 3

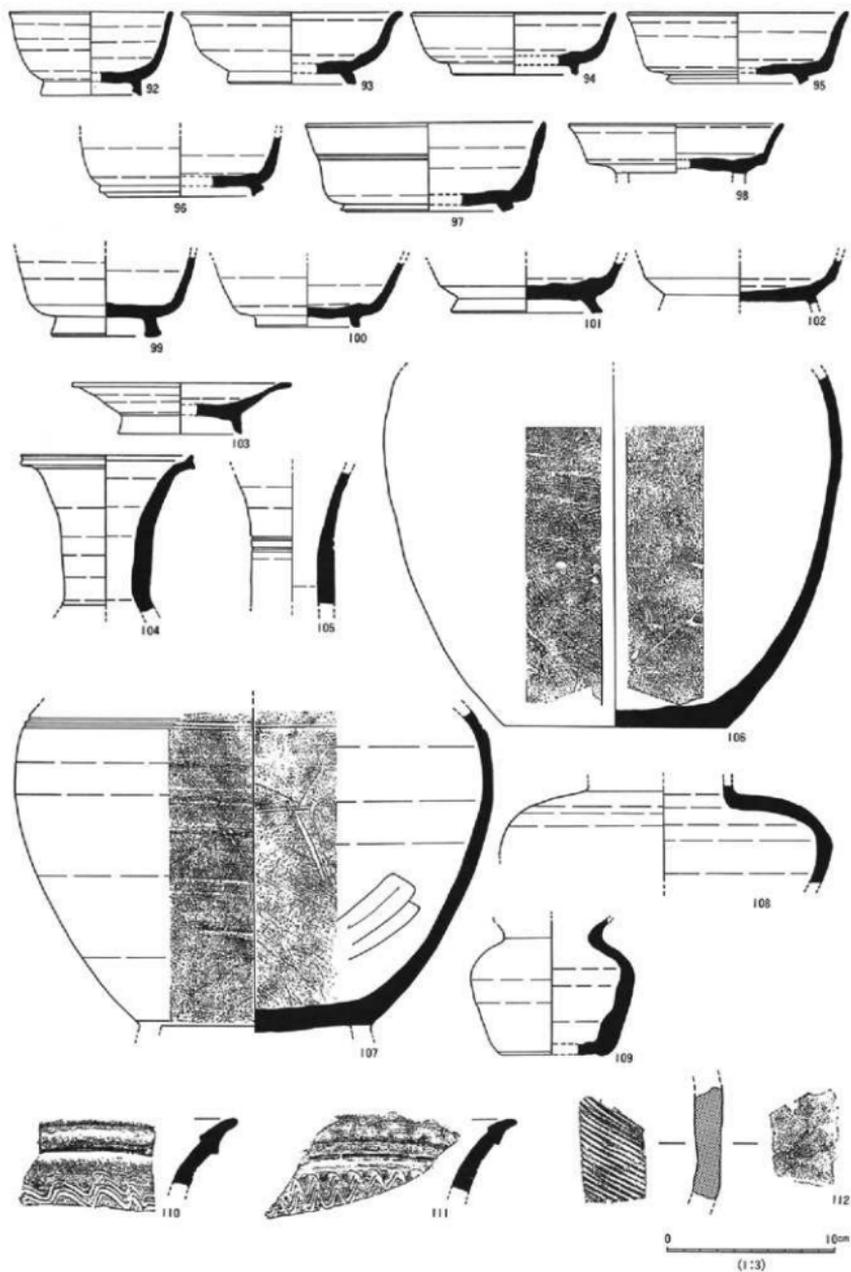
V 中谷地遺跡



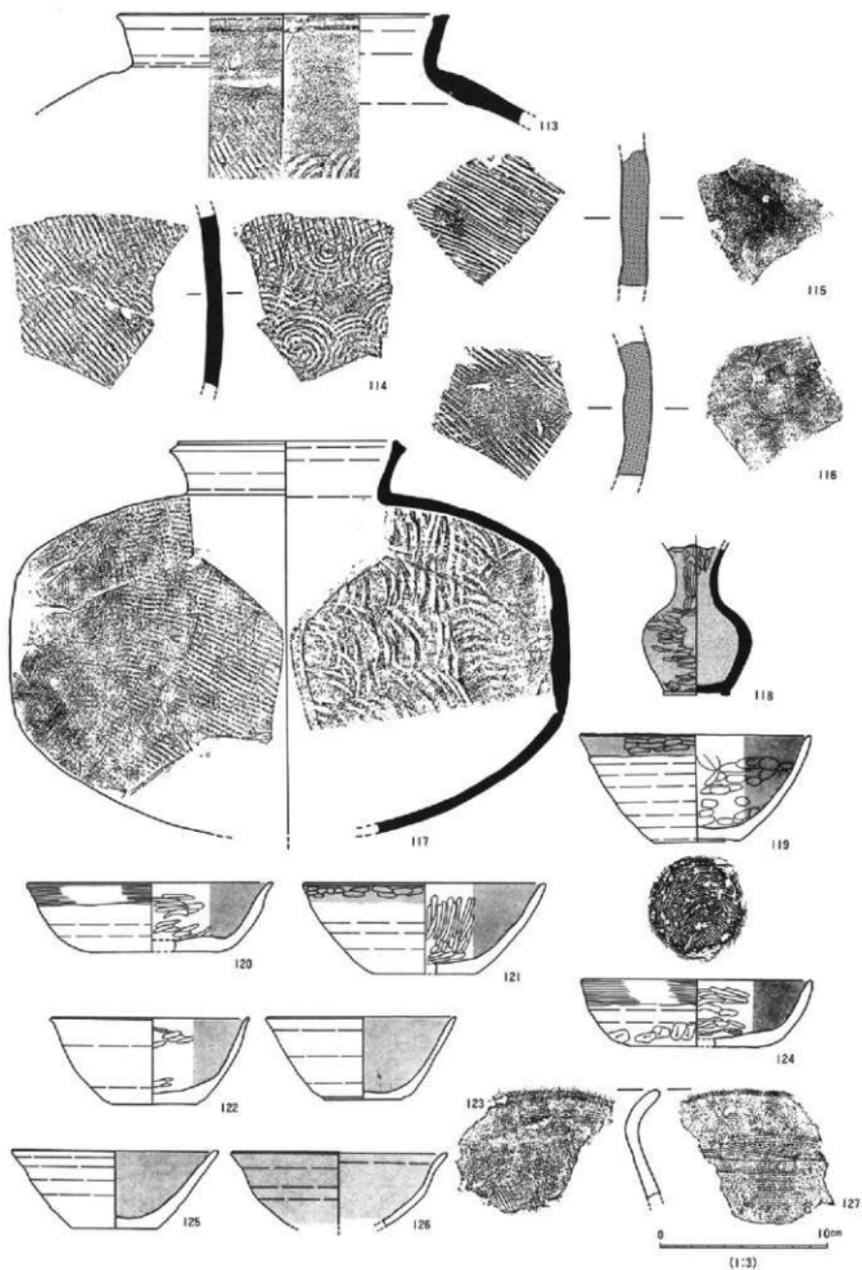
第107図 遺物実測図(4) 土器 4



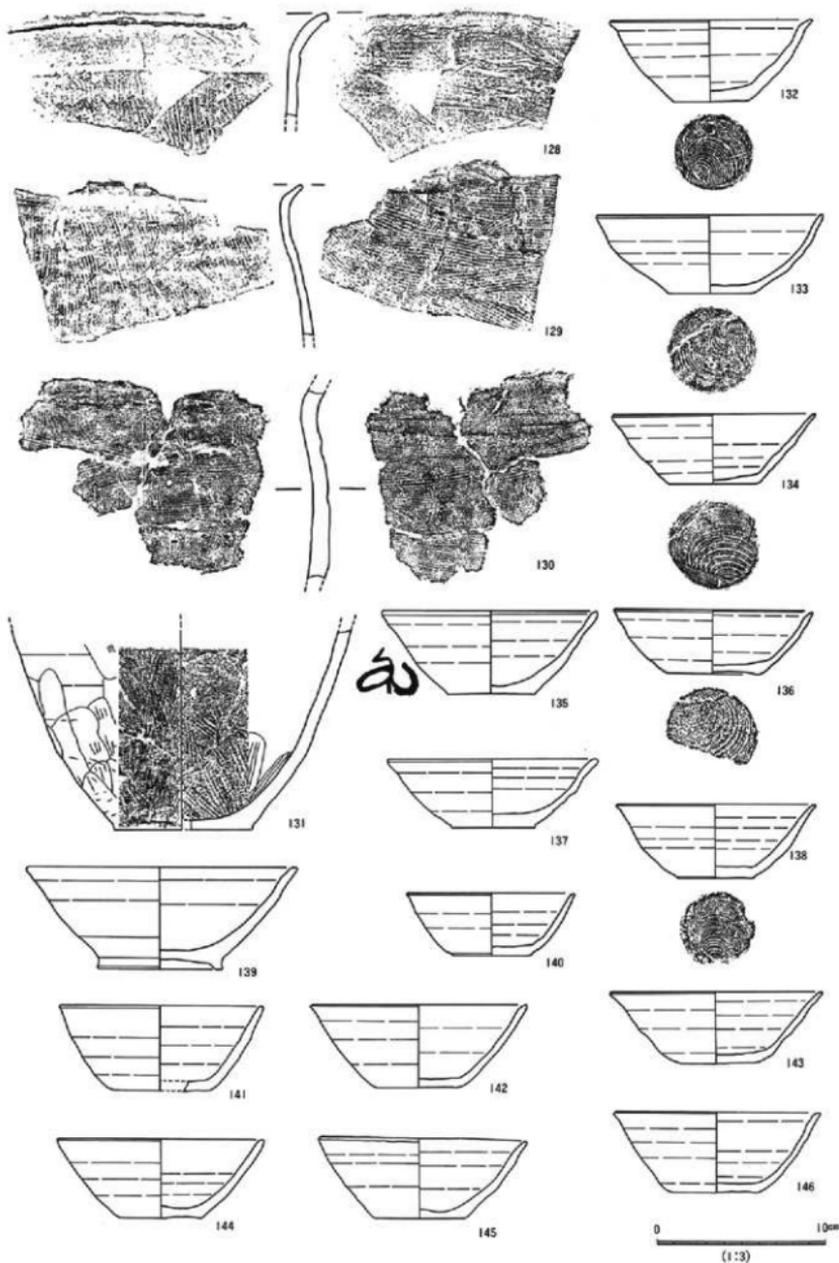
第108図 遺物実測図(5) 土器 5



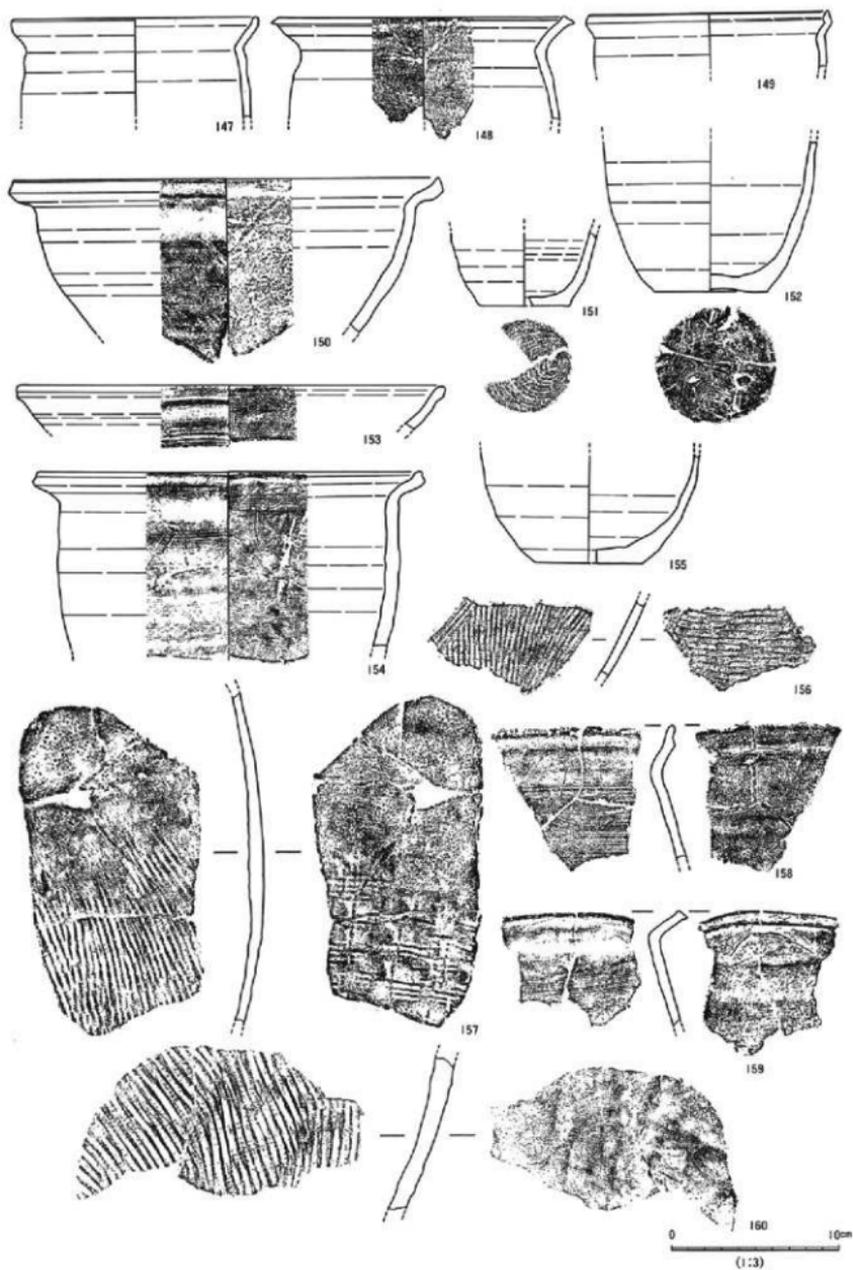
第109圖 遺物実測図(6) 土器 6



第110图 遺物実測図(7) 土器 7

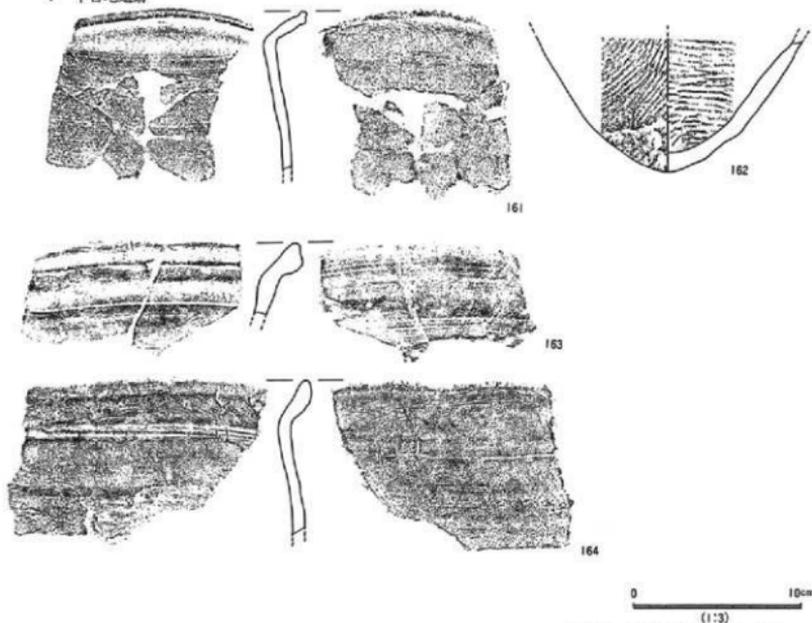


第111圖 遺物実測図(8) 土器 8



第112圖 遺物実測図(9) 土器 9

V 中谷地遺跡



第113図 遺物実測図⑩ 土器10

にはタタキ・アテ・カキメなどが見られる。

**珠洲系陶器**

a) 甕 (第109図、第110図115・116)：焼成具合により若干、色の違いがあるが、珠洲系の甕片である。細い条線状のタタキ痕が見られる。

近世陶磁器 近世以降の陶磁器は、101点出土した。いずれも表土及びI・II層の耕作土からの出土である。甕の破片資料が大半で具体的な産地や年代は不明である。

## (2) 土製品・石製品等 (第114図)

土製品としては土鍾がある。径約50mmを持つ大型のもので、第114図3は紐を巻いたような痕跡が残っている。4は紡錘車である。片面が破損している。

石製品として砥石、石器剥片がある。砥石は3点出土している。小河川跡 (SG59) からの出土がほとんどである。砥石 (6・7) は白色泥岩製で消耗が激しい。

石器剥片は1点ある。5-7区遺構検出中の出土で、弥生土器に関わる遺物と思われる。その他、鉄角釘がある。

## (3) 木製品

溝跡・柱跡から11点の木製品が出土した。柱材・曲物片など用途のわかるものの他に用途のわからない板材片がある。遺存状態の良い柱材について図示し、説明する。

柱材 (第115図第116図)：芯持ち材全体を利用するもの (2・6・7・8)、2方桁の木材を利用するもの (1・3・4・5) が見られる。また、2桁目材は底面平坦で芯持ち材利用のものは「V」字状あるいは尖頭状に手斧で削られている。

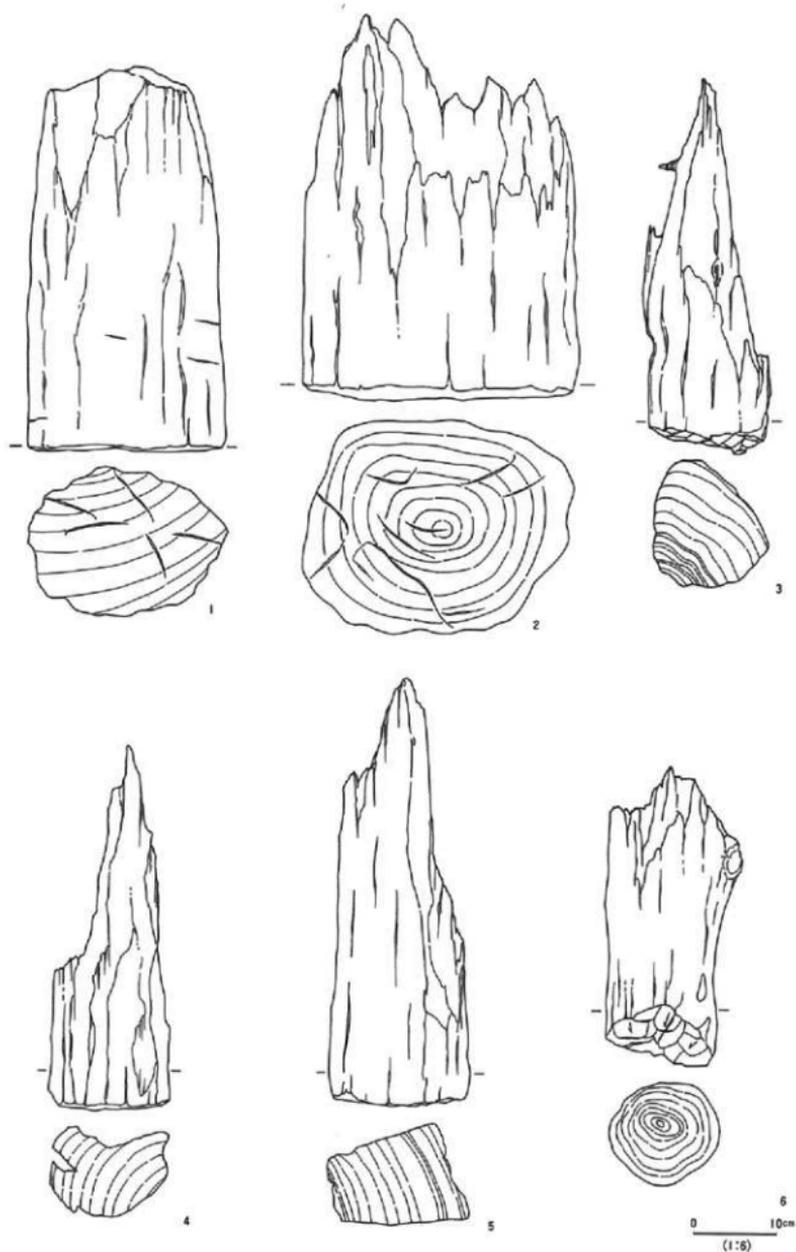
樹種同定分析 (藤根 久樹パレオ・ラボ) の結果では、1・3・5はスギ材、2・7・8はカツラ材、6はクリ材であることがわかった。このことから、1号掘立柱建物跡と4号掘立柱建物跡は、建築資材にスギ材を利用していること、また、7号掘立柱建物跡は建築資材にクリ材を利用していることが判明した。資材の選定差は、建物の構造差や時期差、建造集団の工法差を表していると思われる。中谷地遺跡での樹種の差は、年代的な差と捉えておきたい。

V 中谷地遺跡

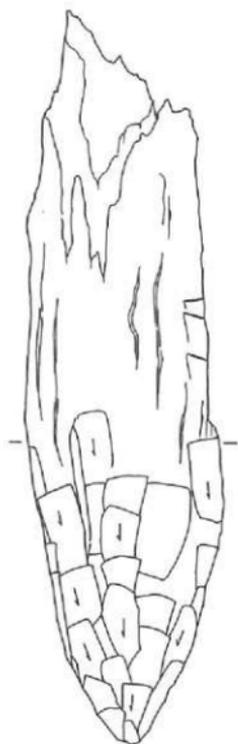


0 10cm  
(1:2)

第114圖 遺物実測図(10) 土製品・石製品他



第115図 遺物実測図(12) 木製品 1



7



0 10mm  
(1:6)

表一28 中谷地遺跡出土遺物観察表 土器(2)

押印	遺物 番号	種 別	器 種	計 測 値			底部切端	調 整 技 法		出土地点	備 考
				口徑	底径	器高		器厚	外 面		
第165区	1	弥生土器	甕				6	口縁縦文線状+ナデ	ナデ	S G 59	
	2	〃	〃				5	縄文	〃	S G 59 R P 22	
	3	〃	〃				5	縄文	〃	S P 460	
	4	〃	〃				5	沈線	ナデ	S G 59-D	
	5	〃	〃				5	〃	〃	〃	
	6	〃	〃				4	縄文	〃	S P 460	
	7	須恵器	蓋	142	27	6	ヘラ切り	ログロ	ログロ	S K 18	黒書「大玉」
	8	〃	〃	173	36	5	〃	〃	〃	S G 59 R P 79	
	9	〃	〃	142	37	7	〃	〃	〃	II層	
	10	〃	〃	140	25	5	〃	〃	〃	S G 59-D	
	11	〃	〃	150	30	6	〃	〃	〃	5-9 II	
	12	〃	〃	140	32	8	〃	〃	〃	6-II	
	13	〃	〃	134	24	7	〃	ログロ+ヘリ削り	〃	7-9 II	
	14	〃	〃	166	28	6	〃	〃	〃	S P 641 R P 66	
	15	〃	坪	142	93	36	5	停止糸切り	ログロ	S G 59-D R P 68	
	16	〃	〃	144	40	38	6	ヘラ切り	〃	S G 59 R P 43	黒書「林」
	17	〃	〃	165	40	39	5	〃	〃	S G 59 R P 30	黒書有り
	18	〃	〃	130	80	35	4	〃	〃	II層	
	19	〃	〃	145	102	37	7	〃	〃	S G 59-D	
	20	〃	〃	122	76	32	4	〃	〃	S P 390	
	21	〃	〃	133	90	37	6	〃	〃	S G 59-D	
	22	〃	〃	140	80	37	5	〃	〃	S K 11	
	23	〃	〃	132	74	34	5	〃	〃	S P 641 R P 5	
	24	〃	〃	142	70	33	5	〃	〃	S D 703	
25	〃	〃	130	35	40	4	〃	〃	S G 59-C		
26	〃	〃	134	70	32	6	〃	〃	T-C	県文化財調査資料	
27	〃	〃	128	78	31	5	〃	〃	S G 59 R P 36		
28	〃	〃	142	85	38	6	〃	〃	II層		
29	〃	〃	132	74	32	3	〃	〃	R P 41		
30	〃	〃	134	65	31	4	〃	〃	II層		
31	〃	〃	136	70	33	4	〃	〃	S G 59 R P 105		
32	〃	〃	130	80	33	5	〃	〃	S G 59		
33	〃	〃	128	56	34	4	〃	〃	R P 29		
34	〃	〃	130	60	41	4	〃	〃	S G 59 R P 17		
35	〃	〃	128	80	34	5	〃	〃	S G 59		
36	〃	〃	132	76	30	5	〃	〃	II層		
37	〃	〃	130	64	32	4	〃	〃	〃		
38	〃	〃	134	82	32	5	〃	〃	S G 59 R P 36		
39	〃	〃	134	84	39	5	〃	〃	9-4 II		
40	〃	〃	138	106	38	4	〃	〃	S G 59-D R P 8		
41	〃	〃	120	90		5	〃	〃	S G 433		
42	〃	〃	135	75	31	4	〃	〃	6-6 II		
43	〃	〃	124	90	300	5	〃	〃	T-1	県文化財調査資料	
44	〃	〃	134	68	37	5	〃	〃	II層		
45	〃	〃	144	70	37	4	〃	〃	S G 59 R P 74		
46	〃	〃	138	100	32	7	〃	〃	S G 59 R P 68		
47	〃	〃	140	70	31	4	〃	〃	II層		
48	〃	〃	140	80	32	5	〃	〃	S K 108		
49	〃	〃	140	80	30	6	〃	〃	7-9 II		
50	〃	〃	120	83	30	6	〃	〃	9-6 II		
51	〃	〃	126	75	30	4	〃	〃	II層		
52	〃	〃	138	70	32	4	〃	〃	S G 59-C		
53	〃	〃	104			5	〃	〃	S G 59-D		
54	〃	〃	130	72	27	3	〃	〃	S G 59 R P 51		
55	〃	〃	94			4	〃	〃	6-6 II		
56	〃	〃	97			4	〃	〃	S G 641 R P 64		
57	〃	〃	112	88		3	〃	〃	II層	黒書「土」	
58	〃	〃	75	19		4	〃	〃	〃	黒書	
59	〃	〃	140	78	34	5	〃	〃	5-9 II	黒書「弁」	
60	〃	〃	64			5	〃	〃	〃	黒書「玉」	
61	〃	〃	74			5	〃	〃	II層	黒書「正」	
62	〃	〃	70			5	〃	〃	S G 59 R P 24	黒書「上」	
63	〃	〃	128			〃	〃	〃	〃	黒書「王」	
64	〃	〃	130	72	42	4	糸切り	〃	6-6		
65	〃	〃	126	50	36	4	〃	〃	II層		

表一29 中谷地遺跡出土遺物観察表 土器(3)

探洞	遺物番号	類別	器種	計測値				肩部切線	調査技法		出土地点	備考
				口径	底径	器高	器厚		外面	内面		
第107洞	66	須恵器	坏	130	48	39	4	糸切り	ロクロ	ロクロ	S G 59 R P 78	
	67	〃	〃	132	48	43	4	〃	〃	〃	9-5 II	
	68	〃	〃	126	48	37	5	〃	〃	〃	6-6	
	69	〃	〃	128	49	39	5	〃	〃	〃	S G 59 R P 17	
	70	〃	〃	134	50	47	5	〃	〃	〃	S G 59 R P 18	
	71	〃	〃	140	60	47	5	〃	〃	〃	田層	
	72	〃	〃	118	47	40	5	〃	〃	〃	S G 59 R P 59	
	73	〃	〃	122	56	36	3	〃	〃	〃	S G 59	
	74	〃	〃	139	46	42	5	〃	〃	〃	〃	
	75	〃	〃	50			5	〃	〃	〃	田層	
第108洞	76	〃	〃	56			5	〃	〃	〃	〃	墨書「万」
	77	〃	〃	50			5	〃	〃	〃	S G 59	墨書「山」
	78	〃	〃	121	72	30	4	〃	〃	〃	S G 59-D	
	79	〃	高合付坏	122	76	45	3	へら切り	〃	〃	5-8 II	
	80	〃	〃	159	97	74	6	〃	〃	〃	R P 1	墨書「十」
	81	〃	〃	140	88	38	4	〃	〃	〃	S G 59-D	へら筋「×」
	82	〃	〃	134	80	62	4	〃	〃	〃	S G 59 R P 44	
	83	〃	〃	124	72	42	5	〃	〃	〃	S G 59 R P 75	
	84	〃	〃	111	62	51	3	〃	〃	〃	S G 59	
	85	〃	〃	139	76	45	6	〃	〃	〃	9-6 II	
第109洞	86	〃	〃	98	62	50	4	〃	〃	〃	田層	
	87	〃	〃	145	84	68	5	〃	〃	〃	S G 59	
	88	〃	〃	128	82	41	4	〃	〃	〃	田層	
	89	〃	〃	136	70	44	5	〃	〃	〃	〃	
	90	〃	〃	179	88	70	4	〃	〃	〃	S G 59 R P 56	
	91	〃	〃	135	82	41	5	〃	〃	〃	田層	
	92	〃	〃	98	60	51	4	〃	〃	〃	R P 23	
	93	〃	〃	132	76	44	4	〃	〃	〃	田	
	94	〃	〃	122	76	38	4	〃	〃	〃	S G 59-D	
	95	〃	〃	130	80	42	5	〃	〃	〃	田	
第110洞	96	〃	〃	86			5	〃	〃	〃	S G 59-D	
	97	〃	〃	143	100	55	6	〃	ロクロ・2条沈線	〃	S G 59 R P 68	
	98	〃	〃	128	80	28	3	〃	ロクロ・段を持つ	〃	4-7	
	99	〃	〃	66			4	〃	ロクロ	〃	S G 59-D	
	100	〃	〃	62			4	〃	〃	〃	S G 59 R P 47	
	101	〃	〃	90			4	〃	ロクロ・ヘアックスリ	〃	S G 59	底面周辺ヘアックスリ
	102	〃	〃				5	〃	〃	〃	〃	〃
	103	〃	〃	134	72	31	5	糸切り	ロクロ	〃	田	
	104	〃	壺	102			10	〃	〃	〃	R P 7	
	105	〃	〃				6	〃	ロクロ・2条沈線	〃	R P 86	
第111洞	106	〃	〃	136			6	へら削り	ロクロ・ヘアックスリ・ハケメ	ロクロ・ハケメ	S G 59 R P 36	
	107	〃	〃				9	〃	ロクロ・ハケメ・2条沈線	〃	S G 59 R P 45	
	108	〃	〃				8	〃	ロクロ	ロクロ	S G 59 R P 25	
	109	〃	〃					〃	〃	〃	S G 59	
	110	〃	壺	60			8	〃	ロクロ・磨損痕状文	〃	S G 59 R P 65	
	111	〃	〃				9	〃	〃	〃	6-4	
	112	弥生系陶器	〃				9	〃	タタキ	アテ	田層	
	113	須恵器	〃	200			13	〃	ロクロ・タタキ	ロクロ・アテ	〃	
	114	〃	〃				8	〃	タタキ	アテ	〃	
	115	弥生系陶器	〃				15	〃	〃	〃	〃	
第112洞	116	〃	〃				16	〃	〃	〃	9-9	
	117	須恵器	横板	134		224	6	〃	ロクロ・タタキ	ロクロ・アテ	S G 59 R P 23 46	
	118	土師器	壺	32	41	90	4	へら削り	ロクロ・1条・2条沈線	ロクロ・1条・2条沈線	S G 2	
	119	〃	坏	140	54	63	6	糸切り	〃	〃	S G 59 R P 58	
	120	〃	〃	146	82	42	7	へら削り	ロクロ・ナデ・着色処理	〃	S G 59-D	
	121	〃	〃	144	60	55	6	糸切り	ロクロ・1条・2条沈線	〃	S G 59 R P 60	
	122	〃	〃	129	53	52	4	〃	ロクロ	〃	S G 59 R P 52	
	123	〃	〃	114	46	50	4	〃	〃	〃	S G 59 R P 61	
	124	〃	〃	138	80	41	7	へら削り	270×110 磨損ハケメ	〃	S G 59-D	
	125	〃	〃	124	50	47	5	糸切り	ロクロ	〃	S P 596	
第113洞	126	〃	〃	130			4	〃	〃	〃	R P 1	
	127	〃	壺				8	〃	横ハケメ	横ハケメ	S G 59-D	
	128	〃	〃				7	〃	〃	〃	〃	
	129	〃	〃				5	〃	〃	〃	〃	
第114洞	130	〃	〃			9	〃	縦横ハケメ	〃	〃	〃	

表-30 中谷地遺跡出土遺物観察表 土器(4)

検出	遺物 番号	種別	器種	計測値			底部切階	調整技法		出土地点	備考
				口径	底径	器高		器厚	外面		
第11区	131	土師器	甕				7	ケズリ・ハケメ	ハケメ	6-8	
	132	赤かき土器	坏	142	44	48	4	糸切り	ロクロ	ロクロ	S G59 R P19
	133	〃	〃	135	50	48	3	〃	〃	〃	S G37 R P85
	134	〃	〃	122	54	42	5	〃	〃	〃	S G59 R P42
	135	〃	〃	132	52	50	5	〃	〃	〃	S K645 R P83
	136	〃	〃	120	54	39	6	〃	〃	〃	S G59
	137	〃	〃	127	59	41	4	〃	〃	〃	R P3
	138	〃	〃	121	44	45	5	〃	〃	〃	S K408
	139	〃	高合付坏	162	74	63	5	〃	〃	〃	S K406
	140	〃	坏	100	46	38	4	〃	〃	〃	R P31
	141	〃	〃	123	60	51	5	〃	〃	〃	S K800
	142	〃	〃	130	50	50	4	〃	〃	〃	S G59 R P19
	143	〃	〃	128	53	43	4	〃	〃	〃	S G2 R P9
	144	〃	〃	124	50	48	4	〃	〃	〃	S P325
	145	〃	〃	128	55	48	5	〃	〃	〃	R P81
	146	〃	〃	124	50	48	5	〃	〃	〃	S E645 R P83
第12区	147	〃	甕	146			5	〃	〃	〃	7-3
	148	〃	〃	180			6	ロクロ・カキメ	ロクロ・カキメ	ロクロ	S G59-C
	149	〃	〃	140			6	ロクロ	ロクロ	ロクロ	7-9
	150	〃	埴	256			8	ロクロ・タタキ	ロクロ・アテ	ロクロ	S P335 S P741
	151	〃	甕		54	44	6	糸切り	ロクロ	ロクロ	Ⅲ
	152	〃	〃	128	66	90	6	〃	〃	〃	S G59 R P73
	153	〃	埴	254			6	〃	〃	〃	S K408
	154	〃	甕	236			8	ロクロ・カキメ	ロクロ・カキメ	ロクロ	S K18 R P71
	155	〃	〃				5	糸切り	ロクロ	ロクロ	S P389 R P112
	156	〃	〃				6	ロクロ・タタキ	ロクロ・アテ	ロクロ	S E645
	157	〃	〃				8	〃	〃	〃	S K18
	158	〃	〃				6	ロクロ・カキメ	ロクロ	ロクロ	7-7
	159	〃	〃				7	〃	ロクロ・カキメ	ロクロ	R P100
	160	〃	〃				11	ロクロ・タタキ	ロクロ・アテ	ロクロ	S K408
第13区	161	〃	〃				6	ロクロ・カキメ	ロクロ	ロクロ	S G59 R P37
	162	〃	〃				10	ロクロ・タタキ	ロクロ・アテ	ロクロ	S G59
	163	〃	埴				7	ロクロ・カキメ	ロクロ・カキメ	ロクロ	Ⅲ
	164	〃	甕				6	ロクロ	ロクロ	ロクロ	S K608

表-31 中谷地遺跡出土遺物観察表 土製品・石製品

検出	遺物 番号	種別	器種	計測値(mm)			破損有無	加工	石材	出土位置	備考
				最大長	最大幅	厚さ					
第14区	1	土師		78	51		有り			Ⅱ層	穴径10mm
	2	〃		81	46		〃			〃	穴径16mm
	3	〃		79	54		〃	溝跡あり		Ⅱ層	穴径12mm
	4	紡錘車		29	45		〃	ケズリ		S G59	穴径12mm
	5	土師		79	39		〃			Ⅱ層	穴径12mm
	6	礫石		62	67	33	〃	砥き面3	砂岩	Ⅱ層	
	7	〃		61	23	22	〃	砥き面5	泥岩	S G59	
	8	〃		73	34	19	〃	〃	〃	〃	
	9	石礫(銅片)		82	33	13	〃	礫面あり	頁岩	5-7	
	10	鉄釘		137	18	9	錆び	角釘 折れ		Ⅱ層	船釘か?

表-32 中谷地遺跡遺物観察表 (柱材)

陣岡	遺物 番号	種 別	計 測 値			材 種	調 整 技 法	出 土 地 点	備 考
			長	長径	短径				
第115区	1	柱材	471	242	184	スギ	表面一部手弁ケズリ 底面ノコ 底面平坦	RW116 SP75	
	2	#	473	315	255	カツラ	表面一部手弁ケズリ 底面ノコ 底面平坦	RW92 SP48	
	3	#	442	152	136	スギ	底面手弁ケズリ	RW91 EP429	
	4	#	443	144	102		底面ノコ 底面平坦	RW93 SP617	
	5	#	519	153	121	スギ	底面手弁ケズリ	RW95 EP477	
	6	#	374	159	145	クリ	表面一部手弁ケズリ 底面手弁ケズリ 底面先端V字状	RW112 EP764	
第116区	7	#	703	202	188	カツラ	表面一部手弁ケズリ 底面手弁ケズリ 底面円すい突縮状	RW90 SP504	折ち込み柱
	8	#	840	184	160	#	表面一部手弁ケズリ 底面手弁ケズリ 底面円すい突縮状	RW115 SP568	打ち込み柱

## 5 まとめ

### (1) 掘立柱建物跡について

掘立柱建物跡は、その方位がN-75°-Wのもの、N-60°-Wのもの、N-63°-Wのものに分けられる。これらを1群・2群・3群と呼ぶことにする(第117図参照)。

1群の建物は遺跡北西部に位置し、この群どうしの切り合いはない。第1号掘立柱建物跡と第2号掘立柱建物跡がそれぞれである。第2号掘立柱建物跡は、総柱建物である。2棟は東西に規則的に配列し、建物間の距離は柱穴芯で3.3mを測る。これらの掘立柱建物跡には、雨落ち溝と思われる溝跡が附随する。第1号掘立柱建物跡西側のSD435、第2号掘立柱建物跡西側のSD524が該当する。

2群の建物は、1群と一部重なり、やや東側に位置する。第3号掘立柱建物跡と第4号掘立柱建物跡がそれぞれである。東西向きの建物ながら、2棟は並立する形となる。第4号掘立柱建物跡は北側に一部庇と思われる張り出し部を持つ。2つの建物の距離は柱芯で5mを測る。

3群の建物は1・2群の南側に位置し4号掘立柱建物跡と切り合う。5号掘立柱建物と6号掘立柱建物跡がそれぞれである。2棟は2群に近い向きで、東西に規則的に配列する。建物間の距離は柱穴芯で0.8mを測る。これらの掘立柱建物跡には、雨落ち溝と思われる溝跡が付随する。5号掘立柱建物跡のSD412、6号掘立柱建物跡北側のSD564が該当する。

第2群4号掘立柱建物跡の梁行きと第3群5号掘立柱建物跡の梁行きが1.8m(6尺)で一致し、掘り方も類似することから、切り合いが見られるものの、2群と3群は近い時期が想定される。

調査区東南の建物群は、1～3群とのセット関係はつかむことができなかった。ただ、7号掘立柱建物跡は掘形の特徴だけを見れば、1群の建物に組そうである。また、9号掘立柱建物跡は、規模が2号掘立柱建物跡に近似する。棟向きもほぼ揃うことから、これも1群の建物に組そうである。

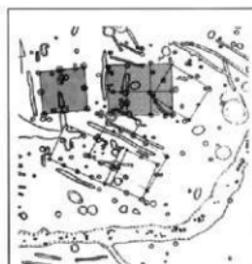
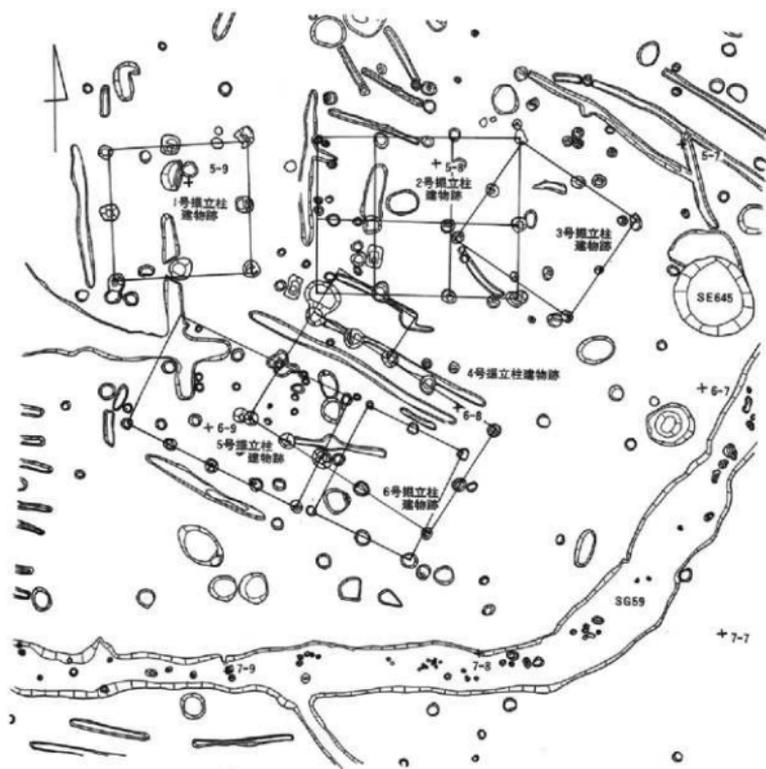
井戸は1基のみの検出であった。調査区のほぼ中央、自然堤防の高まりの中央部に位置する。検出された建物群の中心部にも位置している。井戸跡底から完形のあかやき土器が出土しており、9世紀後半以降の年代が想定される。

### (2) 畝状溝跡について

中谷地遺跡からは、畝状溝跡はまとまりとして8ヶ所確認した(第118図)。

区内では、これまでも幾多の遺跡において畝状溝跡が確認されている。溝跡は古代の遺構面から検出されることもあり、奈良・平安時代以降に掘り込まれたものが大半を占めるようである。溝跡は規則的な配列を成し、5～20条のグループを持つことが多い。検出面からの深さが20cm弱で自然堤防の比較的微高地に掘り込まれている。

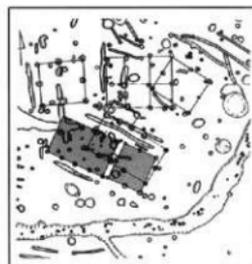
これまでの細長い溝跡は、畑作跡地と考えられている。しかし、栽培種など分からず近世農村文書等による作物の特定が求められる。



1群(SB1, SB2)



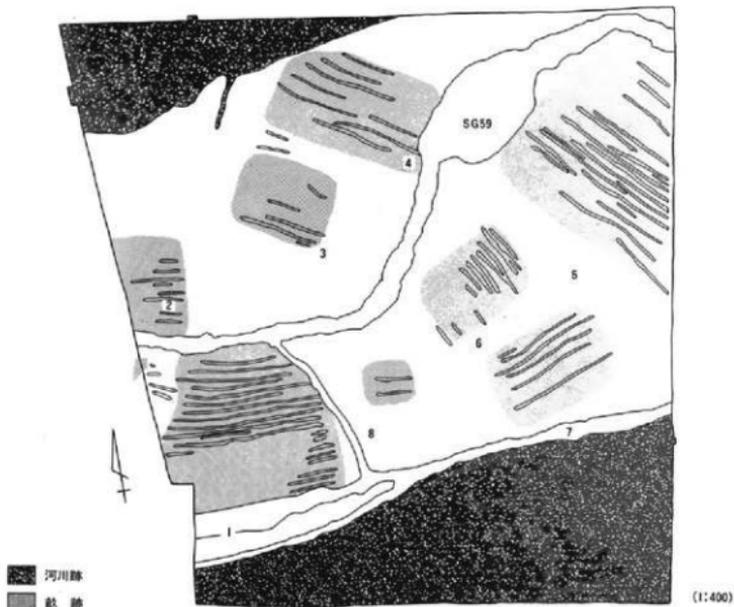
2群(SB3, SB4)



3群(SB5, SB6)



第117図 獨立柱建物跡群配置圖



第118図 畝状溝跡ブロック配置図

## (3) S G59出土土器と城輪柵跡周辺の8世紀～9世紀の土器群

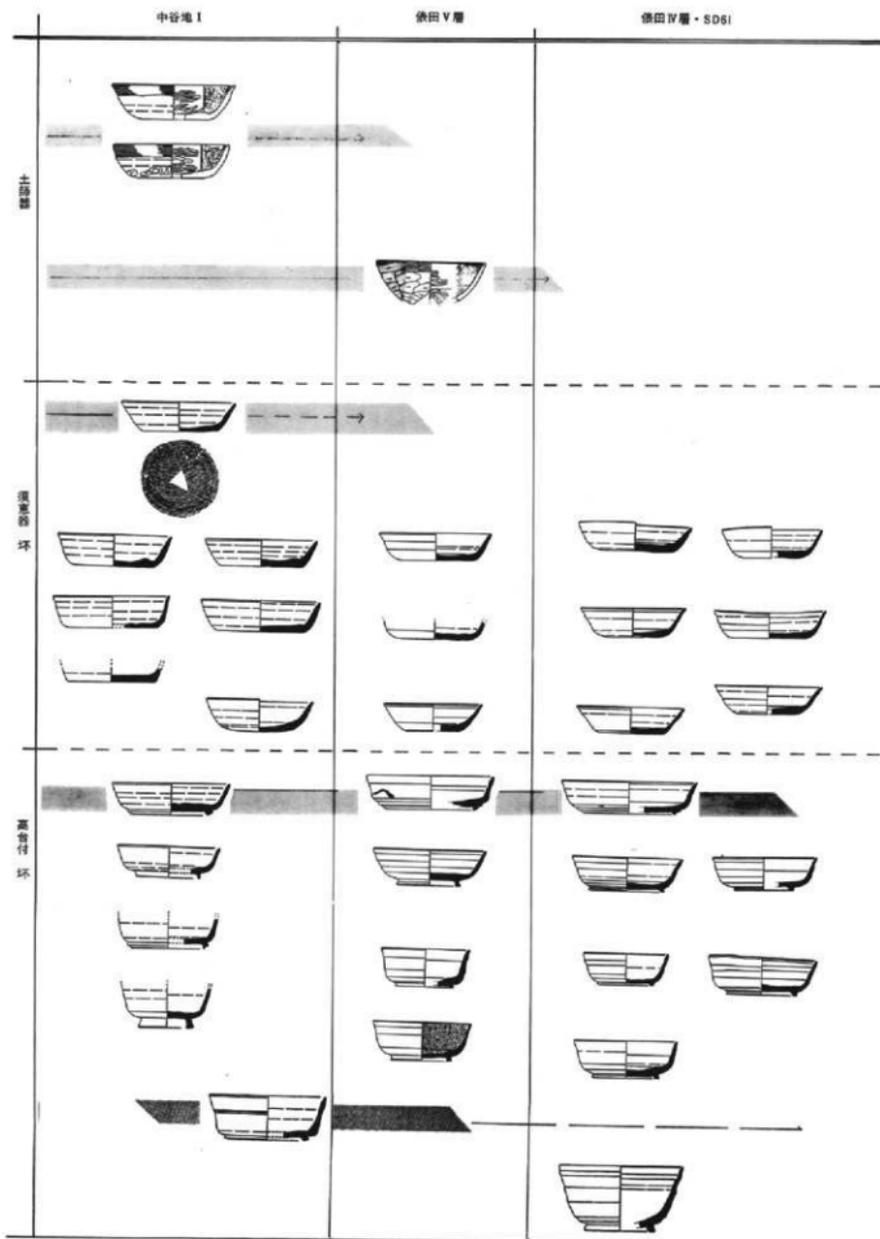
S G59溝跡からは須恵器582点、あかやき土器983点が出土した。調査区中央部付近と北東付近からの4ヶ所から特にまとまって土器類が出土している。破損資料、破片資料が大半を占めるが、完形の坏も出土している。いずれも投げ捨てられたような状態で検出されている。

溝跡(S G59)出土の土器は、その形態や製作の特徴、調整等から3グループに区分した。それぞれ中谷地Ⅰ・中谷地Ⅱ・中谷地Ⅲ群土器と設定する。中谷地Ⅰ群はS G59のD地点からの一括遺物である。静止糸切り底部へラ調整の坏、ロクロ使用内部黒色処理された土師器坏、体部が直に立ち上がる須恵器坏、そしてハケメ調整の土師器坏が組成する。D地点から、やや離れたところから口縁部に櫛描き波状文の施された甕が出土している。

中谷地Ⅱ群はS G59のA地点からの一括遺物である。須恵器で底部へラ切り坏、横板、あかやき土器の甕などが組成する。坏の体部はやや外反し、底径も若干小さい。中谷地Ⅲ群はS G59のB地点からの一括遺物である。須恵器で底部切離しが回転糸きりの坏が見られる。また、黒色土器が組成する割合が高い。

これらの土器を理解するためにも、庄内地方北半における同時代の資料、特に酒田市城輪柵遺跡周辺から出土した土器群をもとに、8世紀～9世紀の土器群について考えてみる。

国指定史跡「城輪柵」周辺は、1970年代以降、ほ場整備等に係る発掘調査により、数十ヶ所に及ぶ奈良・平安時代の遺跡が調査されてきた。資料の蓄積によって、おぼろげながら



第119図 城輪跡周辺 8世紀後半の土器交通案

も当時の集落の様子や土器の様相が明らかにされ、幾つかの研究結果が報告されている。昭和59年(1984)庄内でひらかれた城柵官衛遺跡検討会で、古代出羽国の動向、城輪柵の構造、周辺集落について話し合いが持たれた。近年は、「山形県史・通史篇」や市町村史において、古代出羽国の主に政治的な動きについての研究成果が報告されている。

一方、東北地方における奈良・平安時代の土器研究としては、氏家和典(氏家1957)、岡田茂弘・桑原滋(岡田・桑原1974)、白鳥良一(白鳥1980)らのすぐれた研究があげられる。一般的に底部切離し静止ヘラ切り・ヘラ切りから糸きりへ、ケズリ調整は有から無へ、法量では底部が小さくなる変遷の方向で考えられている。山形県内の奈良・平安時代の土器群研究も、当初は宮城県側資料や研究上の知見と比較する方向で進んだ。近年、仲田茂司(仲田1994)は、東北地方におけるロクロ土師器の受容と展開についてまとめられ、ロクロ土師器は、8世紀後半を中心とする時期と須恵器にかわって食膳具の主役となる10世紀前半を中心とする時期に大きな画期があると指摘された。

山形県内の奈良・平安時代の土器については、佐藤庄一により、遺構内一括出土土器を基にした土器編年が示された(佐藤1983)。また同じ頃、渋谷孝雄・阿部明彦らは新潟県や富山県出土土器との比較から変遷や年代について論じている(渋谷・阿部1983)。その後、阿部明彦は8世紀代の須恵器や非ロクロ使用土師器甕・あかやき土器杯について新知見を追加された(阿部1985)。1988年には、秋田の船木義勝らが山形県内の須恵器窯跡出土の杯類の分類や法量分析から、3期に大別した(岩見・船木他1988)。この中でⅠ期(8世紀前半～8世紀中葉)Ⅱ期(8世紀後半～9世紀中葉)Ⅲ期(9世紀後半～10世紀後半)に区分し、酒田市願瀬山4号窯はⅡ期に位置づけている。1996年、斉藤俊一は、墨書土器の集積と須恵器ヘラ切り杯の分布や分類から8世紀から9世紀の土器の再検討を行っている(斉藤俊一1996)。さて、8世紀から9世紀の土器について、これまでの調査研究で明らかになっている点を整理すると以下のようにまとめることができる。現時点で、もっとも古い土器群は、俵田遺跡Ⅴ層出土土器群である。俵田Ⅴ層(SM60祭祀遺構下)からは、国分寺下層式の土師器杯・甕と須恵器蓋で宝珠形の爪を有するもの・体部が急に立ち上がるもので底部の大きい坏類などが伴出し、8世紀後半の年代が想定されている。同じく溝跡(SD61)からの一括遺物は8世紀末～9世紀初頭に相当するもので、無遺物層を挟んで、Ⅱ～Ⅲ上面(SD202・SX22)の土器群(9世紀後半)へと層位的な変遷が追える。また、8世紀後半の窯跡出土資料として遊佐町刺龍神社西窯の土器群が目される(斉藤俊一1996)。続いて、9世紀前半の土器群としては、酒田上ノ田遺跡(佐藤他1982)の溝跡(SD401)があげられる。佐藤庄一により、庄内地方第Ⅰ期として設定された一括資料で、須恵器が80%、あかやき土器が18.2%を占める。ヘラ切り杯が主体を占めるもの、糸きり杯が出土しており、併存することを指摘している。ここでは横瓶が出土している。

そのほか八幡町沼田遺跡(SD331)からは、227点の土器が出土したが、須恵器の割合が高い。蓋は宝珠形に名残を残し、坏はすべてヘラ切り無調整で底から体部にかけてやや丸みを持つ。9世紀前半頃と想定されている。酒田市南興野遺跡(SD55)からは多数

の土器や木製品が投げ込まれた状態で検出され、良好な一括資料がある。須恵器環には、墨書土器が多い。ヘラ切り環が大半であるが、少量糸きり環が伴う。9世紀前半に位置づけられている。その他、平田町桜林遺跡や西田遺跡・酒田市生石2遺跡などからも、まとまった土器群が得られている。土器群の変遷は、基本的に明確な層位の上下関係や遺構切り合いに裏づけられた一括遺物を検討資料とすることによって、慎重にかつ的確に解明されていく必要がある。8世紀後半から9世紀前半にかけては、次のような変遷を想定する。

表一三 城輪柵跡周辺における8世紀～9世紀の土器変遷案

8世紀後半		9世紀前半	
俵田遺跡V層	⇨ 俵田遺跡SG61	南興野遺跡SD55	沼田遺跡SD331
	IV層	西田遺跡SX22	上ノ田遺跡SD601
		桜林遺跡SD72	
中谷地I		⇨	中谷地II ⇨
(剣龍神社西窯)		山橋5遺跡1号窯	原瀬山4号窯

俵田遺跡V層段階は、国分寺下層式土師器を含み、非クロコ壺や宝珠形把手の壺・底径が大きい環・断面V字状の高台をもつ環など、新潟県北半での山三賀福年(坂井秀弥也1989)のI～II期に相当する土器群である。

俵田遺跡SG61、IV層段階はあかやき土師器壺・埴が出現する。宝珠形蓋は、崩れていき、底径が大きいヘラ切り環が多様な変異をみせる段階である。

沼田遺跡SD331段階は、少量須恵器の糸きり環が出現する。ヘラ切り環は、やや底径が小さくなり、底から体部にかけて丸みを持つ環が見られる。この段階に横瓶が組成するケースが多い。

中谷地遺跡SG59出土土器は、以上の3段階中、俵田V層段階か、それ以前に該当する資料と沼田SD331段階に該当する資料が見られる。それぞれ中谷地I群・中谷地II群と対比できる。

中谷地I群は、俵田V層と比較してみると土師器壺、高台付環、波状文を持つ壺などと類似する点が見られる。ただ、静止切り環やヘラ切り土師器環が組成することを考えるならば、俵田遺跡がV層よりも若干古い段階と推測しておく。須恵器環の法量を比較するならば、剣龍神社西窯資料により類似性が見い出される。中谷地I群土器に類似する資料を県外に探すと秋田県末館I窯跡出土の坏群に近似する。末館I窯跡の土器群の年代については、岩見誠夫・船木義勝らによって考察が加えられ、8世紀中葉と位置づけられている。また、新潟県新発田市山三賀遺跡出土第I期土器群にも近い。山三賀第I期土器群は非クロコの土師器壺やクロコ使用土師器が組成の主体で、須恵器の相対的割合は少ない。須恵器は食器が大半を占めるといふ。福島県新鶴村大久保窯跡B1窯跡では回転ヘラケズリ再調整、ヘラ切り後ナデ調整の坏など山三賀I期に相当する資料が出土しており、8世紀中

葉と位置づけられている。中谷地遺跡でみられた台部が断面「V」字状になる高台付坏は、新潟県・富山県などでは8世紀段階の高台付坏の特徴に見ることができる。また、宮城県  
の事例では、国分寺下層新段階の土師器にロクロ調整ヘラ切りの黒色土器が出現しており、  
中谷地I群のロクロ土師器もその範疇に位置づけることが可能である。以上の様相を考慮  
すると中谷地I群土器は、俣田V層以前、絶対年代で8世紀中葉頃と捉えておきたい。8  
世紀中葉と言え、出羽国が建国されて間もない時期で、733年(天平5)には出羽櫛が秋  
田城へ移転している。秋田城跡第54次調査S G 1031の第45層～50層出土土器群(8世紀後  
半期)との比較がもつめられよう。後統する俣田IV層・S G 61段階に相当する窯跡として  
山楯5遺跡窯出土一括資料があげられる。報告書によれば、窯内であかやき土器壺・埴も  
焼成されていること、少量ながら杉葉模様の硯台が生産されており8世紀中葉～末の時期  
と報告されている。ただ、坏形態は、沼田遺跡や西田遺跡例に類似している。

中谷地II群は、底径の大きい底部ヘラ切り坏が特徴的な土器群であり、横瓶が組成する。  
八幡町沼田S D 331や平田町西田遺跡S X 22・桜林遺跡S D 72などで同様な一括土器資料が  
得られている。窯跡では、酒田市願瀬山4号窯がこの時期の窯跡としてあげられ、秋田県  
では、葛法1・2号窯がこの段階に相当する(岩見・船木1988)。これらの土器群は岩見・  
船木編年では9世紀前半に位置づけられている。中谷地II群もこの頃と思われる。8世紀  
末～9世紀前半は、延暦年間・弘仁年間にあたり城輪柵跡が国府として機能したと考えら  
れている時期である。城輪柵跡出土土器群との比較が必要となる。

中谷地III群は、須恵器坏は糸切りに代わり、あかやき土器・黒色土器が組成する割合が  
高い。渋谷孝雄(1989)による遊佐町下長橋遺跡での土器編年に対比すれば、9世紀後半  
から10世紀初頭の年代が相当する。

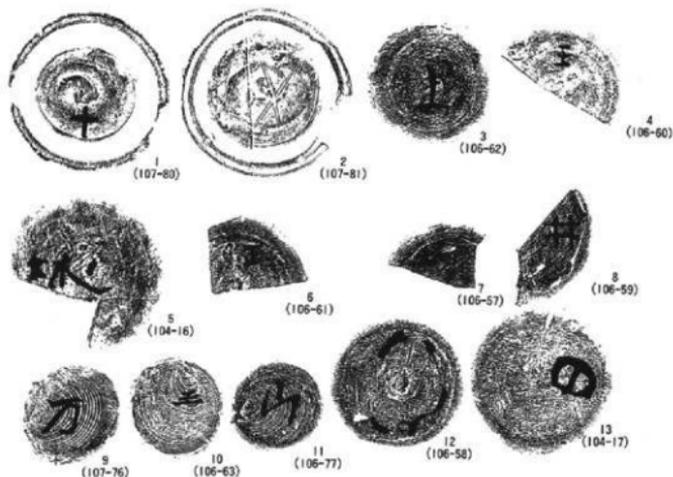
表—34 庄内地方の8世紀から9世紀初頭の動向

西暦	和 暦	政 治 的 動 向	遺 跡
708	和綱1年	出羽郡の建郡 (『続日本紀』)	秋田城
712	和綱5年	出羽国の建国 (『続日本紀』)	
733	天平5年	出羽櫛の秋田高清水岡への移転 国府も移転したか。	
737	天平9年	大野東人の軍、多賀城から雄勝へ進軍	
760～	天平宝字以降	続けて百済王が出羽国守になる。	
785	延暦4年	百済王 英孫 出羽守になる。(『続日本紀』)	中谷地 I 俣田 V
804	延暦23年	秋田城の停廃 河辺府の保持が強調される。 出羽国府の南遷 (『日本後紀』)	俣田 IV
830	天長7年	出羽国北部大地震 秋田城の壊城 (『類聚国史』)	城輪柵跡 沼田 西田

## (4) 墨書土器について

墨書土器は、須恵器・あかやき土器の坏や蓋で確認した。坏底部22点、坏体部1点、蓋1点確認している。ヘラ切り坏への墨書は底部端に位置するものが多い。糸切り坏では中央部になされている。墨書された文字は「王」「大玉」「井」「林」「上」「十」「山」「万」「土」「正」「死」が見られる。その他「〇」など印的なものも存在する。「上」「井」「林」「十」「土」「王」「正」は須恵器ヘラ切り坏に見られ、「王」「万」「山」は須恵器糸切り坏に見られる。これら墨書土器の多くは溝跡(SG59)内出土である。さて、庄内地区でこれまでに出土している墨書土器と比べると、「王」は遊佐町下長橋遺跡、遊佐町宮ノ下遺跡、八幡町沼田遺跡で出土している。「井」は酒田市関B遺跡、酒田市手蔵田2遺跡、酒田市生石2遺跡、酒田市上曾根遺跡で出土している。「上」は、遊佐町地正面遺跡、酒田市熊野田遺跡で出土している。「万」は遊佐町小深田遺跡、遊佐町北目長田遺跡、遊佐町宮ノ下遺跡、酒田市関B遺跡、酒田市手蔵田5遺跡、酒田市生石2遺跡、酒田市沼田遺跡、平田町桜林興野遺跡などで出土している。(斉藤俊一1996による)

この中で沼田遺跡からは、「王」が64点出土し、「山」「万」等の墨書も見られ文字の組成から類似が見られる。「王」の文字は、百済王との関わりについて関心が持たれているが判然としなない。



0 10m  
(1:3)

第120図 中谷地遺跡墨書土器集成

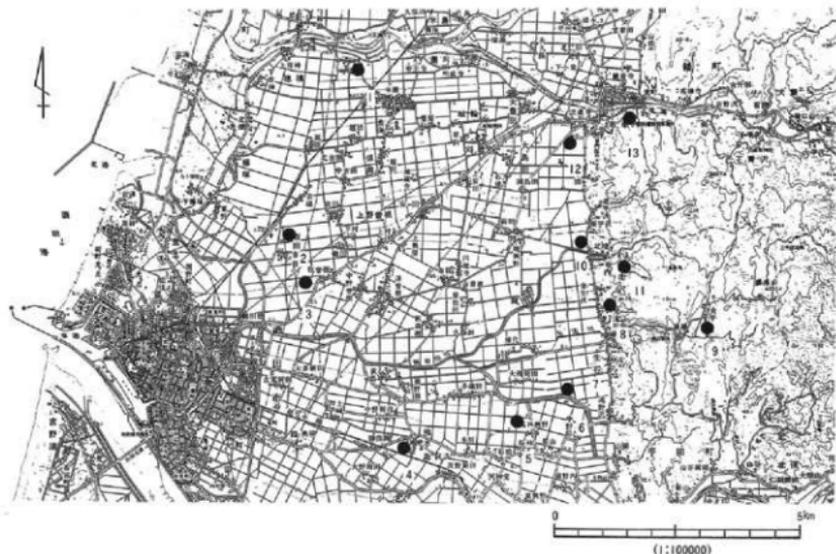
## (5) 庄内平野・砂丘の縄文～弥生時代遺跡 (第121図)

中谷地遺跡や梵天塚遺跡から縄文土器・弥生土器が出土したことで、庄内平野部での遺跡立地の在り方をとらえ直す必要がある。庄内では、これまでに平地や砂丘でも少ないながら縄文・弥生時代遺跡の発見があった。これら周辺の遺跡を検討し、生活領域や地形などについて考える。

大正10年、酒田市黒森地区で赤川の改修工事に際して、砂丘下から縄文時代晩期～弥生時代の土器が出土した。郷土史家阿部 正の「山形県黒森砂丘下の遺跡」(1942『考古学雑誌32-10』、日本考古学会)の報告によれば、遺物は「河底に近い所、すなわち砂と泥土を混じた稍々黒い層」の中に発見された。おそらくは泥炭層と思われる。また、樹木根や倒木の存在は、砂丘はまだ発達しないで、樹木は覆われていたことを示す。採集された遺物は、朝日道博物館と酒田市立光丘図書館に保管されている。

遊佐町藤崎山および青塚付近から石鏃が出土している。佐藤禎宏(1976『遊佐町神失道遺跡について』、『庄内考古学13』)により、資料の由来や位置について紹介されている。佐藤によれば古代『三代実録』に残る石鏃飛来地は、神失道遺跡の可能性が高いと推定された。

藤崎周辺では、近世に入り砂丘植林に携わった佐藤藤蔵なるものが石鏃を皇室に献上した古文書が佐藤家に残されている。



表一35 酒田周辺の縄文・弥生時代遺跡一覧

遺跡名	位置	標高	出土遺物	文献
1 向田遺跡	酒田市本郷字向田	8.4m	縄文土器・土師	山形県歴史文化センター報告
2 中谷地遺跡	酒田市本郷字向田字中谷	3.2m	弥生土器	山形県歴史文化センター報告
3 梵天塚遺跡	酒田市本郷字向田字梵天塚	3.2m	弥生土器	山形県歴史文化センター報告
4 筒子島遺跡	酒田内船子島	6.3m	縄文土器 弥生土器	山形県歴史文化センター報告
5 西田遺跡	字山崎新田字西田	7.2m	弥生土器	山形県歴史文化センター報告
6 生石4遺跡	酒田内生石	8.6m	弥生土器	山形県歴史文化センター報告
7 生石2遺跡	酒田内生石	12m	弥生土器 砂鉄式	山形県歴史文化センター報告

第121図 縄文・弥生時代遺跡分布図

遺跡名	位置	標高	出土遺物	文献
8 北沢遺跡	酒田市北沢	50m	縄文土器 石器	1975山形県遺跡地図
9 生石3遺跡	酒田市本郷字向田	104m	縄文土器 石器	1975山形県遺跡地図
10 北塚遺跡	酒田市北塚	12m	縄文土器	1975山形県遺跡地図
11 入ノ沢遺跡	酒田市北沢字入沢	50m	縄文土器	1975山形県遺跡地図
12 榎橋遺跡	八幡町一条字北塚	12.4m	縄文土器 後期	山形県歴史文化センター報告
13 八森遺跡	八幡町一条字八森	65m	縄文土器 前期	山形県歴史文化センター報告

昭和49年(1974)、当時致道博物館次長酒井忠一氏は、埋蔵文化財分布調査中に鶴岡市大字三瀬字宮の前で、弥生時代(天王山式)の土器を採集した。

昭和50年(1975)、庄内砂丘の地質を研究されている角田清美氏は鶴岡市七塚で砂丘の断面調査中に土器片を発見した。発見の知らせを受けた酒井忠一氏と佐々木七郎氏は現地調査を行い、第2黒砂層とされる層準に相当することを確認した。

昭和50年代に入り、庄内では、ほ場整備が本格化し平野部での発掘調査が進められた。

昭和60年(1985)ほ場整備に係る酒田市生石2遺跡の調査で、この地域ではめずらしい縄文時代から弥生時代中期にかけての土器が大量に出土した。亀ヶ岡文化の伝統と西日本の遠賀川様式の影響を受けた土器が出土したことで、庄内でも、弥生時代早くに稲作文化が始まっていたことを裏づけることになった。生石2遺跡での弥生時代に属する遺物の発見後、酒田周辺の平野部では縄文時代～弥生時代の資料について関心が高まった。平野部ではこれまでに第121図、表-35に示した遺跡から縄文土器や弥生土器が出土している。まとまった資料は生石2遺跡のみであるが、明らかに平野部にも遺跡が存在することは明白である。以前から東側丘陵上では縄文時代遺跡が存在することは知られており、1975年の山形県埋蔵文化財地図(山形県教育委員会)では8ヶ所の遺跡が確認されている。生石周辺では八幡町榎掛遺跡で、縄文時代後期中葉の土器片が出土している。また、酒田市熊野田遺跡では、縄文時代晩期の鉢が出土している。酒田市向田遺跡でも縄文時代晩期の土器や石鏃・石筥が出土した。ここは標高6～7mの地点である。梵天塚遺跡・中谷地遺跡でも弥生土器が出土し、平野部の広い範囲に分布が広がることがわかってきた。

庄内砂丘の形成史をまとめられた角田清美氏(1976角田清美「庄内平野の地形について」『庄内考古学13』)によれば、砂丘には3枚のクロスナ層が存在し、飛砂が少なく砂丘が発達しなかった安定した時期があると示された。この中でクロスナII層は、酒田市黒森で縄文時代から平安時代の遺物が採集された層に相当する。クロスナII層は、酒田市浜中付近で採集された資料を用いてC<sup>14</sup>年代測定がなされた結果、3,550±100年前(GaK-1235)の値が得られている。角田は砂丘での遺跡形成はクロスナII層の安定期にあたと示された。

以上、遺跡物の発見は、砂丘地帯・湿地帯・湖沼地帯にも縄文人が生活領域を持っていたことを物語る。庄内平野は古代以来開拓が進み、日本有数の水稲地帯になっている。地表は冠水状態になるため、シルト層はグライ化が見られ、耕地の改変により、平安時代の遺構は地表下30cmほどで確認できる。ところが中谷地遺跡では、表土下約80cmで弥生土器を検出した。梵天塚遺跡では、深く掘り込まれた溝跡から弥生土器が出土した。青灰色シルト層中以降に縄文時代から弥生時代の遺構が存在する可能性が高まった。

## 報告書抄録

ふりがな	つらばいせき じんてんぐかいせき なかやちいせきほつちゅうしゅうこくしよ							
書名	土崎遺跡・梵天塚遺跡・中谷地遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第42集							
編著者名	石井浩幸							
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 Tel 0236-72-5301							
発行年月日	西暦 1996年 12月 20日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
土崎	山形県 酒田市 大字土崎 字屋敷添	6204	2027	38度 55分 30秒	139度 52分 45秒	199507011 ～19950804	1,050	東北横断自動車道(酒田～酒田北間)建設工事
梵天塚	山形県 酒田市 大字牧曾根 字梵天塚	6204	平成元年 度登録	38度 55分 57秒	139度 52分 22秒	19950724 ～19950929	3,500	同上
中谷地	山形県 酒田市 大字吉田新田 字中谷地	6204	平成元年 度登録	38度 56分 32秒	139度 51分 51秒	19950911 ～19951129	3,500	同上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
土崎	集落跡	平安時代	掘立柱建物跡 井戸跡 土壇 溝跡 畝跡	2棟 5基 13基 6条 21条	須恵器 あかやき土器 珠洲系陶器 漆碗	標高3mの微高地に立地。土壇や井戸跡から多数の木製品が出土。		
梵天塚	集落跡	中世	土壇 溝跡 井戸跡	199基 5条 2基	珠洲系陶器 明栄付皿 青磁 古銭 虫物 へら	戦国期の墓地跡。土壇内から多数の木製品が出土。溝跡から埋納銭約1800枚が出土した。		
中谷地	集落跡	弥生時代 平安時代	土壇 掘立柱建物跡 井戸跡 土壇 溝跡 畝跡	1基 9棟 1基 33基 6条 128条	弥生土器 須恵器 あかやき土器 土師器 磁石 紡錘車	弥生時代中期の遠賀川式折衷系壘が出土。標高3mの自然堤防上の集落跡。3時期にわたる建物跡群を核出。		



付 編



土崎遺跡 SK4 土壌分析・樹種同定

バリノ・サーヴェイ株式会社

## はじめに

土崎遺跡（山形県酒田市所在）は、平安時代～中世の遺物・遺構を中心とした遺跡である。今回の分析は、トイレ遺構の検証と、木製品の樹種構成という2つの目的に関して実施する。

トイレ遺構とみられているのは、平安時代～中世のものと思われる遺構（SK4）である。発掘調査所見によれば、はじめは井戸として使われていたが、底部に篝火が多量に検出されることから、後にトイレや「肥溜め」として転用されたとみられている。今回は、遺構埋積物中の大型植物遺体、花粉、寄生虫卵の分析を行って、トイレ遺構の検証を試みる。また、これと併せて土壌の理化学的特性についても調査し、遺構内内容物の痕跡が残されていないかどうか調査する。なお、土壌分析については、目的を考慮してpH、電気伝導度、全炭素、全窒素、炭素率、全リン酸、亜鉛を選択した。

一方、木製品については、平安時代～中世のものと思われる建物跡や溝内から検出された木製品を対象として分析を行う。

## 1 試 料

トイレ遺構の検証については、SK4内の土壌1点について、各分析（花粉・寄生虫分析、大型植物遺体分析、土壌理化学分析）を実施する。木製品については、11点を同定対象とする。試料については、結果とともに表3に示す。

## 2 方 法

## (1) 花粉・寄生虫分析

試料8cm<sup>3</sup>を量り取り、水酸化カリウム処理による試料の泥化、1/4mmによる篩別、フッ化水素酸による鉱物質の除去を行い、花粉・寄生虫卵を濃集する。残渣の一部を量りとりてプレパラートを作成して同定する。同定個数から1cm<sup>2</sup>あたりの個数を換算して、グラフ化する。

## (2) 大型植物遺体分析

試料約300ccについて、水酸化ナトリウム水溶液を加えて放置し、泥化させる。0.5mmの篩を通して残渣を集め、双眼実体顕微鏡下で同定可能な植物遺体を抽出・同定する。

## (3) 土壌理化学分析

pH(H<sub>2</sub>O)はガラス電極法、電気電動度(EC)はECメーター法、全炭素・有機炭素・全窒素・炭素率はCNコーダー法(土壌標準分析・測定法委員会, 1986)、全リン酸は硝酸・過塩素酸分解ーバナドモリブデン酸比色法(土壌養分測定法委員会, 1981)、亜鉛は硝酸・過塩素酸分解ー原子吸光度法(渋谷ほか, 1978)でそれぞれ行った。以下に分析操作を示す。

## a) 分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩でふるい分けをする。この篩通過試料（風乾細土試料）をpH（H<sub>2</sub>O）、電気伝導度、全リン酸、リン酸吸収係数、可給態窒素、亜鉛の分析試料とする。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し、0.5mm篩を全通させ（微粉碎試料）、全炭素、全窒素、有機炭素の分析試料とする。風乾細土試料については、105°Cで4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

b) pH（H<sub>2</sub>O）

風乾細土10.0gをはかりとり、25mlの蒸留水を加えてガラス棒で攪拌する。30分間放置後、再びガラス棒で懸濁状態とし、pHメーターで測定する。

## c) 電気伝導度

風乾細土10.0gをはかりとり、50mlの蒸留水を加えて1時間振とうする。振とう後、すみやかにECメーターの電極を懸濁液に挿入し、電気伝導度を測定する。

## d) 全炭素・全窒素

微粉碎試料100～1,000mgを正確にはかり、助燃剤（酸化コバルト）5gと混合する。これをサンプルボードに乗せて、CNコーダー（柳本制作所製）に挿入する。挿入された試料をキャリアガス（He）気流中で950°Cに加熱燃焼する。発生した燃焼ガスを純化させ、CO<sub>2</sub>及びN<sub>2</sub>の組成にする。次いで希釈→分取の工程を経て、TCD検出器により炭素及び窒素の濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた試料中の水分から、乾土あたり炭素量（T-C%）と窒素量（T-N%）を求める。

## e) 全リン酸

風乾細土試料2.00gをケルダールフラスコにはかり、はじめに硝酸（HNO<sub>3</sub>）5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO<sub>4</sub>）10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で100mlに定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液（バナドモリブデン酸・硝酸液）加えて分光光度計によりリン酸（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g）を求める。

## f) 亜鉛

風乾細土試料2.00gをケルダールフラスコにはかり、はじめに硝酸（HNO<sub>3</sub>）5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO<sub>4</sub>）10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で100mlに定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、原子吸光度計により亜鉛（Zn）濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの亜鉛量（Zn mg/kg）を求める。

## (4) 樹種同定

剃刀の刃を用いて、試料の木口（横断面）・柱目（放射断面）・板目（接触断面）の3断

面の徒手切片を作製する。切片は、ガム・クロラル（抱水クロラル・アラビアゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で透過光による木材組織の観察を行い、その特徴から種類を同定する。

### 3 結 果

#### (1) 花粉・寄生虫卵分析

結果を表1、図1に示す。検出個数は、花粉・孢子化石、寄生虫卵とも少なく、1cm<sup>2</sup>に換算した値も総数で10<sup>3</sup>個を越えていない。花粉化石では、イネ科、ヨモギ属、ブナ属などが検出され、一方、寄生虫卵では鞭虫卵のみが少量検出される。また、有機物のほとんどが炭化した木質片からなり、食物残渣などに含まれる草本質なもののみられない。

#### (2) 大型植物遺体分析

検出された種類は、炭化米（イネの炭化した胚乳）8個体、炭化した初めの破片（イネの穎）17個体、未炭化もしくは一部炭化した初めの破片（イネの穎）18個体、タデ属が3個体、カヤツリグサ科が4個体である。

イネ (*Oryza sativa* L.) の胚乳は、楕円形で大きさが4mm程度。表面には数本の筋がみられる。一方、穎は大きさが7mm程度。表面には細かい突起が密に配列している。タデ属 (*Polygonum* sp.) の果実は、黒色、三稜形で大きさが2mm程度。表面は薄くて堅く、光沢がある。カヤツリグサ科 (*Cyperaceae* sp.) の果実は、褐色、片凸レンズ型の倒卵形で大きさが2mm程度。表面はやや薄く柔らかい。

#### (3) 土壌理化学分析

各分析結果については、表2に示した。

表2 土壌理化学分析結果

試料名	pH(H <sub>2</sub> O) 1:2.5 25°C	電気伝導度 1:5 25°C	全炭素 C %	全窒素 N %	炭素率 (C/N比)	全リン酸 P205mg/g	全亜鉛 Znmg/kg
SK4	4.6	0.74	5.48	0.34	16	3.57	218

#### (4) 樹種同定

試料は、9点がスギに、2点がニレ属に同定された(表3)。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

##### ・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分隔壁孔

表1 花粉・寄生虫卵分析結果

種 類	試料番号 SK 4
木本花粉	
スギ属	3
カバノキ属	2
ブナ属	4
コナラ属コナラ亜属	1
草本花粉	
イネ科	18
カヤツリグサ科	2
アカザ科	1
アブラナ科	1
ヨモギ属	5
シダ類胞子	
シダ類胞子	10
寄生虫	
鞭虫卵	4
合 計	
木本花粉	10
草本花粉	27
シダ類胞子	10
寄生虫卵	4

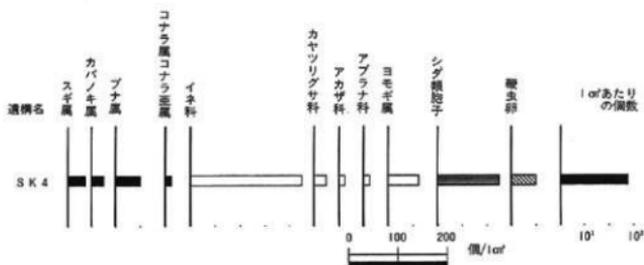


図1 花粉化石・寄生虫卵組成  
1 cmあたりの個数で換算した。

はスギ型で2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

●ニレ属 (*Ulmus* sp.) ニレ科

環孔材で孔圍部は1～3列、孔圍外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～6細胞幅、1～40細胞高。柔組織はターミナル状および周囲状。

#### 4 SK4のトイレ遺構としての可能性について

トイレ遺構としての可能性について、今回行った各分析分野の立場からそれぞれ検証を行い、最後にまとめる。

##### (1) 花粉・寄生虫卵分析

今回得られた花粉化石、寄生虫卵とも個数が少ない。一般に、湿原堆積物中の花粉化石の量は、1cm<sup>2</sup>あたり約6,000～100,000個くらいであるし(Moore&Webb, 1978)、トイレ遺構における寄生虫卵の個数は1cm<sup>2</sup>あたり5,000～10,000個以上である。(金原正明・金原正子, 1994)。花粉化石が少ない理由としては、急速に遺構が埋積されたため、花粉化石が取り込まれにくかった等の理由が推定される。また、寄生虫卵については、トイレ遺構の検出数よりも2桁低く、また1種類しかみられないことから、SK4がトイレ遺構である立証は難しい。

##### (2) 大型植物遺体分析

トイレ遺構では、食物とともに摂取され、体外に排泄される小型の種実(ウリ類、ブドウなど)が検出される(金原正明・金原正子, 1994)。しかし、今回得られた大型植物遺体の中にはそういったものがみられない。炭化したものが多く、また、残渣中にも炭化した材の小片が多数みられることからすると、焼却したものを破棄したいわゆる「ゴミ穴」的なものである可能性が高い。

表3 樹種同定結果

番号	遺構名	登録番号	用途	時代・時期	樹種
1	EP 61	RW54	柱材	平安時代～中世	スギ
2	EB118(総柱建物跡)	RW16	柱材	平安時代～中世	スギ
3		RW74	柱材?	平安時代～中世	スギ
4	EB 54(総柱建物跡)	RW38	柱材	平安時代～中世	スギ
5	EP170	RW64	柱材	平安時代～中世	スギ
6	EB139(総柱建物跡)	RW37	柱材	平安時代～中世	スギ
7		RW53	柱材?	平安時代～中世	スギ
8	SD124(旧河道)	RW39	柱材?	平安時代～中世	ニレ属
9	EP 38	RW73	柱材	平安時代～中世	スギ
10	SD164(溝)	RW62	柱材?	平安時代～中世	ニレ属
11		RW77	柱材?	平安時代～中世	スギ

(3) pH (H<sub>2</sub>O)

pH (H<sub>2</sub>O) は、土壤に含まれる遊離の酸性物質（有機酸、硫酸塩、硝酸態窒素、土壤に弱く吸着した水素イオンなど）による水素イオン濃度を測定するもので、これによる酸性を活性酸という。一般にpH (H<sub>2</sub>O)の評価は表4のように示される。（竹迫, 1990）。

表4 pH (H<sub>2</sub>O) の評価

pH (H <sub>2</sub> O)	評 価
8.0以上	強アルカリ性
7.6~7.9	弱アルカリ性
7.3~7.5	微アルカリ性
6.6~7.2	中性
6.0~6.5	微酸性
5.5~5.9	弱酸性
5.0~5.4	強酸性
4.9以下	ごく強酸性

今回の結果で、ごく強酸性の反応を示し、試料中に何か酸性物質の影響が指摘される。

## (4) 電気伝導度

溶液の比抵抗の逆数をいい、ミリジーメンズ/センチメートル (mS/cm) で表示する。この値が高い土壤ほど、土壤溶液中に陰イオン（硝酸イオン、硫酸イオンなど）、陽イオン（カルシウムイオン、マグネシウムイオンなど）の含有量の多いことを意味する（三好ほか, 1983）。

今回の結果では、0.74mS/cmの値を示し、やや高い傾向にある。これは、pHが著しく低い値を示すことから、硝酸イオンまたは硫酸イオンの影響と考えられる。

## (5) 全炭素・全窒素・炭素率

土壤は、一般に無機成分と有機成分に大別され、後者の給源は動植物の遺体、根、微生物などである。したがって、地表面が安定で、植生が長く維持されると表層には多くの有機物が集積することになる。有機物は、一般に堆積物あるいは土壤の表層（地表面）へ供給されるだけであるから、埋没現象のない単元土壤では有機物量は下層になるほど漸減する。このことから、下層に有機物量が多い層が認められる場合は、過去に表層であったことが指摘される。一方、遺跡で検出される遺構などの覆土は、人為的な影響も含めて異地性のものが多く、表層から下層へ有機物量が漸減する現象が必ずしも当てはまらない。しかし、有機物量の多い覆土の出現が特徴的な場合、そこには給源物質として動植物遺体の存在が指摘されることもある。

ところで、土壤の有機物量は分析によって直接測定することはできないので、一般には有機物の構成成分である炭素量を測定し、その測定値から有機物量を知ることができる。但し、土壤中の炭素は有機物の構成成分の他に炭酸カルシウムなど無機成分として存在する。一般に前者を有機炭素、後者を無機炭素と呼び、その合計を全炭素と呼ぶ。したがっ

て、厳密に炭素量から有機物量を換算する場合は、有機炭素量に係数1.724(土壤有機物(腐植)中の平均炭素割合が58%である。)を乗じて求める。窒素も有機物の主要な構成成分であるので、窒素量の変化から炭素の場合と同様なことがいえる。但し、土壤中の窒素の場合は、有機窒素量に対する無機窒素量の割合が無視できるほど少ないことから、全窒素量で測定した値が有機窒素量としてみなしてもほとんど差し支えない。また、炭素に比較すると窒素の方が分解しやすいこともあり、有機炭素量を全窒素量で除した炭素率(C/N)は新鮮有機物で大きく、土壤有機物(腐植)で小さい10~20の範囲)のが普通である。

今回の結果では、全炭素量が5.48%の値を示す。これを腐食に換算すると9%程度となり、本試料の腐植量(有機物量)は比較的高い含量である。但し、炭素率が16を示していることから、試料中に新鮮有機物などの混在は考えにくい。

#### (6) 全リン酸

土壤中におけるリン酸の移動性はきわめて小さく、揮散性のリン酸はほとんどない。土壤中のリン酸は植物の根によって吸収され植物に移行する。その植物は草食動物に食べられて動物の体に移り、草食動物は肉食動物に食べられる。このようにリン酸は植物から動物へと動植物の死がいや動物の排泄物が微生物によって分解され、リン酸塩となって土壤にもどってくる。自然界におけるリン酸の循環は、岩石→土壤→植物→海→岩石の経路をたどるが、その循環はきわめておそい。また、わが国の土壤は、火山灰土壤やその影響の強い土壤が多く、これらはリン酸の容脱が著しく小さい。したがって、土壤中に高含量のリン酸が認められる場合は、それが動植物、特に人を含めた動物を給源としている可能性が高い。また、農耕地ではそれが人為的な施肥による影響であることを推定される。

今回の結果では、3.57mg/gの値を示す。ところで、土壤の天然賦存量( $P_2O_5$ %)については、Bowen(1983)では中央値が0.2%、Boit・Bruggenwert(1980)では0.1~0.25%、川崎ほか(1991)では黒ボク土の平均値が0.21%、天野ほか(1991)では0.27%以下と報告されている。これらの報告例から推定される最高値は0.3%程度とみられる。本試料はこの推定値よりやや高い値を示すが、これを外的給源物質による富化として捉えらるには対照試料との比較が必要であり、ここで富化の判断をすることは難しい。

#### (7) 亜鉛

重金属類元素の土壤中における自然含有量はごく微量である。しかし、これら重金属類も人間の営力によって局所的な濃集が容易に起こる。逆の見方をすれば重金属含有量の高い土壤は人間の営力の及んだ可能性を指摘できる。また人間は植物を体内に蓄積し、その成分を排泄物として土壤に還元する。したがって、自然界には極微量であった重金属類元素も排泄物の還元された土壤では含有量の特徴的濃集が想定される。特に亜鉛は下水汚泥などに現在でも他の重金属元素よりも1桁多い量が含まれており(下水汚泥32点:

159.0~3,196.9mg/kg、平均値1,250.1、変動係数51.9% (日本土壤肥科学会, 1988)、当時の環境汚染指標元素となりうる可能性がある。

土壤中の亜鉛濃度は普通10~300mg/kgの範囲にあり、その平均値は50mg/kgと言われているが(久馬ほか「土壤の事典」, 1993)、今回の結果は218mg/kgを示し、一般的な含量範囲内の値である。しかし、平均値よりも高く、現在の環境庁の管理基準である120mg/kgを大きく越えた値を示していることから、汚染の可能性も否定できない。このような場合は、この値が濃集したものか否かの判断が必要であり、対照試料との比較が望まれる。

#### (8) ま と め

土壤分析の結果から、遺構内覆土では酸性物質が混在している可能性が示唆され、その物質は硫酸イオンまたは硝酸イオンが想定される。しかし、酸性物質の判定については、成分分析を行わなければはっきりしたことは言えない。また、その他の化学性としてリン酸、亜鉛含量が普通土壤の含有量よりも高い傾向にあるように思われる。もし、これが局所的な濃集であるならば、覆土全体が人為的影響で汚染された土壤であることが指摘できる。しかし、寄生虫卵や大型植物遺体の産状からすると、トイレ遺構というよりは、焼却した材片や板などを破棄した「ゴミ穴」であった可能性が指摘されるため、土壤の汚染が糞尿による可能性は低い。しかし、仮にトイレとして使用されたあと、廃絶する際にゴミ穴として転用したとすれば、最終的な用途である「ゴミ穴」が分析結果に反映されるといった状況も考えられる。遺構が様々な用途に転用される例は多々あるだろうが、そのような場合の分析手法については、断面観察による詳細な層位の認定や、対照試料との比較等など、今後多角的に展開していく必要がある。

### 5 木製品の樹種構成について

柱材および柱材?の多くはスギであり、主としてスギが選択されていたことが推定される。同様の結果は、遊佐町石田遺跡、木原遺跡、中田浦遺跡などでも確認されており(未公表資料)、当該期において一般的な用材選択であったことがうかがえる。これらの遺跡ではスギの他にクリも柱材に多数使用されている。スギとクリの使用状況に関しては、遺跡によって異なる様子が見られる。このことから、集落によって活動範囲とその植生が異なっていたこと等が指摘されているが、詳細は不明である。

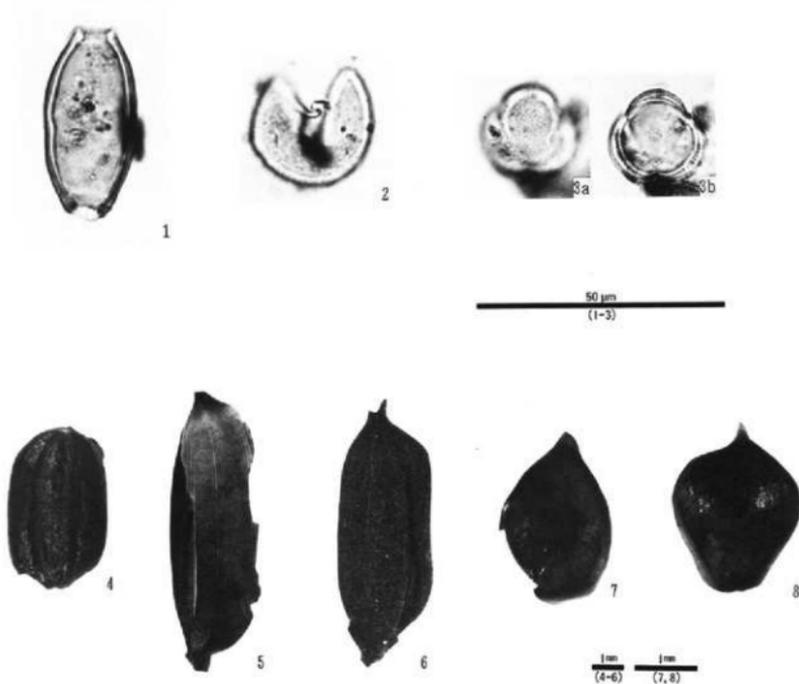
本遺跡では、スギの他にニレ属が2点確認されている。これまで周辺で行われた調査では、ニレ属の柱材は確認されておらず、スギやクリとは建物の性格などが異なる可能性がある。しかし、ニレ属はいずれも河道や溝からの出土であり、柱材とは断定できていない。そのため、今後類例を蓄積した上で判断する必要がある。

#### 引用文献

天野洋司・太田健・草場敬・中井信(1991) 中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計

- 量。農林水産省農林水産技術会議事務局編『土壤蓄積リンの済生循環利用技術の開発』、p.28-36
- Bolt, G.H. and Bruggenwert, M. G. M. (1980)『土壤の化学』。岩田進午・三輪書太郎・井上隆弘・陽捷行訳, 309p., : p.235-236, 学会出版センター[Bolt, G. H. and Bruggenwert, M. G. M. (1976) *SOIL CHEMISTRY*].
- Bowen, H. J. M (1983)『環境無機化学—元素の循環と生化学—』。浅見輝男・茅野充男訳, 369p., : p.297, 博友社[Bowen, H. J. M. (1979) *Environmental Chemistry of Elements*].
- 土壤標準分析・測定法委員会編 (1986)『土壤標準分析・測定法』。354p., 博友社。
- 土壤養分測定法委員会編 (1981)『土壤養分分析法』。440p., 養賢堂。
- 金原正明・金原正子 (1994) 堆積物中の情報の可視化。可視化情報, 14(53), p.79-84。
- 川崎 弘・吉田 澤・井上恒久 (1991) 九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編『土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発』, 149p. : p.23-27。
- 久馬一剛・佐久間敏雄・庄子貞雄・鈴木皓・服部勉・三土正則・和田光史 (1993)『土壤の事典』。566p., 朝倉書店。
- 三好 洋・嶋田永生・石川昌男・伊達 昇 (1983)『土壤肥料用語事典』。259p., 農文協。
- P. D. Moore&J. A. Webb (1978) an illustrated guide to Pollen Analysis. 133p., Hodder and Stoughton.
- 日本土壤肥料学会編 (1988) 昭和62年度環境庁請負調査結果報告書, 再利用資源土壌還元影響調査に係わる総合解析調査—資材調査結果の解析—, p.1-60。
- 渋谷政夫・小山雄生・渡辺久男 (1978)『重金属測定法—土壤汚染元素と定量法の解説—』。331p., 博友社。
- 竹泊敏 (1990) 土壤分析法。浅海重夫編『土壤地理学』, 302p., 古今書院 : p.122-147。

図版 1 寄生虫卵・花粉化石・種実遺体



寄生虫卵

1. 寄生虫卵 (SK4)

花粉化石

2. スギ属 (SK4)

3. コモギ属 (SK4)

種実遺体

4. イネ 炭化した胚乳 (SK4)

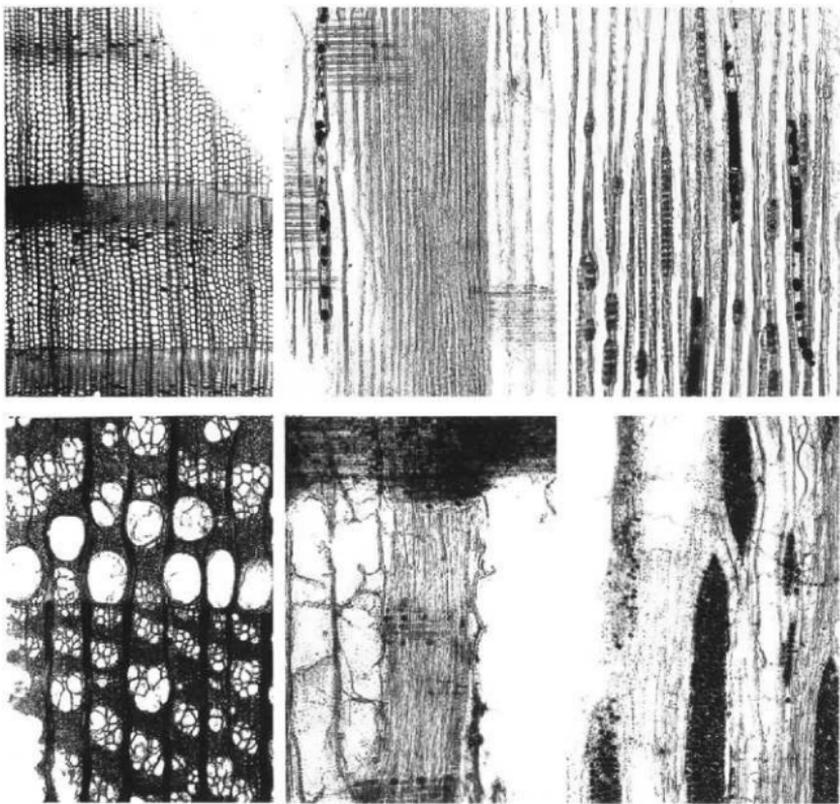
5. イネ 穎 (SK4)

6. イネ 炭化した穎 (SK4)

7. タデ属 果実 (SK4)

8. カヤツリグサ科 果実 (SK4)

図版 2 材



1. スギ (RW64)  
 2. ニレ属 (RW39)  
 a: 木口, b: 径目, c: 板目

200  $\mu$ m : a  
 200  $\mu$ m : b, c

## 梵天塚遺跡 リン・カルシウム分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

## はじめに

梵天塚遺跡は、庄内平野北半最上川右岸標高約3mの水田地帯に立地する低湿地性遺跡である。発掘調査により、中世から近世に属する300基ほどの遺構が確認されている。遺構には土壇・墓墳・溝跡・井戸跡・用水施設等があり、とくに土壇・墓墳が多く、本遺跡は墓地跡を主とした遺跡と考えられている。土壇には、古銭・椀・櫛が入っており、墓墳としての可能性が考えられるものがあるが、遺物の出土しない土壇も多い。このような中で、土壇が墓墳としての可能性を追求するために本分析では、土壇・墓墳の埋積覆土を対象としてリン・カルシウム分析を行う。

## 1 試 料

分析対象とした土坑は、41基である。また、対照試料として、土坑以外の堆積土壇5点(Ⅱ層・A・B・C・D区)を分析した。分析を行った46試料についての詳細は、結果と併せて表1に示す。

## 2 分析 方法

分析は、土壤標準分析・測定法委員会編(1986)、土壤養分測定法委員会編(1981)、京都大学農学部農芸化学教室編(1957)、農林水産省技術会議事務局監修(1967)、ペドロジスト懇談会(1984)などを参考にした。以下に、分析方法を示す。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.0mmの篩を通過させる(風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法(105°C、5時間)により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダールガラスコに秤とり、はじめに硝酸( $\text{HNO}_3$ )5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸( $\text{HClO}_4$ )10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で、100mlに定容して、ろ過する。今回は、リン酸含量をリン酸( $\text{P}_2\text{O}_5$ )濃度として測定する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量( $\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ )とカルシウム含量( $\text{CaOmg/g}$ )を求める。

## 3 結 果

結果を表1に示す。リン・カルシウムとも全体的に高い値を示している。リン酸の結果に関して統計的な数値でみると、平均は土坑で4.33、対照試料で2.64、分散は土坑で6.59、対照試料で2.53、自由度は土坑で40、対照試料で4である。また、土坑のリン酸とカルシウムとの相関係数は0.15である。図1・2にはこれらの結果をグラフ化し、図2では対照

表1 リン・カルシウム分析結果

地点	リン酸含量 P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> mg/g	カルシウム含量 CaOmg/g	土 色	土性
S K 9	1.75	6.35	10Y R2/1黒	L
S K15	4.88	6.62	10Y R3/1黒褐	L
S K18	5.89	5.23	10Y R3/2黒褐	L
S K19	6.85	5.96	10Y R3/2黒褐	L
S K21	3.73	8.37	10Y R3/1黒褐	L
S K22	1.35	5.99	10Y R3/1黒褐	L
S K40	1.44	5.40	10Y R3/1黒褐	L
S K49	3.77	5.73	10Y R1.7/1黒	L
S K54	0.68	6.60	10Y R1.7/1黒	L
S K59	5.15	6.45	10Y R2/3黒褐	L
S K64	4.55	5.79	10Y R3/2黒褐	L
S K102	6.37	6.37	10Y R2/3黒褐	L
S K107	2.45	6.85	10Y R3/2黒褐	L
S K108	1.95	6.52	10Y R3/2黒褐	L
S K109	3.56	6.86	10Y R2/2黒褐	L
S K115	2.08	6.49	10Y R3/1黒褐	L
S K123	8.25	6.26	10Y R3/1黒褐	L
S K124	5.08	6.15	10Y R3/1黒褐	L
S K141	8.96	6.19	10Y R3/1黒褐	L
S K145	7.86	7.60	10Y R2/2黒褐	L
S K148	3.29	6.87	10Y R2/2黒褐	L
S K170	5.60	7.07	10Y R2/2黒褐	L
S K201	5.93	7.36	10Y R2/2黒褐	L
S K213	2.31	7.01	10Y R1.7/1黒	L
S K224	7.21	11.37	10Y R2/2黒褐	L
S K225	1.38	10.15	10Y R2/2黒褐	L
S K230	1.26	8.11	10Y R2/1黒	L
S K248	9.65	7.34	10Y R2/2黒褐	L
S K260	8.24	8.32	10Y R2/1黒	L
S K272	5.27	7.39	10Y R2/2黒褐	L
S K274	6.87	6.83	10Y R2/3黒褐	L
S K275	5.57	7.64	10Y R2/3黒褐	L
S K281	8.27	7.95	10Y R2/3黒褐	L
S K296	1.09	6.84	10Y R2/2黒褐	L
S K314	2.14	7.74	10Y R2/3黒褐	L
S K320	1.72	7.46	10Y R2/3黒褐	L
S K336	1.00	5.18	10Y R1.7/1黒	L
S K337	2.97	6.79	10Y R2/3黒褐	L
S K347	5.01	7.32	10Y R2/3黒褐	L
S K359	4.73	5.92	10Y R2/2黒褐	L
S K376	1.55	6.31	10Y R2/2黒褐	L
A地区	2.90	7.18	10Y R4/6褐	L
B地区	3.34	10.93	10Y R4/6褐	L
C地区	1.46	7.54	10Y R4/3におい黄褐	L
D地区	0.75	8.27	10Y R5/4におい黄褐	L
II層	4.79	6.60	10Y R3/4暗褐	L

注. (1) 土色：新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議，1967）による。  
 (2) 土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会，1984）の野外土性の判定法による。  
 L…壤土

試料と各土壌のリン酸含量順に示した。

#### 4 考 察

リン酸のいわゆる天然賦存量の報告例 (Bowen, 1983; Bolt・Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991) によれば、上限は約 $3.0P_2O_5mg/g$ 程度と推定される。また、人為的な影響を受けた既耕地では $5.5P_2O_5mg/g$  (黒ボク土の平均値) という報告例がある (川崎ほか, 1991)。一方、カルシウム含量の天然賦存量は普通 $1\sim 50CaOmg/g$  (藤貫, 1979) とされるが、その範囲はリン酸よりも明らかに大きい。したがって、これを著しく越える数値が得られた場合に、カルシウムの富化を指摘できる。

今回分析を行った土坑は、黒ボク土のようなリン酸を保持しやすい土壌ではないにも関わらず、いずれもリン酸が高い値を示している。また、対照試料に対しても比較的高い値を示し、中には骨片が検出された土坑 (S K64) の値 ( $4.55P_2O_5mg/g$ ) よりも高いものがある。さらに、調査区の特定の箇所に構築された土坑が高いということはなく、リン酸の高い土坑は全体に分散している。

ここで、土坑試料と対照試料のリン酸の平均値について、それぞれ95%の信頼区間において区間推定を行うと、両者が重なることから、明確な有意差が認められない。すなわち、当時の堆積物において、全体的にリン酸量が高い傾向が認められる。この理由として、多くの墓坑とみられる遺構が密集していることから、リン酸の土壌中からの溶脱によってその影響が周囲に及び、全体的にリン酸値が高くなっている可能性がある。一方で、水田耕作面から比較的浅いところにある遺構であることから、水田への施肥に関する影響についても否定できない。このような状況から、埋葬の有無を示す境界となる値を設定することが困難であるが、今回のリン酸含量値をII層試料以上の含量を示した土壌 (S K15, 347, 124, 59, 272, 275, 170, 18, 201, 102, 19, 274, 224, 145, 260, 123, 281, 141, 248) に墓塚の可能性が高い (図2)。また、図2のリン酸含量 $4.0mg/g$ 付近にひとつの区分があるようにもみえ、S K64以上の含量をもつ土壌に可能性がある。一方、カルシウムについては、リン酸とともに骨などに多く含まれる元素であるが、リン酸と比較して土壌から溶脱しやすい。リン酸とカルシウムの相関係数がかなり低いのは、カルシウムが溶脱してしまった結果であると考えられる。したがって、カルシウムよりもリン酸の方が、埋没当時の状況を反映していると考えられる。

#### 文 献

天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信 (1991) 中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.28-36

Bowen, H. J. M. (1983) 環境無機化学—元素と循環と生化学—。浅見輝男・茅野充男訳,

- 297p., 博友社[H. J. M. Bowen (1979) *Environmental Chemistry Of Elements*].
- Bolt, H. G・Bruggenwert, M. G. M. (1980) 土壤の化学. 岩田進午・三輪豊太郎・井上隆弘・陽捷行訳, 309p., 学会出版センター[H. G. Bolt M. G. M. Bruggenwert (1976) *SOIL CHEMISTRY*], p.235-236.
- 土壤標準分析・測定法委員会編 (198) 土壤標準分析・測定法・354p., 博友社.
- 土壤養分測定法委員会編 (1981) 土壤養分分析法, 440p., 養賢堂.
- 藤貫 正 (1979) カルシウム. 地質調査所化学分析法, 52:57-61, 地質調査所.
- 川崎 弘・吉田 澤・井上恒久 (1991) 九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, 149p.: p. 23-27.
- 京都大学農学部農芸化学教室編 (1957) 農芸化学実験書第1巻, 411p., 産業図書.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 新版標準土色帖.
- ペドロジスト懇談会 (1984) 野外土性の判定. ペドロジスト懇談会編「土壤調査ハンドブック」, 156p.: p.39-40.

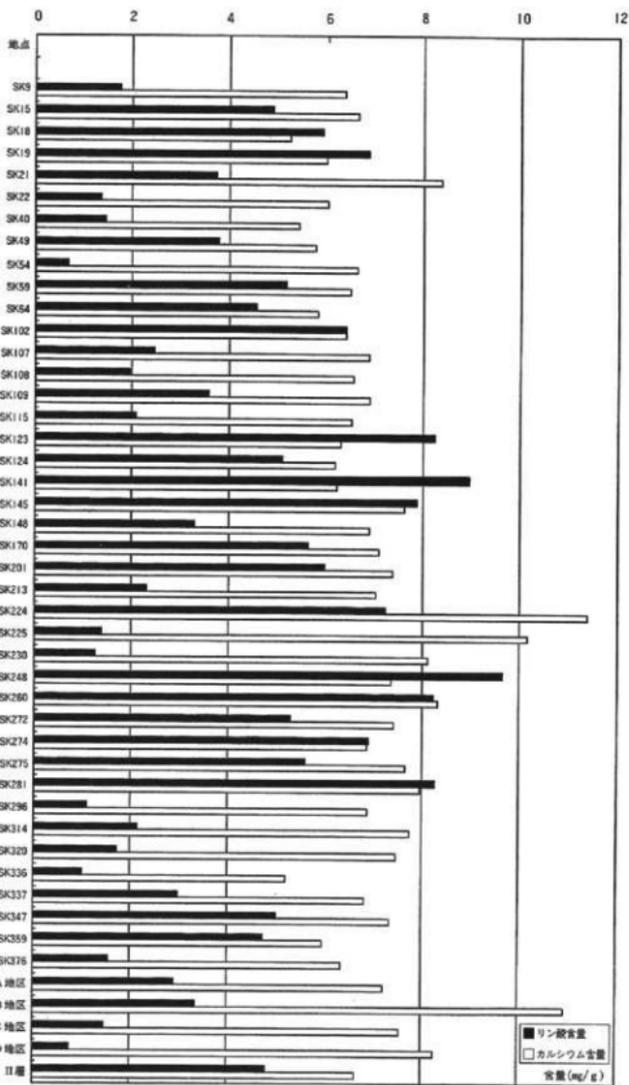


図1 リン・カルシウム含量

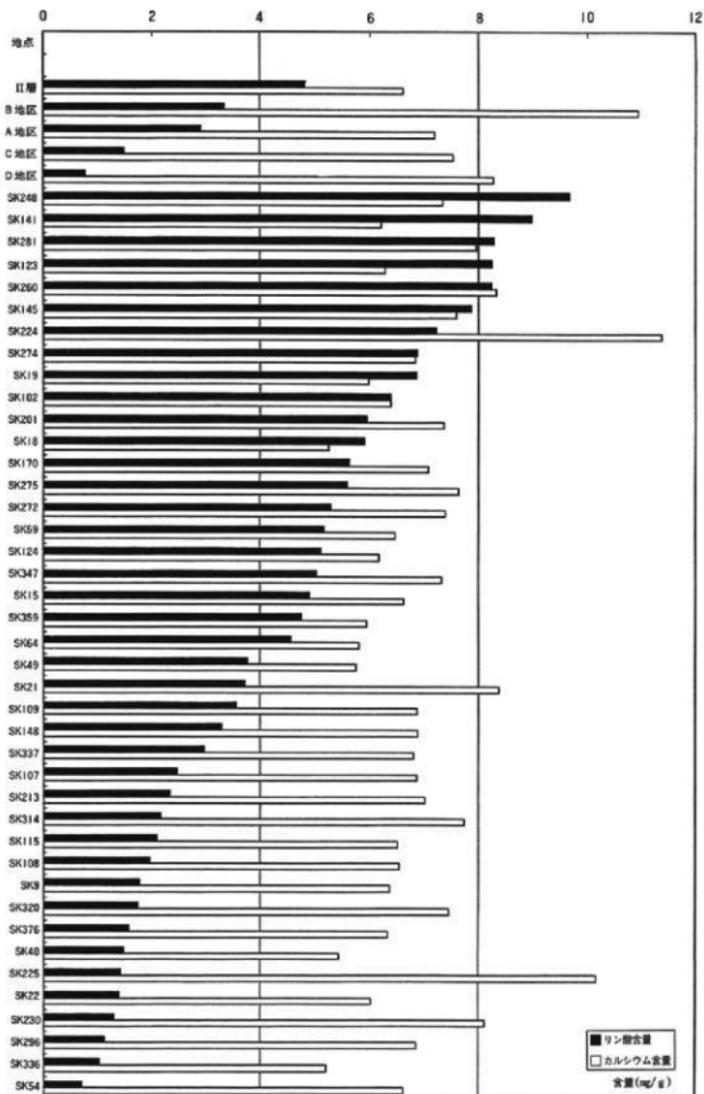


図2 リン・カルシウム含量 (リン酸含量順)

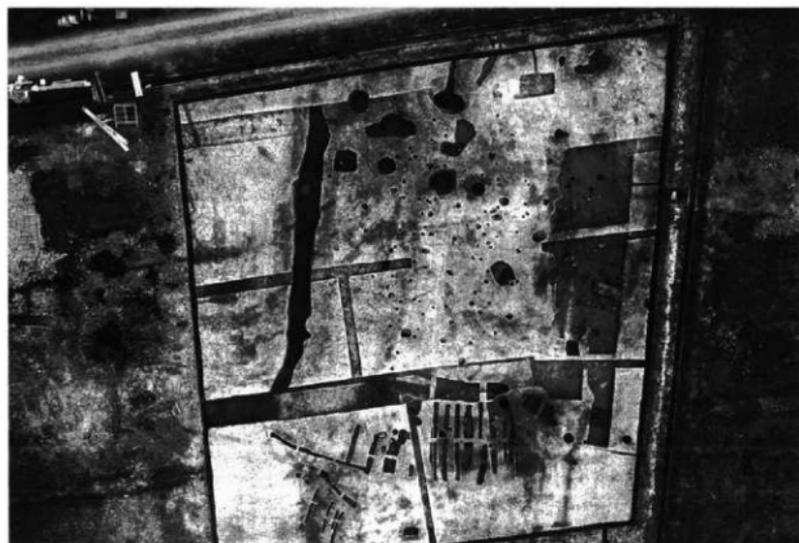


圖 版





土崎遺跡調査区全景（上空北から）



調査区全景（上が東）



東壁土層状況 (↑西から)



調査風景 (↑北から)



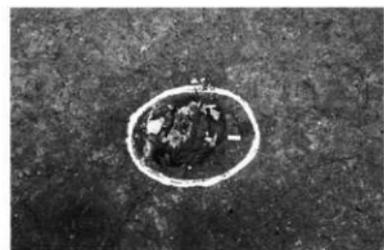
SB1・SB2建物跡(↑北から)



E P 44 (↑西から)



E B 54 (↑西から)



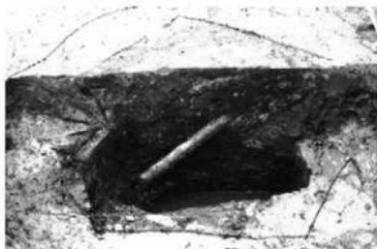
E B 118 (↑西から)



E P 138 (↑西から)



SK 4 (↑西から)



SE 34 (↑南から)



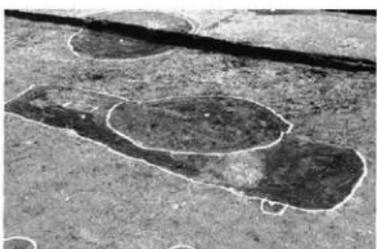
SE 13 (↑南から)



SK 168 (↑北から)



SE 34検出状況 (↑東から)



SK 5・SK 6検出状況 (↑西から)



SD 123断面 (↑西から)



SD 172~SD 182畝跡群 (↑東から)



S K 4 内木製品出土状況



S D 1 内漆碗出土状況 (RW22・23)



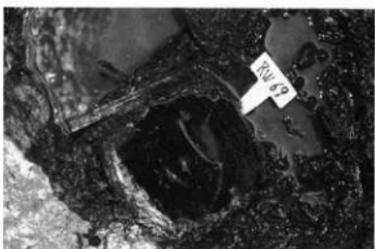
S D 1 内漆碗出土状況 (RW20)



S D 1 内船形木製品出土状況 (RW19)



S D 123 内木製品出土状況 (RW35)



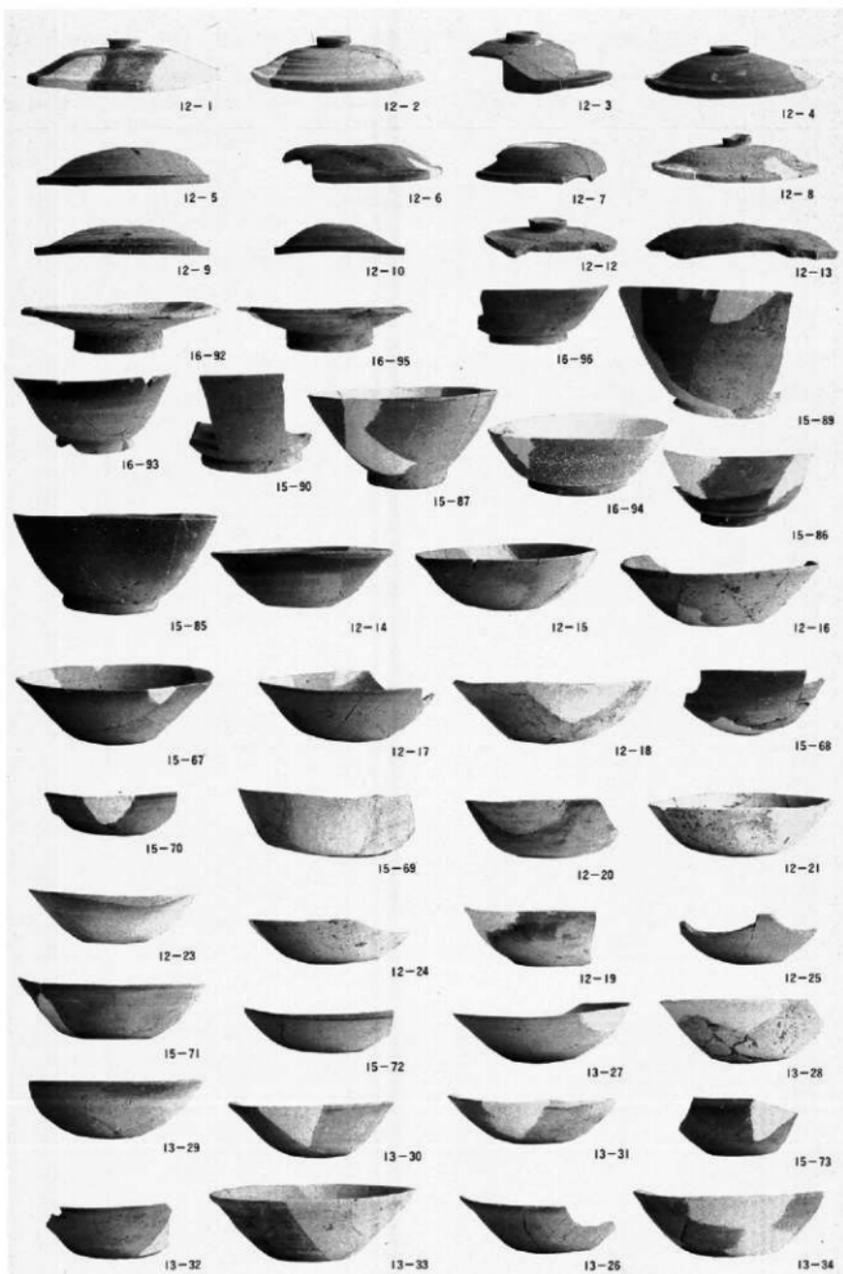
S K 144 内碗出土状況 (RW69)

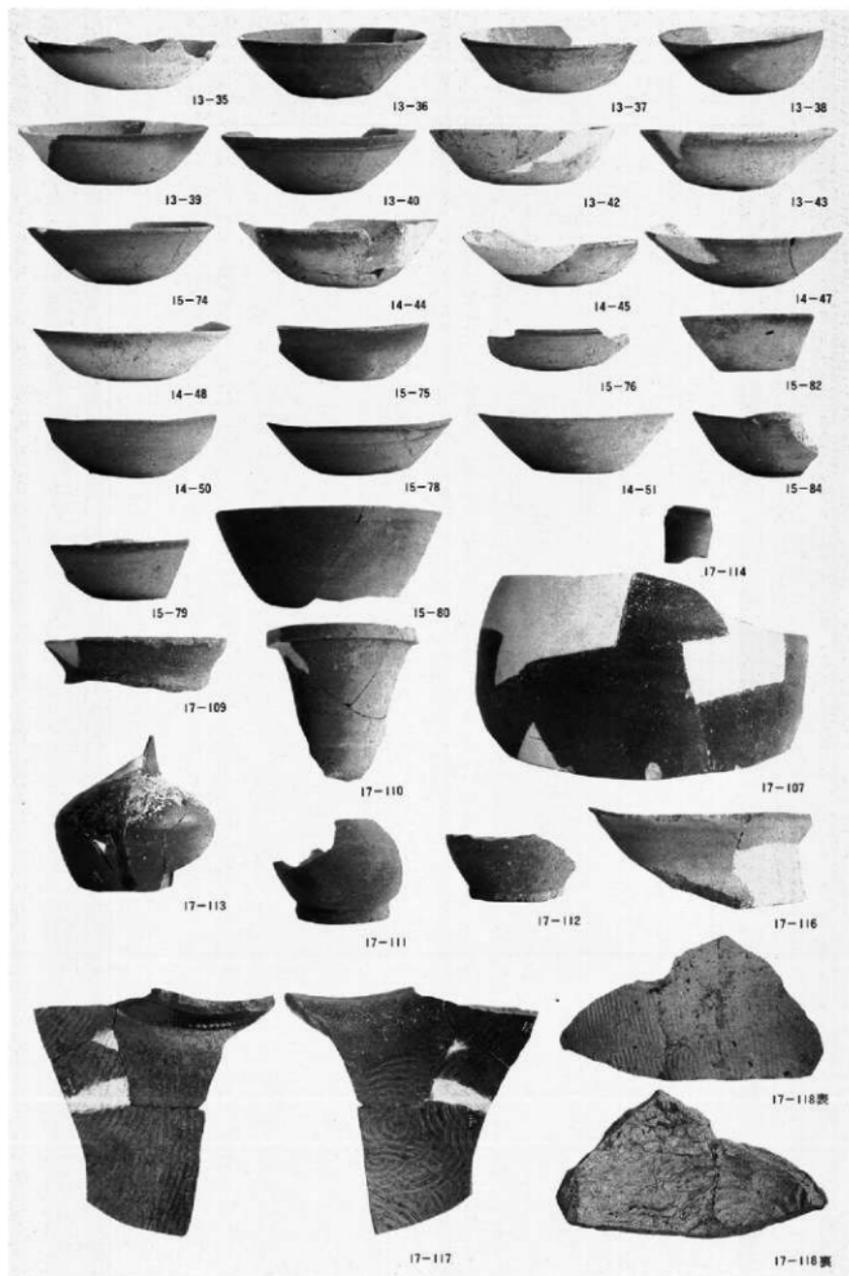


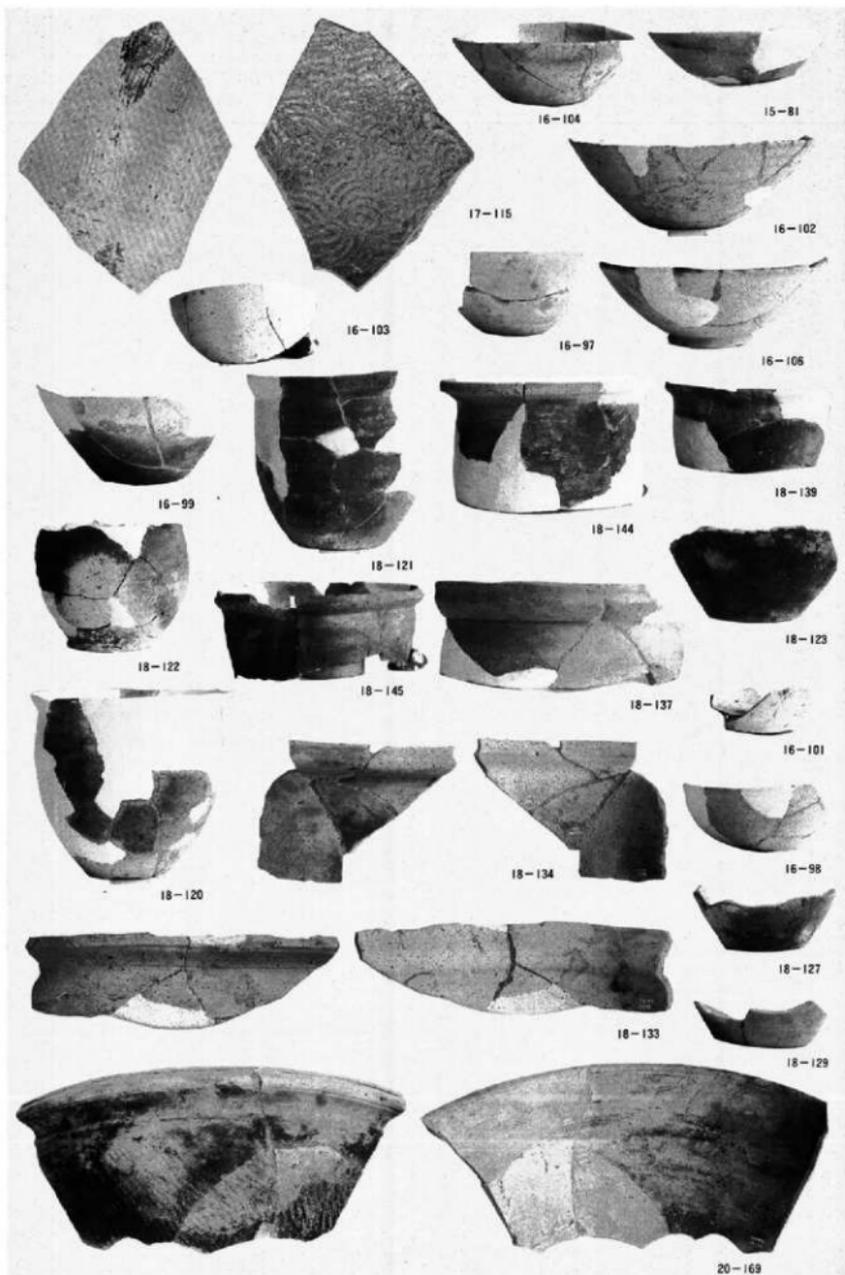
須恵器杯出土状況 (R P 49)

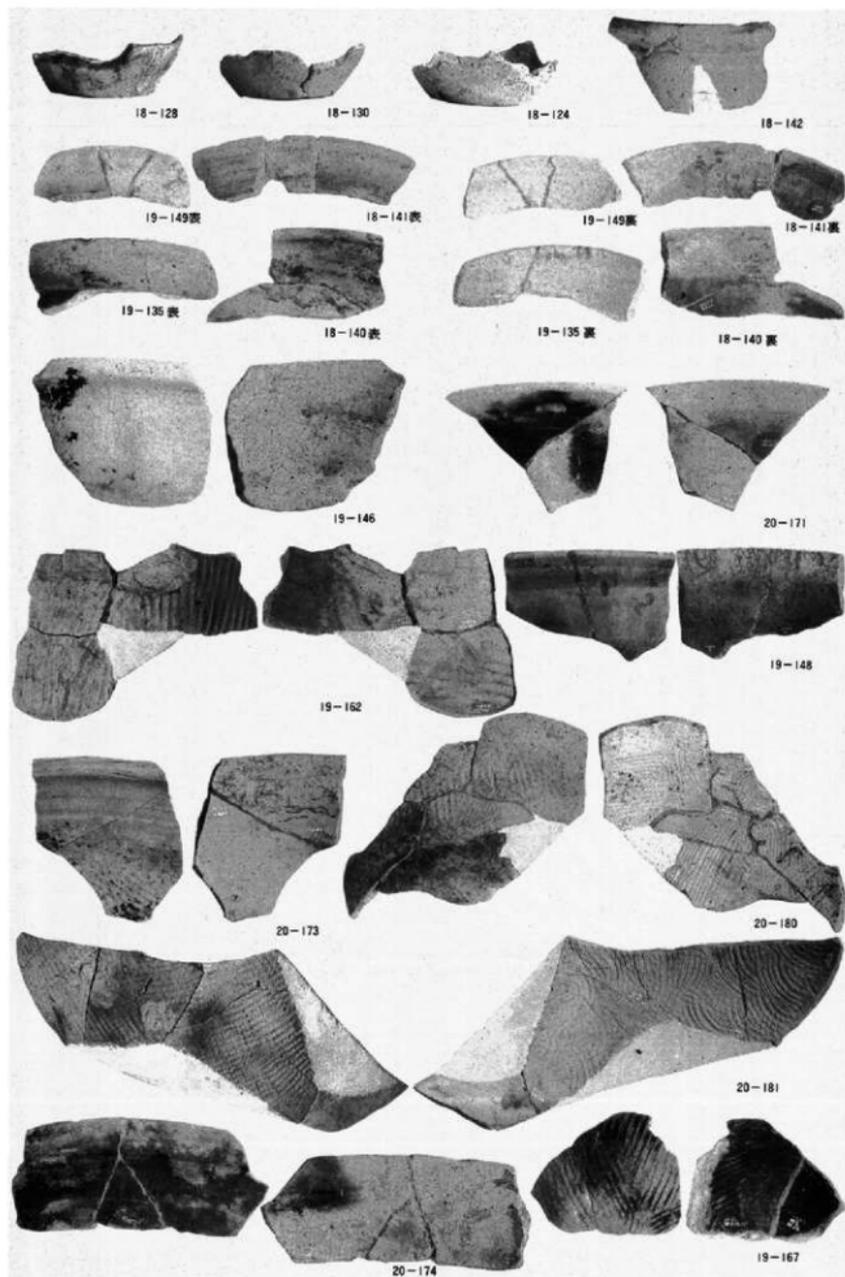


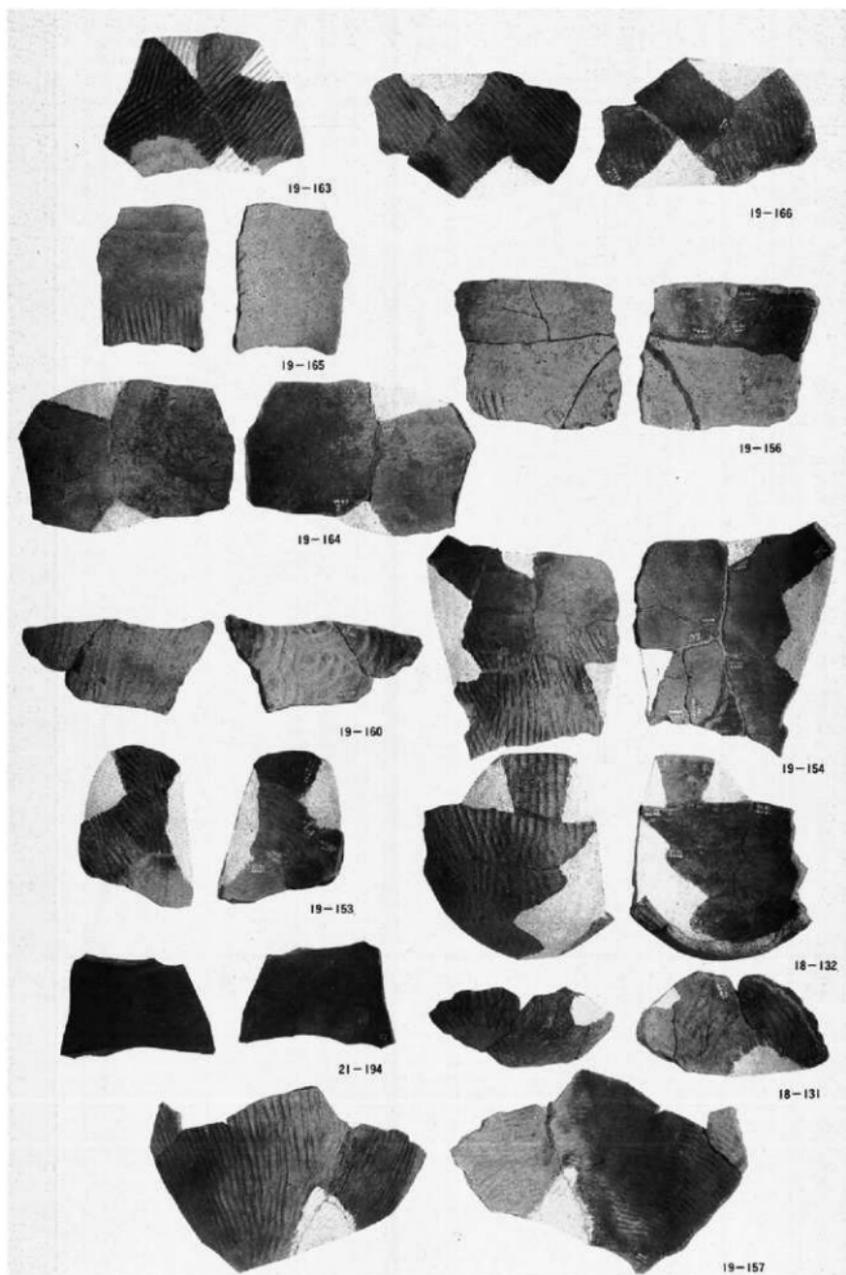
須恵器杯出土状況 (R P 17)

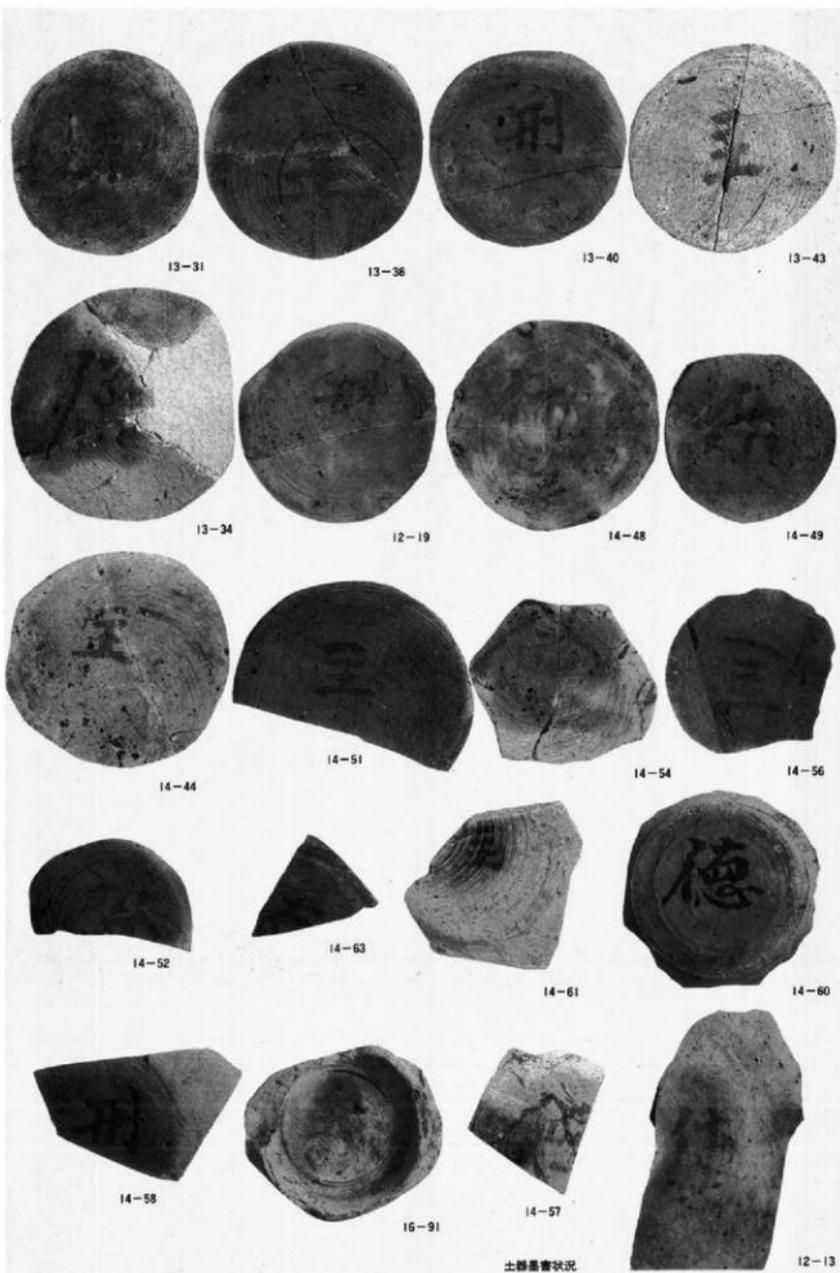






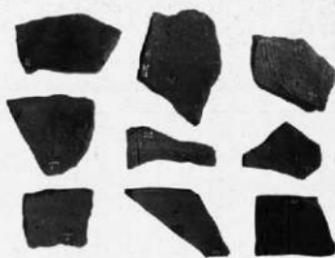








21-191 21-184 21-199 表  
21-182 21-188 21-186  
21-187 21-183 21-185



21-191 21-184 21-199 裏  
21-182 21-188 21-186  
21-187 21-183 21-185



21-195 表 21-192 21-194 裏  
21-198 21-193



21-195 裏 21-192 21-194 裏  
21-198 21-193



21-200 表 21-201 表 21-200 裏 21-201 裏



22-6



22-7



22-1



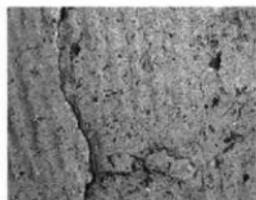
22-2



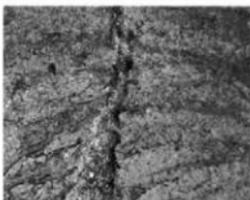
22-3



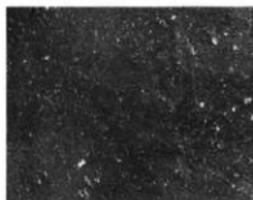
22-5



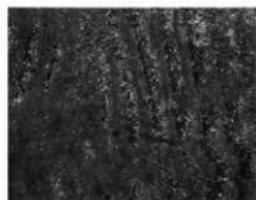
17-118 表



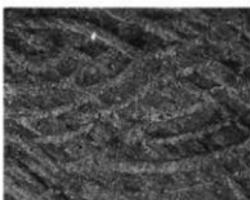
17-118 裏



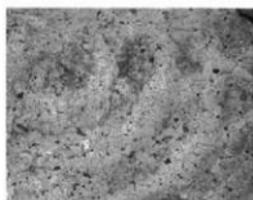
17-107 表



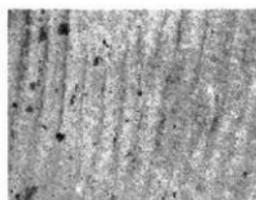
17-117 表



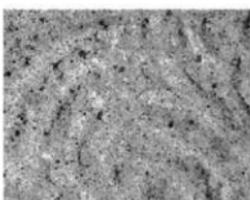
17-117 裏



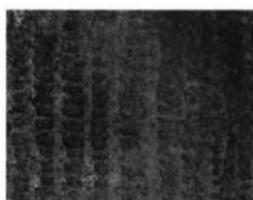
19-160 裏



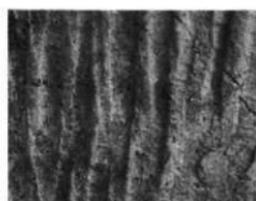
17-115 表



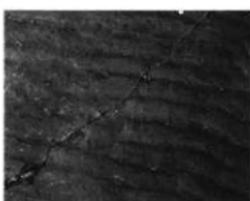
17-115 裏



19-166 表



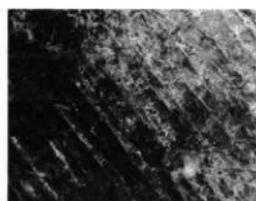
19-157 表



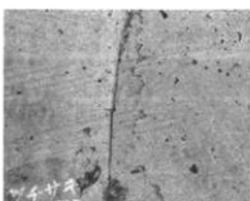
19-157 裏



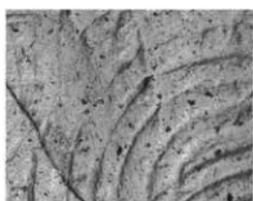
19-156 表



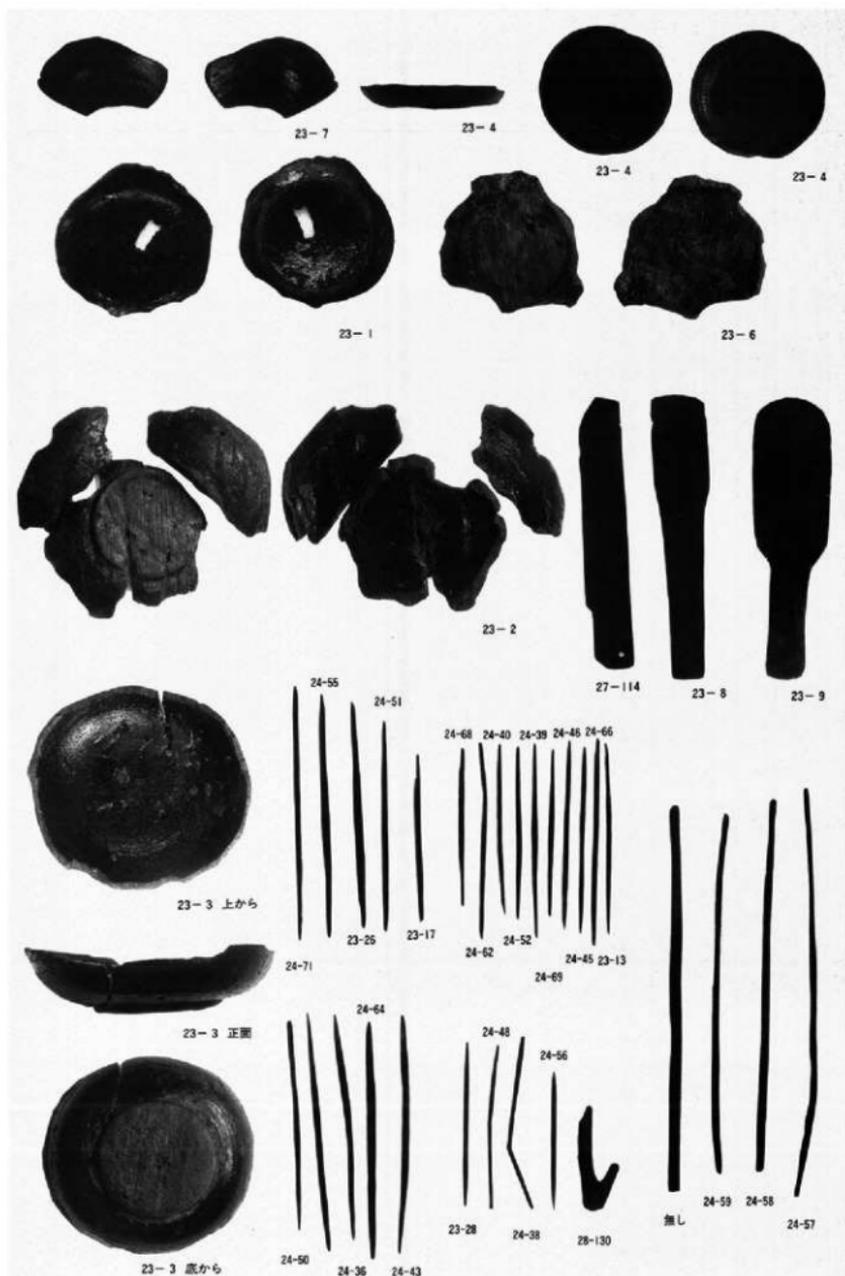
20-169 表

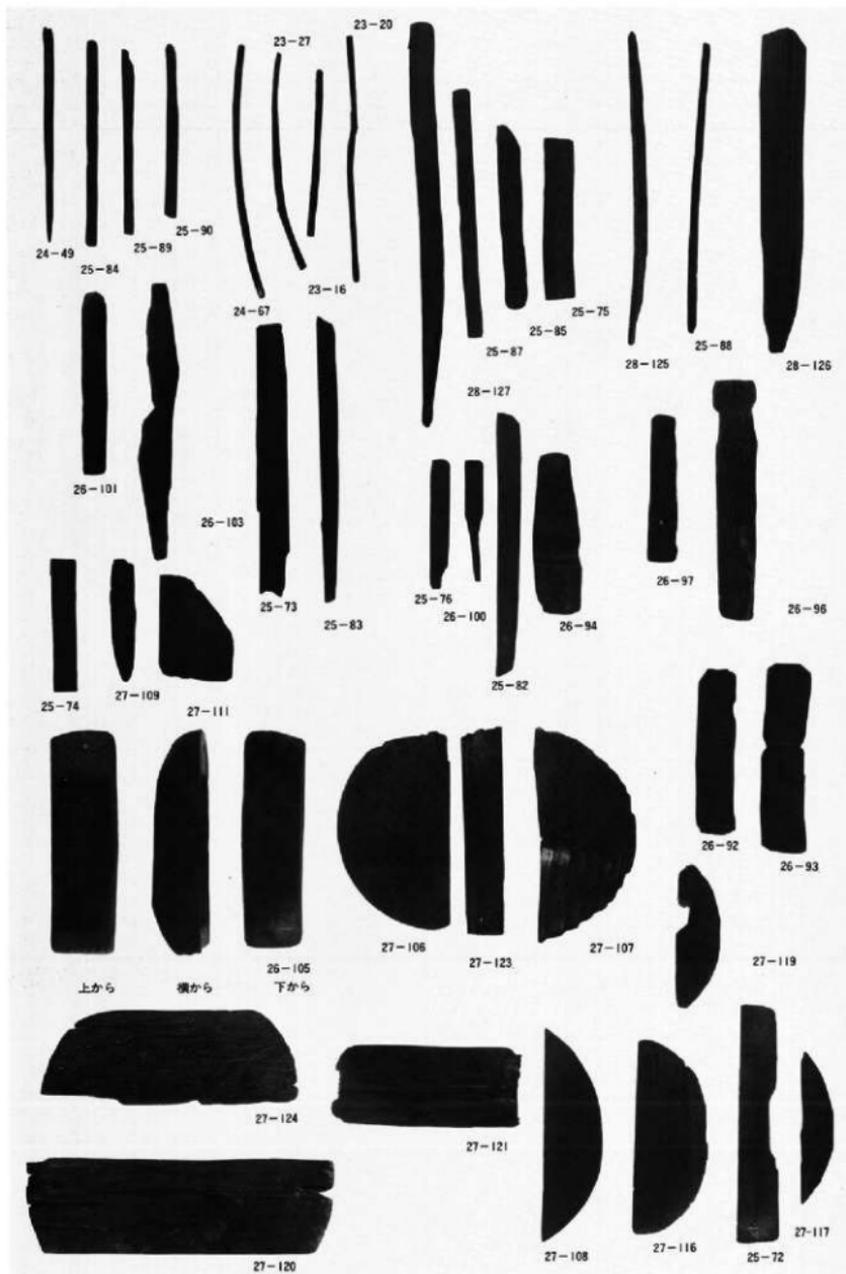


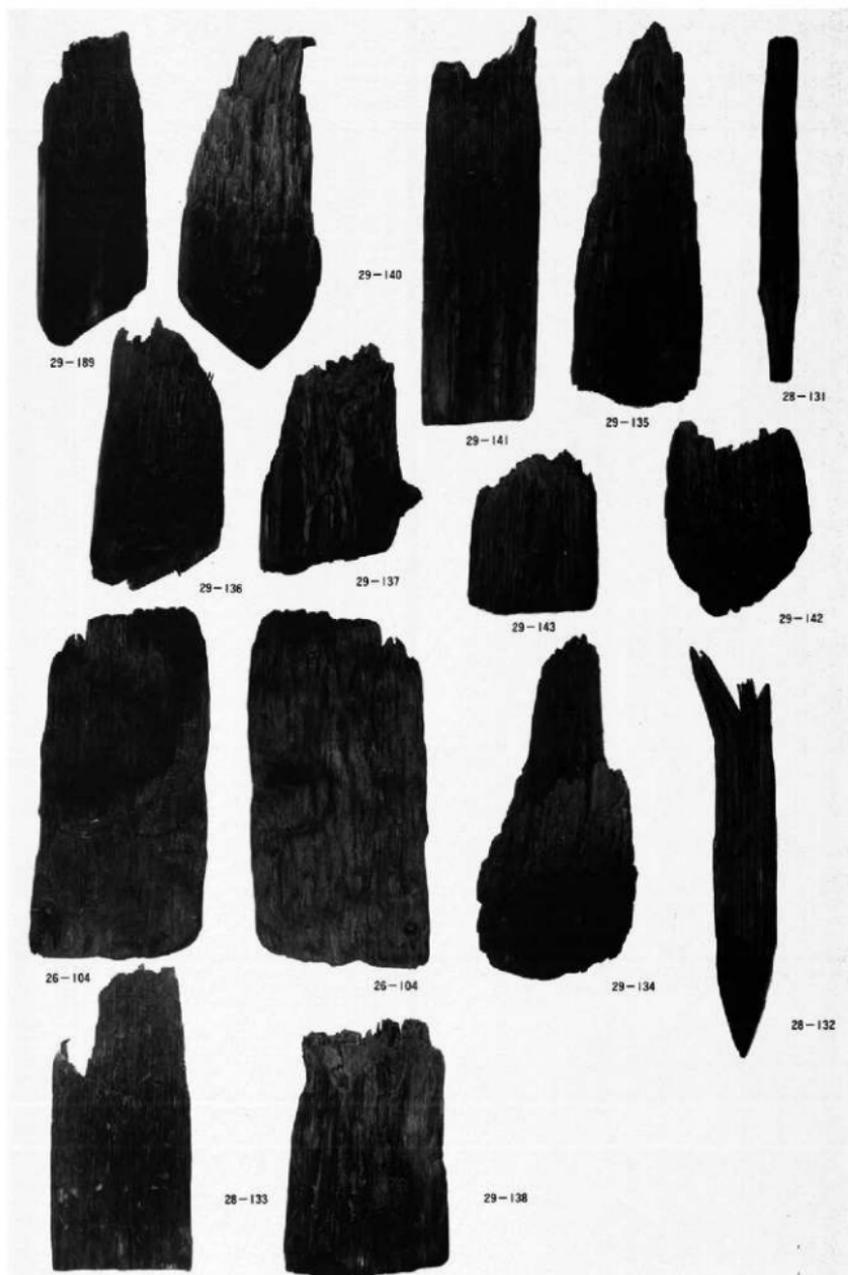
20-169 裏

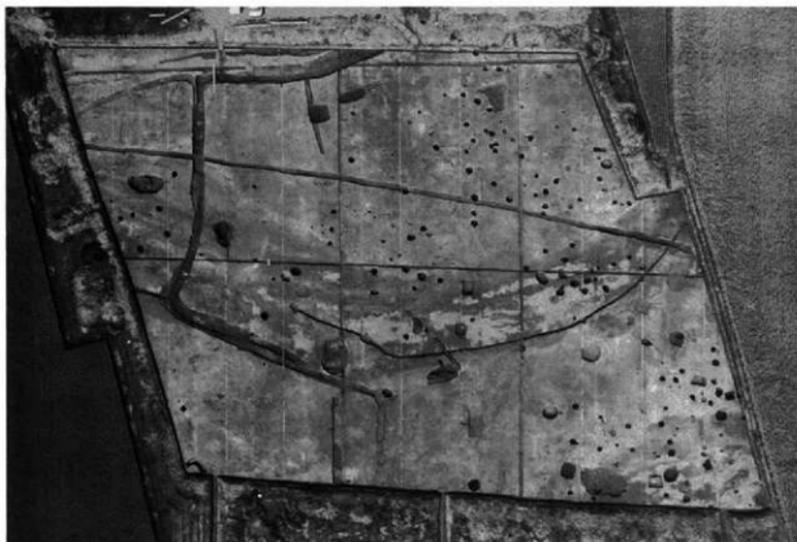


20-181 裏









梵天塚遺跡遠景（上空から上が北）



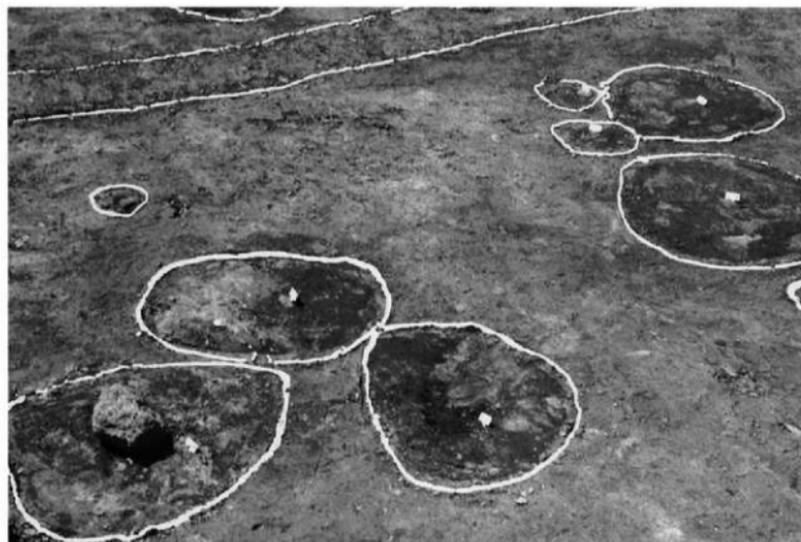
調査区全景（上空西から）



作業風景（↑北から）



現地調査説明会（↑南から）



S K 298~311検出状況 (↑南から)



東側土壌群 (↑南から)



東壁土層状況(1) (↑西から)



東壁土層状況(2) (↑西から)



SK 4 (南から)



SK 9 (↑南から)



SK 15 (↑南から)



SK 9 (↑南から)



SK 21 (↑南から)



SK 22 (↑南から)



SK 34 (↑南から)



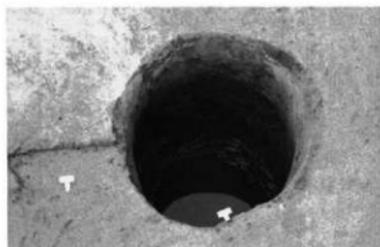
SK 36 (↑南から)



S K 40 (↑南から)



S K 46 (↑南から)



S K 49 (↑南から)



S K 58 (西から)



S K 58内曲物出土状況 (↑北から)



SK 57 (南から)



SK 59 (↑南から)



SK 62 (↑南から)



SK 64 (↑西から)



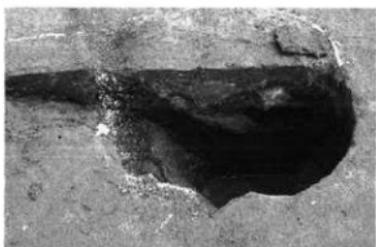
SK 79 (↑南から)



SK 102 (↑南から)



SK 110 (↑南から)



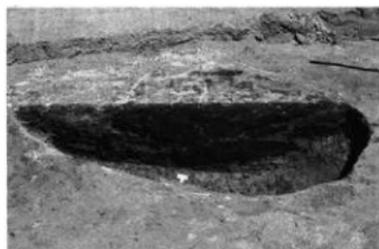
SK 115 (↑南から)



SK 116 (↑南から)



SK 118 (南から)



SK 124 (南から)



SK 118 (↑南から)



井戸跡SE 125 (↑北から)



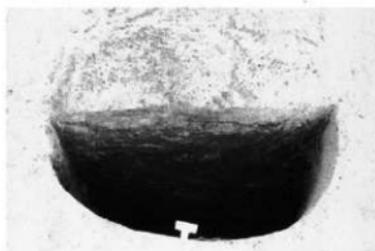
S K 127 (↑南から)



S K 134 (↑南から)



S K 230 (南から)



S K 140 (↑南から)



S K 163 (↑南から)



S K 132 (西から)



S K 382 (東から)



S K 144 (南から)



S K 180 (南から)



S K 196 (錫杖出土状況・南から)



S K 239 (南から)



S K 248 (南から)



S K 249 (↑南から)



S K 254 (南から)



S K 265 (南から)



S K 266 (↑南から)



S K 269 (↑南から)



S K 279 (↑南から)



S K 301 (↑南から)



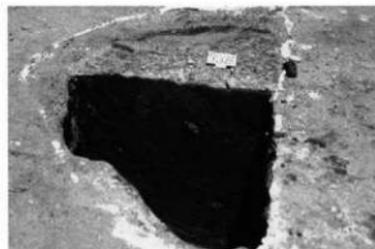
S K 313~320 (↑東から)



S K 376 (↑南から)



S K 303 (↑南から)



S K 326 (↑南から)



S K 370・曲物等出土状況 (↑北から)



S D160内埋納銭 (R M 6) 出土状況 1 (↑北から)



S D160内埋納銭出土状況 2 (↑西から)



S D160内埋納銭出土状況 3 (↑北から)



S D160内明染付皿出土状況



S K 56内木製品



S K 132横・倒木検出状況 (↑北から)



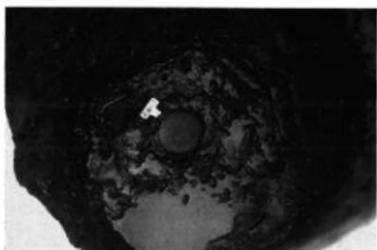
S K 248内木製品出土状況 (↑南から)



S K 9内板材出土状況 (↑南から)



S D 160内蓋出土状況 (↑南から)



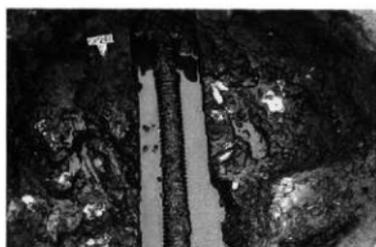
S K 215内丸板 (R W 67・↑南から)



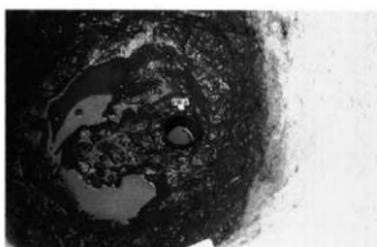
S E 39用水施設出土状況 (↑北から)



S K 58内曲物 (R W 2・3・4)  
柄 (R W 5出土状況)



S K 241焼骨出土状況 (↑南から)



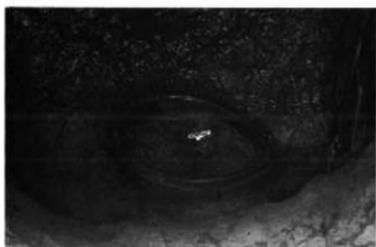
S K 170内曲物 (R W 64) 出土状況 (↑南から)



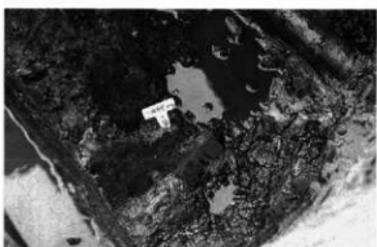
S D 160内漆碗出土状況 (R W 1)



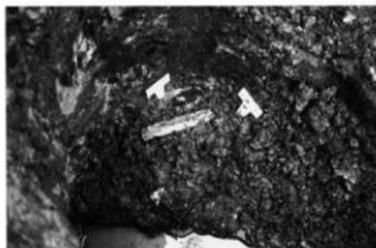
S K 225内碗出土状況 (R W 61)



S K 201内曲物 (R W 65) 出土状況 (↑南から)



S K 15内碗出土状況 (R W 68・南から)



S K 54内斎串 (RW38) 出土状況 (↑南から)



S K 368内へら (RW112) 出土状況 (↑北から)



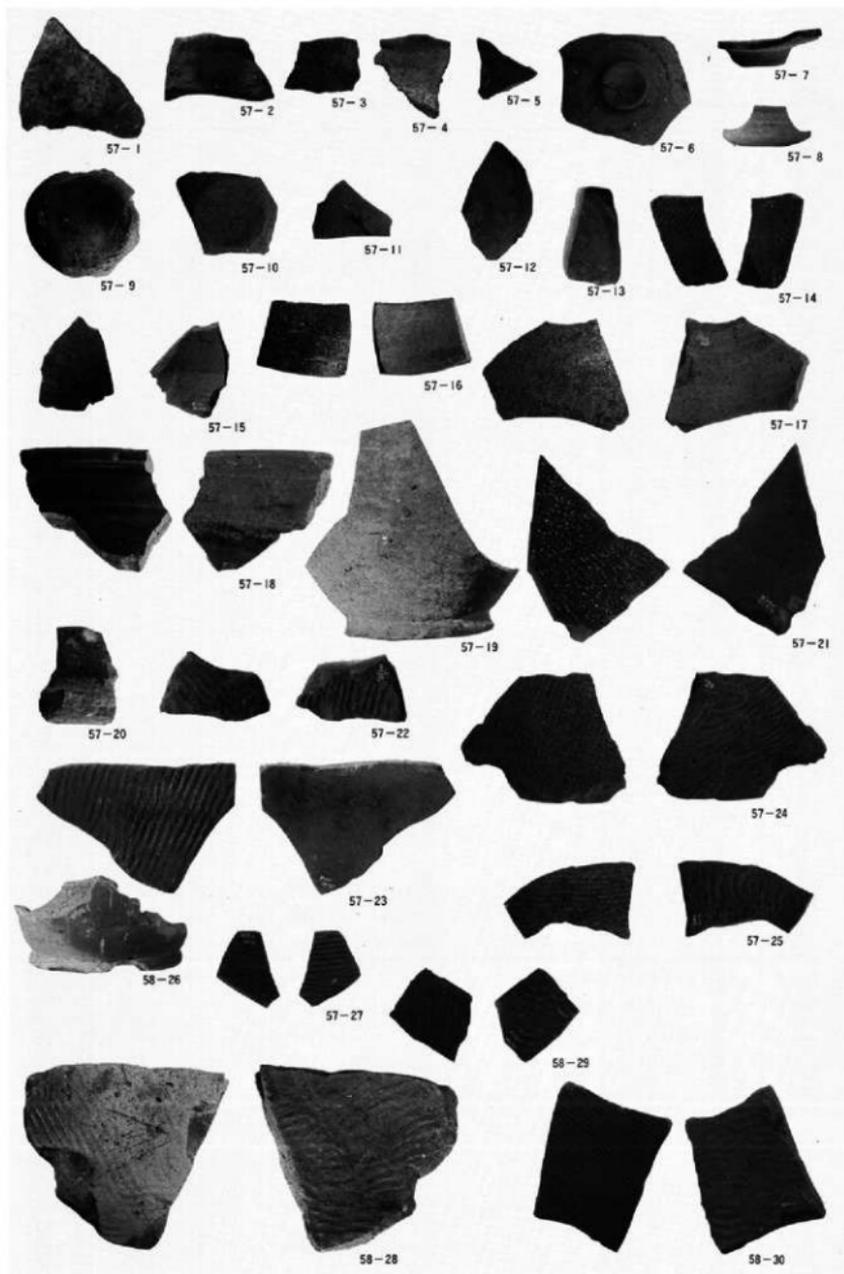
R Q 31 (↑南から)

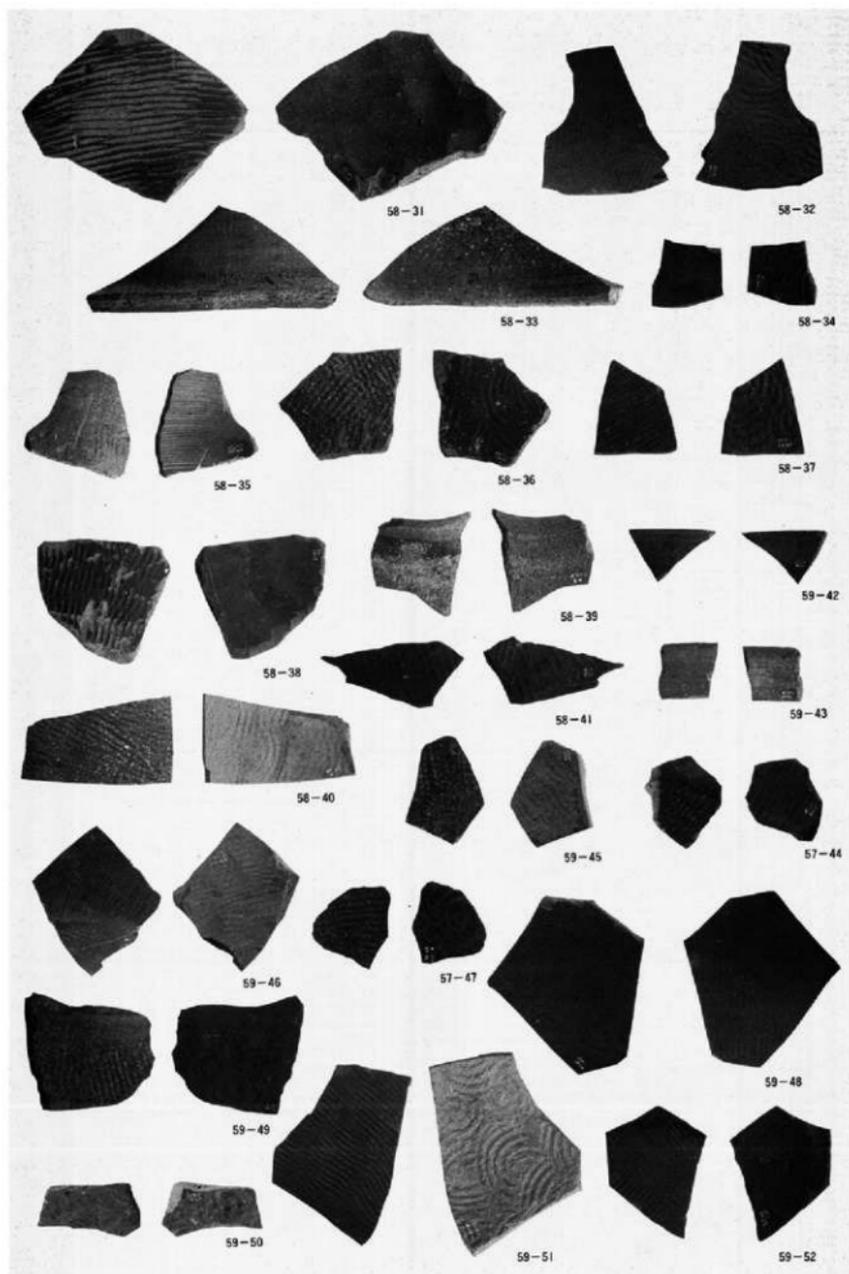


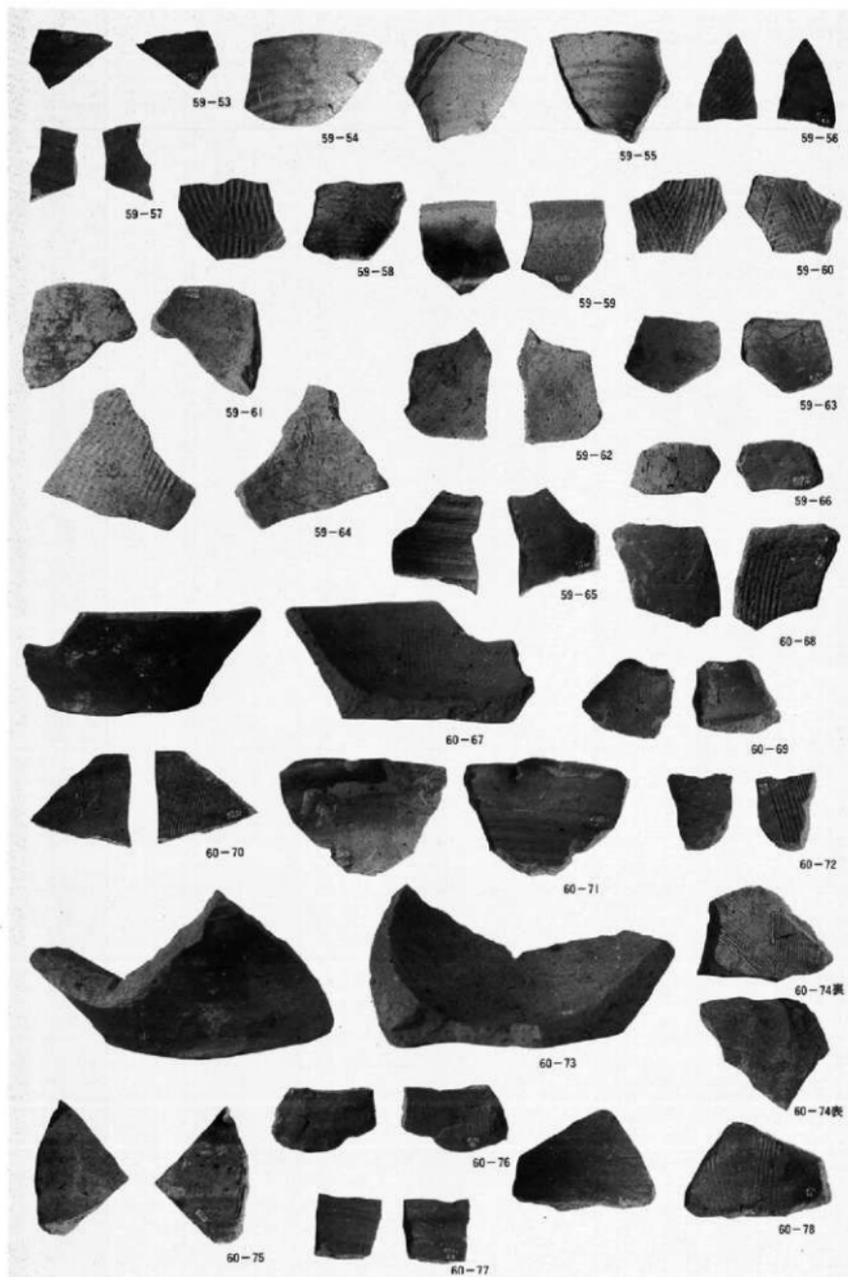
S K 内RW66 (丸板↑南から)



S K 370内木製品出土状況 (↑北から)









60-79

60-80



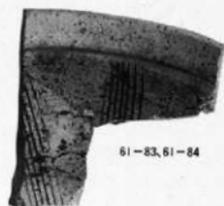
61-81



61-82



61-83, 61-84



61-85



61-86



61-87



61-88



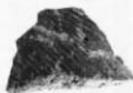
61-89



61-90



61-91



61-92



61-90



61-93



61-94



61-95



61-95



61-96



61-97



61-95

61-96



61-98



61-99



61-100



62-101



62-102



62-103



62-104



61-105



62-106



62-107



62-108



62-109



62-110



62-113



62-111



62-112



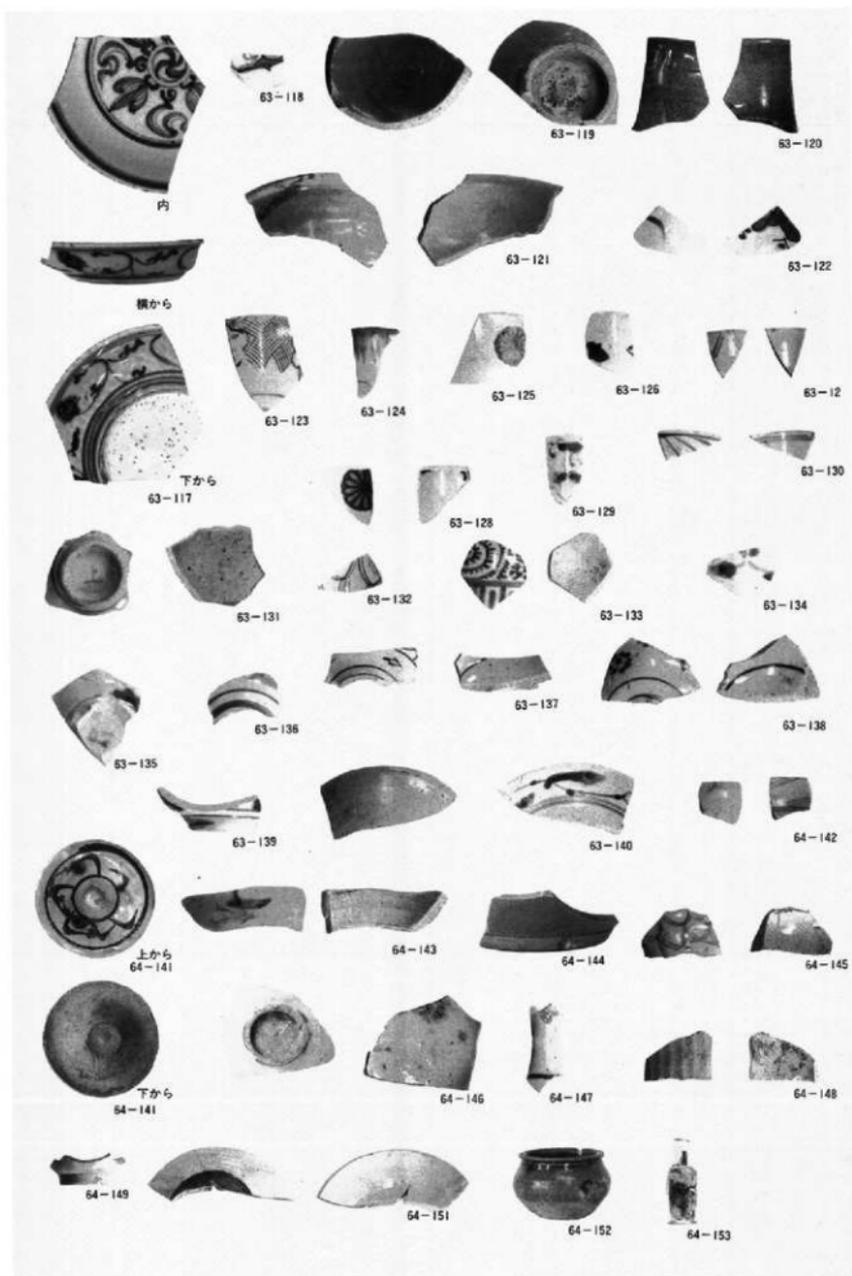
62-113



62-115



62-116

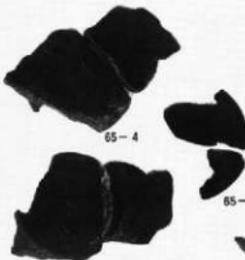




65-1



上から



65-4



上から



上から



横



65-5

横から



下から



下から



横から



下から



横から



上から



下から



65-13



65-8



65-9



65-10



下から



65-14



66-15



66-16



上から



上から



66-17



66-18



横から



66-19



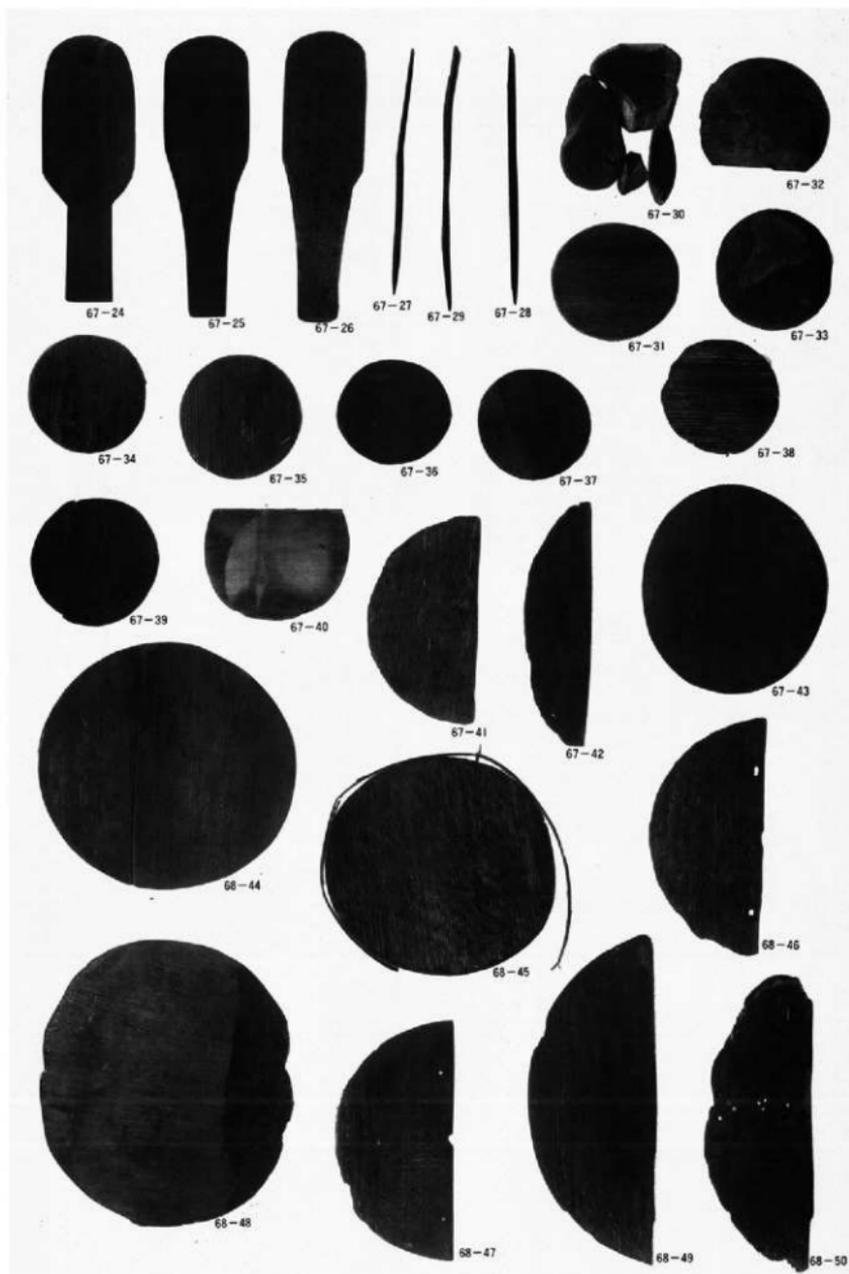
66-20



横から  
66-21



66-22









74-8

74-5

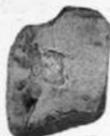


74-7



75-12

75-9



75-11



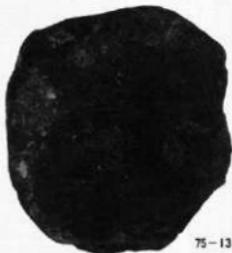
75-10



76-17



77-23



75-13



76-15



76-22



76-19



76-21



76-14



76-18



76-20



77-24



76-16



77-25



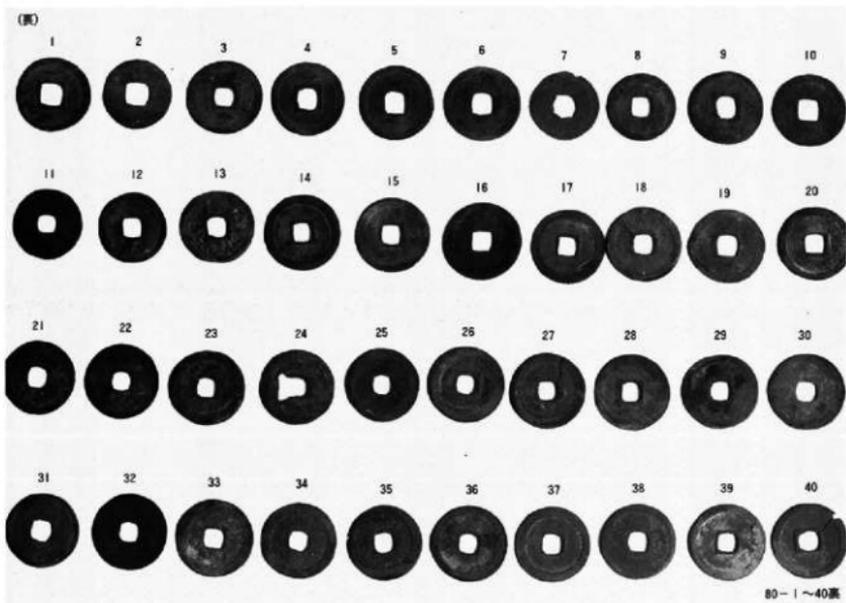
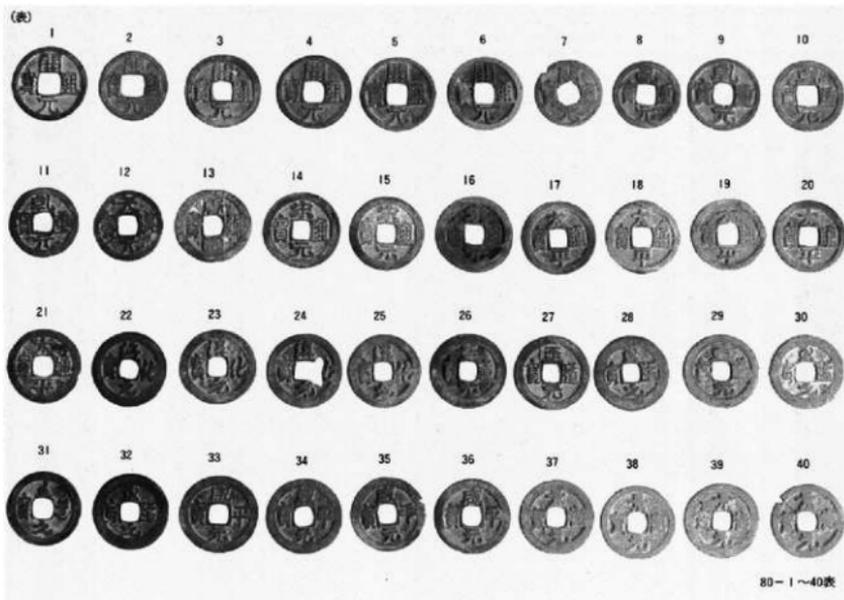
77-26



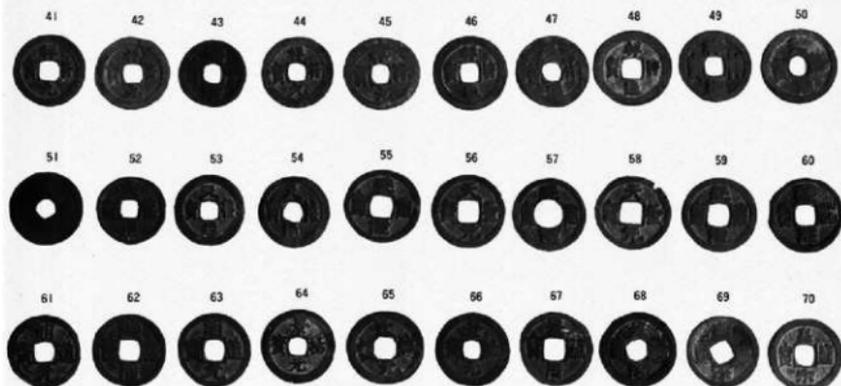
鉄錐(埋納鉄と共存)



73-3

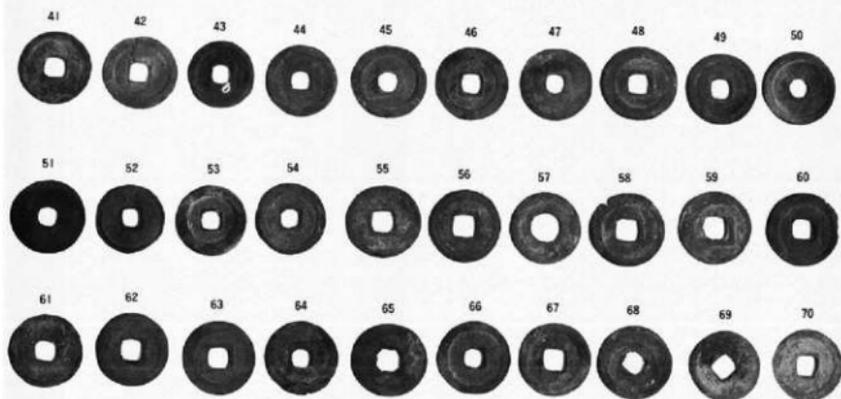


(表)



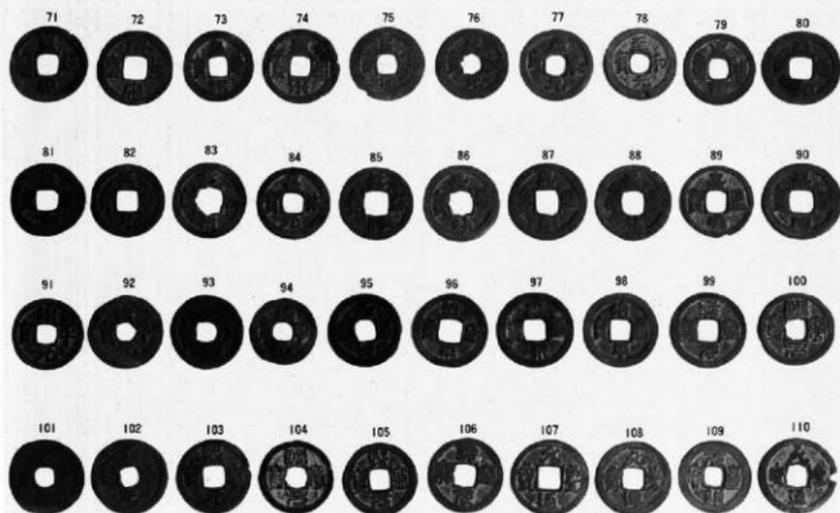
80-41~70表

(裏)



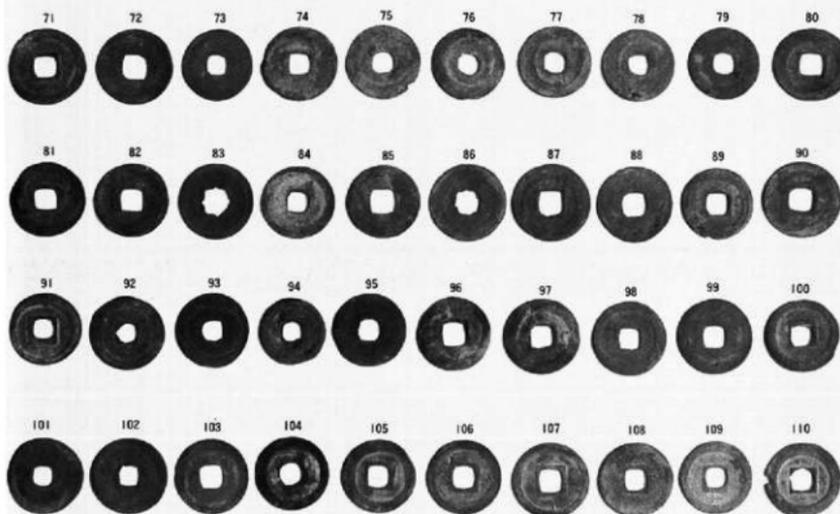
80-41~70裏

(表)



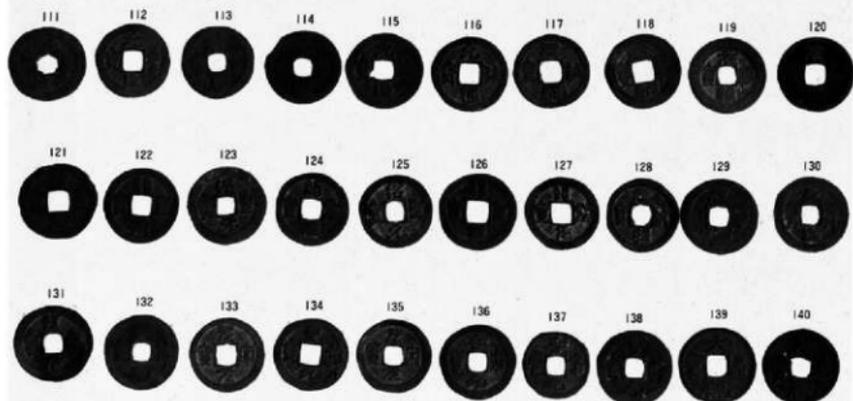
81-71~110表

(裏)



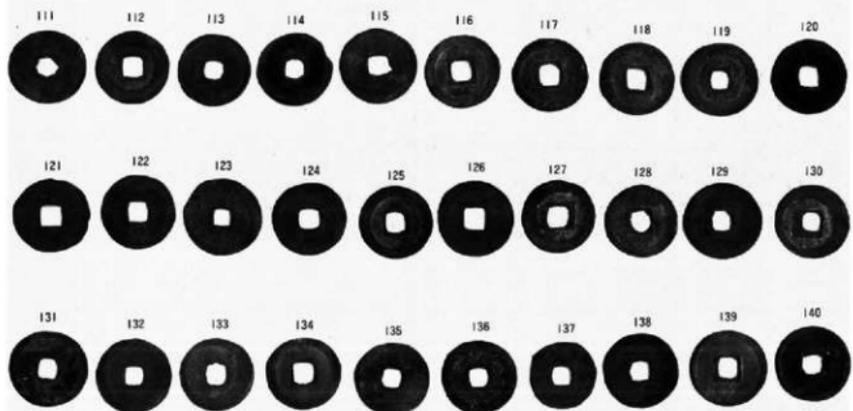
81-71~110裏

(表)



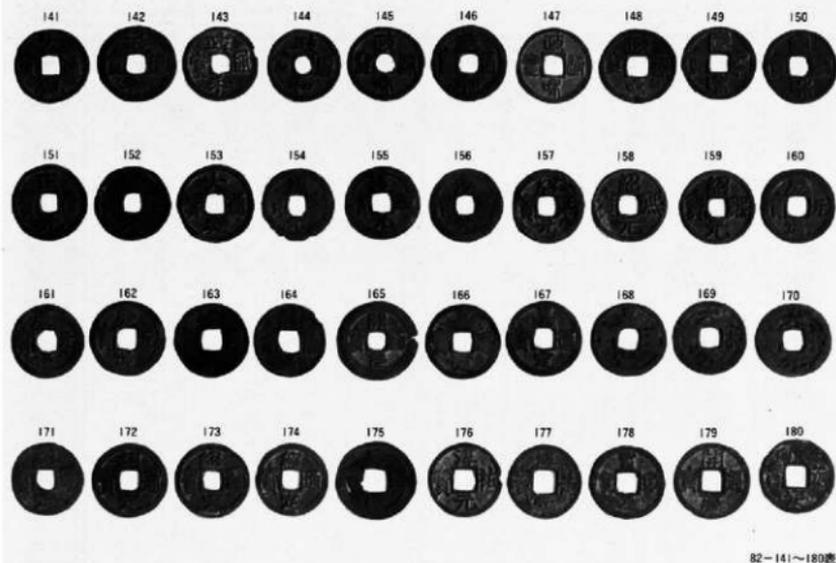
81-111~140表

(裏)

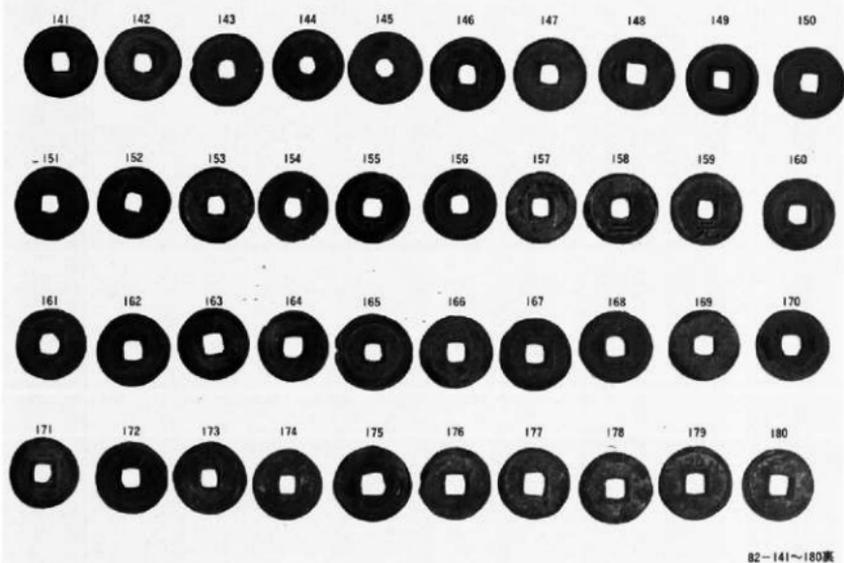


81-111~140裏

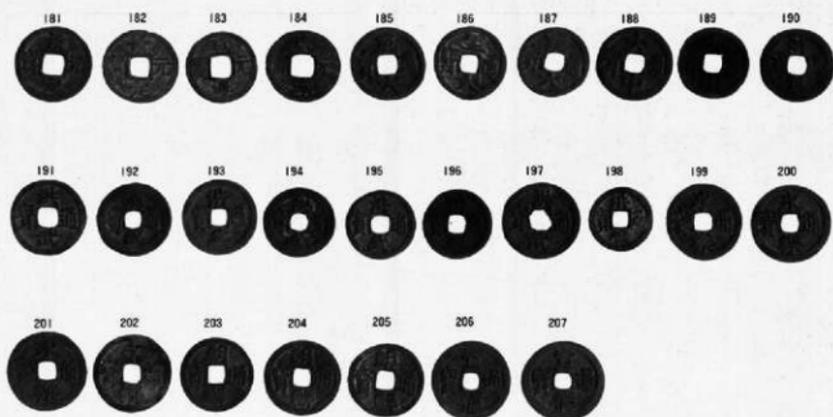
(裏)



(表)

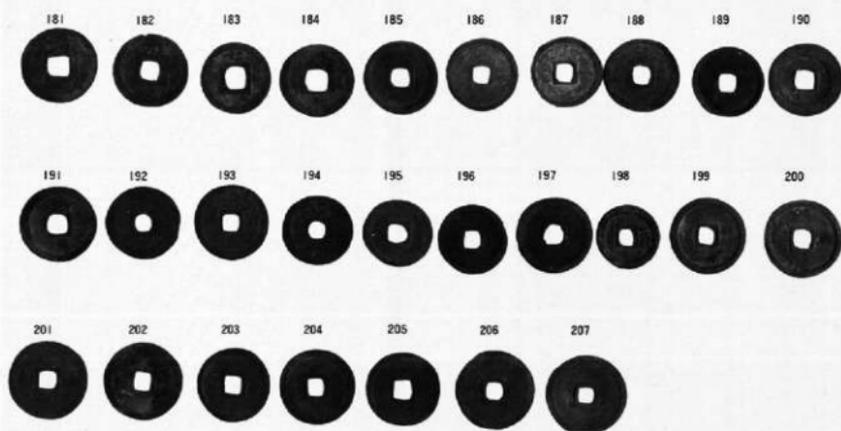


(表)

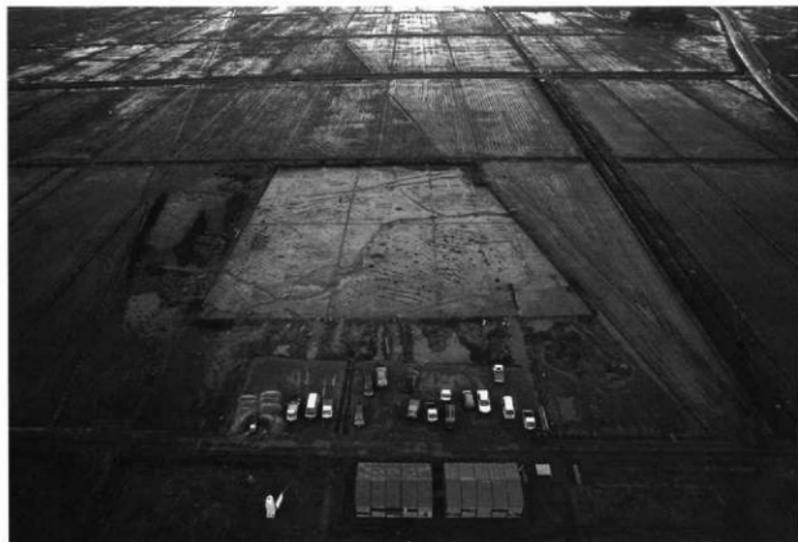


82-181~207表

(裏)



82-181~207裏



中谷地遺跡調査区全景（上空北から）



中谷地遺跡調査区全景（上が北）



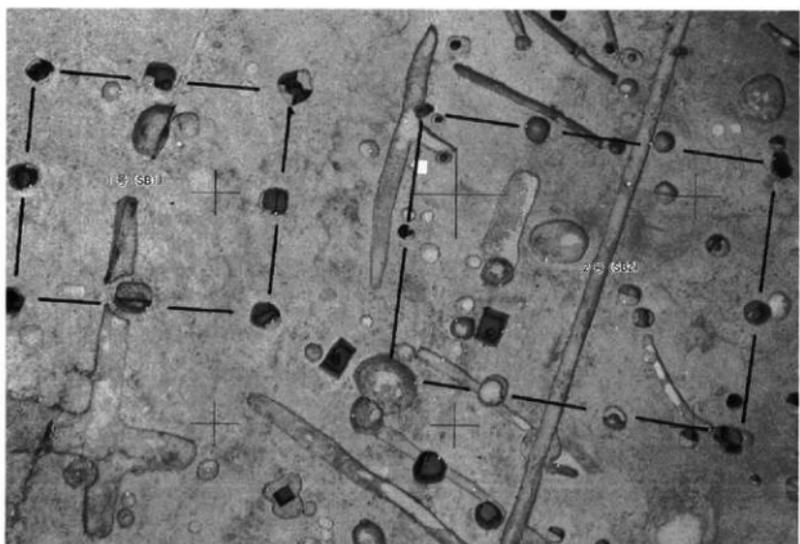
遺跡近景 (↑東から)



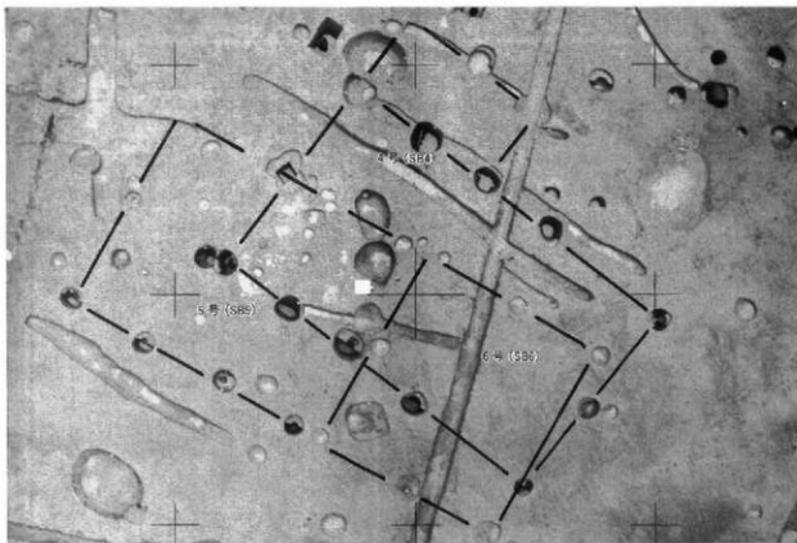
調査風景 (↑西から)



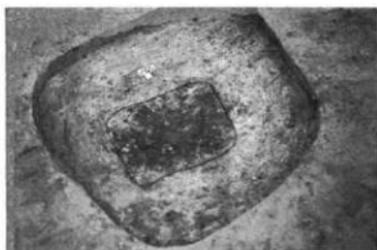
西壁土層断面(↑東から)



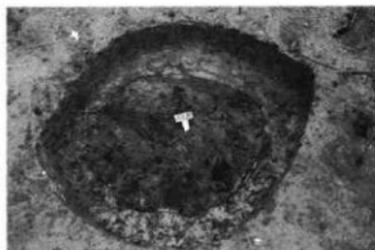
1号・2号 掘立柱建物跡(↑上が北)



4号・5号・6号 掘立柱建物跡 (上が北)



E B 523 (↑南から)



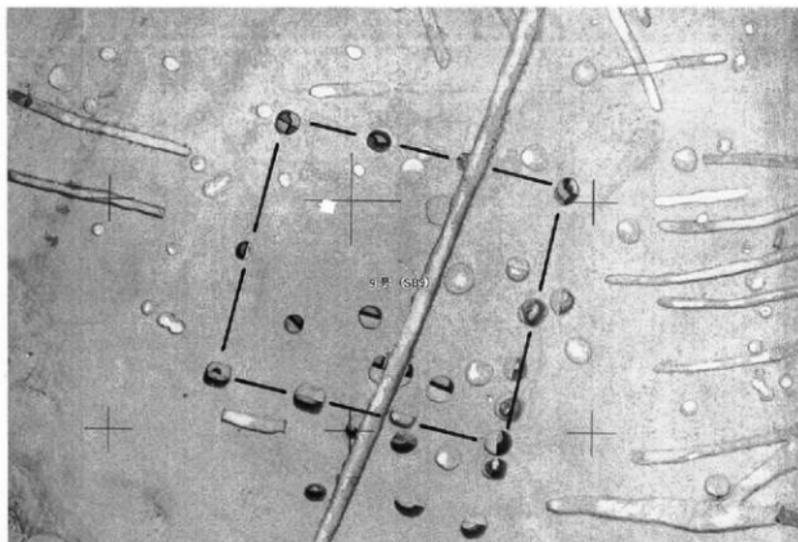
E B 429 (↑南から)



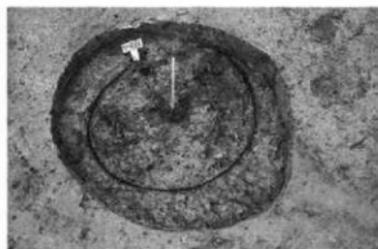
E B 523 (↑東から)



E B 429 (↑南から)



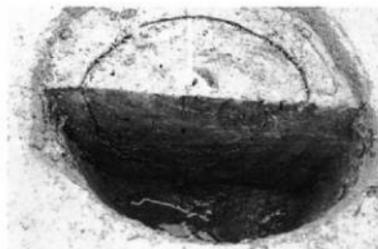
9号 掘立柱建物跡 (上が北)



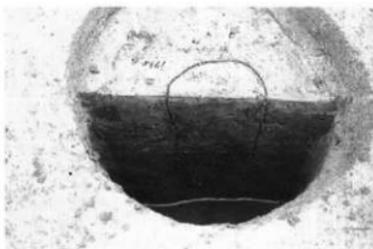
E B 413 (↑南から)



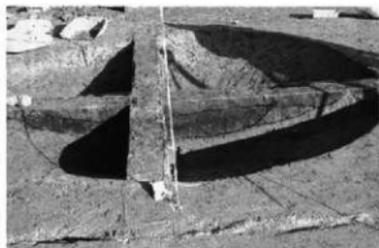
E B 425 (↑南から)



E B 413 (東から)



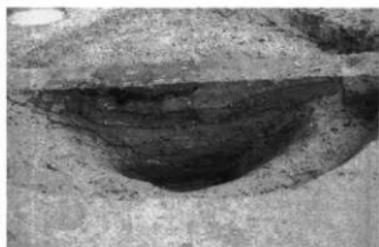
E B 461 (東から)



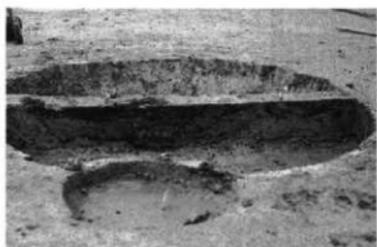
S E 645 (↑西から)



S K 137 (↑南から)



S K 637 (↑南から)



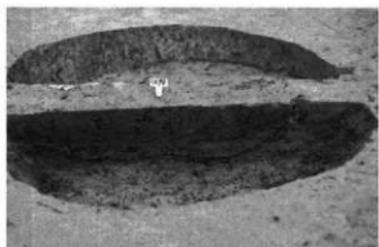
S K 452 (↑南から)



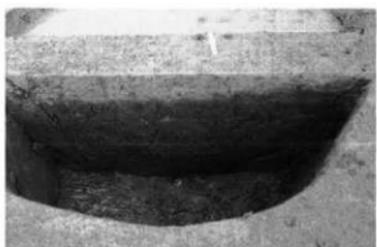
S K 572 (↑南から)



S K 499 (↑南から)



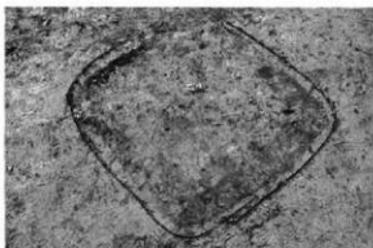
S K 94 (↑南から)



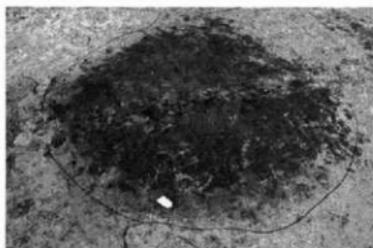
S K 650 (↑西から)



S K 467 (↑南から)



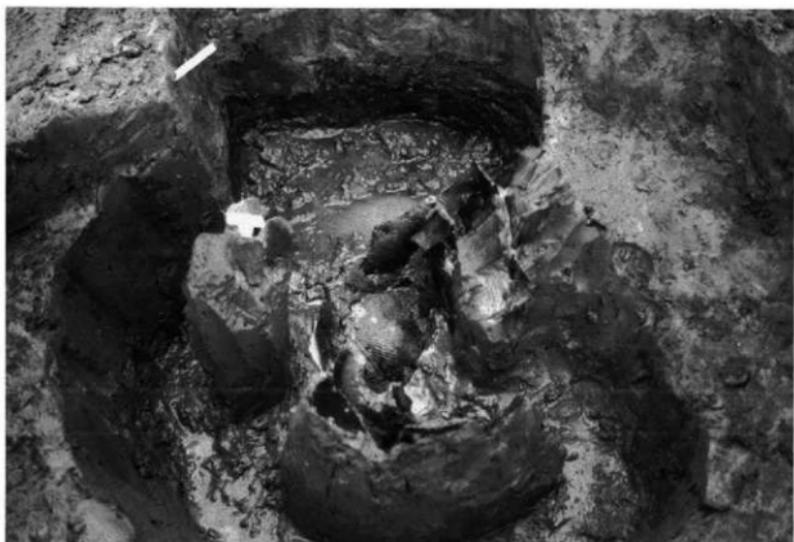
S R 462 (↑南から)



S E 645 (↑南から)



S K 810内弥生土器出土状況 1 (↑西から)



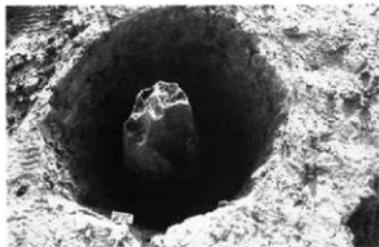
S K 810内弥生土器出土状況 2 (↑北から)



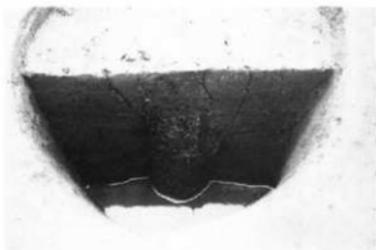
S G59 (↑北から)



畝跡群検出状況 (↑北から)



E P 75



E P 504



須恵器蓋 (R P 71)



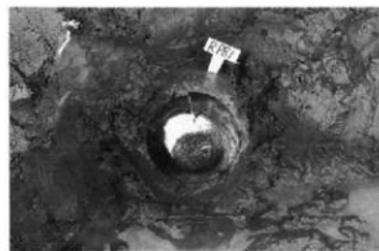
長頸壺 (R P 7)



須恵器杯 (R P 21)



須恵器高台付杯 (R P 1)



あかやき土器杯 (R P 81)



土師器小壺 (R P 2)



須恵器杯 (R P 17・53)



須恵器杯 (R P 44)



須恵器杯 (R P 43)



あかやき土器杯 (R P 45)



須恵器杯 (R P 41・42)



S G 59内杯出土状況



S G 59 (東側) 内遺物出土状況 (南から)



S G 59 (中央部) 内遺物出土状況 (南から)



105-7



105-8



105-11



105-10



105-9



105-12



105-13



105-14



105-15



105-16



105-17



105-18



105-19



105-20



105-21



105-22



105-23



106-24



106-25



106-26



106-27



106-28



106-29



106-31



106-30



106-32



106-38



106-35



106-34



106-36



106-33



106-39



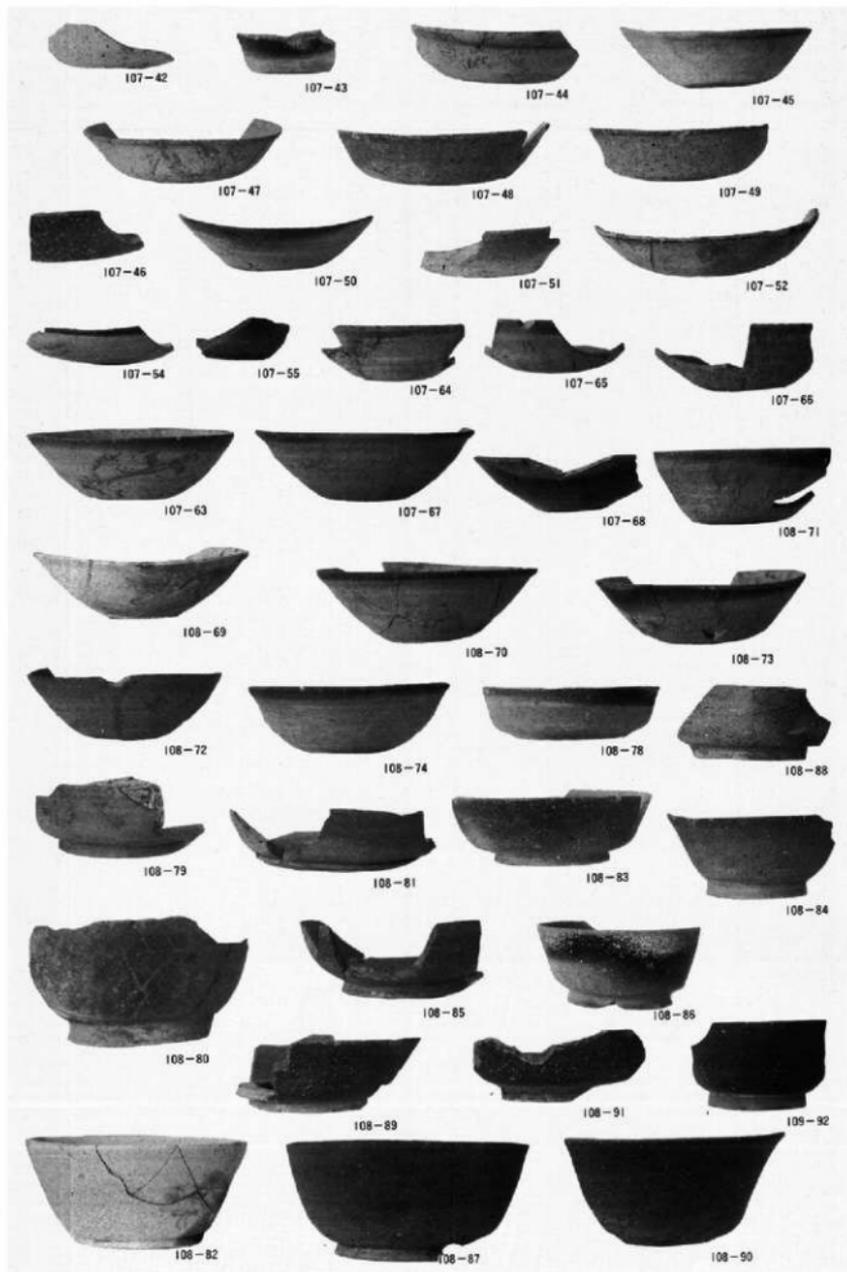
106-40

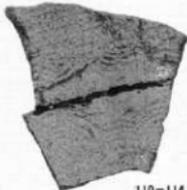
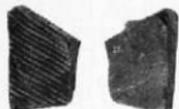
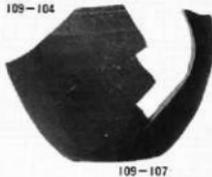
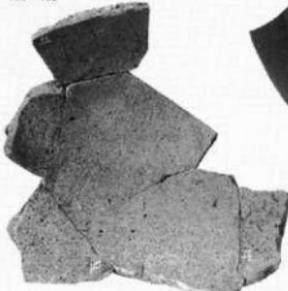
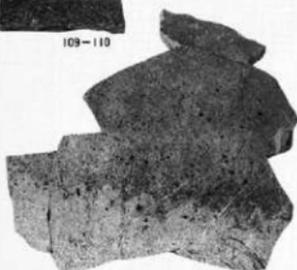


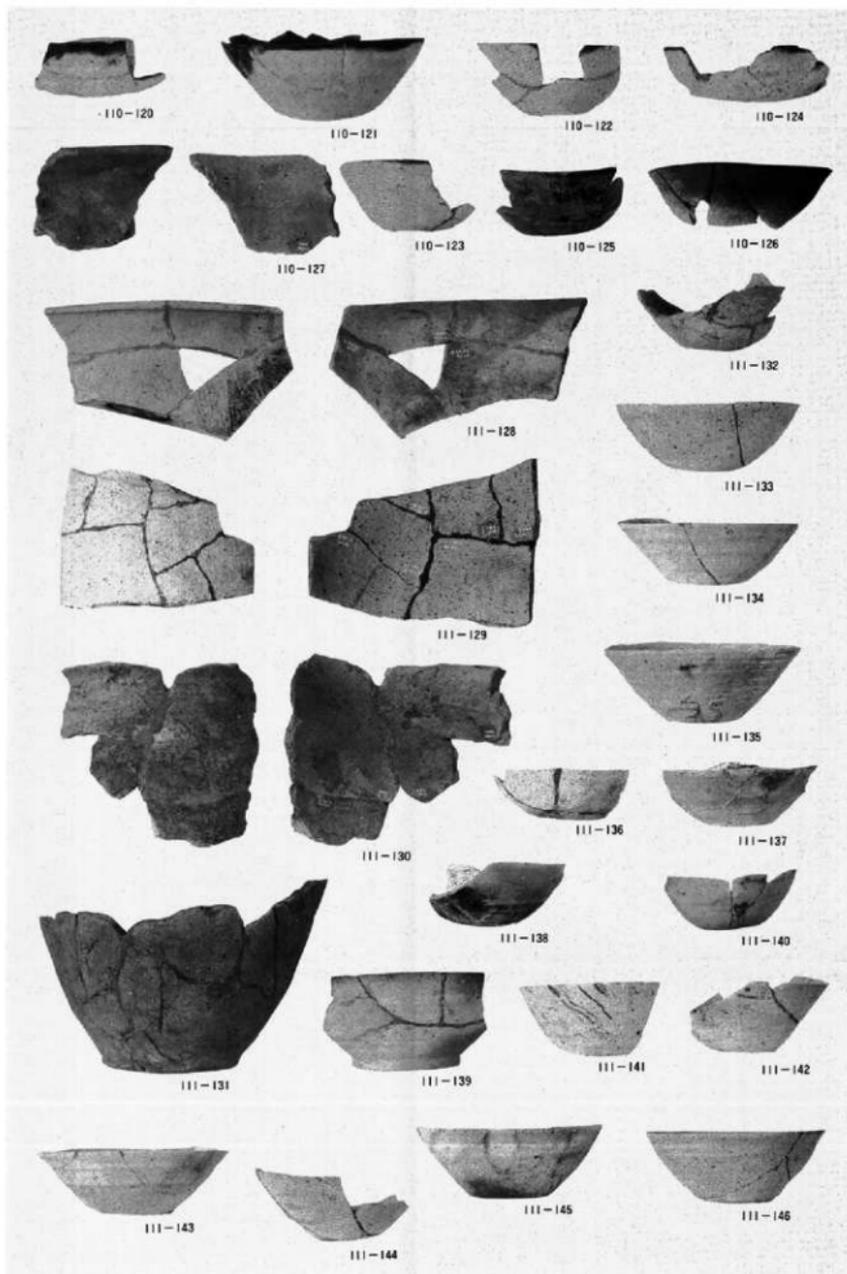
106-41

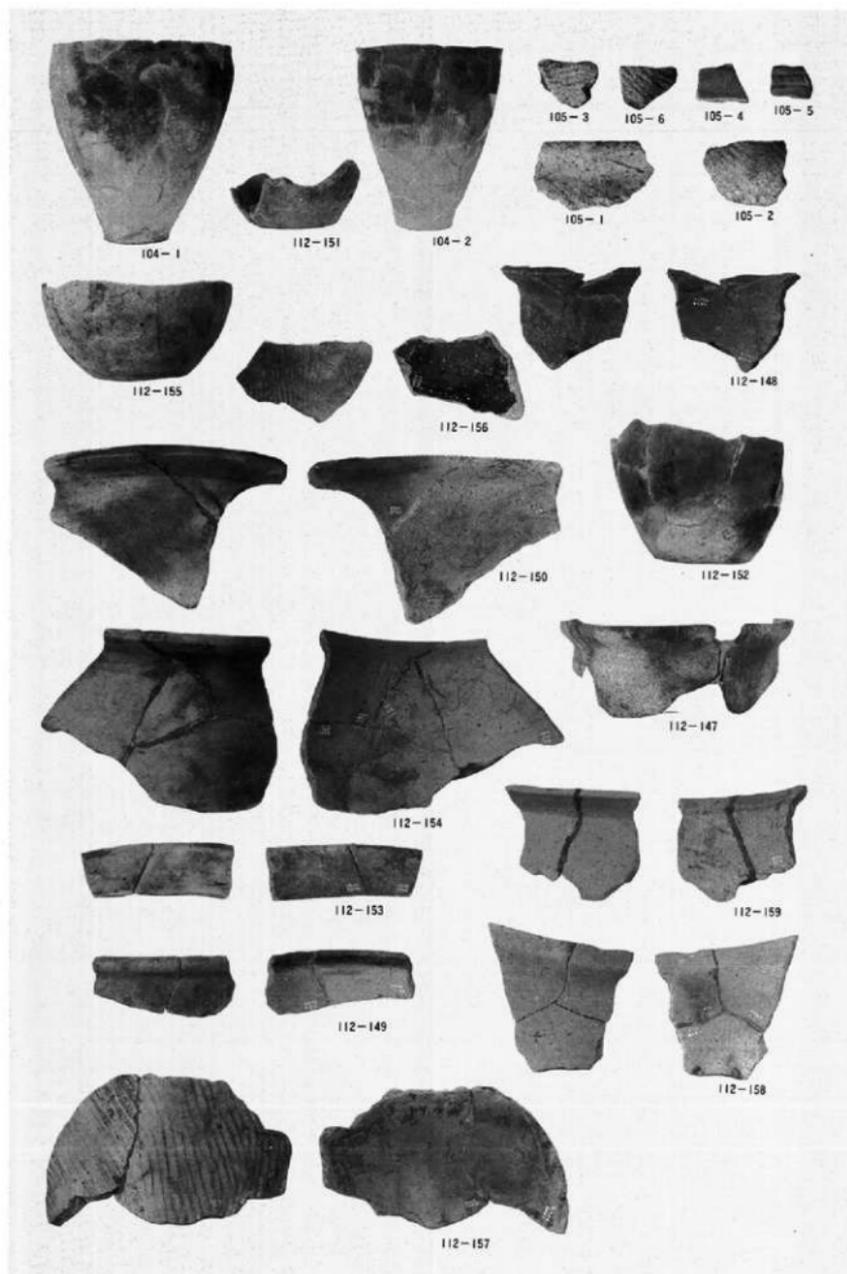


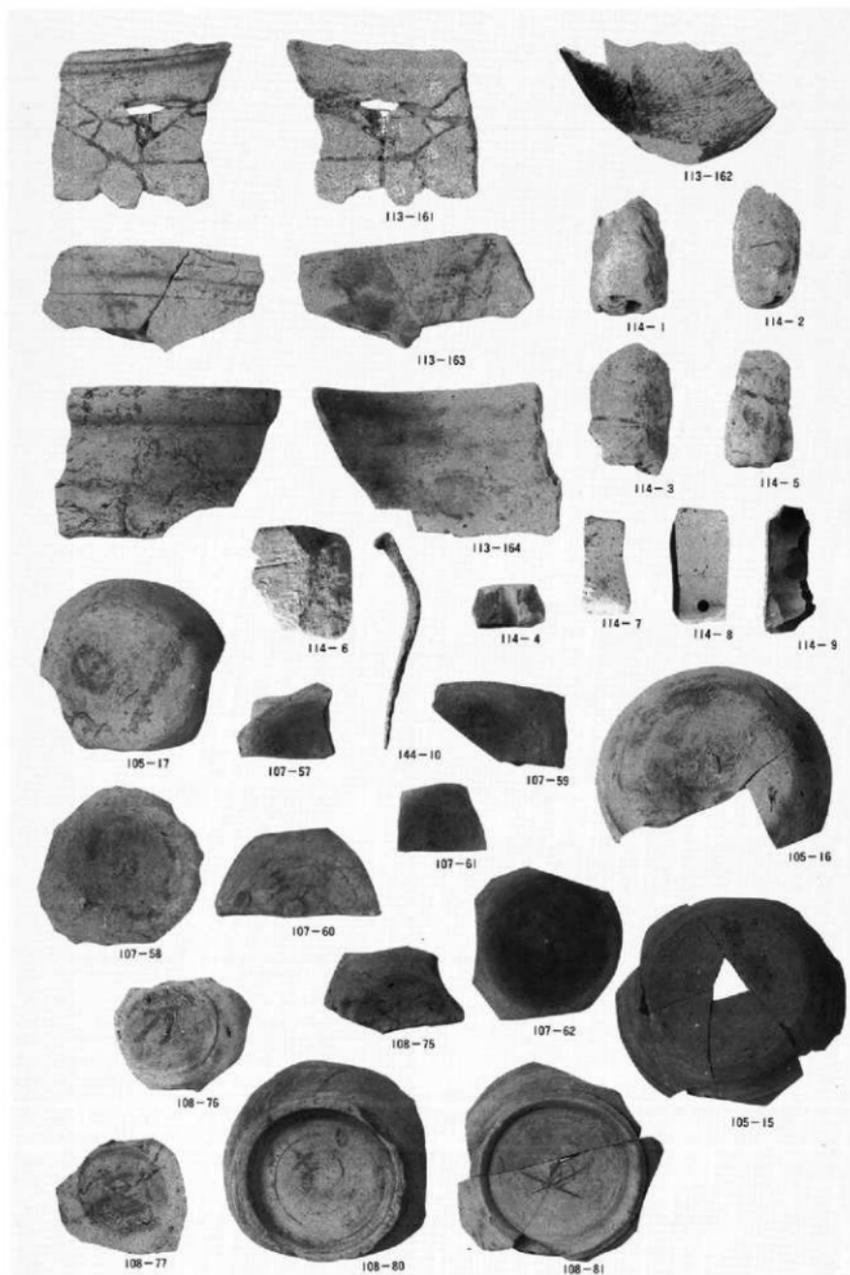
106-37





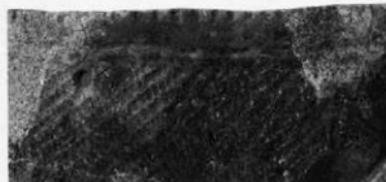








104-1



口縁部 104-1



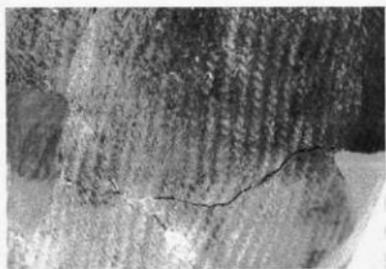
体部 104-1



104-2



口縁部 104-2



体部 104-2



115-2



115-4



115-6



115-1



115-5



115-3



116-8  
先端状況



116-8



116-7



116-7  
先端状況

---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第42集

つゝ 崎 遺 跡  
せん 天 塚 遺 跡  
なか 谷 地 遺 跡  
発掘調査報告書

1996年12月20日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター  
〒999-31 山形県上市市弁天二丁目15番1号  
電話 0236-72-5301  
印刷 大場印刷株式会社

---

